



# 朝鮮半島における植民地主義とスポーツに関する研究

金, 誠

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-06

(Date of Publication)

2013-10-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3215

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003215>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



2012年12月15日提出

神戸大学大学院国際協力研究科 博士学位論文

朝鮮半島における植民地主義とスポーツに関する研究

研究指導教員：木村 幹  
金 誠(KIN Makoto)

## 論文要旨

本研究は植民地朝鮮におけるスポーツに着目し、日本の植民地主義の影響下においてスポーツという文化的実践が当該社会においてどのような役割・機能を果たし、またその文化的実践がいかなるものであったのかをいくつかの事例に基づき明らかにするものである。本研究の視角は植民地権力ならびに民族主義のそれぞれとスポーツがどのように結びついており、植民地朝鮮の人々が共有するスポーツという場の位相がどのような意味を帯びて存在していたのかという点にあった。

本論は6章構成となっており、大きくは第1章から第3章までの植民地権力とスポーツに着目した事例、次に第4章と第5章の朝鮮人民族主義者らとスポーツに着目した事例、第6章の国際スポーツへの参加にみる朝鮮人選手らの葛藤に着目した事例の3つに分けられる。本研究において明らかにした点、及び考察してきた点は以下のようにまとめられる。

第1章から第3章までにかけては植民地権力の側が実践したスポーツについて明らかにしてきた。なかでも第1章と第2章において着目したのは朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会であった。

京城という都市が開発されていく時期に創建された朝鮮神宮、さらに京城運動場という総合運動施設、こうした人々の動きをつくり出し、収容していける巨大な施設群の存在とともに朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会が創設されていく。そして1924（大正13）年に日本で開催された明治神宮競技大会に倣い、朝鮮神宮にスポーツを奉納する神事の意味をもって翌1925（大正14）年に第1回の朝鮮神宮競技大会が京城において開催されたのであった。この第1回大会の開会式は朝鮮神宮の鎮座祭、京城運動場の開場式と同日に行われており、これら一連の式典は植民地権力側の権威を示すことになっていたのである。

こうして儀礼化されたスポーツの祭典である朝鮮神宮競技大会は植民地朝鮮において毎年行われるようになり、時の植民地支配の様式に従ってその役割・機能が期待されることになる。まずは当初からこの大会に日本人、朝鮮人が共に参加していたこともあり、文化政治期のスローガンである「内鮮融和」を象徴するスポーツ大会として位置付けられ、競技の結果や大会の華々しさとともに「内鮮融和」に基づく言説が繰り返し再生産されていったのである。つまり朝鮮半島に生きる人々の認識の在り方、あるいは期待される行動の規範をこの大会を通してプロパガンダし、指し示していったと言えるだろう。さらに1930年代になると社会事業の一環として、とりわけ社会教化に資する事業として行われることにもなっている。このことは朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会

が当該社会に大きな影響力を持つ得るということを経督府が認識していたことの証左ともなろう。1940年代には朝鮮の民族スポーツを競技種目として採用したり、大会を厚生局や総督府が主催していくことになるなど体制側の思惑がより強く反映されるようになり、最終的には戦時の軍事訓練的要素を含んだ競技大会へと化していったことが明らかにされた。

また第3章では皇民化政策期の植民地朝鮮において日本への求心性を高めるために武道・武士道といった日本精神を植え付けていこうとする文化的実践について分析を行った。ここで着目した皇国臣民体操と呼ばれる体操は剣道の型を簡易化したものであり、皇国臣民の誓詞とならんで、皇国臣民の精神を形成していくための「動的体認の実践部面」を受け持つことを目的に制定されていた。その普及に関しては各種学校をはじめとして様々な場所で実践されてはいるものの植民地朝鮮に定着するまでには至らなかったようである。これはこの体操や武道を指導する能力をもった教員や指導者の少なさに起因している。ただ重要なことはこの時期にこうした文化的実践を通して武士道的な精神を「内鮮一体」へ導くものとして利用し、植民地朝鮮に生きる人々にそれを受け入れさせようとしたことであり、その方法の一手段としてこの体操が登場してきている事実であろう。皇民化政策を推進した南次郎は朝鮮に徴兵制を布き、朝鮮人を戦争へと動員していくことを植民地政策の目標に掲げていた。日中戦争の勃発により、朝鮮半島の地政学的重要性がさらに増してくると、これまで以上に民族主義を廃棄した朝鮮人の必要性がグローブアップされたのである。つまり植民地社会の安定を目指す政策ではなく、体制に協力せざるをえない環境をつくるのが重視され、それに沿ったスポーツの実践がこの頃から現れてきたと捉えられる。その典型として皇国臣民体操が登場してきていたのである。

こうした支配論理に与するスポーツとは一線を画して実践されたスポーツを第4章と第5章で取り上げた。ここでは植民地朝鮮における朝鮮人民族主義者らによって実践されたスポーツに着目し、なかでも普成専門学校と東亜日報社（金性洙を中心とする東亜日報グループ）のスポーツについて分析を行った。

植民地朝鮮における民族主義者らがスポーツを発展させていくことに価値を見出したのはそれが民族の発展を示す、あるいは促すと考えていたからであった。そうした朝鮮人のスポーツの発展を示す好例として取り上げたのが第4章で扱った普成専門学校のスポーツ活動である。普成専門学校は植民地朝鮮においては朝鮮人のための高等教育機関であり、金性洙が校長として赴任してきた時期からは宗主国である日本の競技力を上回る競技結果を残す活躍がみられた。例えば皇民化政策期にあたる時期に普成専門学校の籠球部は全日本大会で3連覇を果たすなどその快挙には目を見張るものがあり、朝鮮民族のスポーツによ

る抵抗と発展はこうした高等教育機関のスポーツ活動において示されることとなっていた。

さらに当該期の朝鮮民族を代表する言論機関として存在していた東亜日報社のスポーツ事業も同様の論理の下で行われている。

東亜日報社の設立は文化政治への転換により、集会・結社が認められるようになったことによる。東亜日報社が当該期に手掛けたスポーツ事業は旧態依然とした朝鮮半島の価値観を転換するためにスポーツを利用するといった側面があった。例えば女性の解放を意図してスポーツ大会を開催したり、民族系のスポーツ組織である朝鮮体育会を後援し、スポーツを朝鮮社会に普及させていくことに力を注いだのである。また民族スポーツを近代スポーツのように近代化させていこうとしている点も見受けられた。つまり東亜日報社を中心とする朝鮮人知識人らが自らのスポーツに見出したのはスポーツによって対抗・抵抗を示すこと以上にまずはスポーツを通じて民族の近代化、民族の発展を図ることにあつたのであり、民族を発展させていくことそれ自体が植民地主義への対抗手段とみたのである。スポーツはその目的達成のための一手段であつた。

第6章では夏季のオリンピックに参加した朝鮮人選手らに着目して、朝鮮人選手の国際スポーツ参加の意義を明らかにした。オリンピックという国際舞台に立つには「日本」の代表選手とならねばならない。そうした状況は朝鮮人選手らを朝鮮民族と日本という国家の狭間でダブルバインドの状態に陥らせていた。選手らをオリンピックへと向かうように促したのは朝鮮人知識人らであつた。彼らの価値観のなかには当該期における優生的な思想の影響もあり、国際スポーツの場に朝鮮人選手らが参加することは民族の優秀性を示すためにも望まれることであつた。そのため朝鮮人選手のオリンピック参加を促す態度が確認され、その参加を後押しすることになっている。そしてその成果はベルリン大会での孫基禎のマラソン金メダルに結実していった。

この孫基禎のベルリン大会での優勝は朝鮮人を嬉々の渦中へと至らしめた。朝鮮人知識人らは挙つてこの事実を朝鮮民族の優秀性、民族の発展を全世界に知らしめる契機になつたと喧伝した。東亜日報社と朝鮮中央日報社は孫基禎の優勝を民族の勝利として報道するために胸の日章旗を消し去つた。一方、日本もこの勝利に沸き立ち、マラソン24年目の悲願が達成されたと報道する。つまり植民地朝鮮にとってこの勝利は肯定的に受け入れられうるものだったのである。ただ当局にとってそれは「内鮮融和」に資するもの、象徴するものであらねばならなかつた。そのため総督府が朝鮮人らの民族主義的言説と行為を許すはずはなく、この植民地権力と民族主義の相克は、結果的に植民地権力側によって民族主義側が弾圧されていくなかで終息し、その後の皇民化政策に向か

っていく。ベルリン大会後の孫基禎は日本の英雄として表象される存在ともなり、対日協力を余儀なくされる状況にまで追い込まれることになっている。

本研究では日本の植民地主義の影響下にあった朝鮮半島のスポーツという文化的実践を植民地権力の側と民族主義の側の双方から確認し、その役割と機能を分析・考察してきた。植民地権力の側はスポーツという文化に自文化の伝統的とされる価値を賦与したうえで植民地朝鮮に生きる人々へそれを示し、統合の象徴としていった。一方で朝鮮人知識人を中心とする民族主義者らはスポーツを自民族の発展、あるいは近代化を促す手段として利用し、その役割に期待した。こうしたスポーツ状況はそれぞれの理念と利害の相克のなかで複層的な状況を形成していたのである。ただ両者において希求された近代化への志向は植民地権力に統合されることによって、その状況はひとつの位相に結びつけられていく。つまり最終的に植民地朝鮮のスポーツは体制を強化していく方向へと向かっていったのである。

植民地朝鮮で生きる人々がこの時期スポーツを通して見たものは植民地社会を主導していく者たちのそれぞれが期待する理想の表象であった。そしてそれは植民地朝鮮における「支配」・「抵抗」・「協力」の位相のうちに存在していたのである。

## 目次

論文要旨	1
目次	5
序章 植民地朝鮮におけるスポーツに着目する意義	9
1. 本研究の目的と視角	9
2. 植民地主義とスポーツ	10
(1) 植民地主義	10
(2) 近代スポーツの拡大	11
3. 植民地朝鮮と体育・スポーツ	14
(1) 研究史の流れ－羅絢成、李学来から西尾達雄へ－	14
(2) 「植民地近代」という視角	17
第1章 朝鮮神宮競技大会の創設	22
1. はじめに	22
2. 大会開催への準備	23
(1) 京城運動場の竣工	23
(2) 朝鮮体育協会の活動	25
3. 大会創設の背景	27
(1) 朝鮮神宮の創建	27
(2) 明治神宮競技大会との関連性	29
4. 大会の開催を含む祝祭的空間の形成	30
(1) 朝鮮神宮鎮座祭の挙行	30
(2) 京城運動場開場式	32
(3) 朝鮮神宮競技大会の開催	33
5. 小括	35
第2章 朝鮮神宮競技大会の変遷と展開	37
1. はじめに	37
2. 研究の方法	37
(1) 先行研究について	37
(2) 史料について	38
(3) 用語について	39
3. 朝鮮神宮競技大会の展開	39

(1) 大会の開催と定着	39
(2) 大会プログラム(第10回大会)の分析	44
4. 朝鮮体育会と朝鮮人の反応	48
(1) 総合競技大会の開催	48
(2) 民族紙報道の若干の変化	51
5. 朝鮮神宮競技大会と皇民化政策	52
(1) 朝鮮神宮競技大会と「内鮮一体」	52
(2) 朝鮮神宮競技大会の終焉	56
6. 小括	58
第3章 皇国臣民体操の成立と展開	61
1. はじめに	61
2. 研究の方法	61
(1) 研究の対象とする時期	61
(2) 史料について	62
3. 皇国臣民体操の実際	62
4. 皇国臣民体操成立の背景	65
(1) 南の朝鮮総督就任と皇民化政策	65
(2) 名称の由来	67
(3) 武道の体操化について	67
(4) 皇国臣民体操の形成	68
5. 皇国臣民体操にみる武道精神	69
6. 皇国臣民体操の普及	71
7. 小括	73
第4章 普成専門学校のスポーツ活動	74
1. はじめに	74
2. 本研究の方法	74
(1) 先行研究について	74
(2) 史資料について	74
(3) 金性洙について	75
3. 普成専門学校の経営引継	77
4. 体育部の推移	79
5. 各競技団体の活動	81
6. スポーツ選手の特別入学	84



7. 小括	86
第5章 東亜日報社のスポーツ事業	88
1. はじめに	88
2. 在日韓国留学生のスポーツ	88
(1) 在日韓国留学生の体育・スポーツ	88
(2) 国際化するスポーツ状況	90
3. 東亜日報社とスポーツ	93
(1) 朝鮮体育会の設立後援	97
(2) 全朝鮮女子庭球大会の主催	101
(3) 民族スポーツの振興	104
4. 小括	105
第6章 オリンピックと植民地朝鮮	107
1. はじめに	107
2. 研究の方法	107
(1) 先行研究について	108
(2) 史料について	108
3. 朝鮮人選手と二つのオリンピック	109
(1) ロサンゼルス大会と朝鮮人選手	110
(2) ベルリン大会と朝鮮人選手	112
4. 孫基禎の優勝と日章旗抹消事件	115
(1) 日本と朝鮮にみる報道の特徴と差異	115
(2) 日章旗の抹消	119
5. 英雄としての「孫基禎」	123
(1) 警戒される存在	124
(2) 英雄「孫基禎」の葛藤	127
6. 小括	131
終章 植民地朝鮮におけるスポーツの位相とその機能	134
1. 植民地朝鮮におけるスポーツの位相	134
2. 植民地朝鮮におけるスポーツの機能	137
3. 本研究の限界と今後の課題	138

【研究資料】韓国スポーツの近現代史

ースポーツ記者趙東彪氏へのインタビュー調査ー・・・・・・・・・・・・・・140

【参考文献】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170

【謝辞】・・178

## 序章 植民地朝鮮におけるスポーツに着目する意義

### 1. 本研究の目的と視角

本研究の目的は植民地期の朝鮮半島において実践されたスポーツ、あるいはその実践を担ったスポーツに関わる機関や組織、スポーツ関係者らに着目し、日本の植民地主義の影響下においてスポーツという文化が当該植民地社会においてどのような位相にあり、またどのような社会的機能を果たしたのかを明らかにすることである。

スポーツに着目する意義としては、①これまでわが国の朝鮮半島に関わる歴史的研究においてスポーツにはほとんど注意が払われてこなかったことから研究対象として未着手な部分が多いという点、②さらに近年の朝鮮半島の植民地期の研究においては「植民地権力の意思や政策がかならずしも朝鮮社会に浸透していたわけではなく、そのことが逆に支配政策のあり方を規定していたこと」<sup>1</sup>にも注意が向けられ、政治史にコミットする社会史や文化史に関する研究の重要性が増してきた点などが挙げられる。このことは朝鮮半島の植民地社会の様相を支配する側と抵抗する側とに截然と分かったうえで、そのいずれかに与しながら研究されてきた手法に変化の兆しがみられるようになってきたことを意味している。

またスポーツ史研究においては植民地朝鮮における体育政策を植民地政策の一形態と見なし、その展開と推移のなかで支配を強化するために体育がどのような役割を担ったのかという視点から分析された研究や体育・スポーツを朝鮮民族の民族主義に則った活動のひとつとして捉え、民族の抵抗運動としての体育という視点から研究されたものの二つがその主流をなしてきた。そのため体系的に語られた研究としてこの二種類の研究は見過ごせない。これらの研究はそれぞれ教育史や民族的な抵抗運動史の影響を受けつつ展開されてきており、これまでの植民地朝鮮の体育・スポーツ史研究の枠組みを形成・決定してきたと言えよう。本研究においてもこれらの研究の成果に負う部分は多々あるが、それぞれの分化している視角を統合しつつ分析していこうとする点、またスポーツをひとつの文化として位置付け、政治と文化の相補的な関係をスポーツから考察していく点など、これまでの研究にはなかった視角を本研究において提示していきたい。

植民地朝鮮社会のなかで文化的なもの、あるいは文化的実践の在り様がそこで生活する人々に如何なる影響を与え、また政治的なものの影響を如何に反

<sup>1</sup> 朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』名古屋大学出版会、2011年、p.229.

映しているのか、そしてその状況はどのように分析できるのか。本研究対象であるスポーツはそれ自体が政治的な活動であるとは言えない。ただ重要な点は実践される、あるいは実践されたスポーツにどのような価値が見出され、それがどのように語られ、その表象の在り方がどのような政治的言説と結びつけられているのかという点にある。植民地朝鮮においてスポーツのなされる場は植民地権力と民族主義の相克の場でもあり、これらは互いに対立し、反目するにも拘らず、植民地朝鮮という場において共有されることにもなった。つまり植民地社会における支配と抵抗の逢着する部分にスポーツという文化的実践の場が存在していたのである。このことはスポーツという実践がそれぞれの領域においてセクト化しつつも、完全にはそれぞれのセクションを構成しえず、統合を牽引する植民地権力のなかで展開されねばならなかった朝鮮半島の植民地主義的状况を物語る。

本研究ではそうした植民地朝鮮のスポーツをいわゆる文化政治期、皇民化政策期、戦時体制期にあたる1920年代から1930年代を経て、1940年代の解放前の時期までを研究の射程におき、当該期間におけるいくつかの典型的な事例を中心に植民地朝鮮におけるスポーツの展開、そしてその機能についての分析を試みる。この期間は朝鮮半島における近代化の問題が日本の植民地主義とどのように関係しているのかという視点も提起してくれる。スポーツが行われうる環境、また盛況になっていく状況はその社会の近代化とも関わっており、その近代化を志向した人々が何を求めてスポーツという身体文化に植民地住民を動員していったのかという点は本研究においても重要な部分となる。

スポーツという可視化される「身体」の表出は当該社会における人々をどのように繋いでいたのか、あるいは繋ごうとしたのだろうか。本研究は上記のような視角から朝鮮半島の植民地主義とスポーツの関係にアプローチしていく。

## 2. 植民地主義とスポーツ

### (1) 植民地主義

植民地主義とはとりわけ19世紀後半から20世紀前半に軍事的、経済的に優位に立つ国家が他国ないしは他民族を植民地化し、そこで行った搾取の体制、あるいはその支配の様式のことを指す。また近代植民地主義の特徴としては「外来の少数者による無期限な支配の確立と維持、その少数者が代表する機械文明と経済機構、キリスト教的背景、分刻みの生活スタイル、そしてその少数者が当然のことと考えていた土着の人々に対する人種的優越感」などが挙げられて

いる<sup>2</sup>。確かにいち早く産業革命を経験した西欧が世界における優勢を誇り、世界の諸地域に自らの価値観を敷衍し、経済的・軍事的支配を遂行していった体制そのものを植民地主義という言葉は含意している。ただ本研究においては日本と朝鮮半島という東アジアの一地域に限定して歴史的な分析を行うため日本の植民地主義の特徴を示すことが重要だろう。水野は日本の植民地主義の特徴を欧米のそれと比較して以下のように述べている。

植民地主義は二重性を持つものとしてとらえられる。欧米の植民地主義を文明化と差異化（野蛮化）の二重性によって特徴づけることができるのであれば、日本の植民地主義は「同化と排除」の二重性によって特徴づけられる<sup>3</sup>

こうした「同化と排除」の二重構造という日本型植民地主義の特徴をひとつの理念型としてみていく視角は有効なものと思われる。とりわけ当該地域における文化的状況、すなわち当該社会の文化的実践を分析する際の視角となるだろう。またこれが為政者側の支配政策に反映されただけでなく、同化あるいは排除（差別化）を植民地朝鮮で生きる人々に突き付けられたとき、あるいはいずれかの選択を迫られることとなったとき、当該地域の人々をさらに強い同化へと導いていく道具として文化が利用されていったと解釈していくことも可能である。そのためそうした文化は人々の行為の決定を反映・促進するものとして存在したと捉えることもできよう。当然のことながら本研究においてスポーツはその範疇に含まれるものとして位置付けられる。

## （2）近代スポーツの拡大

近代スポーツ<sup>4</sup>が世界へ広がっていく過程と植民地主義とは密接なかかわりがあった。19世紀末から20世紀はじめにかけて、西洋を中心とした工業先進国や軍事強国は各々が所有する植民地や従属国の拡大にしのぎを削り、世界を

<sup>2</sup> マーク・ピーティー〔浅野豊美訳〕『植民地』読売新聞社、1996年、p.22.

<sup>3</sup> 水野直樹編『生活の中の植民地主義』人文書院、2004年、pp.8-9.

<sup>4</sup> 近代スポーツとは「近代社会のなかで形成され主導権を握るにいたったブルジョアジーの論理にもとづいて〈近代化〉され、新しく誕生したスポーツ」のことであり、また「①ナショナルレベルの統一ルールをもち、②ナショナルレベルの種目別競技団体（全国協会や連盟）を組織し、③整然と管理されたナショナルレベルの競技会が運営されるようになること」の3つの条件を最低限満たしていることがその成立の根拠とされる。岸野雄三編『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987年、pp.231-235.

分割、統治するに至った。その結果、西洋を中心として、その周辺に植民地の国々が置かれることとなり、政治的、経済的のみならず文化的にも従属関係が成り立つ様相を呈したのである。

これらの植民地では支配した側である西洋の文化的優越感や当時展開された社会進化論の影響から、植民地と宗主国との間に「野蛮」と「文明」とに色分けされた文化的差異が強調され、植民地における異文化は西洋の優れた文化によって進化、発展するものだとする価値観がもたらされた。こうした価値観が植民地とされた地域へ西洋文化を押し広げることの正当性を担保し、植民地支配と文化が密接に結びつきながら拡大されていくことになったのである。

この時代、特にその植民地を最も多く所有していた国はイギリスであった。近代スポーツの発展にイギリスの果たした役割が重要なものであった点は贅言を要さないが、その発展した近代スポーツをイギリスは自らの植民地を拡張させるとともに世界へと伝播させる役割を果たしたのである<sup>5</sup>。

イギリスの植民地でスポーツの伝播にかかわることになったのは、軍人、行政官をはじめとする外交関係者、また宣教師や教師といった人々であった。イギリス領植民地のイギリス人居留地などではゴルフやテニスが行われ、また多くのイギリス人のいる居留地にあってはラグビーやクリケットなども行われていたのである。

スポーツが伝播していくなかでも、とりわけ宣教師や教師の影響は多大なものであった。宣教師たちは現地の社会に宗教や医療、教育などとともにスポーツをも広めていったのである。彼らは啓蒙活動を通して文明化を推し進めるという使命感をもっていた。これは先にも少し触れたように植民地の文化を「野蛮」なものであるとし、ゆえにそれらは「文明」によって改善されなければならないという植民地支配を正当化する思想に基づくものであった。そしてミッション系の学校などを通して、時には現地の風習などを無視して強引にスポーツを文化変容の手段として行っていったのである。しかしながら、これらのスポーツは一般民衆のすべてに向けてというよりも現地の支配階層の子弟たちを対象としていた。これはスポーツによって勇気、忍耐、忠誠心、服従、団結心などを養い、現地の支配階層である彼らをイギリスの植民地支配に有効に利用していこうとする意図が含まれていたのである<sup>6</sup>。つまりスポーツが植民地主義の

---

<sup>5</sup> アレン・グットマン〔谷川稔ら訳〕『スポーツと帝国』昭和堂、1997年。には近代スポーツが帝国主義の影響下のなかで世界各地に伝播していったプロセスが描かれている。

<sup>6</sup> 石井昌幸「イギリスのスポーツ教育と植民地政策」稲垣正浩・谷釜了正編『スポーツ史講義』大修館書店、1995年、pp.116・117。

一形態として政治的にも展開されたのである。

イギリスを発信源としてその植民地へとスポーツは伝播していき、近代スポーツは世界に拡大されていった。植民地主義とスポーツの伝播について、とりわけ競技としてのスポーツが当の植民地で行われるようになったことを指すのは当然のことだが、それに加えて、伝播した近代スポーツの様式的・構造的特質が植民地に根付いていた先住民の身体文化や伝統スポーツを近代化させたという点も植民地主義とスポーツの伝播をみるときに重要な要素となるだろう。

だからと言って植民地主義の影響下で拡大していった近代スポーツが一様に植民地の人々に受け入れられたわけではなかった。

文化要素の伝播に関して、文化を受容する側の社会あるいは成員はその可能性として、1.文化をそのまま受容する 2.文化を受容しつつ、その文化を変形させていく 3.伝播してきた文化に対して完全に拒絶する、といった3点のいずれかの態度をとることになる<sup>7</sup>。ゆえにスポーツが伝播していく過程にもこうした文化の受容過程があらわれることになるものと考えられる。ただ植民地においては宗主国との支配関係を考えた場合、伝播してきたスポーツを完全には拒絶できなかったか、あるいはなんらかの形で受容せざるをえなかったと考えるのが妥当であろう。

先にも述べた通り、イギリスの場合、最初に植民地にスポーツを持ち込んだのは軍人、植民地行政官、宣教師、教師などの人々であったが、それらをまず始めに受容した側の人々は現地の支配階層の子弟たちであった。彼らのなかにはイギリスへ留学をしたものも多く、そうでなければ自国に存在するミッション系の学校などに通い、クリケット、ラグビー、サッカーなどの近代スポーツを経験することができたのである。また現地の兵士や警察官には体力づくりのプログラムの一部として近代スポーツが取り入れられたりもしていた<sup>8</sup>。彼らに期待されたのは植民地支配の尖兵としての役割を果たすことであり、親英的な立場から他の階層の人々をコントロールできるようになることだった。

しかし、スポーツの伝播はそうした政治的な局面を越えて更にその裾野を伸ばす。スポーツに対して娯楽や遊戯的要素としての価値観をもつと同時に、自らの地位向上を目指す人々は支配階層の人々の行うスポーツにステイタスシンボルとしての価値を見出し、支配階層の人々を模倣してスポーツを行うようになったのである。すなわちスポーツ文化が拡大していく過程で上からの一方的な流れによってスポーツ文化が受容されていくのではなく、下からの要求に応

<sup>7</sup> 祖父江孝男・米山俊直・野口武徳編『改訂文化人類学事典』株式会社ぎょうせい、1985年。

<sup>8</sup> アレン・グッドマン、前掲書、p.79。

じてスポーツ文化の受容がなされ、更なるスポーツの伝播が進むことにもなったのである。スポーツが徐々に植民地社会に浸透していったプロセスは植民地主義の影響であることは明らかではあるが支配者側の論理だけでは語れない。

近代スポーツの普及に際して、当初はイギリス人たちが積極的に現地にスポーツを普及させようとする意図があるわけではなく、スポーツを行うことは自分たちのアイデンティティや文化的紐帯を確認する作業のひとつだった。確かに社会統制的なシステム樹立のために現地人エリートに対して教育を行うようになる、スポーツ教育が重要な役割を果たすことになってきた事実も挙げられる<sup>9</sup>。しかし、植民地化された地域の人々が、積極的にスポーツを受容することはスポーツそのものが社会的上昇の手段ともなり、スポーツ競技での勝利が自分たちを支配する植民者への抵抗を意味したからでもあった。アメリカの黒人アスリート問題を研究しているジョン・ホバマンは次のように言う。

ヨーロッパ植民者は、己の身体的活力に対して強い思い入れを抱いていた。それゆえ、人種対抗的な運動競技には神経質にならざるをえなかった。一方でスポーツは、文化帝国主義の道具であった。それはイギリス的価値観をアフリカ、アジア、オーストラリア、ニュージーランドへ導入する役割を果たした。しかし、同時にスポーツは、服従すべき人種が、勝利によって白人とある種対等な関係を結びうる場でもあった<sup>10</sup>。

このように植民地主義とスポーツの問題はその伝播の過程から言及され、スポーツ普及の媒介となった人々と受容した側の人々との相互関係に注意を向けねばならなかった。そしてその関係のなかで植民地社会におけるスポーツの役割・機能がどのようなものであったのかが考察されるのである。

### 3. 植民地朝鮮と体育・スポーツ

#### (1) 研究史の流れ－羅絢成、李学来から西尾達雄へ－

植民地朝鮮における体育・スポーツに関する研究はまず韓国の体育・スポーツ史の定立に努めた羅絢成によって研究されている。羅絢成の著書『韓国体育史』<sup>11</sup>は韓国の伝統社会の体育・スポーツから現代社会における体育・スポー

<sup>9</sup> 石井昌幸・金光誠「植民地主義とスポーツ文化の拡大」宇佐美隆憲編『スポーツ人類学』明和出版、2004年、pp.64-71.

<sup>10</sup> ジョン・ホバマン〔川島浩平訳〕『アメリカのスポーツと人種』明石書店、2007年、p.208.

<sup>11</sup> 羅絢成『韓国體育史』교학연구사、1981年.



ツに至るまでの変遷が記述されており、そのなかでも多くを割かれているが韓国の近代体育の展開についてであった。彼は韓国近代体育における時代区分の設定を行い、区切られた各時代において主流となった体育・スポーツ活動の傾向を提示・分析している<sup>12</sup>。ここでの視角は近代的な教育制度が成立していくなかで各種学校においてどのように体育・スポーツが取り入れられていったのか、また日本の植民地支配下においては日本の体育制度が朝鮮半島に移植されつつも、世界的な体育・スポーツの流れを朝鮮近代体育・スポーツがどのように汲もうとしていたのかという点にあった。

こうした記述のなされ方は朝鮮民族の発展史に視角を置いていたものと理解されるが、だからと言って植民地支配のなかでの民族主義的な体育・スポーツに焦点を絞り、それについて徹底して記述していくという姿勢ではなかった。むしろ日本の体育制度の移入と朝鮮民族の体育・スポーツ活動の複層する当該期の状況を整理し、その相互の史実について記述しようとする。そのなかで支配-被支配の関係を明らかにしようとし、日本の戦時体制が固まっていく1940年代に入ると朝鮮民族の自律的な体育活動はなくなり、植民地支配の影響下での統制された体育・スポーツ活動の実態についても明らかにしてきたのである。

ただこの著書においてはそのテーマからもスポーツに関する記述よりも体育に関する記述のほうが多いため朝鮮民族のスポーツに関するものは同じく羅絢成著の『韓国運動競技史』<sup>13</sup>に譲らねばならないだろう。この著書は植民地期の朝鮮民族のスポーツ活動についてまとめられたものであり、当該期の朝鮮人らのスポーツでの活躍について知らしめてくれる点が多いのだが、記載されている内容がスポーツの競技・活動記録などに終始しているため、当該期のスポーツ活動の意義についてまで言及されるものではなかった。

植民地朝鮮における朝鮮民族の体育・スポーツを民族主義的な立場から徹底的に言及したのは李学来であった。李学来の研究は多岐に亘るが、植民地朝鮮における体育・スポーツについては『韓国近代体育史研究』<sup>14</sup>という代表的な著書を著しており、この研究によって彼は朝鮮民族の民族主義的な立ち位置から植民地期の体育・スポーツを構成し直した。羅絢成も李学来も民族主義的な視角という点で違いはないが、李学来の研究における特徴は日本の植民地支配下の体育・スポーツを植民地権力による弾圧とそれに対する民族的抵抗といった二項対立を軸にして当該期の体育・スポーツ史を綴っている点であろう。こ

12 羅絢成、前掲書、p.18.

13 羅絢成『韓国運動競技史』普文社、1958年.

14 李學來『韓国近代體育史研究』지식산업사、1990年.

うした視角は当該期のスポーツ状況を必ずしも説明し尽くしているとは言えないが、李学来の場合、上記の視角から体育・スポーツが当該植民地社会にあってどのような機能を果たし得たのかという部分にまで踏み込んで議論しており、「抵抗」としてのスポーツを明確に提唱したという点において評価されよう。

こうした韓国の研究者らによって研究される植民地朝鮮の体育・スポーツ史研究は朝鮮民族の内在的な発展のプロセスを体育・スポーツにおいても確認されることを明らかにしてきた。これはまた植民地権力によって弾圧・抑圧を余儀なくされた民族の体育・スポーツ活動の歴史的事実を彼らの研究期間においてどのように発掘し、表出していくのかという課題の下で行われてきていたとも言える。そのためそうした視角からは植民地権力の主体たる日本の側が一体植民地朝鮮でどのような体育・スポーツを展開してきたのかという課題については詳述されてこなかったのである。

こうした間隙を埋め合わせ、新たな視角を提示する研究を行ったのが西尾達雄であった。西尾はその著書である『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』<sup>15</sup>において日本の植民地支配の下で行われた朝鮮半島の体育に政策的意図があったことを提起し、支配政策の一環として機能した体育・スポーツについて分析を行った。

西尾は植民地朝鮮の時代をその変化の様相から、武断政治期、文化政治期、準戦時体制期、戦時体制期、決戦体制期の5つに区分し、各時期の体育政策とその推移について言及する。その各時期に展開される体育政策は時の総督府の植民地政策－植民地教育政策(朝鮮教育令の制定と改正)の延長線上にもあり、朝鮮民族を日本人とは区別・差別し、「愚民化」させていくのか、あるいは「内鮮融和」のもとに日本の側に取り込んでいくのか、それとも「同化」を強要し、日本人化させていくのかという支配者側の意図を学校体操教授要目の詳細な分析や体育科教材の配当、あるいは体力管理の実態などを中心にしてその展開を明らかにしている。ここでの西尾の研究は植民地朝鮮における体育政策という植民地政策の派生的な広がりの中なかで、植民地朝鮮における支配者の被支配者に対する差異化・差別化を伴う眼差しがどのように植民地住民の「身体」を捉え、それを国民化し、統合していったのかというものであったと言えよう。当該期における植民地体育政策は最終的には戦争における戦力に資する「身体」を育成するための政策としてその役割を担うことになったのであるが、それは「身体」の没個人化を図り、国家による身体統制を助長するものになっていったのである。

<sup>15</sup> 西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店、2003年。

このように西尾は支配者側の意図が「身体」に刻みこまれる様相を体育という教育の一分野が担っていたことについて明らかにした。こうした視角からの研究・分析は民族の発展をその視角して記述していく研究にはみられなかった点でもあった。

上記のように体系的に語られてきた植民地朝鮮における体育・スポーツに関する研究は羅絢成、李学来、そして西尾達雄によって構成されてきた。これらの研究の成果は非常に重要だが、教育史や民族運動史の流れを汲んでいることもあり、体育という教育の一分野に重点が置かれるか、あるいはスポーツを抵抗運動のひとつとしてみていく視角が強く反映されてきた嫌いがある。そのためスポーツという文化のインタラクティブな部分や共有される位相の意味、あるいは当該期のスポーツにみる近代化・近代性の問題がやや欠落しており、そうした視角からの研究は未確認の部分が残っていると云わざるをえない。

## (2) 「植民地近代」という視角

1960年代、70年代の韓国は朴正熙政権の下で第一次、第二次経済開発五カ年計画が実施され、韓国経済は目覚ましい発展を遂げる<sup>16</sup>。いわゆる「漢江の奇跡」と呼ばれる高度経済成長である。このことは海外の研究者らにも衝撃を与え、「漢江の奇跡」をもたらした要因を日本の植民地期との連続から探る研究がなされるようになった<sup>17</sup>。そして、その後展開されるのが日本統治下における朝鮮の近代化に対して否定的に評価する「収奪論」と肯定的に評価する「植民地近代化論」との衝突<sup>18</sup>であった。この論争の推移はここでは触れないが、こうした議論が紛糾するなかで複数の場から「植民地近代」という分析概念が提示されることになり、植民地朝鮮研究においても新しい視角からの研究がみ

<sup>16</sup> 外国資本と国内の安い労働力を利用して、消費財輸出産業を積極的に育成する輸出中心の経済政策を実施した。またこの時期の年平均経済成長率は2桁に近く、輸出は20倍に増えて国民所得は2倍になったとされる。韓国教員大学歴史教育科『韓国歴史地図』平凡社、2006年、p.196。

<sup>17</sup> 例えばカーター・J・エッカート〔小谷まさ代訳〕『日本帝国の申し子』草思社、2004年。

<sup>18</sup> 慎鏞廈は植民地朝鮮において、朝鮮人の近代化志向があつたにもかかわらず、それを日本の植民地権力が抑圧した点を強調した。この立場が「収奪論」である。その対極として植民地朝鮮の近代化が日本の植民地支配の恩恵かのように語る立場を「植民地近代化論」とされ、両者で論争が繰り広げられた。またこの論争から鄭在貞は掘り下げるべき課題として①開発と収奪、②成長と同化、③連続と断絶の3つの論点を提示している。松本武祝「“朝鮮における「植民地的近代」”に関する近年の研究動向—論点の整理と再構成の試み—」『アジア経済』Vol.43 No.9、アジア経済研究所、2002年、pp.31-32.ならびに金洛年、前掲書、pp.205-206。

られるようになってきた。

ではここで言う「植民地近代」はどのように定義されるのか。板垣は「植民地近代化論」と「植民地近代論」との違いを語る際に植民地近代は「近代に対して批判的な視座をもち、近代性・近代化そのもののもつ権力性や抑圧的、差別的、暴力的な諸側面に注目する。(中略)植民地近代論は植民地主義と近代性を表裏一体のもの、あるいは近代世界システムにおける位置の問題としてとらえ、そうした非対称的な関係性のなかで諸事象をとらえようとする」<sup>19</sup>としている。そして具体的な研究の動向として規律権力論、民族主義批判、都市文化論、女性史と微視史、教育史に立脚した研究を挙げている<sup>20</sup>。つまり近代という時代そのものを批判的に捉えたうえで近代性と植民地主義の共犯関係と配置の問題をいくつかの視角から見直す方法が提示されるようになったと理解される。

ただ一方で、こうした近代批判を前提とする研究の方法に難色を示す議論もある。金洛年は植民地近代に関する視角について近代の肯定あるいは否定といった価値判断を前提としている点に問題があると言及し、近代＝否定という価値判断が当該期の実態を分析する以前に結論を導きうるのではないかという危険性を示唆している<sup>21</sup>。さらに彼はそうした問題認識に立ちながら、研究領域を植民地経済(=A)、支配体制と政治(=B)、植民地の社会・文化(=C)の3つに分類し、各領域間の相互補完関係に注目することを提起している<sup>22</sup>。この点は近代批判を前提にした研究の視角とは異なり、近代的なるものへの志向を肯定的に受け止めようとしていた人々の態度や姿勢をも含みつつ、それについて批判的に研究していく視角が与えられるものと考えられる。

このように「植民地近代」に関する議論はこれまで朝鮮近代史研究<sup>23</sup>のなか

<sup>19</sup> 板垣竜太「〈植民地近代〉をめぐって」『歴史評論』No.654、校倉書房、2004年、pp.35-36.

<sup>20</sup> 板垣竜太、前掲書、pp.36-39.

<sup>21</sup> 金洛年「「植民地近代化」再論」今西一編『世界システムと東アジア』日本経済評論社、2008年、pp.206-207.

<sup>22</sup> 金洛年、前掲書、pp.230-233.

<sup>23</sup> 戦後日本の朝鮮近代史研究の推移について並木の論文を参考にしてみよう。並木の「戦後日本における朝鮮近代史研究の現段階—「内在的発展論」再考—」によると、まず「戦前期日本の朝鮮史像を特色づけていたのは、朝鮮の自力での発展の可能性を否定し、後進性・落伍性をことさらに強調する停滞論と、朝鮮における歴史形成の動因を専ら大陸や日本など外部に求める他律性史観とであった」とされる。

上記の停滞論と他律性史観といった分析概念はヨーロッパ近代に基準が置かれている。ここで言う近代は発展段階的に達成されるとする発展段階説をとっており、ヨーロッパ近代という基準から先進性と後進性とに分けられ、そこか

であり注目されてこなかった多くの文化的な事象にも目を向けさせる契機になったものと思われる。

それでは本研究対象であるスポーツを植民地近代という分析概念からみていくとどのように検討できるだろうか。その動向を確認しておきたい。

その代表的な研究として鄭根埴の研究をみてみよう。鄭根埴は『生活の中の植民地主義』に所収されている「植民地支配、身体規律、「健康」」のなかで近代的身体をキーワードにして、植民地朝鮮における近代的身体の形成過程を規律権力との関係から論じる。そして植民地期の規律権力に裏打ちされる状況を1970年代の韓国の維新体制に投影しようとしている。

彼は北澤の研究<sup>24</sup>を引いてきて明治期以降の近代的身体を江戸時代の伝統的身体と比較し、近代的身体の特徴を「身体が国家権力の精密な検査対象になり、より良い身体と健康は訓練によって育成されるということ、つまり「体育」という概念が一般化したことである」<sup>25</sup>と導き出す。そして近代的身体が作り出される方式は、社会的支配類型や市場の発展段階において異なるとし、ゆえに宗主国と植民地では適用される身体規律の方式は違っていたと言及しているのである。

身体規律の志向する方向が人的資源の活用に向いているのであれば、その究

---

ら日本＝先進性と朝鮮＝後進性といった定式を導き出すことで日本の帝国主義や朝鮮半島の植民地支配を合理化・正当化する機能を果たしたのである。このことが朝鮮に対する蔑視観や民族差別の再生産を促した点は看過できない。そのためこうした課題をクリアするための分析概念や分析枠組の登場が待たれることになる。

そこで次に提示されたのが「内在的发展論」と呼ばれる分析概念であった。梶村によると「内在的发展論とは、一国史を、停滞的・他律的なものとしてみるのではなく、国内的な契機の法則的展開に即して発展してきたものとしてとらえようとする方法論である。そして、巨視的な意味での一国史的发展の基本的原動力は、下からの契機、つまり基層民衆＝直接生産者の生産・再生産における創造的営為、その枠組としての生産力と生産関係の対応関係と矛盾、そしてそれに条件づけられた意識の成長と階級闘争の展開であると考えられる」としている。

こうした内在的发展論の分析概念、あるいは視角は朝鮮近代史研究のなかでも特に民族運動史や解放闘争史を中心にみていくといった傾向を生みだしている。このことだけ取り上げると一国史に拘泥している点、ならびにそこから派生する民族運動史を中心に据えた分析の方法は研究の分析枠組を決定づけてしまった感がある。並木はこうした内在的发展論に対しても警鐘を鳴らしている。

<sup>24</sup> 北澤一利『「健康」の日本史』平凡社、2000年。及び北澤一利、「近代的身体と健康概念の歴史性」『環』第7号、藤原書店、2001年。

<sup>25</sup> 鄭根埴「植民地支配、身体規律、「健康」」水野直樹編『生活の中の植民地主義』人文書院、2004年、pp.69-70。

極は戦争への動員だと言える。植民地朝鮮における人々を人的資源として動員していこうとするのは 1930 年代の後半以降、具体的な事件を挙げれば 1937 年の日中戦争勃発後のことである。この時期を考慮すると、植民地の宗主国である日本と植民地としての朝鮮半島での総動員体制は並行な関係として捉えられる。そのためここではその動員体制の特徴の違いが明確に述べられなければならない。

彼の見解では「身体の植民地的動員のためには、まず近代国家一般においてと同様、植民地民衆が検査され、訓育、錬成されねばならなかったが、もっとも重要なことは、身体の使用が植民地体制に抵抗する方向でなされないように、精神的に馴致されねばならないということだった」<sup>26</sup>としており、植民地体制に歯向かわない、抵抗しない精神の育成が強調される。そしてこれらを踏まえて「この時期には近代スポーツの自由主義的・合理主義的要素が批判されるようになり、スポーツを「道」と関連づけた柔道と剣道が必修科目になった」<sup>27</sup>としている。また具体的には集団体操、皇国臣民体操や教練などが言及され、「健康」が強制されていく点も同様の文脈上に置かれている。

こうした鄭根埴の研究の延長線上にあるのが辛珠白の研究<sup>28</sup>である。彼は朝鮮半島における徴兵制に着目し「朝鮮人の身体における軍事的合理化」がどのようになされたのかを西尾の研究成果に依拠しながら論を展開している。対象としている時期は 1942（昭和 17）年から 1945（昭和 20）年までの植民地時代の最終段階の時期であり、戦時下の朝鮮人青年に向けられた身体観と戦争へと動員していくための支配機構、体育組織の改編といった制度的側面についても言及する。

鄭根埴と辛珠白の研究はともに「植民地近代」を意識した研究であり、その論じるところは近代を否定的にとらえ、植民地民衆の身体に植民地権力がどのように介入していったのかを証明するものであった。その身体への眼差しは規律権力が実践される体育・スポーツへと向けられている。

確かに 1930 年代後半以降に着目した場合、これらの研究で述べられている点は首肯できる点が多い。しかし、こうした規律権力論のみでスポーツを捉えると植民地下におけるスポーツのインタラクティブな側面がみえなくなってし

<sup>26</sup> 鄭根埴、前掲書、p.73.

<sup>27</sup> 鄭根埴、前掲書、p.74.

<sup>28</sup> 신주백 「체육교육의 군사화와 강제된 건강」 공제육·정근식 편 『신민지의일상』 문화과학사, 2006 年, pp.229-256.

もう可能性も無視できない。植民地主義のなかでスポーツの果たした機能・役割は多様である。こうした近代批判に立脚しつつ、規律権力論で述べられるスポーツは植民地主義とスポーツの関係の一部分でしかなく、他の要素を多分に排除することになってしまっていると言わねばならないだろう。

## 第1章 朝鮮神宮競技大会の創設

### 1. はじめに

本研究は当時日本の植民地であった朝鮮において創設された朝鮮神宮競技大会に着目し、大会創設の経緯を明らかにしていこうとするものである。

この朝鮮神宮競技大会は1925（大正14）年にはじめて開催されている。当時の朝鮮半島は日本の支配下にあり、朝鮮総督府の統治方針としては文化政治<sup>1</sup>と呼ばれる植民地政策が採られていた時期にあたる。このとき言われたスローガンは「内鮮<sup>2</sup>融和」であり、日本人と朝鮮人の共存を建前とした政策が展開されていた。

こうしたなかで朝鮮神宮競技大会は創設されていく。これは朝鮮における初の総合的なスポーツ大会であった。また、この大会が開催される前年には日本で明治神宮競技大会が開催されており、この大会のひとつの見方として明治神宮競技大会が植民地まで拡大されたものともとれる。そのため明治神宮競技大会に付されていた意味との関連からも朝鮮神宮競技大会の創設に関して検討していく必要があるだろう。ただ、両大会の後の状況を照らし合わせてみて、必ずしも単に明治神宮競技大会が植民地へと拡大されただけとは捉えられず<sup>3</sup>、朝鮮神宮の鎮座祭や京城運動場の開場式を含む一連のイベントのなかで朝鮮神宮競技大会が成立していった点は見逃ごせない。

資料に関しては京城日報<sup>4</sup>を中心に当時の新聞資料ならびに当時の雑誌など

<sup>1</sup> 1919（大正8）年の三・一独立運動の後に朝鮮総督となった斉藤実によって行われた政治で、その施政方針には「本期の當初に於いては先づ本府官制を改め、従来總督の任用は武官に限りたる制限を廢止して普通警察制度に改め、尚ほ官吏・教員等の制服帶劍を廢止する等、總督政治の重點を文化的開發に置くことを明らかにした。之が爲に時人は普通に文化政治と稱するに至つたが、統治の根本方針に於いては前期と何等異なる所なく、即ち併合の詔書を奉體し、益々一視同仁の大御心を擴充し、半島をして天業恢弘の樂土たらしむるにあるは勿論である」と語られている。朝鮮総督府編『朝鮮総督府施政三十年史』名著出版、1974年、p.134.

<sup>2</sup> この「内鮮」という言葉は日本と朝鮮半島をひとつのものとして捉えていくことを意味する表現である。しかしこの言葉は宗主国側・植民地権力側の意図が強く反映されている言葉であり、その使用に関しては注意を要するが、歴史的用語のため本研究においてはそのまま用いることとしている。

<sup>3</sup> 朝鮮神宮競技大会は第1回大会以降、1943（昭和18）年の第19回大会まで毎年開催されているのに対し、明治神宮競技大会は内務省と文部省の確執から主管の変更や隔年で大会が開催される時期があるなど、朝鮮神宮競技大会に比べ大会の運営が必ずしもスムーズには運んでいなかった。つまり、それだけ朝鮮神宮競技大会が統制をとられながら開催されていたとも言える。

<sup>4</sup> 京城日報は日本語で書かれた新聞で、総督府の御用新聞としての役割を果た



を用いて大会創設の経緯を明らかにし、大会創設に関しての考察を深めていきたい。

## 2. 大会開催への準備

大会を開催する準備・運営を担ったのは朝鮮体育協会である。そのため大会開催までの過程は朝鮮体育協会の動きから見て取ることができよう。また大会の開催に際して要求されたのが、大会を開催することのできる運動場の存在であった。朝鮮神宮競技大会は朝鮮において開催される初の総合的なスポーツ大会であったため、この大会が開催されるにあたってはそれに見合った「場」が必要とされたのである。その「場」として登場してきたのが京城運動場であった。以下では大会開催までにどのような準備がなされたのかを京城運動場の竣工と朝鮮体育協会の活動から見ていく。

### (1) 京城運動場の竣工

京城運動場は光熙門と東大町との中間にあたる訓練院広場の東方公園地に22,700坪の総面積をもって建設され、工事費は155,000円を費やすというものであった<sup>5</sup>。

この運動場建設の目的は「數年前より大京城として完全な一大運動場が欲しいと云ふ輿論が旺になり、大正十二年の春に府で大體の計画を樹てゝゐたが、時恰も東宮殿下御結婚記念事業として何等かの計畫實現を必要とするに至ったので、京城府は永遠の記念として一大運動場を建設することに決定」<sup>6</sup>したという経緯から理解されよう。当時の京城の運動施設といえば、学校の運動場に依存することがほとんどで、例えばテニスコートにしても一般に開放されるということがなかった。そのため施設の整った運動施設の建設が要求されたのである。また、この運動場の建設が東宮の結婚を祝した記念事業でもあった点は重要であろう。「東宮殿下には豫て體育方面に特に御熱心に御獎勵あらせられ」<sup>7</sup>ていたということが、この運動場建設を東宮の御結婚記念事業へと結びつけたようである。

京城運動場の建設がこうした記念事業としての意味をもったことにより、府

---

したとされる。社則の一つ目には「京城日報の社員は忠君愛國の精神を發揮して朝鮮總督府施政の目的を貫徹するに勗むること」とあり、その紙面上の性格をあらわしている。主な資料として京城日報を用いるがこの点には留意しておきたい。

<sup>5</sup> 朝鮮總督府『朝鮮』1925年11月号、高麗書林、1987年、p.145.

<sup>6</sup> 朝鮮總督府『朝鮮』1925年11月号、高麗書林、1987年、p.146.

<sup>7</sup> 『京城日報』1925年5月30日付.

を中心とした建設を行う側は強い責任感を持たざるを得なかった。当時その設計に携わった京城府の技師大森鶴吉は、この記念事業に万全を期すために日本の著名なグラウンドや運動場を視察し、さらに外国の運動場についても研究を重ね、体育協会の関係者とも意見を交換したうえで設計に取り掛かるという徹底ぶりだった<sup>8</sup>。また運動場を建設する際に起きた土地の買収問題<sup>9</sup>にあっては、土地収用令による強制処分も辞さないとしながらも、東宮の慶事を記念するグラウンドであるため、法の力を用いることに懸念の声があがるなど、ここでも何らかの影響が垣間見られたのである。

運動場建設が本格的に始まったのは1925（大正14）年5月の起工式を終えたあたりからである。起工式に至るまでは土地の買収問題や建設経費の問題など諸所の問題が浮上しており、建設事業は足踏み状態だったが、起工式後は朝鮮神宮競技大会が開催される10月に合わせて計画通りに運動場の竣工がなされていく。完成した京城運動場の設計状況をみると、総面積22,700坪中、陸上競技場8,500坪、野球場5,500坪、庭球場1,200坪、水上競技場（予定地）600坪、馬場550坪、植樹芝生地道路6,350坪となっている<sup>10</sup>。これらの設備の完成に際して大森は「其経費頗る少く僅か十五萬餘圓では到底充分の設備は出来ないのである、現に明治神宮競技場の如き單に競技場丈けにて百餘萬圓を投じ又甲子園の如き野球場丈けにて八十萬圓を費やして居る、之れは主として観覧席に多額を要したのであるが京城運動場は總額十五萬餘圓で各種の競技場を造ると云ふ無理があり到底観覧席等は理想通りのものが出来る筈はない今日考えればこの少額で全體の現設備が出来た事が意想外とする所である然し規模としては將來を豫想し充分の設備をなし得る構造としてあるのは勿論であるが観覧其他を完備するには少くも今後尚百餘萬圓の経費を要するのである。幸ひに現運動場が一般土木事業界の不況時にもあつた關係上経費の割合に相當の設備をなし得た事を了承されたいと思ふ」<sup>11</sup>と述べている。少ない経費のわりに施設の充実をはかることができたのである。

ともあれこうして竣工された京城運動場は「愈々來たる十五日朝鮮神宮鎮座祭の記念すべき日に此記念事業として建設した運動場の開場式を擧げ十七、十八の兩日朝鮮神宮競技大會場として初めて使用し得るようになったのは色々の

<sup>8</sup> 『京城日報』1925年5月30日付。

<sup>9</sup> この土地買収において問題になっていたのは買収額に対する京城府と朝鮮貿易会社間の認識の相違であった。具体的に言うと貿易会社側は所有地2,000坪を坪15円と査定していたのに対し、府は坪10円と査定し、総額にすると約10,000円ほどの差額が出ていたのである。『京城日報』1925年2月13日付。

<sup>10</sup> 『京城日報』1925年10月10日付。

<sup>11</sup> 『京城日報』1925年10月10日付。

意味に於て非常に喜ばしいことである」<sup>12</sup>とあるように、朝鮮神宮の鎮座祭、朝鮮神宮競技大会との関連性を意識したうえで開場式を迎えようとしていた。こうした総合的なスポーツ施設の登場が朝鮮神宮競技大会を成立させる必要条件であったことは言うまでもなく、また、この運動場建設がひとつの記念事業としても遂行された点は看過できない。

## (2) 朝鮮体育協会の活動

朝鮮神宮競技大会を主管したのは朝鮮体育協会であった。朝鮮体育協会は朝鮮における体育・スポーツの普及発達を目的として1919(大正8)年2月に朝鮮新聞社の後援を受けつつ発足している。この体育協会は京城庭球団と京城野球協会を中心として組織されていたため、発足当初は「野球と庭球に力を注ぎ斯道の発達普及を圖る」<sup>13</sup>ことをまず第一に掲げて、その活動を展開していたようである。

朝鮮体育協会の運営資金は会費と寄付金に基づく基金で成り立っていたが、寄付金の占める割合が大きく、主に総督府と民間企業に頼っていた。そのため総督府の政策次第では運営に多大な影響が及ぼされることとなり、朝鮮神宮競技大会が創設された年の1925(大正14)年には総督府の鉄道経営の移管問題から朝鮮体育協会の組織改造問題にまで発展することとなった<sup>14</sup>。これは総督府がそれまで南満州鉄道株式会社に委託していた鉄道の経営を新鉄道局へ移管すると決定したことによるが、その移管は同年3月31日に施行されている<sup>15</sup>。これにより総督府の予算は鉄道局に大きく流れることになり、朝鮮体育協会は運営上の資金不足の問題を抱え込むこととなる。

こうして運営の窮地に立たされた朝鮮体育協会では組織の改造問題が取沙汰されるようになった。4月には「改造を叫ばれてゐた朝鮮體育協會先月末役員會を開いて今年の豫算、事業計劃、役員改選、その他に關して協議した結果豫て本紙が報道した通り従來の組織を會員組織とし年額十二圓以上を納むるものを會員とすることになつた」<sup>16</sup>とあり、組織改造についての決定が下されている。朝鮮体育協会をこうした会員組織としたのは、多くの人々を会員とするこ

<sup>12</sup> 『京城日報』1925年10月10日付。

<sup>13</sup> 宮田保「朝鮮運動競技界の發達と現状」『文教の朝鮮』1927年4月号、朝鮮教育會、p.112。

<sup>14</sup> 『京城日報』1925年2月13日付。

<sup>15</sup> 新東亜編集室編『朝鮮近現代史年表』三一書房、1980年、p.131。

<sup>16</sup> 『京城日報』1925年3月19日付。因みに朝鮮体育協会が組織された当初は年額50円以上の会費を納めるものを会員と規定しており、会費を下げることで会員の増員を図ろうとしたことが理解される。

とで会費を調達し、資金不足の解消を図ろうとしたことに他ならなかったが、このような結果を招いたのは朝鮮体育協会の有する半官半民の性格によるものであったと理解されよう。こうした資金不足が影響して朝鮮体育協会はそれまで主管・主催していた各種スポーツ大会からは手を引き始め、朝鮮神宮競技大会を中心にスポーツ大会の主管・主催を行っていくこととなるのである。

ところで、朝鮮体育協会はこの第1回の朝鮮神宮競技大会の準備あたり、まず競技細目及び選手の出場資格を決定している<sup>17</sup>。第1回大会において採用された種目は陸上競技、野球、庭球、バスケットボール、バレーボールの5種目であったが、陸上競技を除く4種目についてはそれまでの競技成績を加味したうえで大会役員会の推薦により大会の出場者が決定されていた。陸上競技の出場資格に関しては「脚力を以て渡世している者即ち車夫、配達夫等を除く一般學生、青年團員、女子學童に限る」<sup>18</sup>と規定されており、車夫などのいわゆる脚力の強さを生業としている者の参加は認められなかった。

大会の経費に関しては、その見積もりを行ったうえで経費の不足の問題を指摘し、これに対応するため、同協会は会長の生田清三郎の名で斉藤総督宛に2,000円の補助金の下付願いを提出するという一面も見せている。これに対しては「本府でも同大会が神宮を壽ぐ最も好き方法であり、全鮮の體育及競技發達に資する事甚大なので是に諒解を與えてゐるので近く下附される模様である」<sup>19</sup>と、府側による大会の重要さの認識も相俟って、事なきを得ている。また、経費の不足のために貴重な収入となったのが大会の入場料であった。これは大会開催が差し迫った10月8日に最終的な打ち合わせが行われ、各競技3日共通券1円50銭、1日券70銭、学生3日券80銭、1日券40銭と決定されている<sup>20</sup>。この金額は当時朝鮮の田舎で働く人夫1日の賃金が、男性の場合最高で1円から最低50銭であった<sup>21</sup>ことから推すと、決して安い金額ではなかったであろう。そのためか15日における京城運動場の開場式ならびに朝鮮神宮競技大会の開会式は一般民衆を多く集めるため無料で開放するということにはなっている。

朝鮮体育協会はこの他にも大会プログラムの作成を行うなど、朝鮮神宮競技大会の細部に至るまで、全面的にその運営・管理が委託されていた。こうして大会の開催に至るまで朝鮮体育協会によって大会の準備が着々と進められてい

17 『京城日報』1925年9月9日付。

18 『京城日報』1925年9月9日付。

19 『京城日報』1925年9月20日付。

20 『京城日報』1925年10月1日付。

21 吉野作造『吉野作造選集9』岩波書店、1995年、p.210。

ったのである。

### 3. 大会創設の背景

朝鮮神宮競技大会の創設には当時の国家神道の影響が見られる。それはこの競技大会が朝鮮神宮を奉賛するという意味を含んでいたことから理解できよう。そのためこうした影響が大会の性格を規定するひとつの要素となっていたはずである。またこの朝鮮神宮競技大会は前年に創設された明治神宮競技大会の予選大会としても位置づけられていたため、2つの大会の接点からも大会創設の背景を導き出しうるのではないかと考える。以下はこれらに着目し、大会創設の背景、また大会の性格について検討する。

#### (1) 朝鮮神宮の創建

朝鮮神宮の創建は日本による植民地朝鮮への宗教政策が具現化されたものとみることができるだろう。これは日本の近代において国教化されるに至った国家神道の存在を抜きにしては語れない。ここで言う国家神道を村上は以下のように説明する。

集団の祭祀として伝統をうけついできた神社神道を、皇室神道と結びつけ、皇室神道によって再構成し統一することによって成立した。民族宗教の集団的性格は、国家規模に拡大され、国民にたいしては、国家の指導理念である国体の教義への無条件の忠誠が要求された。国家神道の教義はそのまま国民精神であるとされた<sup>22</sup>。

すなわち、既存の神社神道を天皇制イデオロギーに基づく皇室神道と結びつけることによってその存在意義を高め、国民の精神的な統合を促すものとして登場してきたものが当時の国家神道であったと理解される。

こうして成立してきた国家神道は伊勢神宮を頂点とする近代社格制度<sup>23</sup>に基づいてシステム化され、国家事業として推進されていく。

そして、この体制が植民地であった朝鮮にも拡大され、それを最もよく象徴するものとして朝鮮神宮が創建されるのである。創建についての内閣告示が出

<sup>22</sup> 村上重良『国家神道』岩波書店、1985年、p.223.

<sup>23</sup> 明治政府によって定められた神社の格に関する制度のこと。神社の格を大きく官社と諸社に分類しており、官社には官幣の大中小社、国幣の大中小社があり、官幣社は神祇官が、国幣社は地方官が祭るものとされ、それぞれ神祇官の所管とされた。また、諸社には府社、県社、郷社が置かれたとされる。坂本是丸「近代社格制度」『神道事典』弘文堂、1994年、p.121.

されたのは1919（大正8）年である。その内容をみると「朝鮮神社創立並其ノ社格 大正八年七月 内閣告示第十二號 一 朝鮮神社 祭神、天照大神 明治天皇、右神社ヲ朝鮮京畿道京城府南山ニ創立シ社格ヲ官幣大社ニ列セラルル旨仰出サル」<sup>24</sup>となっており、内閣告示が出された当初はまだ「朝鮮神宮」という名称ではなく「朝鮮神社」であったことが分かる。「朝鮮神宮」へと名称の変更をしたのは1925（大正14）年6月に出示された内閣告示のときであり、鎮座祭の行われる4ヶ月前のことであった<sup>25</sup>。

ところで朝鮮神宮は「朝鮮に於ける内鮮同胞をして報本反始の誠を盡し精神生活の中樞を明徴にし、半島大衆の嚮ふ所を昭示し給はんとの大御心に基づく」<sup>26</sup>ものとされ、また総督府も「内鮮人の共に尊崇する事の出来る神祇を勧請して、半島住民の報本反始の誠を致させ、内鮮融和を圖るのは、朝鮮統治上最も緊要の事」<sup>27</sup>とし、朝鮮神宮の創立が内鮮融和を図るうえで重要な役割を果たすものと考えられていた。

また祭神に関しては天照大神ならびに明治天皇としているが、この祭神をめぐってはひとつの論争が起きている。内閣の告示によって定められた祭神に対して、神道関係者が異議を唱えたことでこの論争は始まっている。このときに異議を唱えた小笠原省三の主張は以下の3点であった<sup>28</sup>。「一、祭神に朝鮮國土の神を奉祀せよ。二、社殿の様式を、朝鮮の風土に適したるものとせよ。三、調度装束及祭式は、内鮮兩地の長を採りて新儀式を制定せよ。」ここで小笠原の言いたかったことは興味深い。すなわち、朝鮮人の内鮮融和を促すうえで、あるいは国家神道の普及のためには朝鮮における朝鮮人のための神社を創建する必要があると説いているのである。そのために祭神は朝鮮で古来から崇拜されている檀君<sup>29</sup>を祀り、朝鮮の気候風土に合わせた社殿を設け、朝鮮の文化も取り入れながらそれらを神道という枠のなかへと絡め取っていこうというもので

<sup>24</sup> 帝國地方行政學會「社寺 宗教」『朝鮮法規輯覽（全）』帝國地方行政學會、1920年、p.1.

<sup>25</sup> 『京城日報』1925年6月28日付。

<sup>26</sup> 岩下傳四郎『大陸神社大觀』大陸神社聯盟、1941年、p.52.

<sup>27</sup> 岩下傳四郎、前掲書、p.53.

<sup>28</sup> 小笠原省三『海外の神社』神道評論社、1933年、pp.186-187.

<sup>29</sup> 朝鮮の始祖神の号とされる。この信仰は以下のように説明される。「檀君信仰は初め民間信仰であったが、高麗末には地方豪族や貴族にも信仰されるようになり、朝鮮王朝（李朝）の国号採用にも箕氏朝鮮とならんで檀君朝鮮の国号が有力とされた。（中略）19世紀末、民族意識の高揚につれ、檀君はふたたび朝鮮民族の祖神として信仰され、大倭教（檀君教）がおこり、現在なお韓国の有力な固有宗教となっている」井上秀雄「檀君」『朝鮮を知る事典』平凡社、1986年、p.268.

あった。

しかし、この主張は退けられる。その理由は「檀君は伝説的存在であること、天照大神、明治天皇と檀君とを合祀することは、かえって朝鮮民族に神宮軽視の念を抱かせる結果になる」<sup>30</sup>とされている。つまり、ここでの論争から分かることは日本の側がこの神宮に対していかに天皇制イデオロギーを矜持していたのかということであった。それほどこの神宮に対する当局側の思い入れが強かったとも換言できる。

こうして朝鮮神宮は上記のような背景を持ちつつ創建され、1925（大正14）年の10月15日には、その鎮座祭が挙行される運びとなった。後述するが、この日は京城運動場の開場式、朝鮮神宮競技大会の開会式と同日であり、植民地朝鮮にあって、この日は特別な一日であったと思われる。

## （2）明治神宮競技大会との関連性

朝鮮神宮競技大会の開催に先立つ1924（大正13）年、日本で明治神宮競技大会が開催されている。朝鮮神宮競技大会は明治神宮競技大会の予選大会としても位置づけられていたため、明治神宮競技大会開催の経緯、目的から朝鮮神宮競技大会に付された役割も推し量れよう。

1924（大正13）年の第1回明治神宮競技大会を主管したのは内務省だった。これは当時の神社行政が内務省の管轄であったことがひとつの要因だと考えられる。そのため明治神宮外苑造営には内務省内に設置された明治神宮造営局が担当し、明治神宮奉賛会と提携しつつ神宮外苑の設計及び施工がなされたのである。そして1924（大正13）年10月に競技場がまず第一に竣工され、同月に竣工式を挙行し、11月の明治神宮例祭を機として明治神宮競技大会が開催されている<sup>31</sup>。

また内務省はそうした神社行政に携わる一方で1916（大正5）年に保健衛生調査会を設置しており、労働者の増加にともなう衛生上の問題を解決することで労働力の確保を意図するようになる。そこで体育・スポーツを奨励し、体力の鍛錬を中心とした「国民保健事業の進展」を図ろうとしていた<sup>32</sup>ということもこの当時の内務省のもつ特徴のひとつであり、明治神宮競技大会を主管した理由として理解される。

では明治神宮競技大会開催の目的は如何なるものであったのだろうか。第1回の明治神宮競技大会報告書を見ると以下のように記されている。

<sup>30</sup> 中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会、1976年、p.285.

<sup>31</sup> 明治神宮奉賛會編『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛會、1937年、pp.7-11.

<sup>32</sup> 高津勝『日本近代スポーツ史の底流』創文企画、1994年、pp.53-54.

明治神宮外苑に築造中の大運動競技場は大正一三年十月を以つて、其の工事竣成の筈なりしを以て、全国の選手を東京に集め、神前に光榮ある全国的な一大競技を行ふは畜に明治大帝の御聖徳を懐仰する所以なるのみならず、國民の身體鍛鍊並精神の作興上其の効果尠少なからずと信じたるを以て、此の年を始めとし、毎年同神宮例祭を機とし、明治神宮競技大會開催の案を樹て、關係方面と打合協議を重ね、遂に同年八月之が根本計劃確立し、經費としては保健衛生及獎勵諸費中より金壹萬円支出の件も略決定したるを以て、文部省、陸海軍省、地方長官等に對し、左記の通り配慮方を依頼せり<sup>33</sup>

上記のように明治神宮競技大會は明治神宮例祭とその時期をあわせて開催されることとなり、その目的は「明治大帝の御聖徳を懐仰」し、また「國民の身體鍛鍊並精神の作興」に置くこととしている。

こうした目的をもって開催されることになった明治神宮競技大會が植民地へとその規模を拡大していこうとしていたのは大會開催当初からみられた。報告書の要項にある選手選出方法には「青年団八道府県単位（一府県十名程度）、一般女子八大体従来大日本体育協會カ地方予選ヲ行ヒシ区域ニ從ヒ、全国ヲ北海道、東北、関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州、台湾、朝鮮及関東州（満州ヲ含ム）ノ十二区ニ別チ予選シ、参加資格ヲ定ムル見込」<sup>34</sup>とあり、大會開催の当初から台湾、朝鮮、満州などの植民地からも代表選手を招聘し、大會を形成していこうとしていたことが窺える。このような規定により、翌年には朝鮮においても朝鮮神宮競技大會が開催されたのであり、この大會が明治神宮競技大會と同様、天皇制イデオロギーを體現していく機能を合わせ持つものであったと理解されよう。

#### 4. 大會の開催を含む祝祭的空間の形成

朝鮮神宮競技大會の開催はこの大會が単一で開催されたのではなく、朝鮮神宮の鎮座祭、京城運動場の開場式などとともに盛大に執り行われた。そのためこうした一連のイベントによって日本の權威を当時の朝鮮において示しえたことは間違いないだろう。これは「内鮮融和」というスローガンに象徴されるように、当時の植民地政策を反映してもいた。以下ではこれらの様子を見ていく。

<sup>33</sup> 内務省編『第一回明治神宮競技大會報告書』内務省衛生局、1925年、p.1.

<sup>34</sup> 内務省、前掲書、p.4.



### (1) 朝鮮神宮鎮座祭の挙行

1925（大正14）年10月、朝鮮神宮が創建され、その鎮座祭が同年10月15日に催されることとなった。この鎮座祭は朝鮮全土をあげて祝う盛大なものであった。例えば京城府は以下のような計画をもって奉祝に備えている<sup>35</sup>。1. 神宮の表参道に大奉祝門を建てる 2. セブランス病院の前に大アーチを建てる 3. 南大門を電飾する 4. 御霊代安着の13日から18日まで夜には花火を打ち上げる 5. 各小学校生徒25,000人に旗行列を行わせる 6. 府から大鏡餅を供物として進呈する 7. 京城電気会社に交渉して花電車20台を運転させる 8. 各商店運送会社の貨物自動車に花飾りをつけさせる 9. 府内新聞社、大会社、大建物には電飾を依頼する 10. 平壤航空隊に依頼して府の上空で奉祝飛行を行わせる 11. 各地から集まる人々のために旅館主に安価で親切にするよう依頼する。

こうした準備の他にも、鉄道局などでは多くの参拝者を見込んで臨時列車の増発ならびに参拝者には運賃の値下げを施す<sup>36</sup>などの措置をとっている。また京城を訪れる人々のための宿泊場所に関しても府はいろいろと工夫しなければならず、それらの人々が旅館に宿泊しきれない場合は下宿屋にも宿泊させることとし、例えば小学校や普通学校生徒などの団体については府内の小学校や普通学校の講堂を臨時に宿泊所として利用、青年団などには寺院を開放することにしていた<sup>37</sup>。

そして15日の当日を迎え、鎮座祭が挙行される。この鎮座祭には朝鮮総督の斉藤実をはじめ、李王家からは李垞が王の名代として参列し、各国領事、各道知事、軍の将校、また新聞記者や銀行関係者、実業家など約3,500名にも上る人々が出席していた<sup>38</sup>。

鎮座祭は定められた式次第にしたがって約2時間にわたり厳かに執り行われ、「かくて李垞公殿下、總督、宮司、参列員の順序に退下したが、既にこれを以て朝鮮の守護神は永遠に南山の中腹淨域に鎮座遊ばされた」<sup>39</sup>とされている。

一方、鎮座祭当日の府の様子をみると「京城府は驛に大奉迎門を建設し、各町々亦奉迎門を作り、各戸に國旗、獻燈、締飾を施し奉祝の至誠は全市に漲り、奉迎の慶は街街に満ちたが、殊に十五日祭典當日大學豫科學生以下各種學校生徒の参拜あり、二萬五千餘の初等學校生徒は手に々々小旗を翳して参拜し、夜

35 『京城日報』1925年9月27日付。

36 『京城日報』1925年10月7日付。

37 『京城日報』1925年9月30日付。

38 『京城日報』1925年10月10日付。

39 『京城日報』1925年10月16日付。

は府主催の提灯行列があり、馬野府尹之を統率し、五百の職員を先頭に青年團及町洞等の参加者之につづき、約二千五百の大民衆が蜿蜒火龍のうねりを作り、左の奉祝歌を高唱しつつ参拜し拜殿前に萬歳を三唱したのである」<sup>40</sup>とされ、この鎮座祭が盛大に行われ、またこれに多くの人々が導入されたことを窺わせる。

ところでこの鎮座祭に際して朝鮮総督の齋藤はこの神宮の意義を以下のように述べていた。

惟ふに我國敬神の大義は國民道德の大本であつて、神社の崇敬は報本反始の精神の表現である。抑神社には行政上それぞれ社格の區別は存するも、皆齊しく其の祭神の神徳を景慕し、衆庶が各其の追遠報始の至情を發露すべき、齋場に供する國家の施設に外ならぬのである。故に國民として神社を崇敬し以て國家の奉祀する我國の祖先及功臣に對し、至誠の念を以て禮を致すことは固より當然のことと謂はねばならぬ。(中略)茲に聊か所懐を陳べ、將來半島に於ける民族が、相率ゐて神宮に對する崇敬の念を厚うし、以て其の歸嚮を一にせんことを切望してやまぬのである<sup>41</sup>。

このように鎮座祭は朝鮮神宮の存在を朝鮮全土に知らしめることとなり、そのイデオロギーを最も象徴する出来事として挙行されたのである。

## (2) 京城運動場開場式

1925(大正14)年10月15日は朝鮮神宮の鎮座祭の儀式が午前に行われ、続いて午後からは京城運動場の開場式が行われている。開場式の様子は以下のように語られる。

この記念すべき大運動場の開場式は朝鮮神宮御鎮座祭の佳日を以て陸上競技場に於て盛大に舉行された。定刻に先立ち小學校、普通學校、高等女學校等の兒童生徒、青年團員、朝鮮神宮競技出場選手入場し、觀衆は約二萬と稱せられた。來賓には齋藤總督を始め、李完用候、大塚鎮海要港司令官、生田内務局長、各道知事、其他官民有志五百餘名の參列あり、午後三時二十分竣工式を終り、引つづき開場式を擧げ、府尹の式辭、總督以下の祝辭があつて後齋藤總督の發聲で聖上皇后兩陛下竝東宮同妃兩殿下の萬歳

<sup>40</sup> 朝鮮總督府「朝鮮神宮鎮座祭の狀況」『朝鮮』1925年11月号、高麗書林、1987年、p.123.

<sup>41</sup> 『京城日報』1925年10月15日付。

を高唱し同三時四十分めでたく開場式を終った<sup>42</sup>。

この開場式の前には修祓の儀式が執り行われ、その後、上記のような開会の辞、式辞、工事報告、その他来賓の祝辞などが行われている<sup>43</sup>。

そして、この後に斉藤総督のテープ切りが行われ、開場式に続き、朝鮮神宮競技大会の開会式を兼ねて京城運動場の入場式が挙行された。このとき競技場において京城府立公立小学校、普通学校あわせて29校、1万人に近い児童たちによる8種の連合体操が行われている<sup>44</sup>。

入場式ではおよそ1,200名の神宮競技大会出場者が入場し、生田体育協会長の挨拶、斉藤総督の祝辞、選手代表の宣誓が行われた。このとき斉藤は「朝鮮神宮新たに成り本日鎮座祭を行はるる佳節に際し、鮮内各地より運動選手を招き、神前に之が競技を爲さむとするは極めて會心に堪えざるなり。我國に於ては神前に技を競ふこと廣く行はれ以て士氣の發揚を圖れり、今諸子は茲に鎮座祭に當りて古來の慣例に依り競技の事に従はむとす、諸子は宜しく平素練磨せる所を十分に發揮し競技の眞精神を體し、以て其の壯快なる意氣を示さむことを望む」<sup>45</sup>と祝辞を述べ、この競技大会が日本の慣例との関わりから、いわゆる神前競技として行われることを祝していたのである。

それに次いで第一、第二高等女学校の生徒2,000名による行進遊戯が行われ、最後は、このときを機に京城連合青年団の閲団式も執り行われている。この青年団はそれまで日本人、朝鮮人の各々で構成されていた青年団をひとまとめにしたもので、両民族が団において結束し、内鮮融和が図られること目的としていた<sup>46</sup>。これは朝鮮人による青年団の活動（政治運動、社会運動）に対する牽制であり、こうした鎮座祭、京城運動場の開場式などの記念式典を利用して行われたものであったと理解される。ともあれ、この閲団式を終え、この日のすべてのプログラムが終了したのである。

### （3）朝鮮神宮競技大会の開催

15日の開会式を終え、16日から18日の3日間にわたって第1回の朝鮮神宮競技大会が開催される。大会の開催に際して10月11日付の京城日報では次のように述べられている。

<sup>42</sup> 朝鮮總督府『朝鮮』1925年11月号、高麗書林、1987年、p.146.

<sup>43</sup> 『大阪朝日新聞朝鮮朝日』1925年10月16日付.

<sup>44</sup> 『大阪朝日新聞朝鮮朝日』1925年10月16日付.

<sup>45</sup> 『京城日報』1925年10月16日付.

<sup>46</sup> 『京城日報』1925年9月15日付.

朝鮮に於ける空前絶後の盛儀たる神宮の御鎮座祭が来る十五日執行されるに當つて、東宮殿下御結婚記念として永へに御慶事を壽くべき京城運動場も、最近漸く完成し東洋一と誇る甲子園グラウンドと肩を列べる程の宏大なるものとなり、朝鮮體育協會では神宮の御鎮座祭を奉祝すべく来る十六日より三日間運動場開きを兼ね盛大なる朝鮮神宮競技大會を舉行することになった。本競技大會は陸上競技、野球、庭球、籠球、排球を併せ、出場選手は廣く全鮮より選出し學生は勿論全鮮各地の青年団等普く内鮮一般の男女を網羅せる半島運動界未曾有の大規模のもので優勝旗の外總督、總監を始め多數優勝カップの寄贈もあり本大會に於ける優秀選手は近く舉行される明治神宮競技大會に朝鮮代表選手として派遣されることになつてゐる。(中略)斯くの如く全鮮を擧げて行はれるこの神宮競技大會に出場する選手總數は二千名の多數に上り半島運動界空前の盛觀を呈するであろう<sup>47</sup>

上記によって大会の概要を掴むことができよう。これによると、これまで述べてきた朝鮮神宮の鎮座祭を奉祝するという意味と京城運動場の開場を記念するという意味のふたつをこの大会が持ちえていたことを知らしめてくれる。また、この大会には朝鮮の各地から日本人、朝鮮人を問わず、競技において優秀な成績を修めた者あるいは優秀な成績を修めたチームが参加しており、更にこの大会において優秀な成績を修めた場合は、日本で開催される明治神宮競技大會に代表選手として参加することになっていたのである。したがって、これら一連の繋がりをもって朝鮮神宮競技大會が創設されていることを鑑みると、こうした総合的なスポーツ大会が様々な社会的状況や背景を映し出しているという点で非常に重要であると思われる。

ところで、この神宮競技大會は16日の野球戦を皮切りに開始されている。野球の出場チームは7チームで、その参加している各チームのメンバーをみるとほとんどが日本人であるが、その後行われたバレーボールやバスケットボールのメンバーをみると朝鮮人選手も数多く参加していることが分かる<sup>48</sup>。そして競技の結果、野球や庭球に関しては日本人で構成されたチームが優勝を果たしており、バレーボールやバスケットボールなどは朝鮮人によって構成されているチームが優勝を果たしていた<sup>49</sup>。

こうして競技を終え、大会での優勝者には優勝旗やトロフィーの授与がなさ

<sup>47</sup> 『京城日報』1925年10月11日付。

<sup>48</sup> 『京城日報』1925年10月11日付。

<sup>49</sup> 『大阪朝日新聞朝鮮朝日』1925年10月21日付。

れているが、「今回の第一回朝鮮神宮競技大会における優勝者は永久に記念される意味において明治神宮競技大会のそれにならつて姓名を桐板に記入して朝鮮神宮に奉納せらるる筈である」<sup>50</sup>とあるように、朝鮮神宮に優勝者の名前を記入した桐板が納められることにもなっていた。

また前述したように、この大会での優秀選手は明治神宮競技大会への参加を果たしている。参加する選手らは朝鮮体育協会の推薦によるものであったが、陸上競技においては、5千メートルの姜燦格、ローハードルの網干宗一、棒高跳びの山本麓、また庭球では町田・今田組、女子選手として須々木・古田組、田口・島谷組が明治神宮競技大会へ出場しており、殊に庭球の須々木・古田組は明治神宮競技大会において準決勝まで勝ち残るなどの活躍をみせ、大きな評価を受けていた<sup>51</sup>。

こうして第1回の記念すべき朝鮮神宮競技大会は盛況の下に幕を閉じたのだが、この大会創設の経緯から推すと、こうした祝祭的な空間が当時の植民地である朝鮮において出現したことの意義は大きいだろう。それは当該期における日本の植民地政策を象徴したスポーツ大会であったと理解することができる。

## 5. 小括

以上、朝鮮神宮競技大会の創設について、その成立までを大会を取り巻く状況から考察してきた。これまで明らかにしたところをまとめると以下のようになる。

1. 朝鮮神宮競技大会が行われるためには、まずそれに見合った運動場の建設が必要であった。そのとき登場してきたのが京城運動場であり、この運動場建設はまた東宮御成婚の記念事業としても遂行されている。
2. この大会は朝鮮体育協会によって運営・管理がなされ、大会開催にあたり、競技細目及び出場資格の決定、また大会経費の管理、大会プログラムの作成などを行い、全面的にこの大会をバックアップしていた。
3. 一方、日本の国家神道の象徴である朝鮮神宮もこのとき創建されており、それを記念して鎮座祭が行われることになった。この鎮座祭は府をあげて盛大に行われている。
4. 竣工した京城運動場の開場式は朝鮮神宮の鎮座祭が挙行される1925（大正14）年の10月15日に時を同じくして行われ、朝鮮神宮競技大会の開会式も開場式直後に行われている。これらが同時に挙行されることで大会を含むそれぞれ

<sup>50</sup> 『大阪朝日新聞朝鮮朝日』1925年10月9日付。

<sup>51</sup> 『京城日報』1925年12月23日付。

れのイベントはその祝祭性を強めていた。

5. こうして朝鮮神宮競技大会は、朝鮮神宮の鎮座と京城運動場の開場を奉祝するという意味も担いつつ、前年日本で開催された明治神宮競技大会の影響も受けながら開催されたのである。この大会へは日本人、朝鮮人がともに参加しており、優秀な成績を修めた選手は朝鮮体育協会の推薦を受け明治神宮競技大会への参加が認められた。

朝鮮神宮競技大会はこの後も毎年開催され、1943（昭和18）年の第19回大会をもって姿を消すことになるが、羅絢成の著書<sup>52</sup>には1944（昭和19）年まで行われたとする記述もある。ただ本研究においては1944（昭和19）年に開催されたという記録は現時点では確認できていないため1943（昭和18）年の第19回大会を最後の大会として位置付けている。

---

<sup>52</sup> 羅絢成『韓國體育史』교학연구사、1981年、p.247.

## 第2章 朝鮮神宮競技大会の展開

### 1. はじめに

前章においては朝鮮神宮競技大会がどのような背景をもって創設されてきたのかを明らかにしてきた。本章においてはその創設された朝鮮神宮競技大会がどのように展開し、そして植民地朝鮮においてどのような機能を期待されていたのかを当該期の植民地朝鮮の社会的動向を踏まえながら分析していく。

朝鮮神宮競技大会が創設されたのは植民地朝鮮の文化政治期においてであった。それ以降の朝鮮半島のスポーツ状況は植民地社会の近代化にともなって進展し、30年代には活況を呈するに至る。そのなかでも総合競技大会としての朝鮮神宮競技大会は当該期において最も権威のあるスポーツ大会として存在していたのである。その理由としては前章で明らかにしてきた通り、①朝鮮体育協会が主管し、植民地権力との結びつきが強かったということ、②またこの朝鮮神宮競技大会で優秀な成績を残した選手らは明治神宮競技大会に参加することができ、延いては国際スポーツへの参加にまで繋がる大会であったということ、などが挙げられる。そのため朝鮮神宮競技大会はその他のスポーツ活動以上に当該期の植民地社会に生きる人々へ植民地権力側の意図を伝え、人々の行動に影響を与えうるスポーツの祭典になっていたものと考えられる。つまりこの大会は当該期の社会的状況を反映することにもなっていたと仮定され、この大会を分析することは当該期の植民地社会の状況をスポーツという文化的実践から分析していくことを意味する。

よって本章では植民地期の朝鮮半島において開催された朝鮮神宮競技大会に着目し、これまで明らかにされてきていない大会の展開について分析・考察していく。またそれにより当該期の植民地社会の状況についても理解を深めていきたい。

### 2. 研究の方法

#### (1) 先行研究について

植民地朝鮮における体育・スポーツを取り扱う文献などには朝鮮神宮競技大会という言葉は散見されるが、大会そのものについての記述はほとんどない。例えば羅絢成の『韓國體育史』では朝鮮人の国際スポーツ参加の過程で朝鮮人選手らが朝鮮神宮競技大会や明治神宮競技大会などで日本人選手を退けたという記述だけに止まっている<sup>1</sup>。また李学来の『韓國近代體育史研究』では1928

<sup>1</sup> 羅絢成『韓國體育史』교학연구사、1981年、p.186.

(昭和3)年の『東亜日報』を史料とし、一部分に朝鮮神宮競技大会についての記述は認められるが、朝鮮人選手の活躍に触れられているだけである<sup>2</sup>。これらの研究は朝鮮人のスポーツでの活躍に焦点が絞られており、民族主義的な立場からスポーツによる民族的抵抗について言及されるものでもあったため、植民地権力とスポーツとの関係がその視角となる日本人主催のスポーツ大会にまで分析が及ばなかったものと考えられる。

またその他に朝鮮神宮競技大会について触れられた研究としては古田の「北朝鮮マスゲーム批判序説—初期の思想的意匠と近代化の虚構」<sup>3</sup>が挙げられる。この研究は北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国。以下、北朝鮮と記述する。)で行われているマスゲームを有機体国家論から考察したものであり、マスゲームが北朝鮮の国家体制の擬態である点を剔抉している。研究の主眼が北朝鮮のマスゲームの政治性におかれていることから、朝鮮神宮競技大会についてはマスゲームが朝鮮半島に定着していった切っ掛けとして取り上げているだけであり、その記述はマスゲームの導入がなされた第3回の朝鮮神宮競技大会について若干触れられているに止まる。

以上述べてきたところから先行研究を整理すると以下の通りである。①民族主義的な傾向をもつ研究においては朝鮮神宮競技大会について若干の記述は認められるものの、大会そのものの分析にまで至っておらず、また②実際に研究されているものについても大会全体を俯瞰した研究はなく、大会の開催初期の段階について実証されているだけに止まっている。

## (2) 史料について

本研究において用いる史料は当該期に発行されていた『京城日報』、『東亜日報』、『朝鮮日報』などの各種新聞資料や京城日報社の発刊していた『朝鮮年鑑』、また朝鮮総督によって編纂された『朝鮮要覧』や『朝鮮事情』などを主なものとしていく。

また大会プログラムの収集を試みたが、日本・韓国の両国において手に入ったのは第10回大会のプログラム1点のみであった。1点だけではあるが、これは本研究にとって重要な史料と位置付けられるため、できる限り詳細に分析を加えることとした。分析の方法としてはプログラムの名簿に掲載されている役員・参加選手に着目し、量的に比較できるデータを作成、これらから日本人・朝鮮人の大会との関わり、また当該社会のスポーツ状況について考察する。日

<sup>2</sup> 李學來『韓國近代體育史研究』지식산업사、1990年、p.187.

<sup>3</sup> 古田博司「北朝鮮マスゲーム批判序説—初期の思想的意匠と近代化の虚構」鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶應義塾大学出版会、2007年、pp.1-32.



本人・朝鮮人であることの特定は名簿上の姓名、また所属組織に基づき判断し、プログラムだけでは不明であった点は各種新聞資料と照らし合わせながら検討を進めた。

### (3) 用語について

本研究で取り扱う「朝鮮神宮競技大会」は1933（昭和8）年に「朝鮮神宮奉賛体育大会」へと名称の変更がなされているが、本文中ではすべて「朝鮮神宮競技大会」と表記する。ただし史料からの引用文についてはこの限りではない。

## 3. 朝鮮神宮競技大会の展開

### (1) 大会の開催と定着

朝鮮神宮競技大会の第1回大会は1925（大正14）年に開催されている。この時期、朝鮮神宮競技大会に関係してくるのは京城（現ソウル）の都市開発・都市整備事業の進展である。金白永によると1925（大正14）年から1926（昭和元）年は京城の都市空間に劇的な変化が見られた期間であるとし、朝鮮総督府新庁舎、朝鮮神宮、京城駅、京城府庁、京城運動場、京城帝国大学などが同時多発的に建立され、幹線道路網の一次整備事業なども完了し、都心部の空間の機能的分化が進んだ点について言及している<sup>4</sup>。大会創設の背景にこうした都市開発・整備事業があり、近代的な都市への移行過程のなかで朝鮮神宮競技大会が開催されるようになった点は看過できない<sup>5</sup>。つまりこうしたスポーツ大会の創出は都市の近代化による権力配置の問題と結びつく形で創出されていったことになる。植民地社会における公共的な施設の登場はスポーツを取り巻く空間の公共性そのものが植民地権力と切り離すことができないことを意味する。そうしたなか植民地社会で生きる人々が経験したスポーツイベントとしての朝鮮神宮競技大会は如何なる大会だったのか。以下では朝鮮神宮競技大会がどのように展開されていったのかをいくつかの点から見てみたい。

#### ①参加選手について

大会の開催に際して10月11日付の『京城日報』では「半島運動發達史の第一頁を飾る神宮競技大會」と題した記事のなかで「本競技大會は陸上競技、野

<sup>4</sup> 金白永「植民地都市京城の広場と路地」『植民地朝鮮と帝国日本』勉誠出版、2010年、p.23.

<sup>5</sup> 朝鮮神宮の創建や京城運動場の竣工については金誠「朝鮮神宮競技大会の創設に関する考察」『スポーツ史研究』第16号、スポーツ史学会、2003年、pp.32-35.を参考にされたい。

球、庭球、籠球、排球を併せ、出場選手は廣く全鮮より選出し学生は勿論全鮮各地の青年團等普く内鮮一般の男女を網羅せる半島運動會未曾有の大規模のもので優勝旗の外總督、總監を始め多數優勝カツプの寄贈もあり本大會に於ける優秀選手は明治神宮競技大會に朝鮮代表として派遣されることになっている」<sup>6</sup>と述べられている。上記より参加選手に関しては学生、青年團、一般において日本人・朝鮮人あるいは男女の別を問わず、選出されていたことが分かる。また優秀な成績を残したのものには明治神宮競技大會への出場、場合によっては国際スポーツへの参加も期待されたのであった<sup>7</sup>。

この第1回大會においては競技種目が5つであったが、本大會出場のために地方予選を行っており<sup>8</sup>、また競技によっては大會役員會に推薦されたチームが大會へ参加することにもなっていた<sup>9</sup>。これを受けて『大韓體育會史』では参加できたのは推薦されたものだけで第1回大會に朝鮮人選手や團體の出場はなかったとしているが<sup>10</sup>、実際には第1回大會に日本人、朝鮮人ともに参加しており、特に籠球、排球に関しては日本人と同等数の朝鮮人選手が出場している<sup>11</sup>。

こうした参加の形態は大會の定着とともに継続され、日本人・朝鮮人を問わず大會に参加していることから、いわゆる「内鮮融和」を象徴するスポーツ大會として朝鮮神宮競技大會が位置づけられていった。ただ参加資格に関しては1942（昭和17）年に変化がみられる。1942（昭和17）年の第18回大會では参加資格に「体力章合格者」であることが求められるようになり<sup>12</sup>、1943（昭和18）年の第19回大會においては以下のように紙面においても参加資格が明確に示された。

<sup>6</sup> 『京城日報』1925年10月11日付。

<sup>7</sup> 陸上競技で活躍した網干選手は同年にマニラで開かれた第7回極東オリンピックに参加している。京城日報 1925年12月23日付。

<sup>8</sup> 『京城日報』1925年9月22日付、同9月30日付、同10月1日付。

<sup>9</sup> 野球、籠球、排球に関しては大會役員會の推薦によって大會へ参加することになっている。『京城日報』1925年9月9日付。

<sup>10</sup> 大韓體育會編『大韓體育會史』大韓體育會、1965年、p.203。

<sup>11</sup> 籠球は6チームが参加しており、KCBBC、善隣商業、京畿道師範學校、京城女子高普の4チームは朝鮮人選手で構成されたチームであった。排球は8チームが参加しており、京城基督教青年會は日本人と朝鮮人が混成しているチーム、京城第一高普、善隣商業、進明女子高普の3チームは朝鮮人選手で構成されたチームであった。また陸上競技、庭球においても朝鮮人選手の参加は認められる。ただ野球に関してのみ朝鮮人選手で構成されたチームはなく、釜山中學の選手に1名、朝鮮人らしき選手が参加しているのみである。『京城日報』1925年10月9日付、同10月11日付。

<sup>12</sup> 『京城日報』1942年8月5日付。あるいは朝鮮總督府『朝鮮事情』昭和十八年度版、朝鮮總督府、P.210。

参加資格 年齢數へ年十五歳より三十五歳迄の男子にして本大會に参加せんとする者は體力章檢定初級以上の合格者たることを要す、但し右年齢該當者にして未だ檢定を受くるに至をざる者にして本大會に参加せんとする者に対しては本年に限り道體育振興會をして之が檢定を實施せしむる等便宜なる方法を以て之に代ふること<sup>13</sup>

このように戦時体制が確立していくなかで大会への参加者は総督府の基準に見合うものに特定されていったのである。しかし、参加資格を満たしていれば当初の如く日本人・朝鮮人という民族的な括りとは関係なく参加していることが確認される<sup>14</sup>。

## ② 競技種目の増加とその推移

次に競技種目に着目して大会の展開をみてみたい。

表 1 は朝鮮神宮競技大会においてそれぞれの競技種目がいつから採用されたのかを示したものである。1925（大正 14）年に始まった朝鮮神宮競技大会は当初野球、庭球、排球、籠球、陸上競技の 5 種目で始まっているが、翌年には蹴球が、第 3 回大会からは卓球とマラソンが採用され、その後も漸次大会で行われる競技種目が増加していつている。

<sup>13</sup> 『京城日報』1943 年 9 月 5 日付。

参加資格の年齢に関して本史料上では「十五歳から三十五歳」と記載されているが、体力章檢定の受験資格者は当時 15 歳から 25 歳までであったことから、「三十五歳」は誤記であり「二十五歳」が正しいものと思われる。

<sup>14</sup> いわゆる「創氏改名」の影響もあり、紙面にて確認できる参加選手のほとんどが日本人名ではあるが、所属の学校名や改名後の氏名などから朝鮮人であろうことが特定される選手が多数存在する。しかし、重要なことは大会に参加できた朝鮮人は中学校や専門学校などの高等教育機関に所属することのできた人々が主であったことであろう。『京城日報』1943 年 10 月 19 日付、同 10 月 20 日付。

表1. 競技種目の推移

大会	年度	競技種目																			
第1回	1925	野球	庭球	排球	籠球	陸上競技	蹴球														
第2回	1926																				
第3回	1927																				
第4回	1928																				
第5回	1929																				
第6回	1930																				
第7回	1931																				
第8回	1932																				
第9回	1933																				
第10回	1934																				
第11回	1935																				
第12回	1936																				
第13回	1937																				
第14回	1938																				
第15回	1939																				
第16回	1940																				
第17回	1941																				

典拠：『京城日報』1925～1941、『東亞日報』1925～1938、『朝鮮年鑑』昭和8年度～昭和16年度

注：1「マラソン」は「陸上競技」よりも遅れて採用されているため別に記載した。

注：2「体操」は徒手体操、体操競技に分けてそれぞれ行われている。

注：3「平瀬砲撃」や「重運搬機操」は1939年から陸上競技種目として行われているが、翌年1940年に採用されている「国防競技」のなかに組み込まれたため表中には示さなかった。

1920年代には陸上競技や球技種目が多く採用されており、競技スポーツ系の種目が定着していったことを窺わせる。1930年代は1933（昭和8）年に大会名称に「朝鮮神宮奉賛体育大会」が使用され始めた<sup>15</sup>こととも関連して、その前後の1932（昭和7）年に相撲が、1934（昭和9）年には剣道や柔道などの武道が採用されている。

また1941（昭和16）年には民族スポーツである朝鮮弓道と朝鮮相撲（＝シルム）が競技種目として採用されている。1942（昭和17）年の紙面には見当たらないため、これらの民族スポーツは1941（昭和16）年の第17回大会のみの採用だとみられるが、こうした朝鮮人に馴染みのある民族スポーツを朝鮮神宮競技大会に取り込んでいるという事実は見過ごせない<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> 「競技大会」から「奉賛体育大会」への改称は、日本の明治神宮競技大会が1926（大正15）年の第3回大会時に「明治神宮体育大会」と改称していることに倣ったものと考えられる。明治神宮競技大会は、第2回大会（1925年）後その名称について、武徳会からの「競技と云ふ字は面白くない。柔道、剣道、弓道等は、競技でなくて武道である。又明治神宮の神前に之を奉納する意味は、決して技を競ふのが目的ではない」との申し出をうけて「明治神宮体育大会」と改称されている。朝鮮神宮競技大会では、第8回大会（1932年開催）、第10回大会（1934年開催）に相次いで相撲、剣道、柔道の武道種目が新たに採用されており、大会名称の変更と関連している。文部省『現代體育の施設と管理』目黒書店、1937年、p.24.

<sup>16</sup> このことについては民俗学者の村山智順の論文が示唆に富む。村山によると1940（昭和15）年10月22日に首相官邸で開かれた経済関係閣僚懇談会の席上で「國民に堅忍持久の精神を昂揚させるために單に取り締りのみに汲々とせず、健全なる娛樂を積極的に獎勵する必要あり、農村娛樂（盆踊など）とか青少年のスポーツとか具體的に獎勵することにしたい、以上の趣旨により各閣僚

さらに表中からは確認できないが同大会からは大会を夏季、秋季、冬季の3季に分けて開催しており、冬季には氷上競技や雪上競技が行われていた<sup>17</sup>。

### ③マスゲームの導入

1927（昭和2）年の第3回大会からはマスゲームが導入されている。マスゲームが一体何なのかという一般読者からの質問もふまえて、同年の記事の見出しには「大会をかざるマスゲームの壮観」と題してマスゲームについて説明がなされている。

一口にいへば、マスゲームは集團競技と譯していゝと思ふが聯合體操も一つのマスゲームである、いはゆる體育ダンスもマスゲームの一つである、今度の大會に加へられたのは京城の男子中等學校八校の白シャツ黒ズボンのユニフォームにかためた三千人の生徒によつて一齋に演ぜられる聯合體操と京城の女子中等學校十二校の四千の胡蝶の如き生徒によつて演ぜられる體育ダンス『カドリール』とであるが、一舉手一投足或は離れ秋の野をいろどる綜合藝術の精をみる様に、壯重なオーケストラによつて一律に舞ふ壯観とであるが、全世界のリレーカーニバルにおいては勿論、明治神宮競技大會においてもこのマスゲームは、滿都の人士に多大の期待と興味をもつて迎へられ、その團體構成の一分子づつがさながら一個の人格となつて動く微妙な美しさにスポーツと現代生活の不可分離を如實にみせられるといふ意味で甚た盛んに行はれてゐるのである、朝鮮最大の競技において、一あらゆるスポーツを包含した點において、最も重要視されてゐるこの朝鮮神宮競技大會にこのマスゲームが加へられたことは、われら甚たうれしいことに思ふ<sup>18</sup>

---

は次回の懇談會までに健全なる國民娛樂について研究持寄ること」ということが閣僚間で申し合わされ、このことが反響を呼び各方面で戦時下の娛樂問題に関して検討と施策が試みられるようになったとしている。村山はその後の記述のなかで娛樂の意義を検討し、さらに朝鮮半島における農村娛樂の変遷を簡潔に紹介している。そしてこれらの振興については「その指導だによろしきを得れば容易に郷土的な健全娛樂として價値を充分に發揮し得るであろう」と考察している。民族スポーツが民族的なアイデンティティを高める効果があるとするならば、朝鮮神宮競技大會への民族スポーツの採用は一見矛盾するかのように見える。しかし土着の伝統的な身体文化を健全娛樂として振興しようとした当局の意図とその史的背景により、この矛盾は解消し、競技種目として採用されたことの整合性が理解される。村山智順「半島郷土の健全娛樂」朝鮮總督府『朝鮮』1941年1月号、pp.46-58。

<sup>17</sup> 『京城日報』1941年7月15日付。

<sup>18</sup> 『京城日報』1927年10月14日付。

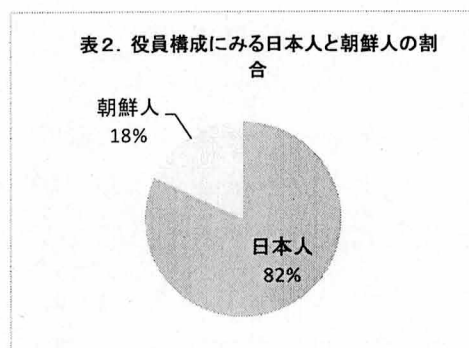
マスゲームは男子の行うものと女子の行うものの2種類が用意されていた。これはその後の大会においても確認される。1928（昭和3）年の第4回大会でも前回同様男子・女子それぞれマスゲームを行っており、10月15日の記事からは府内の女子学生3千人のマスゲーム、徒手体操、カドリールの行われたことが分かる<sup>19</sup>。

こうしたマスゲームの導入はマスゲームへの参加人数の増加<sup>20</sup>などもあり、大会の祝祭性を高める機能を果たすとともに、各種体操を朝鮮神宮競技大会において披露していく場へと導いていった感もある。例えば1937（昭和12）年には皇国臣民体操や建国体操が、1938（昭和13）年にはラジオ体操が朝鮮神宮競技大会において披露・実演されている<sup>21</sup>。マスゲームから繋がるこうした各種体操の演出は植民地社会で生きる人々に体操の実践を促す広報的役割を果たしたものと考えられる。

## （2）大会プログラム（第10回大会）<sup>22</sup>の分析

### ①役員について

表2は大会役員にみられる日本人と朝鮮人の構成比である。



（典拠：『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』1934年）

<sup>19</sup> 『京城日報』1928年10月15日付。

<sup>20</sup> 1934（昭和9）年には「男子中學生徒一萬餘人のマスゲーム」とされていることから、第3回大会に比べ、マスゲームの参加人数の増加が確認される。

（『京城日報』1934年10月13日付参照）ただし、1936（昭和11）年には「五千人に餘る男子中學生の見事なマスゲームがあり」といった記事からも分かるように、必ずしも参加人数が増加し続けた訳ではなく、大会ごとに増減はあったようである。『京城日報』1936年10月17日付。

<sup>21</sup> 『京城日報』1937年10月16日付、同1938年10月6日付。

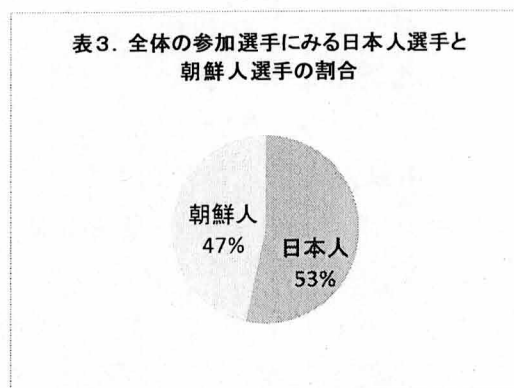
<sup>22</sup> 本研究における表2から表6は筆者が第10回大会プログラムのデータを集計したうえで作成したものである。朝鮮體育協會編『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』、1934年。

役員職は総裁、顧問、会長、副会長、総務、準備委員に分かれており、総裁に政務総監の今井田清徳が、大会会長は学務局長の渡邊豊日子が務めている。役員の総人数は100名であり、うち82%（82名）が日本人、18%（18名）が朝鮮人といった構成である。役員職の編成の差異から比較の対象にはなりにくいが、ひとつの参考として紙面上で大会役員を確認することができる第4回大会の役員構成をみってみる。各競技団体の役員を除くと、役員職としては名誉会長、会長、総務の3つが挙げられる。この役員職に就いた人々の属性をみると総人数45名中、日本人91%（41名）、朝鮮人9%（4名）となっていた<sup>23</sup>。日本人役員が役員のほとんどを占めている点において両大会で代わり映えする点はないが、第10回大会においては第4回大会に比べ、朝鮮人役員の占める割合が若干高まっている（9%増）ことが確認される。

両大会の名簿を見比べたときに共通して朝鮮人役員として選出されている人物に李吉用がいる。彼は東亜日報社のスポーツ記者であり、この後の1936（昭和11）年に孫基禎がベルリン・オリンピックのマラソンで優勝した際に東亜日報社の日章旗抹消事件を主導した人物である。このような朝鮮人民族主義者の象徴とされる人物らが朝鮮神宮競技大会の役員に選出されているという事実も確認される<sup>24</sup>。

## ②参加人数及び日本人選手と朝鮮人選手の割合

次に大会へ参加している選手たちに着目してみよう。



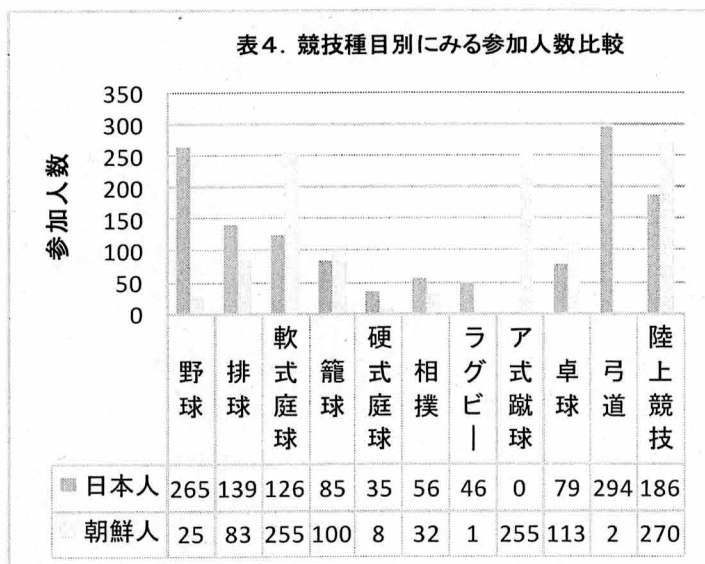
（典拠：『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』1934年）

表3は全体の参加選手にみる日本人選手と朝鮮人選手の割合を示したもので

<sup>23</sup> 『京城日報』1927年10月14日付。

<sup>24</sup> 李吉用は東亜日報の記者であり、民族主義者の象徴的な人物でもある。

ある。第10回大会に参加した選手らのうち11種目のなかで日本人選手は53%（1311名）、朝鮮選手は47%（1144名）であった。既述の役員の比率に比べ、参加選手たちに関して言えば、日本人・朝鮮人の差がほとんどなくなり、数量的にはかなり均等に大会へ参加していたと言えそうである。



（典拠：『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』1934年）

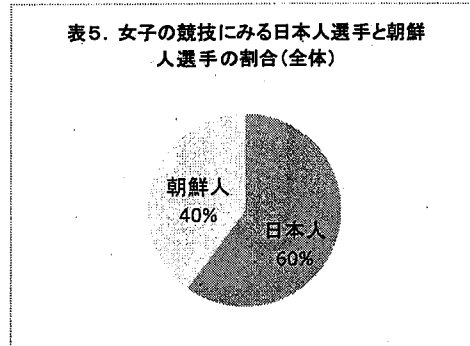
しかし、表4のように競技種目別に日本人・朝鮮人の参加人数を比較してみると競技によってはかなり偏りのあるものが見受けられる。例えば日本人が大きな割合を占めている競技は野球（91%）、硬式庭球（81%）、ラグビー（98%）、弓道（99%）などであり、朝鮮人が大きな割合を占めている競技は軟式庭球（67%）、ア式蹴球（100%）などである。またそれぞれにある一定の割合での参加が認められる種目のうち、日本人のほうに参加人数の多い種目は排球（63%）、相撲（64%）であり、朝鮮人のほうに参加人数の多い種目に籠球（54%）、卓球（59%）、陸上競技（59%）が挙げられる。因みに競技種目を参加人数の多さで見ると陸上競技が最も多く456名、次いで軟式庭球の381名となっている。

これらの結果を考察すると、興味深い点は日本人・朝鮮人別に競技種目の参加人数の割合をみた場合、それぞれに定着していると思われる競技がいくつか存在していることである。日本人では野球・弓道がその典型であり、朝鮮人ではア式蹴球がその典型的なものに挙げられるだろう。また陸上競技や軟式庭球においても朝鮮人選手の割合が高いことからア式蹴球に加え、実際に当該期の朝鮮半島において朝鮮人の競技人口の多い種目であったことが予想される。



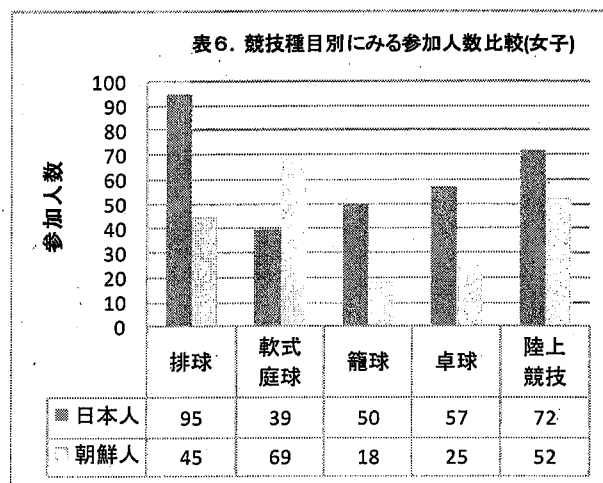
③女子競技にみる日本人選手と朝鮮人選手の割合

次は参加選手のなかでも女子選手に着目してみたい。



(典拠:『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』1934年)

表5は女子の競技にみる日本人選手と朝鮮人選手の割合である。5種目中<sup>25</sup>、日本人選手は60% (313名) を占め、朝鮮人選手は40% (209名) を占めている。全体の参加選手にみる日本人・朝鮮人の割合に比べて、若干日本人の比率が上がり、朝鮮人の比率が下がっている。



(典拠:『歴史深き半島のオリンピック総合競技プログラム』1934年)

表6は②と同様、競技種目別に参加選手を比較したものであるが、排球、籠球、卓球、陸上競技においては日本人選手が多く、軟式庭球は朝鮮人選手が多

<sup>25</sup> 野球・硬式庭球・相撲・ラグビー・ア式蹴球は女子の参加選手がいなかった。弓道に関しては若干名女子選手らしき姓名がみられるが、男女に分けて記載されておらず、性別の特定が不確実なため省略した。5つの競技種目については女子の競技と男子の競技に分けて記載されていた。

い種目となっている。特に日本人は排球の参加選手が多く、これは参加組織の構成から高女や女高普において排球が盛んに行われていたのではないかと考えられる。一方、朝鮮人では全体で比較したときと同様、軟式庭球において日本人選手よりも多くの選手の参加が確認される。これは早くから軟式庭球の女子大会が東亜日報社によって開催されていた<sup>26</sup>ことや当該期の朝鮮人の女子に対する身体観<sup>27</sup>が影響し、朝鮮人の女子に軟式庭球という競技種目が定着していたのではないかと推察される。

#### 4. 朝鮮体育会と朝鮮人の反応

##### (1) 総合<sup>28</sup>競技大会の開催

朝鮮体育会は1920(大正9)年に発足し、当該期における朝鮮人を対象としたスポーツ活動の振興のため、種々のスポーツ大会を開催している。発足から1938(昭和13)年の解散に至るまでの間に、1920(大正9)年の全朝鮮野球大会を皮切りに、1921(大正10)年の全朝鮮蹴球大会と全朝鮮庭球大会、1924(大正13)年の全朝鮮陸上競技大会、1925(大正14)年の全朝鮮氷上競技大会、1929(昭和4)年の全朝鮮シルム大会(朝鮮シルム協会と共同主催)、1930(昭和5)年の全朝鮮力技大会(朝鮮日報社と共同主催)と全朝鮮水上競技大会(朝鮮水泳倶楽部と共同主催)、1931(昭和6)年の全朝鮮籠球選手権大会、全朝鮮アマチュア拳闘選手権大会、1933(昭和8)年フルマラソン大会を主催し、そして1934(昭和9)年には総合大会として全朝鮮総合競技大会を主催している<sup>29</sup>。

上記の朝鮮体育会が主催した大会のなかで朝鮮神宮競技大会と関連する記述に1925(大正14)年の第6回全朝鮮野球大会を第1回朝鮮神宮競技大会の開催期間に合わせて同期間に開催したというものがある<sup>30</sup>。このことは朝鮮体育

---

<sup>26</sup> 東亜日報社によって1923(大正12)年に全朝鮮女子庭球大会が開催されている。全朝鮮女子庭球大会については、南宮吟皓「日本統治期朝鮮における東亜日報社主催女子庭球大会(1923-1939)に関する研究」『スポーツ史研究』第13号、スポーツ史学会、2000年。が詳しい。

<sup>27</sup> 当時の新聞記事には女子の体質は他の国々に比べて劣っているということが指摘されており、そんななかで競技種目のなかでも「女子の体質に最も適当な庭球」と述べられていることから、庭球が当該期の女子の体質に適した競技であると考えられていたようである。『東亜日報』1923年6月14日付。

<sup>28</sup> 「総合」は現代表記では「総合」であるが、日本人側の競技大会である朝鮮神宮競技大会と区別し、朝鮮人側の競技大会を示そうとする意図から史料上で用いられている漢字をそのまま使用することとした。

<sup>29</sup> 大韓體育會、前掲書、pp.90-129。

<sup>30</sup> 第6回全朝鮮野球大会は10月15日から17日までの3日間、培材高等普通学校のグラウンドで開催されており、第1回の朝鮮神宮競技大会は10月15日

会の民族主義的立場を補完する挿話として扱われ、「競技大会を通した抗日のひとつの標本」<sup>31</sup>であったと植民地権力に対する抵抗的な立場から説明されるのだが、その真偽の実際はここでの記述だけでは明らかにされているとは言い難い<sup>32</sup>。

朝鮮体育会は、その後 1929（昭和 4）年に朝鮮体育会創立 10 周年を記念して全朝鮮野球大会、全朝鮮庭球大会、全朝鮮陸上競技大会を一括りにし、第 10 回全朝鮮競技大会を開催している。この大会自体はこの年 1 回限りで終わっているが、1934（昭和 9）年にその名称を全朝鮮総合競技大会<sup>33</sup>と変更して、1938（昭和 13）年の朝鮮体育会の解散まで毎年定期的に総合スポーツ競技大会として開催している<sup>34</sup>。この全朝鮮総合競技大会は、それまでの朝鮮体育会主催の個別スポーツ大会を統合し、継承していくものとして位置づけられており、1934（昭和 9）年の大会を第 15 回大会として、以後 3 度（16、17、18 回大会）開催され、いずれも東亜日報社がその後援を引き受けている<sup>35</sup>。

では朝鮮人らにとってこのような総合的なスポーツ大会を開催することの意

---

の京城運動場の開場式、競技大会の開会式の後、16 日から 18 日まで競技が行われている。『東亜日報』1925 年 9 月 30 日付および『京城日報』1925 年 10 月 15 日付、同 10 月 17 日付。

<sup>31</sup> 大韓體育會、前掲書、P.79.

<sup>32</sup> 全朝鮮野球大会に参加している高等普通学校などが朝鮮神宮競技大会の野球競技に長く参加していない点や、全朝鮮野球大会の第 1 回大会から第 5 回大会までの開催期日にバラつきがあった点、植民地支配を受けていた史的背景などを勘案すると日本人が主体で開催していく総合的なスポーツ大会に対する懸念や何らかの抗議であったことは推察される。しかしそれが真に抗日的な動きであったかどうかは疑義の余地が残る。野球という競技にあっては 1927（昭和 2）年の時点で「未だ比較の出来ない程彼等より幼稚な状態である」と言われており、競技レベルの差から別に大会を主催することに意義を見出していたのではないかとも考えられる。『朝鮮日報』1927 年 5 月 2 日付。

<sup>33</sup> 初めての全朝鮮総合競技大会（第 15 回大会）は、1934（昭和 9）年の 11 月 2 日から 5 日まで 4 日間にわたって開催されている。蹴球、庭球、野球、陸上、籠球の 5 種目が京城運動場をはじめ、鉄道運動場、旭川運動場、青坡広場、培材高普運動場などで行われた。開会式では、金圭冕（朝鮮体育会役員）の司会の下、尹致昊朝鮮体育会会長の開会の辞や選手代表の李永善による選手宣誓、さらには、宋鎮禹（東亜日報社長）や呂運亨（朝鮮中央日報社長）らによる祝辞が述べられるなど、当該期における民族主義者の有志らが一堂に会している点はこの大会の重要性を物語っている。翌 1935（昭和 10）年の第 16 回大会では、蹴球、庭球、野球、陸上、籠球の 5 種目に柔道、シルム、力道、剣道が加わり、計 9 種目の競技が 5 日間にわたって展開され、続く 1936（昭和 11）年、1937（昭和 12）年大会ではさらに卓球、拳闘、水上競技の 3 種目が追加され、開催期間も 2 ヶ月にも及ぶなど、徐々にその規模は巨大化していった。大韓體育會、前掲書、pp.125-127.

<sup>34</sup> 大韓體育會、前掲書、p.81.

<sup>35</sup> 大韓體育會、前掲書、p.125.

義は如何なるものであったのか。これは当該期に開催されていた朝鮮体育協会主催の朝鮮神宮競技大会と比較していくうえで重要な視点だろう。1929（昭和4）年と1934（昭和9）年の両総合競技大会の開催を契機に当時のスポーツ状況について述べられたいくつかの言説があるので以下にみてみたい。

朝鮮體育會は今十三日をもって創立十周年を迎えたが同會では同日盛大な紀念式を行い且つ三日間三種の綜合競技大會を開催する由である。

（中略）從來朝鮮の社會では他の諸文化に於けると同じく體育に於いても常に等閑視し甚しきに至りては、運動選手を技藝師の如く蔑視して來た爲に、人民體質に於いて今日の不發達をみるに至り氣象に於いても不活發、不健全にしてあらゆる秩序ある事業進行に大いなる痼疾となつてゐるのである。體育貢獻十年の今日、未だ他の社會のそれには及ぶことは出來ないが、時日尚淺き割合には急速の進歩を示している<sup>36</sup>

我が體育の中樞機關たる朝鮮體育會は、その創立十五周年を記念すべく、盛大な綜合競技大會を開催するに至つた。（中略）回顧すれば、十五年前の朝鮮の體育といへば、極めて幼稚であつた。都市の一部教育機關としてのみ體操の餘課に陸上及球技の數種を行うに過ぎずして今日の朝鮮體育會主催の綜合競技大會に現れるその體育水準とを比較すれば、誰もが我が體育界の驚異的發達を感嘆せざるを得ないであろう。かく發達せしは、勿論體育會單獨の力ではないが、我々は決して體育會の光りある業績を無視し得ないであろう<sup>37</sup>

わが朝鮮の單一機關たる朝鮮體育會が創立一五週年に當たるや記念的に全朝鮮綜合競技大會を開催するにつきましてはわが運動界の發展向上の爲に慶賀するのであります

回顧するに貴會創立當時の運動界は幼稚であるだけでなく組織的に形成された何等の機關がなく獎勵と指導を受ける機會がない状態だったので

しかし一五週年の歴史を經過した今日では世界的に躍進する選手が簇出する途程につくようになったことは衷心に感賀するのであります

そのためわが選手一同が今般貴會主催と東亞日報後援第一五週年創立紀念朝鮮綜合競技大會に参加するようになったことを光榮に思い同時に

<sup>36</sup> 『東亞日報』1927年6月13日付。

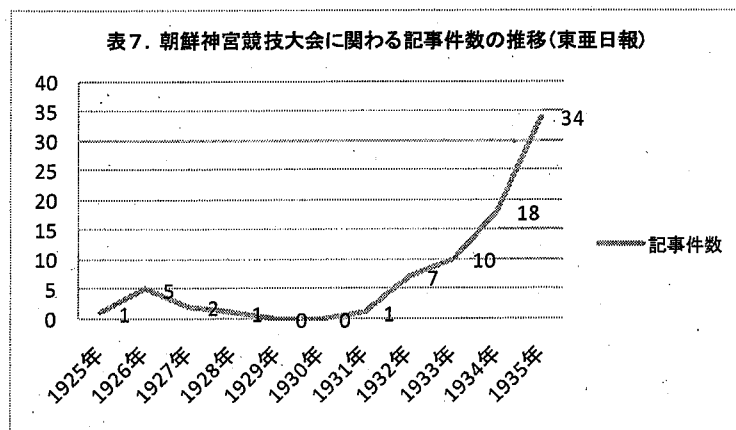
<sup>37</sup> 『東亞日報』1934年11月2日付。

技能と勝負を發揮するだけでなく運動精神を一層向上増進して上述した如く甚深たる意義が有る貴大會に参加して朝鮮運動界のなす事業を更新振興するのであります<sup>38</sup>

朝鮮体育会による2つの総合競技大会の開催は1920年代から30年代における朝鮮人のスポーツ状況の一面を窺わせる。上記の史料にみられるように1920年代のスポーツ状況の進展、さらにそうした状況が30年代にも続いてきていたことが分かる。就中1932（昭和7）年のロサンゼルス・オリンピックに朝鮮人スポーツ選手が日本代表として選出されるようになったこと<sup>39</sup>は、スポーツにおける民族の発展という認識と自負に影響を与えているようである。換言すれば、体育・スポーツ組織の進展、体育・スポーツ事業の発達、朝鮮人スポーツ選手らの競技力向上（国際スポーツへの参加）などが総合競技大会の開催という事業に結実し、民族の発展と結びつけられて語られるようになっていくということが理解されるのである。

## （2）民族紙報道の若干の変化

上記のように朝鮮人のスポーツ状況が1920年代から30年代にかけて進展していくなかで、朝鮮神宮競技大会は朝鮮人にどのように捉えられていたのか。民族紙を代表する『東亜日報』に着目して1925（大正14）年から1935（昭和10）年までの動向を確認してみたい。



<sup>38</sup> 大韓體育會、前掲書、p.125.

<sup>39</sup> ロサンゼルス・オリンピックにはマラソンの金恩培、權泰夏、ボクシングの黄乙秀の3名が朝鮮人選手としてオリンピックに出場している。結果は金恩培6位、權泰夏9位、ボクシングの黄乙秀は1回戦敗退であった。大韓體育會編『大韓體育會七十年史』大韓體育會、1990年、pp.242-243.

表7より予選大会の記事・広告記事を含めた朝鮮神宮競技大会に関する記事件数<sup>40</sup>を確認すると1925(大正14)年の第1回大会は1件確認され、その後若干の増減はあるが1931(昭和6)年まではあまり紙面に掲載されてきていないことが分かる。変化の兆しがみられるのは1932(昭和7)年の第8回大会である。1932(昭和7)年に7件の関連記事が掲載され、その後は1935(昭和10)年の第11回大会まで増加の一途を辿っている。このことから民族紙側の朝鮮神宮競技大会への関心の高まり、あるいはそれを反映する朝鮮民衆の関心の高まりは確認されよう。

記事内容に関してはそのほとんどが競技日程、競技成績などであるが、1930年代に入ってからの記事は朝鮮人選手の活躍や朝鮮人チームの活躍が見出しで紹介されるなど民族主義的な傾向が確認できる<sup>41</sup>。

こうした『東亜日報』の朝鮮神宮競技大会に関する当該期の報道の変化は先の総合競技大会の開催が意味したところと歴史的に符合する。つまり朝鮮人のスポーツ状況の進展は朝鮮神宮競技大会での朝鮮人選手の活躍も相俟って民族的関心を高め、日本人主催の大会を否定、ボイコットを促すなどといった抵抗的な傾向を示したのではなく、大会に参加した朝鮮人選手らの活躍に民族的発展を見出していくといった点に重きを置いていたと考察されるのである。

## 5. 皇民化政策と朝鮮神宮競技大会

### (1) 朝鮮神宮競技大会と「内鮮一体」

1936(昭和11)年8月に朝鮮総督に就任した南次郎<sup>42</sup>は朝鮮統治において2つの目的をおく。ひとつは「天皇の行幸を仰ぐこと」であり、もうひとつが「徴

<sup>40</sup> 1925(大正14)年から1935(昭和10)年まで11年間の東亜日報記事の中で朝鮮神宮競技大会の情報が付された記事(広告や見出しを含む)の件数を集計した。

<sup>41</sup> 例えば1935年10月22日付の『東亜日報』ではスポーツ欄の見出しに「マラソンの柳君新記録 陸上女子も活躍」とし、神宮競技大会の最終日概況は「この日陸上には一般部決勝があったがマラソン朝鮮に新しい記録を公認コースで柳長春君が打ち立て八百米に金鍾漢、投ハンマーに安榮植両君が大会及朝鮮新記録を打ち立て女子部には投槍に李秋子嬢が朝鮮新記録を打ち立てた」というように概況においてまず朝鮮人選手の活躍を報じている。

<sup>42</sup> 陸軍大将。1929(昭和4)年8月から1930(昭和5)年12月まで朝鮮軍司令官として在任している。朝鮮総督としての在任期間は1936(昭和11)年の8月から1942(昭和17)年の5月までであった。

兵制の施行」であった<sup>43</sup>。これらの目的を達成するためには朝鮮半島の政治的安定と植民地権力への強い求心性が要請される。その実現を目指すところのスローガンが「内鮮一体」であったと考えていいだろう。皇民化政策の展開と戦時体制への移行の段階ではこの「内鮮一体」をどのように図るかが文化的側面において重要であり、体育・スポーツにおいてもその限りではなかった。朝鮮神宮競技大会は前節までで考察してきた通り、日本人・朝鮮人の「内鮮融和」を標榜するシンボルとなっていたことから「内鮮一体」を推進していくなかで格好のスポーツ事業であった。そのため朝鮮人たちにとっては民族的発展を大会の内部においても実現してきていたことが皮肉にもこの時期の朝鮮神宮競技大会の論理のなかでは裏目に出てしまう。ではこの時期からの朝鮮神宮競技大会がどのような大会になっていったのかについて確認してみたい。

#### ① 社会教化と朝鮮神宮競技大会

総督府は体育・スポーツを社会教化に資する社会事業のひとつとして捉えていた。昭和12年度の『朝鮮総督府施政年報』の社会教化のひとつに「体育運動ノ奨励」という項目があり、そこには「體育運動ハ内鮮融和上益スル所亦尠カラザルニ鑑ミ青少年及學生生徒ヲ本位トスル體育大會其ノ他體育奨励機關等ノ事業ニ絶エズ奨励ヲ加工以テ社會體育ノ振興ニ依リテ青少年ノ心身ノ健全ナル發達ヲ期スル（以下略）」と記載され、それまでの年報には記載されてこなかった朝鮮体育協会の事業について具体的に明記されることになり、そのひとつに「朝鮮神宮奉賛體育運動競技會ヲ開催スルコト」も挙げられている<sup>44</sup>。また昭和13年発行の『朝鮮事情』をみるとこの時期から朝鮮神宮競技大会の概況が報告されるようになってきている<sup>45</sup>。

1937（昭和12）年7月には日中戦争が始まり、朝鮮半島の地政学的な重要性がさらに増すことになる。そんななか翌年の1938（昭和13）年の第14回大会に臨んで当時総督府学務局長であり、朝鮮体育協会会長でもあった鹽原時三郎は朝鮮神宮競技大会について「朝鮮神宮奉賛體育大會は朝鮮のオリンピック大會であります、全鮮の代表者が神宮の大前に敬虔なる氣持を以て集ひ鍊磨の技と力を華と表示し神の御名を讃へ御代を壽き奉る聖なる大會であります」<sup>46</sup>と述べ、朝鮮神宮競技大会の神聖性を顕示している。

<sup>43</sup> 宮田節子「天皇制教育と皇民化政策」浅田喬二編『帝国日本とアジア』吉川弘文館、1994年、pp.157-158.

<sup>44</sup> 朝鮮総督府編『朝鮮総督府施政年報』昭和十二年度版、クレス出版、1992年、p.233.

<sup>45</sup> 朝鮮総督府編『朝鮮事情』昭和十四年度版 朝鮮総督府、1938年、p.70.

<sup>46</sup> 『京城日報』1938年9月10日付.

さらに大会開催中に掲載された『京城日報』社説「朝鮮神宮体育大会—銃後国民の統制を示せ—」では、「殊に朝鮮神宮奉賛の趣旨に出でたるものであり、更に戦時下に行はれる大会である以上、普通一般の年次行事とは自ら異なる意気込みによつて臨まれてゐることは推察するに難くない。(中略)しかも、この體育大会が文字通り内鮮一體の赤裸々の姿を以て展開されるところに、朝鮮神宮奉賛の意義が深いのであつて、形式的なる半島若人の總動員たるに止まらず、精神的には自戒自肅し、戦線にある皇軍兵士の勞を感謝髣髴せしめることを忘れてはならない」<sup>47</sup>と述べられている。こうした言説からも分かるように朝鮮神宮競技大会は戦時を強く意識した大会となり、時局に応じた心構えや「内鮮一体」が大会を通して象徴され、当該社会における社会教化の手段としてその有効性が想定されたのである。

## ② 第15回大会から第17回大会について

第15回大会以降は大会に更なる変化がみられるようになる。まず競技に着目すると1939(昭和14)年開催の第15回大会では、陸上競技の競技種目に初めて手榴弾距離投や重量運搬継走などが新たに加えられている<sup>48</sup>。さらにこれらの競技は、1940(昭和15)年の第16回大会からは、陸上競技の一個別種目から分離独立させ、新たに「国防競技」として行うこととしている<sup>49</sup>。また、この第16回大会は皇紀2600年にあたることから、その記念行事のひとつに挙げられ、入場式では再び鹽原学務局長が「體育の眞の目的は日本の精神に透徹せしめ、更にまた國家戦略の増強に資するにある、これ以外の體育は邪道である」<sup>50</sup>と発言するに至っている。

表8. 大会参加人数の推移(第13回～第17回)

回数	年	参加人数
第13回	1937	3,694
第14回	1938	4,241
第15回	1939	5,439
第16回	1940	6,660
第17回	1941	20,000以上

典拠:『朝鮮事情』昭和14年度版～昭和18年度版より作成

注:第17回大会の2万人以上という参加人員数は連合体操や公開演技を含んだ数とみられる。

47 『京城日報』1938年10月12日付。

48 『京城日報』1939年8月25日付。

49 『京城日報』1940年9月25日付。

50 『京城日報』1940年10月13日付。



1941（昭和16）年開催の第17回大会では、「戦時下の體育眞義に即する半島最高の氣魄と、體力を神宮大前に奉納、國民的神事奉仕の大會意義を極度に昂揚する」<sup>51</sup>ために、大会機構が全面的に改革され、大会の規模が拡大することとなった。この時作成された実施要項は以下の通りである。

一、體育による國民的意義の昂揚敢闘精神の錬成、團體訓練の強化、體力の増強國防的各種技能の錬磨の重要性を強調、全半島皇國臣民をしてこの大會を通じて國民體育に對する關心を探からしむる

一、本大會は朝鮮神宮御祭神に對する神事奉仕たるとともに半島體育運動最高の行事であるをもつて、これが参加者は人物、體力ともに健全優秀な者を選抜する

一、體育式典、體育行進は總體的に莊嚴々肅に實施、深き國民的感激の顯現を期する

一、演技を整齊、各道對抗種目を中心として朝鮮の特殊事情を考慮、最高の演技を網羅して競技場は戰場に通ずるの覺悟をもつてあくまでも敢闘斃而後已むの武士道精神を發揚、規律統制ある行動を以て大會を終始、銃後國民の意氣と力の決意の下訓練の成果を顯示する

一、神事に奉仕するに相應しく、且つは國民的訓練の範を示すの氣概をもつて全役員及び参加者は競技場以外でも節度ある行動を執るために、會期中學校、寺院その他適當な施設場所で全員の合宿錬成をなす

一、國民體育の尊嚴性の認識にもとに觀衆も規律性ある行動を行ふとともに、適宜大日本厚生體操等を實行、眞摯明朗な雰圍氣の裡に體育の本義に即した國民的訓練を實施する<sup>52</sup>

このように大会の儀礼性と規律性を同時に高めるような実施要項へと変化してきており、大会の参加者、觀衆ともに「國民」として大会のなかに組み込んでいこうとする意図が汲み取れる。

同年10月21日付の『京城日報』では「神宮體育大会」という社説において「第十七回朝鮮神宮奉贊體育大會は、けふ十月廿一日の参加者神宮参拜の體育行進に始まり、廿六日の閉會式を以て終ることになつてゐるが、今回の大會が朝鮮神宮御祭神に對する神事奉仕であると共に、半島體育運動最高の行事であることは従前と少しも變りはないとしても、臨戦下體育の本義に即する半島最高の氣魄と、それによる國民的民意氣の昂揚とに重點を置き、いはゆる敢闘精神

<sup>51</sup> 『京城日報』1941年7月15日付。

<sup>52</sup> 『京城日報』1941年7月15日付。

の錬成、團體訓練の強化、體力の増強、國防的各種技能の錬磨を目標に、皇國臣民として總力陣營を形造るべきところに、從來と異なる一段の飛躍があることを特筆すべきである。(中略)希くば今回の大會をして、参加者と否とを問はず、眞に戦場にある勇士の氣魄と禮讓とを以て神宮に奉納して恥なき大會たらしめると共に、ますます戦力増強の一翼たらしめることを最大の念慮とせねばならぬ」<sup>53</sup>とあるように、大会の目的はただ単に朝鮮神宮を奉賛するだけではなく、総力戦体制に向けた戦力の増強に重きが置かれるようになってきている。

## (2) 朝鮮神宮競技大会の終焉

### ① 朝鮮体育振興会の発足

戦時体制への編成が進んでいくと、朝鮮における体育・スポーツを統制する体育団体設立が叫ばれるようになる。1938(昭和13)年8月、各種スポーツ団体(19団体)が朝鮮体育協会の傘下におかれるようになると、1941(昭和16)年2月27日には、朝鮮体育協会改組懇談会が開かれ、朝鮮体育協会の改組が決定する。そのときの改組に伴う朝鮮体育協会規程の改正案(23条)の総則(5条)は次の通りである。

第一條 本會は朝鮮體育協會(假稱)と稱す

第二條 本會の本部を朝鮮總督府學務局社會教育課内に置く

第三條 本會は國防國家體制に即應するやう朝鮮における體育を指導統制し國民體育の健全なる普及發達を圖り以て皇國臣民としての心身を錬成し戦力の増強に資するを目的とす

第四條 本會は外國における體育團體に對し朝鮮を代表す

第五條 本會は國內の朝鮮以外の地における體育團體に對し朝鮮を代表す、但し特別の事情あるものはこの限りにあらず<sup>54</sup>

このように改組を機に戦時体制下の体育・スポーツの果たす役割が明確に示されることになったのである。しかし、この改組はスムーズに進むことはなく、懇談会直後に改組案に対する批判がでてきている<sup>55</sup>。ただその内容は、体育団

<sup>53</sup> 『京城日報』1941年10月21日付。

<sup>54</sup> 『京城日報』1941年2月28日付。

<sup>55</sup> 1941(昭和16)年3月3日、4日付の『京城日報』では「その部制たるや、集散離合を圖つた改組だけであり、全體的な眞の國民體育の國家機關とは言へない、その組織は多數決制であるのだ、戦ふ國の體育鍛錬面は須く強力な單一國家的機構にすべきである」と述べられていたり、また朝鮮体育協会の改組実現は「勿論慎重を期すべきであるが、望むらくは有能の最高人士が寄り合つて

体の一元化を批判するものではなく、戦時体制を整えていく上では、より強力な一元化が望まれるというものであった。

そして半年後の同年8月には、各種体育団体の統制に取り組むべく、当該団体の代表者を集めた懇談会が開かれ<sup>56</sup>、11月下旬には新たな組織として朝鮮体育協会の発足を挙げるようになっていた<sup>57</sup>。しかし、11月下旬に総督府の機構改革が行われ、新たに厚生局が誕生すると、朝鮮体育協会は学務局社会教育課から厚生局保健課に移管されることになり<sup>58</sup>、当初の発足予定が翌年へと持ち越されることとなったのである。

1942（昭和17）年、予定されていた朝鮮体育協会の改組は朝鮮体育振興会の発足によりなくなる。これまで朝鮮体育協会が管轄してきた体育団体並びに朝鮮体育協会は、朝鮮体育振興会に統合されることとなり、ここに朝鮮体育団体の一元化は果たされることになった。この朝鮮体育振興会は「政務總監を總裁に頂き、厚生局長が會長、厚生局保健課長が理事長となり、その下に執行機關として理事を置き、これには、本府の體育指導官を常務理事とするほか、衛生課長、社會課長、勞務課長、社會教育課長、警務課長が理事となり、その下に總務部、一般體育部、競技訓練部、國防訓練部の四部を置く」<sup>59</sup>といった構成で組織体系を確立していったのである<sup>60</sup>。

以後、朝鮮体育振興会は朝鮮で開催されるすべての体育・スポーツ行事を全面的に管轄することとなる。例外的な体育大会に関しても、同振興会が目的を酌量した上、その監督指導を受けることが絶対条件とされたり、あるいは「全日本」や「全鮮」などの名称が付された競技会を禁止したり、国民体育特技登録制を採用し、競技者を一定の規程に基づいて資格の審査及びに個人の登録手続を実施するなど、その管理体制は徹底化されていったのである。

## ②第18回大会と第19回大会について

1942（昭和17）年の第18回大会は、上記のように発足した朝鮮体育振興会主管により開催されている。この大会について岡保健課長は、「私の考へとして

---

早急に建設を圖るとともに個人主義的意識に拘泥せず、眞の體育翼賛、最高機關たる面目を躍如たらしめるべきだ、そして、從來の人的乃至機構の缺如をこの際思ひ切つて強化し、既成勢力も一掃、全體主義の上に立つべきであろう」とも述べられるなど、戦時体制下の影響を反映する議論がなされた。

<sup>56</sup> 『京城日報』1941年8月2日付。

<sup>57</sup> 『京城日報』1941年10月10日付。

<sup>58</sup> 『京城日報』1941年11月20日付。

<sup>59</sup> 京城日报社『朝鮮年鑑』昭和十八年度、高麗書林、1986年、p.598。

<sup>60</sup> 朝鮮体育振興会の組織構成については西尾による研究が詳しい。西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店、2003年、pp.549-552。

は神宮奉賛體育大會は國家的體育祭であるから、愈よ隆昌にやりたい元來これは國でやるべきものである、然しこれには相當の經費を要するので盛大にやればやる程經費が必要なことは當然であるが、行く行くは總督府或は厚生局で直接主催したい、そしてもっともっと盛大なものにしてできるだけ多くの國民が參與して奉賛できるやうな仕組にしたい、同時に地方においても極力盛大にして、國民の士氣を煽らせたいたい」<sup>61</sup>と多くの人々を大会に参加させ、さらに大規模に大会を行いたいとする意向を述べていた。

この第 18 回大会はまず、地区予選（各道奉賛體育大會）を開催し、その勝者による本戦が京城運動場を中心に 20 競技、4 日間にわたって開催された。競技種目には銃剣道が新たに加えられている。

最後となった翌 1943（昭和 18）年の第 19 回大会は、先に岡保健課長が述べていたように総督府が主催することとなり、9 月 11、12 日に水泳を、そして 10 月 17、18、19 日の 3 日間は京城運動場を中心にその他の競技が行われている。この大会に先立ち「徴兵制及び海軍特別志願兵制の実施をみた」ことは重要であり、そのためこの大会の目的は「戦力増強」に集約されたのである。

大会の重点は「一、盡忠報國、玉碎奉公の皇道精神を發揚し、仇敵撃滅の旺盛なる氣魄を昂揚する 二、大會の運営については現下の輸送關係などを考慮し、適當な調整を加へる 三、演練は決戦下居常實踐すものを中心として行ひあくまで規律嚴正、眞摯敢闘を旨として、大東亞指導國民としての潑刺たる威力を中外に顯揚すること」<sup>62</sup>とされ、軍事訓練さながらの競技が展開された。これまで行われてきた球技はすべて競技種目から除外され、戦技訓練として武装行軍、戦場運動、銃剣道、射撃、基礎訓練として体操、剣道、柔道、弓道、相撲、また特技訓練として海洋訓練、滑空訓練、機甲訓練、馬事訓練がそれぞれ行われている。

閉会式では大野会長が「選士諸君に於ては正々堂々平素鍊磨の成果を恭しく朝鮮神宮の大前に奉納せられ現下國家が國民に對して最も要請しつつある所の剛健なる基礎體力並に戦技と旺盛なる決戦的精神とを遺憾なく發揮せられました事は誠に欣快の至りに堪えません」<sup>63</sup>と大会の目的が達せられたことに満足げな発言をしていることから、朝鮮神宮競技大会が「戦力増強」に資するものとして遂行されたことが理解される。

## 6. 小括

<sup>61</sup> 『京城日報』1942 年 1 月 1 日付。

<sup>62</sup> 『京城日報』1943 年 9 月 5 日付。

<sup>63</sup> 『京城日報』1943 年 10 月 20 日付。

本研究では植民地朝鮮における朝鮮神宮競技大会に着目し、その展開について分析を行った。本研究で明らかになった点をまとめると以下の通りである。

1. 朝鮮神宮競技大会には朝鮮半島で生活する日本人・朝鮮人ともに参加している。ただ 1942（昭和 17）年の第 18 回大会からは参加資格として「體力章合格者」であることが求められた。
2. 大会の競技種目は漸次増加しており、1920 年代は陸上競技や球技種目が多く採用され、1930 年代は武道系の種目の採用がみられる。また 1941（昭和 16）年には朝鮮の民族スポーツが競技種目として採用されていることが確認される。
3. マスゲームは第 3 回大会から採用され、「聯合體操」や「體育ダンス」などが男女別に行われている。また各種体操も大会時に披露されることがあり、皇国臣民体操や建国体操、ラジオ体操などが大会で行われている。
4. 1934（昭和 9）年の第 10 回大会のプログラムを分析すると、大会役員は日本人が多くを占めているが、参加している選手に関しては日本人・朝鮮人の割合がかなり均衡してきていた。しかし、その割合は競技によって偏りがみられ、野球や弓道は日本人がほとんどを占め、ア式蹴球は朝鮮人が占めていた。これはそれぞれの民族に定着している競技が存在していたことを示すものである。また女子選手については庭球の割合においてのみ朝鮮人のほうが高かった。
5. 朝鮮体育会によって総合競技大会が主催されたが、それは朝鮮人の民族的発展を象徴するものでもあった。そうした 1930 年代の朝鮮人のスポーツ状況の進展は朝鮮神宮競技大会への関心を高める結果となっていた。
6. 皇民化政策期の朝鮮神宮競技大会は社会教化を図るスポーツ事業として位置付けられ、「内鮮一体」を象徴する大会として開催されていった。
7. 戦時下という時局に合わせて大会の目的は変化していき、第 18 回大会は朝鮮体育振興会が、第 19 回大会は総督府が大会を主催することとなり、「戦力増強」に資する大会として遂行されている。

本研究において対象とした朝鮮神宮競技大会は植民地期の朝鮮半島のスポーツ状況を知らしめてくれる貴重な研究対象であった。この大会を俯瞰していくなかで分かることは植民地朝鮮の政治的状況、社会的状況がスポーツに投影されているということ、さらに朝鮮神宮競技大会という公共的なスポーツ空間が一定期間内植民地朝鮮に存在し続けたという事実である。朝鮮神宮競技大会は日本人・朝鮮人ともに参加していたが、表象される選手たちの様子はそれぞれの立場により、内鮮融和あるいは国民統合をシンボライズされることもあれば、民族主義あるいは民族的な発展をシンボライズされることもあった。ただこれ

らは植民地権力に沿うものであることが求められ、植民地権力によって統制される範囲を超えることはありえない。そのため総力戦に向けた戦時体制が朝鮮半島において形成されていくなかで、朝鮮神宮競技大会はその体制強化のためのプロパガンダとなり、最終的には戦力増強に資する大会へと変化していった。そうなる大会のなかに存在していた若干の矛盾点はむしろ体制側にとって有効に作用したと考えられ、表象される選手たちの姿は朝鮮神宮の奉賛や大会を通じた規律の再生産を促し、朝鮮半島で生きる人々へ植民地権力側の期待する行動の形象となっていたのである。

### 第3章 皇国臣民体操の成立と展開

#### 1. はじめに

本章では皇民化政策期に制定された皇国臣民体操という体操を取り上げて分析の対象としていく。この体操は武道を体操化したものであり、剣道の型を簡易化して体操へと転化させ、身体の鍛錬だけではなく、その精神性に重きをおいて行われた体操であった。体操はひとつの技術であるが、その技術は国民としての統合を促すものとして企図されてきていることは贅言を要さない。そのため本研究対象である皇国臣民体操には武道に付与された日本的価値観を身体を通して規範化していこうとする意図が働いていたと想定され、この体操に着目することで植民地権力側が身体を通して植民地社会に生きる人々をどのように取り込んでいこうとしたのか、その特長と実際を確認することもできるだろう。

西尾によって明らかにされているように植民地朝鮮における体育が当該期の植民地政策に沿った体育政策という観点において身体的な側面から支配の強化が実践された事実は疑義の余地がない<sup>1</sup>。植民地朝鮮においてはそうした事実が最終的に朝鮮人という人的資源をその体制のなかへと動員しようとしたことが植民地権力側の目論見でもあった。そうした動員の前段階にどのような施策をもって植民地住民を動員へと繋げていこうとしたのか、本研究対象である皇国臣民体操をそうした過程のなかに位置づけその実態を明らかにしていく。

#### 2. 研究の方法

##### (1) 研究の対象とする時期

本研究の対象である皇国臣民体操の登場してきた時期は1930年代以降のいわゆる皇民化政策期であり、本研究では特に1936(昭和11)年に南次郎<sup>2</sup>が朝鮮総督に就任してからの時期をその対象とする。この時期はいわゆる創氏改名や神社参拝などが強制的に行われるようになる時期であり、「内鮮一体」といったスローガンに代表されるように朝鮮人を日本人へと同化させようとする政策が推し進められていた。

朝鮮総督に就任した南は朝鮮統治における目標を二つ掲げている。「第一は朝鮮に陛下の行幸を仰ぐことで、第二は朝鮮に徴兵制度を施くこと」であった。

<sup>1</sup> 西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店、2003年。

<sup>2</sup> 朝鮮総督府第8代総督(在任1936~1942)。日本の軍人。朝鮮総督として在任した6年間に、「内鮮一体」を標榜して皇民化政策を推し進めた人物とされる。金容権編『朝鮮韓国現代史事典』日本評論社、2002年、p.229。

そのためこれらを実現させるための政策として国体明徴、鮮満一如、教学刷新、農工併進、庶政刷新を五大政綱とし、これらが南の統治方針であったとされる。皇国臣民体操はこれらの施政方針に基づいた植民地政策が施行されていく時期に制定されている。

## (2) 史料について

本研究で用いる史料は、当該期において朝鮮総督府の発行していた雑誌『朝鮮』、また朝鮮教育会の発行していた雑誌『文教の朝鮮』、さらに京城日報社発行の『京城日報』などを主とする。これらの史料を中心に皇国臣民体操の実態を確認し、事実関係を検討していく。

これらの史料の特徴は体制側に与した言説を展開しているものであるという点である。例えば、『京城日報』についてみると京城日報社の社是には「京城日報社員は忠君愛国の精神を発揮して朝鮮総督府施政の目的を貫徹するに勗むること」<sup>3</sup>とあるように、京城日報が総督府の御用新聞であったことは明らかであり、ゆえに当時の植民地政策の展開に与して語られた言説であることは疑いようがない。こうしたことからこれらの史料を用いる場合、当該期の植民地社会の状況を特に体制側がどのように把握し、どのように志向していこうとしたのかを読みとる視角が必要となる。

## 3. 皇国臣民体操の実際

皇国臣民体操とはどのような体操だったのか。まずは以下の資料を参考にしながらその実際の動きを確認しておきたい。

---

<sup>3</sup> 京城日報社『京城日報社誌』京城日報社、1920年、p.5.



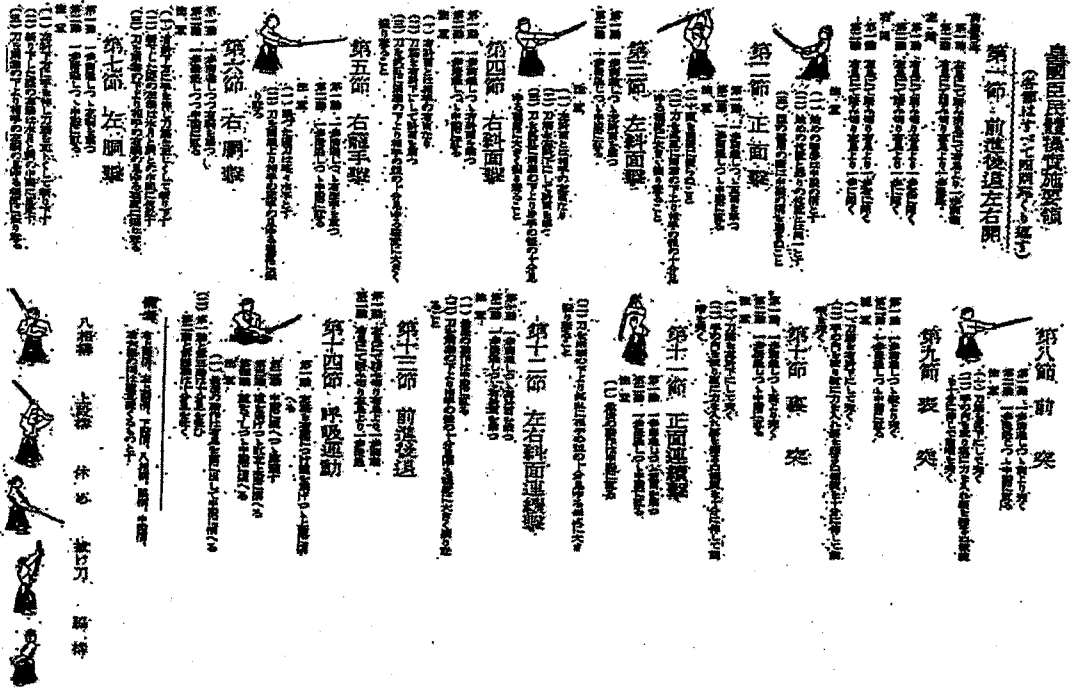


図1. 皇国臣民体操実施要領（典拠：『京城日報』1937年10月21日付）

これは1937（昭和12）年10月21日付の京城日報に掲載された「皇国臣民体操実施要領」である。

この実施要領からも分かるように、皇国臣民体操は剣道の型を体操化したものであり、この体操の一連の動きは14節で構成されていた。各節ごとの動きを示すと以下の通りである。

第一節	前後後退左右開
第二節	正面撃
第三節	左斜面撃
第四節	右斜面撃
第五節	右籠手撃
第六節	右胴撃
第七節	左胴撃
第八節	前突
第九節	表突
第十節	裏突
第十一節	正面連続撃

第十二節	左右斜面連続撃
第十三節	前後後退
第十四節	呼吸運動

第一節では中段の構の姿勢を維持しながら基本的な体の移動を行い、次に相手の頭部への面撃の動作を二、三、四節において、五節にて相手の右籠手に向かって籠手撃の動作、六、七節にて胴撃の動作、八、九、十節にて突の動作、十一、十二節は連続撃の動作を取り入れ、十三、十四節においては整理体操として前後の体の移動と呼吸運動を行い締めくくっている。また実施要領にも示されているように構に関しても5つの構を、体操とともに指導していくこととなっていた。

また資料に見られるようにこの体操は木剣(木刀)を持って行われるもので、その木剣(木刀)は学年に応じて重さと長さを設定した3種類のものからなっていた。詳細を示すと以下の通りである。

一、中等學校以上

重 サ 百二十匁内外  
長 サ 三尺ヨリ三尺三寸五分迄

二、初等學校上學年用

重 サ 百匁内外  
長 サ 二尺九寸ヨリ三尺迄

三、初等學校下學年用

重 サ 九十匁内外  
長 サ 二尺七寸ヨリ二尺九寸迄

このように皇国臣民体操の実践を推進するために、それぞれの規格に応じた木剣(木刀)を各学校に支給することが考えられ、このことについては原則的に朝鮮体育協会が代価を統制しつつ、配給制で各学校に配布することとしていた。学校によっては実習の際に創作したり、あるいは素材となる枇杷の木が入手困難であるとのことから、檜の木を用いて製作されることが一般的であったという<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 朝鮮総督府学務局社会教育課・朝鮮体育協会「皇国臣民体操の精神と実施上の注意」『文教の朝鮮』1938年3月号、p.71.

#### 4. 皇国臣民体操成立の背景

##### (1) 南の朝鮮総督就任と皇民化政策

1936（昭和11）年8月に朝鮮総督に就任した南次郎は「内鮮一体」をスローガンとした植民地政策を展開していく。この当時に行われた植民地政策は特に皇民化政策と呼ばれ、朝鮮の人々に対して同化政策を推し進めるものであった。

まずは神社参拝が強制的に行われる。これは日本の国家神道を朝鮮の下層に位置する人々にまで敷衍させようとするものであり、そのために一面（村）一神社主義をとり、朝鮮の至るところに神社が創建された。従って同時期の神社数も、1916（大正5）年の神社数34から、1931（昭和6）年の神宮1、神社50、神祠86、さらには1942（昭和17）年末の官幣大社2、国幣大社6、その他の神社55、神祠828と飛躍的に増加していることが分かる<sup>5</sup>。また官幣大社である朝鮮神宮の参拝者数の推移をみても、1931（昭和6）年に40万3550人だったのが1937年には約5倍の202万2292人に増加し、その後1942（昭和17）年には264万8365人にまで達している<sup>6</sup>。このことから神社参拝が強制力をもった政策として行われたことが窺える。

皇民化政策を象徴するものとしては「皇国臣民の誓詞」が挙げられる。これは、1937（昭和12）年に学生だけでなく広く一般民衆にも普及させる目的で作成され、あらゆる行事の際に暗誦するよう命じられたもので、以下に示すように児童用と成人用との2種類が用意されていた。

##### (其ノ一)

- 一 私共ハ 大日本帝國ノ臣民デアリマス
- 二 私共ハ 心ヲ合セテ 天皇陛下ニ忠義ヲ盡シマス
- 三 私共ハ 忍苦鍛錬シテ 立派ナ強イ國民トナリマス

##### (其ノ二)

- 一 我等ハ皇國臣民ナリ 忠誠以テ君國ニ報ゼン
- 二 我等皇國臣民ハ 互ニ信愛協カシ 以テ團結ヲ固クセン
- 三 我等皇國臣民ハ 忍苦鍛錬カヲ養ヒ 以テ皇道ヲ宣揚セン<sup>7</sup>

この誓詞創定の趣旨は、「南總督ノ教育體制ノ根本主義タル皇國臣民錬成ノ

<sup>5</sup> 朝鮮総督府編『日本人の海外活動に関する歴史的調査』高麗書林、1985年、p.61.

<sup>6</sup> 朝鮮総督府、前掲書、p.61.

<sup>7</sup> 朝鮮教育会「皇國臣民ノ誓詞」『文教の朝鮮』朝鮮教育会、1937年11月号、p.4.

本旨ニ基キ半島ニ在ル青少年ヲシテ簡潔明暢ナル誓詞ノ反復朗誦ニ依リ我ハ皇國臣民ナリトノ信念ヲ牢固ナラシメ内鮮一體協力團結シテ君國ノ爲ニ赤誠ヲ捧ゲ日常ノ本務ニ從ヒテハ各其ノ分ニ應ジ克ク勤勞鍛鍊シテ實力ヲ養ヒ以テ世界ニ雄飛スベキ基礎ヲ確立セシメントスルニ在リ」<sup>8</sup>とされ、朝鮮の人々がこの誓詞を反復して口ずさむことにより、当局は皇国臣民の精神と内鮮一体の精神を朝鮮の人々に刷り込もうとしていた。

こうした政策は、学校教育、とりわけ日本語教育のなかにも展開され、言語による植民地支配といった側面も色濃くなっていた。1938（昭和13）年に改正された朝鮮教育令をみると、朝鮮語は教科目から随意科目となり、その地位が貶められる一方で、日本語については「国語ヲ習得セシメ其ノ使用ヲ正確ニシ応用ヲ自在ナラシメテ国語教育ノ徹底ヲ期シ以テ皇国臣民タルノ性格ヲ涵養センコトヲ期スベシ」<sup>9</sup>とされたのである。

また1939年には「朝鮮民事令中改正」、1940（昭和15）年には「朝鮮人の氏名に関する」制令がそれぞれ公布され、いわゆる「創氏改名」が遂行されることとなる<sup>10</sup>。これは、朝鮮における「姓」を日本の「氏」へと強制的に変更させるというもので、創氏手続きの届出期間は、1940（昭和15）年2月11日から同年8月10日までの約6ヶ月間とされた。しかし、5月20日の時点で創氏を完了したのは、総戸籍数のわずか7.6%という状況であったため、総督府はさらに「親日知識人を徹底的に利用し、法律の若干の手直し行い、さらに当時ほとんどすべての朝鮮人を組織していた国民精神総動員朝鮮聯盟を通して、強制の度を強め、ついに後半の三ヶ月で実に約三〇〇万戸を創氏させ、全体で創氏戸数三二〇万一一六戸、創氏率七九.三%を達成する」<sup>11</sup>に至ったのである。

この他にも「陸軍志願兵制度」<sup>12</sup>の導入など数多くの皇民化のための具体的政策が存在する。この時期の植民地政策は、いずれの場合も戦争の影響による人的資源の確保がその目的となっており、その手段としての同化政策が次々と展開されるようになったのである。しかし、この時障害となったのが朝鮮固有

<sup>8</sup> 朝鮮教育会、前掲書、p.5

<sup>9</sup> 佐藤秀夫編『続・現代史資料10』みすず書房、1996年、p.30.

<sup>10</sup> 宮田節子・金英達・梁泰昊『創氏改名』明石書店、1996年、p.43.

<sup>11</sup> 宮田節子ら、前掲書、p.80.

<sup>12</sup> 陸軍特別志願兵制度は1938年2月22日の勅令第95号「陸軍特別志願兵令」の公布により開始されている。この時の志願者の多くは小作農の人々が多かったが、それは農村の疲弊が極限状態に達していたことに起因し、朝鮮人農民が「志願せざるを得なかった」状態に置かれていたことを物語っている。宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1997年、pp.50-93.

の習俗、歴史、文化、言語等であった。こうした障害を切り崩すために植民地住民に対して日本の精神性を植え付け、受容してくれることを期待したのである。この影響は、当然朝鮮の体育・スポーツにおいても顕著になってくる。

## (2) 名称の由来

皇国臣民体操は剣道の型を簡素化した体操であり、このときまでは単に木剣体操と呼ばれているものだった。そのため京城日報にみられる皇国臣民体操に関する最初の記事は「皇道精神の鼓吹に木剣体操を課す」<sup>13</sup>という見出しである。この時点ではまだ「皇国臣民体操」という名称は使われていなかった。皇国臣民体操の「皇国臣民」という言葉は南の下で学務局長となる鹽原時三郎の造語だと言われており<sup>14</sup>、恐らくこの体操の制定時に学務局長心得であった塩原の影響もあって「皇国臣民体操」という名称が用いられるようになったのではないかと考えられる。次に紙面にあらわれるのは10月8日の制定後、10月10日の記事であるが、そこには「皇国臣民体操 学務局で制定普及さす」とあり、「国民精神作興運動と共に総督府学務局では体位向上を目指すスポーツをも日本精神を織り込んだものたらしむべく従来の体操に日本武道の型を取り入れて新しい日本式体操を制定しこれを『皇国臣民体操』と名づけて一般に普及せしめることとなり、目下関係方面において慎重考慮中である」<sup>15</sup>と簡潔な説明が付されている。

## (3) 武道の体操化について

先に皇国臣民体操は木剣体操として知られていたものだと述べた。実はこの皇国臣民体操の制定に先立つこと40年ほど前に日本でもこうした武道の体操化が試みられている。明治30年代から40年代にかけて考案された武術体操法がそれである。この体操は教育家と武術家らがそれぞれ考案している<sup>16</sup>。教育家によって武術体操法が考案された理由としては「学校体操教材に撃剣を採用するためには、頭脳への危険性の排除と教授法の統一という二つの課題が克服されなければならなかった」<sup>17</sup>と説明される。当時は学校教材においても普通体操が主流でまた合理性を重視したスウェーデン体操が学校教材として採用されようとしている時期でもあった。そのため学校教材への採用を促すために日

<sup>13</sup> 『京城日報』1937年9月25日付。

<sup>14</sup> 宮田節子ら、前掲書、p.20。

<sup>15</sup> 『京城日報』1937年10月10日付。

<sup>16</sup> 教育家としては小沢卯之助や中島賢三らが、また武術家としては隈元実道、橋本新太郎、関重郎史治らが挙げられる。

<sup>17</sup> 中村民雄『剣道事典－技術と文化の歴史』島津書房、1992年、p.181。

本の武術・武道に西洋式の体操の原理を組み入れ、安全で集団に一斉指導できる武術の指導法の確立がなされたのである。

しかし、このときに考案された武術体操法はスウェーデン体操が学校体操教材の中心を占めるようになると、大正の後期にはほとんど実践されなくなったという。ただ、こうした教育家らの武術体操法の影響を受けて武術家たちも初心者向けに武術を指導していくための方策を立てることとなり、武術家による武道の体操化もこのときになされている。

大正期には低迷してしまう武術体操だが、この体操のいくつかの特質は確認しておきたい。ひとつは日本の伝統的な身体技法を合理的価値観により武術体操という西洋式なものへと転化したこと、またそれによって多くの武術家に武術の初心者への一斉指導の方法を示唆するに至った点。次にこのとき創作された武術体操が講習会などを開くことによってこのような武術の動きを基本とする体操が全国に広まったということ。しかし、一方では刃筋を無視した動きなどから武術体操そのものには技としての価値はほとんどないとする議論も生まれてきていたことなどである<sup>18</sup>。

上記のように武術体操のいくつかの特質を確認したが武道の体操化が当時の武術家らの間で広く知られるようになった点は重要であり、こうした武道の体操化の視点は皇国臣民体操の成立とも関連づけて比較検討する余地がある。

#### (4) 皇国臣民体操の形成

皇国臣民体操はどのようにしてつくられたのであろうか。以下は皇国臣民体操が導入されるときに交わされた会話の一部である。

「皇国臣民体操とは木剣体操のことか。」「木剣体操を学校体操のなかに取入れるのか。」等は体操科担当教師諸君よりの質問であつた。「木剣体操を学校の中に広く取入れることになつたさうですが結構ですな。」と満悦の意を表しての話は剣道教師諸君より出る話題であつた<sup>19</sup>。

これらのやりとりから皇国臣民体操という武道を体操化したものがこのとき俄かに登場してきたのではなく、以前から実践されていた武術体操の存在を体育や剣道に関係する人々によって知られていたことを窺わせる。

それではこのとき皇国臣民体操をつくったのは誰なのか、そのことに関して

<sup>18</sup> 中村民雄、前掲書、p.185.

<sup>19</sup> 朝鮮総督府学務局社会教育課・朝鮮体育協会「皇国臣民体操の精神と実施上の注意」『文教の朝鮮』1938年3月号、p.56.

直接述べられている資料は管見ながら発見できなかったが、皇国臣民体操の創作に関わったであろう人物は特定できる。『文教の朝鮮』という雑誌の「皇国臣民体操の精神と実施上の注意」という論考のなかで、朝鮮総督府嘱託であった梅沢慶三郎とともにこの体操の動きの解説を行っている京城師範学校教諭の根本通夫である。

根本は大日本武徳会剣道 5 段錬士でもあり、大日本武徳会朝鮮地方本部に所属していた。また皇国臣民体操の制定される前年には『剣道要義』という著書を著しており<sup>20</sup>、その内容は剣道錬士号の受験者に対する参考書のようなものであったが、武道史論から運動生理衛生に至るまで多岐にわたっており、根本の識見の深さを伺わせるものであった。著書のなかには武術体操に関する論考は見当たらないが、彼の知る師範や先生などは先に述べた武術体操を知る人々であり、武術、武道の体操化についての知識を彼が把握していた可能性は極めて高い。そして学校教材であることを意識してか実際につくられた皇国臣民体操は明治期の武術体操よりもさらに簡素化されており、14 節で形成された剣道の基本動作を繰り返すものであった。

#### 5. 皇国臣民体操にみる武道精神

南の五大政綱のひとつであった教学の刷新という施政方針に基づいて 1937（昭和 12）年 10 月 8 日に皇国臣民体操は制定されている。皇国臣民体操の制定される 6 日前の 10 月 2 日には「皇国臣民の誓詞」が制定されており、皇国臣民体操はこの「動的体認の実践部面」として制定されたのであった<sup>21</sup>。

それでは皇国臣民体操制定のねらいは如何なるものであったのか、以下に制定の趣旨と目的を確認しておきたい。

##### （一）趣旨

古來武道ノ型ヲ範トシテ之ヲ體操化シ組織ノ上「皇國臣民體操」ヲ創定シ、一般ニ普及セシムルコトトセリ、右ハ古來日本精神ノ根帶ガ武道ニ依リ培ハレタル武士道ニ在ルヲ信ジ其ノ精神ヲ採リ劍ニ親シム者ト否トヲ問ハス日常武道ノ型ニ親シムコトニ依リ心身ヲ鍛錬シ皇國臣民タルノ信念體得ニ資セシメンガ爲ナリ

##### （二）目的

教育體制ノ根本方針ハ皇國臣民ノ造成ヲ目的トスルニ在リ各學科ヲ通シ之ニ歸一セシムルニ在ルハ勿論ニシテ曩ニ學校體操教授要目ヲ改正相成

<sup>20</sup> 根本通夫『剣道要義』大同館書店、1936年。

<sup>21</sup> 朝鮮総督府編『朝鮮総督府施政三十年史』、名著出版、1972年、p.790。

タル主旨モ亦右ノ目的精神ニ出ツルモノニシテ皇國臣民體操實施ニ當リテハ徒ニ技巧末節ニ捉ハルルコト無ク身體ノ鍊成、精神ノ統一ヲ旨トシテ我國傳統ノ武道精神ノ體得ニ依リ皇國臣民タル氣魂ノ涵養ニ努ムルト共ニ姿勢ノ端正、身體ノ強健ヲ圖リ快活、剛毅、確固不拔ノ精神ト忍苦持久ノ體カトヲ養成センコトヲ期ス<sup>22</sup>

上記のように趣旨、目的ともに武道の技を体得することにねらいがあるのではなく、武道の基本動作を通して皇国臣民としての身体と精神を育成することにねらいのあったことが理解される。

そのため皇国臣民体操で重視されたのは武道における技や動きの体得よりも、身体と精神の鍛錬であり、この身体運動を通して皇国臣民の態度を養成することであった。それでは皇国臣民体操が強調する武道精神とは如何なるものだったのであろうか。『皇国臣民体操精義』には以下のように記されている。

我が国忠君尚武の美風は日本民族固有の性情であつて、後代発達して来た武士道の淵源は亦実に茲に存すといはなくてはならぬ。(中略)かくして武道は日本精神の根幹にして、徒に武士階級一般の精神たるに止まらないのであつて、王政維新後、封建制度の崩壊と共に、武士なる階級は廃せられたりと雖も、その精神には些の消長もなく維新後国民皆兵となりたる後は日本魂なる名称に於て日本精神の根帯となつたのである<sup>23</sup>。

つまりここで述べられている武道精神とは日本の国家意識、すなわち日本のナショナリズムの根幹とされていることが分かる。武道、武士道の精神は武士のものであったのだが、明治期に入って王政復古が成し遂げられ、徴兵制の施行により国民皆兵が実現すると、この精神は国民すべての精神になったというのである。またこうした武道精神の影響は「現今の体育が余りに欧化に流れ徒に技巧的な形態美を求めてその実をなくした憾みがある」<sup>24</sup>という言葉や「学校体操教授要目が改正せられて純日本式体操体系に改められたりと雖も輸入体操の殻を真に脱し得ぬ恨なきにしもあらず」<sup>25</sup>といった言葉にあらわれ、武道精神を強調することで体育における脱西洋化を後押しすることにもなっている。

<sup>22</sup> 朝鮮総督府、前掲書、pp.792-793.

<sup>23</sup> 坂東藤太郎『皇国臣民体操精義』日韓書房、1938年、pp.8-9.

<sup>24</sup> 『京城日報』1937年10月15日付.

<sup>25</sup> 朝鮮総督府学務局社会教育課・朝鮮体育協会、前掲書、p.56.



## 6. 皇国臣民体操の普及

こうして制定された皇国臣民体操は学校教育を中心に普及していくこととなる。制定当初は随意科目として初等学校、中学校で行われるようになったが、1938年の第3次学校体操教授要目の改定により、中等学校や師範学校では柔道・剣道といった武道が正課となり、さらに皇国臣民体操は必修となったのである<sup>26</sup>。

また皇国臣民体操は学校だけではなく、他の場所においても実施されている<sup>27</sup>。当時の『京城日報』にはその様子がいくつか紙面に掲載されている。なかでも1938（昭和13）年に陸軍特別志願兵訓練所において皇国臣民体操が正課として採用されている点は看過できない。何故ならこの訓練所に集まってきた青年らは朝鮮人だったからである。当時の紙面には「志願兵の正課に皇国臣民体操」という見出しで以下のような記事が掲載されている。

入所以来五旬の訓練に半島最初の感激と光榮を荷つて身心愈よ錬磨される陸軍特別兵志願者訓練所では正科として皇國臣民體操を取入れることになり廿七日陣之内鹿雄教士を招いて日本刀に関する講話を受け、廿八日午前九時全訓練所生二百二名に三寶にのせて森嚴な木刀の受與式を行つて後教士の指導で體操の實施指導を受け益々皇國臣民の精髓に触れることになつた<sup>28</sup>

南の掲げた植民地統治における目的のひとつは「朝鮮に徴兵制度を施く」ということだった。その手始めの場所である陸軍特別志願兵訓練所で皇国臣民体操が行われるようになったことは、皇国臣民体操の役割を再確認させる事柄であろう。

さらに同年に開かれた朝鮮総督府時局対策調査会の「体位ノ向上ニ関スル件」<sup>29</sup>（朝鮮総督府、1938）においては朝鮮神宮競技大会などとあわせて皇国臣民体操も時局に対する体育・スポーツ活動のひとつとして取り上げられている。

皇国臣民体操で重視されたのは身体の鍛錬も然ることながら、その精神性であった。もしただ単に武道精神を広めたいのならば、武道そのものを行うこと

<sup>26</sup> 西尾達雄、前掲書、pp.429-430.

<sup>27</sup> 例えば『京城日報』1937年12月5日付、同1938年4月3日付、同1938年6月29日付、同1938年7月29日付、同1938年11月20日付などに皇国臣民体操を行う様子が写真付で掲載されている。

<sup>28</sup> 『京城日報』1938年2月8日付。

<sup>29</sup> 朝鮮総督府編『日帝下支配政策資料集第十五卷』高麗書林、1985年、pp.102-103.

のほうが合理的であるように思われる。しかし、こうした武道を体操化した皇国臣民体操の登場してきたことの意義はいくつか考えられる。

皇国臣民体操は剣道の型を簡易化したものであったことは既に述べた。しかも14節という非常に短くされたものであった。この理由としては武道をなるべく低学年の児童から親しませることによって真に皇国臣民を形成していきたいという当局の意図があったのではないかと考えられる。そのため初等学校の児童に教材として配当できるようにより簡易なものにした。また武道に関わる講話等で皇国臣民体操の意義を児童らに伝えるなど、徳育の観点からもこの体操を想定しており、その効果の有意性を高めようとしていたことが分かる。

これは当時の教育政策の影響も伺える。当時30%の就学率を5年で60%に、1950（昭和25）年には皆学を目指し、内鮮共学も直ちに実施する<sup>30</sup>といったことが教育の計画として掲げられ、計画通りに進むと近い将来には多くの朝鮮人児童も初等学校に入学できることになる。1920年代には高等普通学校以上の学校で同盟休校などの民族主義的な行動が頻繁に見られ<sup>31</sup>、こうした運動が当局を悩ませていたことなども同時に考慮すると、できるだけ早い時期、つまり児童期から日本への統合を促す精神を植えつけていきたいとする当局の意図が働いていたと考えるのは自然であろう。そうした状況のなかで皇国臣民体操の登場してきた意義も首肯できる。

次に当時の学校教育のなかで武道教育を行う下地が整っていなかったという点があげられる。すなわち指導者不足ないしは指導者の指導力の問題である。朝鮮全土に武道精神を浸透させていくには、またその効果を得るためには教員の武道、皇国臣民体操に対する理解が第一の条件だった。そのため、まずは教員自身が指導しやすく、理解のしやすい教材が必要であった。この点も皇国臣民体操が登場してきたことと関連するのではないかと考えられる。皇国臣民体操が制定された2年後の1939（昭和14）年においても「本府に於てはかねて皇国臣民体操によりその普及企図し来つたが、之が真の効果の挙揚は指導者自身の武道精神の修養体得に依らなければ到底満足を期することの不可能なる状態に鑑み、今般教育者の全部に対し勤務の余暇を割いて武道の修練を積ましめ実践を通じて武道精神の把握体得を図らしめる」<sup>32</sup>という状態であり、教員の武道への理解の度合いが当局の思っているより低調であった。こうしたことからまずは教員らの武道に対する理解を高めていく必要性があったと考えられる。

<sup>30</sup> 『京城日報』1938年3月31日付。

<sup>31</sup> 金成植『抗日韓国学生運動史』高麗書林、1974年、pp.222-223。

<sup>32</sup> 朝鮮総督府「学校教員に武道奨励」『朝鮮』1939年5月号、p.102。

## 7. 小括

本研究は皇国臣民体操に着目し、その成立と展開について言及してきた。本研究において明らかになった点は以下の通りである。

1. 皇国臣民体操は剣道の型を体操化したものであった。その目的として武道精神を年少者に対して普及させたい意図が確認され、体操は14節で構成されるなどかなり簡易化されたものであった。
2. 1936（昭和11）年に朝鮮総督に就任した南次郎は「内鮮一体」を主唱し、学務局長に鹽原時三郎を任命、皇民化政策の「動的体認の実践部面」を司る体操として皇国臣民体操を梅沢慶三郎と根本通夫に作らせたものと推察される。
3. 皇国臣民体操は小学校では体育の正課となり、教育の場で普及し始める。また陸軍特別志願兵の訓練所でも皇国臣民体操が行われるなど制度化された空間のなかで行われる体操となっていた。しかし、普及させていくための指導者不足の問題が出てくるなど植民地社会に必ずしもうまく浸透していった訳ではなかった。

この体操が注目に値するのは、植民地という状況下、そのなかで制度化された組織内に植民地住民を巻き込み、巻き込まれた人々の身体をどのように植民地権力へと結びつけていくのか、そのことについてひとつの方法が示されている点にある。

武道に付与された日本独自の価値観が当該期の植民地政策と結びついたときに本研究で扱ったような体操が存在意義をもって登場してきた。この体操が真に植民地権力への求心性を高めたかどうかは疑問の残る点ではあるが、植民地権力に植民地住民を引き付ける方策のひとつであった点は明らかであり、国民統合にこうした体操を利用しようとした意図は読み取れるだろう。

## 第4章 普成専門学校のスポーツ活動

### 1. はじめに

本章では植民地期の朝鮮半島で活躍をみせた普成専門学校のスポーツ活動に着目し、その実態を明らかにしていく。

普成専門学校は現在の高麗大学校の前身であり、その歴史は1905(明治38)年から始まる。植民地期においては朝鮮人子弟の通う高等教育機関としてその存在は際立っていた。そのため普成専門学校のスポーツ活動を明らかにすることで当該期における朝鮮人らのスポーツに対する価値観や機能を垣間見ることができるだろう。

また普成専門学校の校長を務めた金性洙という人物の存在にも着目したい。植民地社会のなかで朝鮮民族にとってスポーツはどのような価値を持っていたのか、またその発展をどのように支えようとしていたのかという点を金性洙との関わりから見出そうとする。

植民地権力のなかで被支配民族にとってスポーツは如何なる価値をもつものであり、その実態は如何なるものであったのだろうか。普成専門学校のスポーツ活動の実態を明らかにすることで植民地社会におけるスポーツの位置づけを考察していく。

### 2. 本研究の方法

#### (1) 先行研究について

普成専門学校については国立大学設立運動に関わる研究<sup>1</sup>やまた教育者としての金性洙について記述された研究<sup>2</sup>は確認されるものの、普成専門学校のスポーツ活動について研究されたものは見当たらない。しかしながら、スポーツ活動と民族意識との繋がりについては李学来や西尾達雄の研究にも見られ、こうした朝鮮民族のスポーツ活動を西尾は「民族としての主体的活動」のひとつであったことを実証している。本研究ではそうした視角を引き継ぐと同時に、植民地期の民族系高等教育機関のスポーツ活動の意義を問うものとしても位置付けていく。

<sup>1</sup> 馬越徹「日本統治下朝鮮における民族的大学観の形成—「朝鮮国立大学」設立運動と普成専門学校を中心に—」『大学論集』第12集、広島大学大学教育研究センター、1983年、pp.99-120.

<sup>2</sup> 例えば、稲葉継雄「金性洙—韓国における民族系私学の指導者—」東亜日報社『仁村金性洙의 愛國思想과 그實踐』東亜日報社、1982年、pp.285-313.

## (2) 史資料について

史資料は『高麗大學校 70 年誌』や『六十年誌』などの学校誌、さらに当該期に発行されている『東亜日報』の記事などを中心に普成専門学校のスポーツ活動の実際を確認していく。また 1933 (昭和 8) 年以降に普成専門学校の校長となった金性洙の評伝などからもスポーツ活動の意義を見出そうとする。

当時の競技記録については上記の学校誌とともに『大韓体育会史』なども参考とする。

## (3) 金性洙について

金性洙は東亜日報グループ<sup>3</sup>の中心人物であり、彼の人脈と資本の総体が東亜日報グループを形成し、植民地朝鮮において朝鮮民族をリードする役割を担った。

ただ現在、金性洙について語ることは非常に難しい。それは彼の評価が二分することからも理解できる。彼に対する評価のひとつは文化民族主義者<sup>4</sup>として植民地期を生き抜き、朝鮮半島の近代化に寄与したとされる肯定的な評価であるが、一方で植民地期に対日協力<sup>5</sup>を行ったとされる否定的な評価がなされている。

<sup>3</sup> 「東亜日報グループ」という言葉は木村によって用いられた言葉であり、木村は普成出身者の「政治活動の中心が東亜日報であったことを重視し、また、東亜日報こそが後の「正統保守野党」へと組織を提供したことに鑑み、「東亜日報グループ」という名称を用いたとしている。本研究においては「東亜日報グループ」という言葉を用いることで、金性洙を中心とする朝鮮人民族主義者らの文化的活動の拠点となった全体を指し示すことを意図している。木村幹『韓国における「権威主義的」体制の成立—李承晩政権の崩壊まで—』ミネルヴァ書房、2003 年、p.259。

<sup>4</sup> 金重洵は金性洙を文化民族主義者という位相に位置づけ、日本の植民地支配下での彼の活動が朝鮮半島における近代化を促進した点について肯定的に評価している。金重洵『문화민족주의자 金性洙』一潮閣、1998 年。

しかし、こうした金性洙の民族主義者というイメージは「金一族の出版帝国や教育機関の膨大な資料や影響力によって支えられてきた」のであり、民族主義者の「民族」という言葉への問いかけをも含めて金性洙に対する評価を再確認する必要がある。カーター・J・エッカート〔小谷まさ代訳〕『日本帝国の申し子』草思社、2004 年、p.346。

<sup>5</sup> 所謂「親日派」に関する問題はすでに多くの著作やレビューが出てきており、ここでの言及は避けたい。ただ金性洙に関して彼の対日協力に関する言及は例えば以下のようなものがある。

「ある政党側では金性洙も戦時協力が多かったと言われ、親日派とされる。しかし戦時にある団体、ある種の集会などに金性洙の名義の出ていることは倭賊とその走狗が金性洙の名義を盗用したのだとされ、金性洙が出席、または承諾したことはなかったという。そして金性洙は朝鮮の教育事業、文化事業のための大いなる功労者であると同時に犠牲者である。

る<sup>6</sup>。解放後の政治的な活動が彼の評価を多様に彩ることになったのだとも考えられるが、ひとりの人物に対して対立するふたつの評価が存在することだけを取り上げても朝鮮半島の近現代史が複雑な様相を呈していることが理解される。ただこのことは日本による植民地支配の影響があることを前提にしておかねばならない。

こうした金性洙に対する相異なる評価はみられるものの、彼を中心とする東亜日報グループが植民地期の朝鮮半島で行った事業の重要性は変わらない。東亜日報グループに関わる事業としては京城紡織、東亜日報社、普成専門学校の経営などがあるが、本研究においては普成専門学校に着目し、そのスポーツ活動について考察していく。

---

(後略) 」

김학민·정운현編『親日派罪状記』학민사, 1993年, p.365.

上記は金性洙に対する評価のなかでも肯定的なもののひとつであろう。彼を支持する論調は大凡このように金性洙の対日協力について弁護あるいは触れない傾向にある。しかし、カーター・J・エッカートが金性洙は「朝鮮人資本家の協力を要請する政府に対して何も抵抗もしなかった。それどころか一九二〇年以降、彼と総督府は蜜月の関係にあった」と結論づけているように彼の対日協力行為に関する批判は避けられない。ただこうした対立する評価は、政治的な立場・意図によってどちらかに偏ることが想定されるため、何れかの評価に与して語っていくことが適切であるとは思われない。

<sup>6</sup> 鄭敬謨は大韓民国成立の淵源に金性洙らの存在を位置づけ、その後の国家への影響力が彼らに起因することを論じている。彼は金性洙らのブルジョア的性格を明確にすることにより、金性洙らに対する非難を強めている。一方でここでの言及は「朝鮮人民共和国」の建国を頓挫せざるをえなかった呂運亨に対する同情の念を強く感じさせるものでもある。金性洙らのブルジョア性を明らかにしていく点は首肯できるが、善悪の対立構造を明確にしたうえで語る論調は植民地期の知識人らの実態を単純化してしまう危険性があるように思われる。鄭敬謨「悪の種子が蒔かれた頃—韓国ハイド性とジキル金性洙—」『シアレヒム』第4巻、シアレヒム社、1982年、pp.4-28.



写真1. 東亜日報社の金性洙像（筆者撮影）

### 3. 普成専門学校の経営引継

普成専門学校は現在の高麗大学の前身である。金性洙の教育事業のなかでも最も代表的な事業としてこの普成専門学校の経営が挙げられよう。

そもそも普成専門学校は1905（明治38）年に李容翊によって創設された私立学校であった。そして、その5年後の1910（明治43）年には孫秉熙を代表とする天道教会が経営を引き受け、1921（大正10）年には財団法人として認められるようになるなど、天道教会の力を背景に植民地社会内での発展をみせていた。しかし、財団法人内での内輪揉めや寄付金がうまく集まらなかったことが影響し始めてくると学校そのものの存立に翳りが見え始める。法人側はこうした危機を脱するために学校経営を引き受けてくれる有志を求めることになったのである。

そこで1932（昭和7）年に普成専門学校の経営を引き継ぐことになったのが財団法人の中央学院<sup>7</sup>であった。『東亜日報』の社説には「普成専門校の曙光」と題してこの時のことが記されている。

維持難中にあつた普成専門学校は該校理事会と評議會の一致可決で財団法人中央學院の設立者である金祺中、金暲中兩氏に引繼されることが決定し再昨日發表された。これは財団法人中央學院設立者から中央高等普通學校を經營する巨大な財産を犠牲にした金祺中、金暲中兩氏が普成専門學校の經營引継交渉に對してその基金に約六十萬圓可量を出捐することを快諾したことに因るのである。

<sup>7</sup> 財団法人中央學院は1929（昭和4）年に成立している。

普成専門學校がこうして永久に安全になったことはただ普成専門學校及びその關係者だけの幸いにあらず、真に朝鮮教育界の面目を保ったと言える<sup>8</sup>。

このように財団法人中央学院に普成専門學校の經營は委託され、その校長に金性洙が着任することになったのである。金性洙は定員超過募集事件で引責辞任した1935（昭和10）年と翌1936（昭和11）年の2年間を除く解放までの期間を普成専門學校の校長として在職している。



写真2. 高麗大學校の金性洙像（筆者撮影）

校長となった金性洙は普成専門學校の中興策の一環として体育の振興を重視したとされる。それは普成専門學校の教育目標として知・徳・体の三大要素が尊重され、学友会においても綱領に「我々は智・徳・體 三育の協調に基づく人格の完成を期する」とあり<sup>9</sup>、こうしたことから体育・スポーツが教育のひとつの要として認識されていたことが分かる。またこのことについて『仁村金性洙伝』では体育・スポーツが民族と結び付けられて説明されている。

ほかの分野ではまず施設や機会にあつて源泉的に日人たちとの差別があつたためこれを克服して彼らを凌ぐことは難しいことだつた。しかし體育にあつては比較的差別が作用する餘地がないため、對等な條件で即座に競つてみるのができたのであつた。運動競技で日本學生を凌ぎ、打ち負

<sup>8</sup> 『東亜日報』1932年3月29日付。

<sup>9</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會編『六十年誌』高麗大學校、1965年、p.225。



かすということは民族の矜持と自信を取り戻す契機であり、運動場での勝利は民族の希望を植えつけるすべであった。仁村が普専學生たちに願ったことは、本館入口の虎象が象徴する雄健な氣象であり、それは強靱な体力から出るのであった。彼が體育を重視したことは教育というのは元來知・徳・體の三位一體からその完成を期するという原理も原理であるが、それよりも民族の現實的要請のためであつた<sup>10</sup>。

日本の植民地支配の齎した影響は朝鮮の人々の心的な状況にまで及んでいたものであり、そのためスポーツには日本人からの差別によって形成される劣等感を競技での勝利によって払拭し、民族の自信を取り戻すところにその意義を見出していたという点が確認される。

では上記で言われる普成専門学校のスポーツ活動は如何なるものだったのか。次にその実際を確認してみたい。

#### 4. 体育部の推移

普成専門学校の体育部の活動は当初学生会活動のひとつであった。三・一運動の影響もあり、学生運動に対する総督府当局の監視は厳しかったが、スポーツに関してはそうした監視や双方の摩擦がなかったため、1920年以降、朝鮮体育会や各新聞社が主催・後援する競技大会が開催されるようになると各種の運動部がそれら競技大会に参加するようになる<sup>11</sup>。

こうした競技会での活躍は抑圧された民族の鬱憤を晴らす場となっていたが、一方で学校内部においては運動部の選手偏重主義が問題となり、運動の大衆化が要望されるようにもなっていた。それに応じて学校当局は1929（昭和4）年に学生会の管理で運営してきた運動部を学校当局で管理することにしたのである。しかし、1年と経たない間に再び学生会へとその運営管理を戻し、その後3年を経た1933（昭和8）年になり、運動部を完全に学校当局で管理することになる<sup>12</sup>。1933（昭和8）年という時期を鑑みると、金性洙の校長就任とともにそれまで曖昧であった体育部の運営管理体制も整理され始めたともみていだろう。こうして置かれた体育部の体育部規定をみると以下の通りである。

一、 本校ニ體育部ヲ置ク

二、 體育部ノ經費ハ生徒ヨリ徴収スル體育費及本校ノ補助金ヲ以テ支辨

<sup>10</sup> 仁村紀念會編『仁村金性洙傳』仁村紀念會、1976年、pp.361-362.

<sup>11</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.169.

<sup>12</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、pp.466-477.

ス

- 三、 生徒ヨリ徴収スル體育費ハ一人額五圓五十錢トシ授業料納期ニ從ヒ相當割合ノ金額ヲ授業料ト同時ニ納入セシム
- 四、 體育部ニ蹴球・ラ式蹴球・庭球・籠球・陸上競技・柔道・剣道・水泳及卓球ノ各部ヲ置ク
- 五、 體育部ノ各部ニ部長一人ヲ置ク  
部長ハ教員中ヨリ學校長之ヲ命ス
- 六、 各部長ハ必要ニ依リ生徒中ヨリ委員ヲ任命スルコトヲ得  
部長委員ヲ任命シタルトキハ直ニ學校長ニ報告スヘシ<sup>13</sup>

上記の規定は 1937 年度のものであるが、金性洙が校長に就任していた時期の規定として確認されるものである。これをみると学校当局により体育部の合理化が図られ、各運動部を体育部に所属するものとして運営管理していくようになったことが分かる。またこのように体育部を体系的に改編することによって運動選手本位であったスポーツを一般学生らに対しても「体力増進と運動精神普及・涵養」に資するものとして位置付けていったのである<sup>14</sup>。

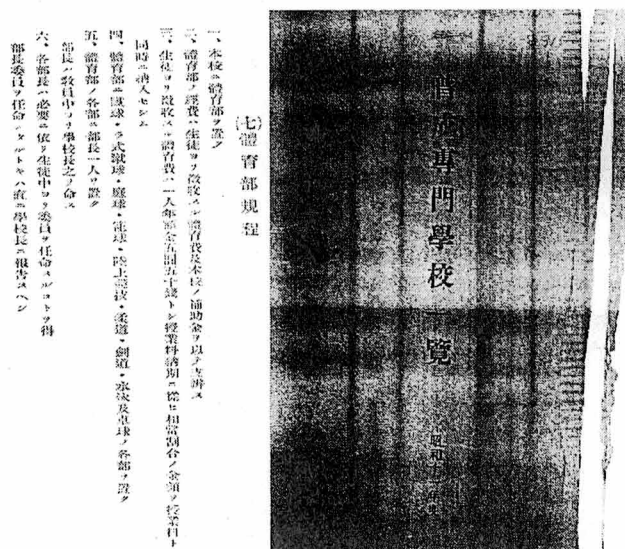


写真 3. 普通専門学校一覧 (昭和 11 年度)「体育部規程」

しかし、1940 (昭和 15) 年になると日本の戦時体制が進行するとともに国民総力連盟が各機関に設置されることになり、12 月には当局の命令により「国

<sup>13</sup> 『普成専門学校一覧』昭和十一年度、p.43.

<sup>14</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.234.

民総力普成専門学校連盟」が組織される。そのためそれまでの体育部は解消され体錬部となる。この体錬部には柔道部・剣道部・力道部・山岳部・ア式蹴球部・ラ式蹴球部・庭球部・陸上競技部・卓球部・排球部・送球部・水泳部・氷上部が置かれたが、競技大会などに出場する余裕はなくなったとされる<sup>15</sup>。ただこの頃になると各種競技大会そのものが次々に廃止されるようになってきていたため、そうしたことも競技大会に出場できなくなった理由のひとつとして挙げられよう。

このように普成専門学校の体育部は1930年代に金性洙が校長となったのと軌を一にして部の合理化が図られたものの、その数年後には総督府当局の命令により戦時体制に見合う組織の改編がなされたのである。

## 5. 各競技団体の活動

それでは各運動部は当該期においてどのような活動をしていたのだろうか。以下ではいくつかの代表的な競技団体の活動を取り上げて検討したい。

植民地期の朝鮮半島におけるスポーツは1930年代に目覚ましい発展を遂げている。ここでいう発展とは宗主国たる日本の競技レベルと比較しても遜色なく、あるいは宗主国側以上の競技レベルに達していたことを指す。このことは日本人の目からみても明らかであった。1934（昭和9）年に竹内は当時の朝鮮半島におけるスポーツの近代的発展を報告しており、そのなかで陸上競技、ラグビー、蹴球、アイススケート、アイスホッケー、庭球などの競技について触れている。そのなかの蹴球と庭球について触れている部分をみると以下の通りである。

更にア式蹴球は朝鮮の國技とも言ふべく、その技術は決して内地のそれに比して優るとも劣らない。目下全鮮的に統一を遂げ得て、その技は増々研究されつゝある。恐らく今後日全日本の蹴球を代表するものは我々の半島から出るであらう。（中略）

更に軟式庭球に於ては昨年明治神宮各府懸對抗に優勝し、今年伊勢神宮競技に於ても再勝し名實共に全日本の斯界の中心は半島に移つた感がある<sup>16</sup>。

竹内によるこの蹴球に対する暗示めいた記述は時を経ずして見事的中するこ

<sup>15</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員會、前掲書、pp.241-242.

<sup>16</sup> 竹内一「黎明の半島體育・スポーツ界を語る」『體育と競技』大日本體育學會、1934年、p.199.

とになる。すなわち翌年の京城蹴球団の活躍である。

1935（昭和10）年に開催されたサッカーの全日本選手権は1936（昭和11）年のベルリン・オリンピックの選手選考も兼ねていた。この大会、決勝まで進んだのは東京文理大と朝鮮半島から出戦した京城蹴球団であった。両者の対戦結果は6-1という圧倒的な大差で京城蹴球団が勝利し、その年の優勝を果たしている<sup>17</sup>。実はこの京城蹴球団の主力メンバーのなかに普成専門学校の金容植・朴奎楨・金炳禧・裴宋鎬・康基淳・高鴻寛ら6名が入っていたのである<sup>18</sup>。このなかでも特に金容植はベルリン・オリンピックの代表選手にも選ばれるなどその活躍は目を見張るものであった。

上記のように、この頃の普成専門学校の蹴球部には非常に優れた選手が多く、朝鮮半島内で開催されていた1932（昭和7）年の朝鮮体育会主催の第13回全朝鮮蹴球大会、1934（昭和9）年の大阪朝日京城支局主催の第8回全朝鮮ア式蹴球大会、1936年の朝鮮蹴球協会主催の全朝鮮蹴球選手権大会などの各大会で優勝しており、また朝鮮体育協会主催の朝鮮神宮競技大会では1933（昭和8）年、1934（昭和9）年の第9回、第10回大会、1936（昭和11）年の第12回大会においても優勝するなど多くの優れた成績を残している<sup>19</sup>。

こうした競技における活躍の他にも普成専門学校の蹴球に関わる活動のなかに学校自体が主催して全朝鮮中等学校蹴球大会というスポーツ大会を開催している点は注目される。この大会は1928（昭和3）年から開催されており、高等普通学校を中心に朝鮮人の子弟らが所属する中等学校が参加の対象とされていた。大会の主旨はサッカーの普及と青少年体育の発展であり、1940（昭和15）年の13回大会まで継続して行われている<sup>20</sup>。またこの大会には前述した金容植・金炳禧・高鴻寛らのように後に普成専門学校の蹴球部で活躍するような選手も多数参加していたことが確認されるのである<sup>21</sup>。

先に挙げた竹内のもうひとつの言及に戻ろう。竹内は庭球に関して明治神宮競技大会、ならびに伊勢神宮競技大会での朝鮮半島からの選手の活躍について触れていた。この年、このふたつの大会で優勝したのは、普成専門学校庭球部の千季根・盧炳翼組だった<sup>22</sup>。彼らの活躍に牽引されて普成専門学校庭球部は1940年まで黄金時代を迎えたとされ、各競技大会においても優れた成績を残し

<sup>17</sup> 日本体育協会編『日本スポーツ百年』日本体育協会、1970年、p.240.

<sup>18</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.473.

<sup>19</sup> 大韓體育會、前掲書、pp.525-648.

<sup>20</sup> 高麗大學校70年誌編纂室編『高麗大學校70年誌』高麗大學校、1976年、p.423.

<sup>21</sup> 大韓體育會、前掲書、pp.577-578.

<sup>22</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.502.

ている。因みに千季根・盧炳翼組に関しては1934（昭和9）年、1935（昭和10）年の朝鮮軟式庭球連盟主催の全朝鮮学生軟式庭球選手権大会第1回、第2回大会で優勝しており、普成専門学校庭球部としては朝鮮学生庭球連盟主催の高専庭球連盟戦において、その第2回大会（1936年）から第5回大会（1939年）までの4大会を連続して優勝している。この時期はまさに全盛期であったと言えるだろう。

普成専門学校のスポーツ活動なかにはもうひとつ偉業をなした運動部が存在する。それは籠球部である。

朝鮮半島のバスケットボール界は普成専門学校と延禧専門学校とが鎬を削りながら発展させていったが、まずその檜舞台に立ったのは延禧専門学校であった<sup>23</sup>。ここでもベルリン・オリンピックの存在は大きい。

1932（昭和7）年、ロサンゼルスでのIOC総会で1936（昭和11）年のベルリン・オリンピックからバスケットボールが正式種目として採用されることになったため、京城蹴球団が活躍したのと同年の1935（昭和10）年、第15回バスケットボール全日本選手権はオリンピックの選手選考を兼ねた大会でもあった。この大会で優勝を果たしたのが延禧専門学校だったのである<sup>24</sup>。結果、延禧専門学校の選手のうち李性求、廉殷鉉、張利鎮の3名が代表選手に選ばれ、ベルリン・オリンピックに参加している。

普成専門学校の籠球部が活躍するのはこのベルリン・オリンピック後のことである。蹴球部と違い、1934（昭和9）年、1935（昭和10）年は籠球部の沈滞期であった。籠球部はベルリン・オリンピックには間に合わなかった。その翌年の1937（昭和12）年から普成専門学校籠球部の大躍進が始まる。

1937（昭和12）年、第17回全日本選手権の決勝は普成専門学校と延禧専門学校によって争われた。結果はほとんど点差がなく43-41という僅差であ

---

<sup>23</sup> 1933年時の延禧専門学校のバスケットボールが『大日本體育協會史』のなかで紹介されている。それによるとワシントン州立大学のウィリアム金という人物から半年間の指導を受け、セットプレイやゲーム運びが巧みになってきたことが窺える。大日本體育協會『大日本體育協會史 下巻』大日本體育協會、1937年、p.1265.

また『연세대학교사』では1931年にアメリカから朝鮮に来た在米朝鮮人2世の정봉운という人物によってスクリーンプレーを教授されたことが記載されている。

연세창립 80 주년기념사업위원회편『연세대학교사』연세대학교출판부、1969年、p.1157.

<sup>24</sup> この大会に選抜されている選手らはOB選手も含まれているため競技記録中には「全延禧」と記載されている。本文中では学校名である「延禧専門学校」を用いた。

ったが、普成専門学校が初優勝を果たしたのである<sup>25</sup>。この年の決勝戦がともに朝鮮半島から出戦してきた学校同士であったことも当時の朝鮮における競技レベルの高さが窺えよう。

普成専門学校籠球部の活躍はこの大会だけに止まらなかった。その翌年の全日本選手権でも優勝を果たし、続く1939（昭和14）年の第19回大会でも優勝し、全日本選手権3連覇という偉業を成し遂げたのである<sup>26</sup>。この記録は1921（大正10）年から1923（大正12）年の東京YMCAの記録に並ぶ<sup>27</sup>が、競技レベル向上の推移、また普成専門学校が植民地支配を受ける環境のなかで成し得た成績である点を踏まえると、後者のそれと同列には語れない。

このようにいくつかの競技団体の活動をみてきたが、普成専門学校の各競技団体は競技レベルを向上させ、宗主国である日本の選手・競技団体に対しても引けを取らず、1930年代には数々の大会において優れた成績を残している。このことはスポーツがオリンピックという国際舞台を中心に、発展した自国の存在感を示す一機会になっていたことを鑑みると、朝鮮半島ではこうしたスポーツでの活躍は植民地支配者への抵抗という意味と同時に朝鮮民族の発展の物語でもある。普成専門学校のスポーツでの活躍はその物語のひとつとして捉えることができよう。

## 6. スポーツ選手の特別入学

普成専門学校では当時から特別入学という制度が存在していた。『六十年誌』には植民地期の普成専門学校のスポーツ活動が日本の政治的権力に対するレジスタンス的意味を持つものであったとしたうえで「学校当局はこうした體育活動の意義を勘案して選手の特別入学を許可して」いたと記述されている<sup>28</sup>。また日本の植民地支配からの解放後は上記のような意味がなくなったため、大学体育の見直しが図られ、「運動選手の特別入学の廢止および學業の勸奨など選手の體育精進に多くの制約が加えるように」<sup>29</sup>なったとあり、植民地期に普成専門学校がスポーツ選手を特別入学といった制度で獲得していたのは明らかである。

普成専門学校の入学に関する規定の第11条には「學校長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前條ニ該當スル入學志願者ニ就キ口頭試問身體検査及學力試験ヲ

<sup>25</sup> 日本体育協会、前掲書、p.351.

<sup>26</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.479.

<sup>27</sup> 日本バスケットボール協会編『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会、1981年、p.86.

<sup>28</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.465.

<sup>29</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.466.

行ヒタル上入學許可ノ決定ヲ爲ス」<sup>30</sup>とあり、通常の入学とは違った入学の方法が当時から存在していたことが窺える。規定上での特別入学を指すとすればこの第 11 条であろう。またこの規定では校長の意向が強く反映するものであったとことも分かる。

前述した普成専門学校の籠球部の活躍はこうした特別入学がその背景にあった。1934（昭和 9）年、1935（昭和 10）年に奮わなかった籠球部は実に 19 名もの選手を平壤・開城・ソウルの各所から集め、その後の全日本選手権 3 連覇を導くことになったのである<sup>31</sup>。このとき活躍した趙得俊・李好善・呉寿喆・呉重烈・安昌健らは昭和 12 年度（1937 年）から昭和 15 年度（1939 年）の期間、最優秀選手若しくは優秀選手として日本籠球協会から表彰されており<sup>32</sup>、全日本代表としても活躍している。

また陸上競技部にも 1937（昭和 12）年の記録から特別入学の選手が確認される<sup>33</sup>。「民族」の英雄、孫基禎である。孫基禎はベルリン・オリンピックのマラソンで金メダルを獲得した植民地朝鮮のまさに英雄だった。しかし、彼はベルリン・オリンピック後にいわゆる日章旗抹消事件<sup>34</sup>という事件が発生したため、植民地朝鮮に衝撃の走るその渦中に身を投じねばならなかった。孫基禎は民族にとっての英雄であると同時に総督府当局にとっては要注意人物だったのである。

当時の孫基禎はなんとも表現できない心持ちで生活せねばならず、日章旗抹消事件の東亜日報社を思い起こし、金性洙に会うことを決意したという。そして、桂洞の金性洙宅を直接訪れ、普成専門学校への入学を願い出たと回想している<sup>35</sup>。こうして普成専門学校に入学した孫基禎は 1937（昭和 12）年の陸上

<sup>30</sup> 普成専門学校『普成専門学校一覧』昭和十一年度、p.31.

<sup>31</sup> 高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.478.

<sup>32</sup> 昭和 12 年度には最優秀選手に趙得俊、優秀選手に呉寿喆、呉重烈が、昭和 13 年度には最優秀選手に李好善、優秀選手に趙得俊、呉寿喆が、昭和 14 年度には最優秀選手に呉寿喆、優秀選手に趙得俊、李好善、呉重烈、安昌健らがそれぞれ選出されている。日本体育協会、前掲書、p.347.

<sup>33</sup> 普成専門学校陸上部は 1937 年の京・水間駅伝競技大会で 1 位、全朝鮮陸上競技大会でも優勝という記録を残しており、その当時の記録から選手のひとりとして孫基禎が参加していたことが分かる。高麗大學校六十年史編纂委員會、前掲書、p.490.

また、『高麗大學校 70 年誌』においても「1937 年からは孫基禎が入校して普専陸上の地位を高め」たとある。高麗大學校 70 年誌編纂室、前掲書、p.438.

<sup>34</sup> 朝鮮中央日報社と東亜日報社らが表彰式時の孫基禎選手の胸にある日本国旗（日章旗）を消して同社の新聞へと掲載したことが問題となり、前社は自粛後そのまま倒産、後社は無期限発行停止処分を総督府当局から受けるという一大事件となった。

<sup>35</sup> 東亜日報社編『仁村金性洙』東亜日報社、1986 年、pp.370-371.

部の活躍に助力することになったのである。



写真5. 桂洞に残る金性洙旧居（筆者撮影）

このように孫基禎のような有名選手でさえも普成専門学校に迎え入れられたのであった。しかも民族発展の象徴であり、当局から要注意人物とされる孫基禎を入学させるということの意義は決して小さなものではなかつただろう。

普成専門学校のスポーツ選手の獲得を促す特別入学という制度は当該期のスポーツ競技での活躍に欠かすことのできない制度であったと思われる。それにより朝鮮半島の各所から才能ある朝鮮人青年を集め、時には朝鮮半島で、時には日本で普成専門学校のスポーツでの活躍を創造していったのである。

## 7. 小括

本研究は植民地朝鮮において朝鮮人の高等教育機関であった普成専門学校のスポーツ活動の実態について明らかにした。

本研究において明らかになった点をまとめると以下の通りである。

1. 金性洙は1932（昭和7）に普成専門学校の経営を引き継いでからは校長として教育事業に携わり、体育・スポーツを普成専門学校の中興策のひとつとして重視した。
2. 普成専門学校におけるスポーツ活動での活躍は支配を受ける朝鮮人の劣等感を払拭する機会となっていた。
3. 日本の戦時体制が進行してくると体育部は解消されて体錬部となり、各競技大会へ参加する余裕はなくなってきた。
4. 普成専門学校の体育部のなかでもとりわけ蹴球部、庭球部、籠球部の活躍



は目覚ましく、日本の国家代表としても選ばれるほどの選手らが存在した。

5. 普成専門学校では特別入学という制度があり、才能あるスポーツ選手を朝鮮半島全土から獲得しており、また孫基禎のような有名スポーツ選手の入学も確認された。

朝鮮半島の植民地期においてスポーツは如何なる機能を果たしえたのか。為政者の側からスポーツの機能を解していくならば、植民地権力を強化する装置として機能し、社会事業のひとつとしても位置付けられていた点が確認される。本研究では視点を変え、支配を受けた側がスポーツをどのように捉えていたのかという点から考察していくものであった。

普成専門学校に着目したのは当該期において普成専門学校が朝鮮民族を代表する高等教育機関であり、朝鮮人エリートを養成していく重要な機関であったからである。そこに1932（昭和7）年以降は金性洙が校長として就任し、教育事業を展開していったのである。植民地期における彼の行動は現代においてはそれぞれの立場により肯定的にも否定的にも評価されているが、この教育事業に携わったことが企業家としての金性洙だけではなく、教育者としての金性洙の存在を後世に伝えることになった。「文化民族主義者」という称号はこのことに由来するものでもあり、また民族に近代化の風を齎したということがその背景にある。それが彼の財力を保持・増強するものであったとしても、である。本研究においては金性洙に対する評価を下したうえで研究に臨むといったものではなかった。あくまでもスポーツが当該社会においてどのような機能を果たしたのかに焦点を絞った。

植民地という状況を考えると当然のことながらスポーツに付与される役割として植民地権力に対する被支配民族の「抵抗」が挙げられる。本研究でみてきたように普成専門学校のスポーツ活動はそういう意味では宗主国である日本に対して十分な成果を上げたとみることができる。しかし、こうしたスポーツ活動は「抵抗」だけを意味したのではなく、スポーツでの成功が民族の「発展」という意味合いを持ったということが本研究において考察された点であった。これは近代化（＝発展）を促そうとした朝鮮人エリートたちの価値観と符合する部分でもあり、1920年代に展開された民族改造論の延長線上に位置していると考えていいのかも知れない。普成専門学校のスポーツ活動は民族の価値観を体現する文化的活動のひとつだったのである。

## 第5章 東亜日報社のスポーツ事業

### 1. はじめに

本章において研究の対象とするのは当該期の民族主義的な言論機関であった東亜日報社のスポーツ事業である。東亜日報社は1920（大正9）年4月に設立され、ブ・ナロード運動や朝鮮物産奨励運動、さらに私立大学の設立に関しても積極的に推進し、当該期において朝鮮民族をリードしていく役割を果たしていた。朝鮮総督府からは警戒される存在でもあったが、文化的な事業を手掛けることで朝鮮民族に民族意識を鼓吹し、その警戒を掻い潜って民族に近代的な価値観を賦与していこうとしていた。そうした文化的な事業のひとつにスポーツ事業も含まれる。スポーツは近代的な価値観を人々に伝えていくのに適した文化的行為とみなされていたものと考えられる。

東亜日報社を牽引していった人々、金性洙や宋鎮禹、張徳秀らは皆日本に留学したことのある人々であった。この点が看過できないのは彼らが留学当時に見た日本でのスポーツ状況が日本の植民地と化していく朝鮮半島で連続性を持つものともなっているからである。そのため本研究においては在日韓国留学生らのスポーツから東亜日報社のスポーツ事業の流れをその携わった人々の関係から一連のものとして捉えていく。

東亜日報社の行ったスポーツ事業は当該期の植民地朝鮮において如何なる意味を持っていたのか。本章ではいくつかの事例に着目し、その実態を明らかにしながら民族主義者らの主導したスポーツの意味について考察していく。

### 2. 在日韓国留学生とスポーツ

金性洙は青年時代に日本に留学している。留学先であった日本での生活は帰国後の彼の事業に関わる人物たち、すなわち東亜日報グループを形成する人物たちとの交流の場でもあった。そのため留学生間の活動のなかで体育・スポーツがどのような思想の下で行われていたのか、また当時の日本のスポーツ状況を確認することで当該期におけるスポーツに対する価値が見出せるだろう。そのため本節では金性洙が日本に留学していた頃の在日韓国留学生らの体育・スポーツについて、またその当時の日本のスポーツにみられるひとつの特徴を確認し、留学生らの帰国後のスポーツ活動との連続性をみとめる。

#### （1）在日韓国留学生の体育・スポーツ

19世紀末、朝鮮からの留学生が日本に送られるようになった当初は「国権回復」という言葉にみられるように退廃しつつあった朝鮮王朝（1897（明治30）

年より大韓帝国)の求心的な力を取り戻すことが志向されていた。そのため当初は留学生も官費の留学生が多かったようである。しかし表にみられるように1904(明治37)年、1905(明治38)年以降の留学生は私費留学生が急増している。その理由としてはこの頃になると官費の留学生を不定期的に50名程度しか派遣しなくなっていたこと、次に第一次、第二次日韓協約の締結を契機に朝鮮半島の人々が啓蒙運動の一環として救国教育の必要性を強く認識し、その結果、留学生の増加につながったとされる<sup>1)</sup>。

年代(明治)		30	31	32	33	35	36	37	38	39	40	41	42	43
学生	在	150	161	152	141	140	148	102	197	430	554	702	739	595
	新	160	2	6	7	12	37	158	252	153	181	103	147	5

表1. 在日韓国留学生数の推移(典拠:金洪周『韓末在日韓国留学生の民族運動』p.23)

ともあれ日本に滞在する留学生が増えてくると、彼らの拠り所となるような組織が形成されるようになる<sup>2)</sup>。当初は朝鮮半島の出身地を中心に様々な団体が組織されていたが、1909(明治42)年にはそれらを統合した組織として大韓興学会が設立されたのである。

こうして組織された大韓興学会では会長、副会長、総務員、評議員、書記員、幹事員、会計部、編纂部、出版部、教育部、討論部、査察部、運動部といった各種の委員を配置し、学会の活動として出版・言論・教育が重視され、体育・スポーツ活動も活動のひとつとして奨励されていた。孫煥は大韓興学会のスポーツ活動について①運動会の開催、②本国への遠征試合の2つを挙げて言及している<sup>3)</sup>。またここでの運動会は例えば同時期の朝鮮半島で活発に行われていた運動会の機能との繋がりも重要だろう<sup>4)</sup>。

<sup>1)</sup> 金洪周『韓末在日韓国留学生の民族運動』느티나무、1993年、pp.22-24.

<sup>2)</sup> 留学生団体の形成は4期に分類され、草創期には親睦会、帝国青年会が、分立期には太極学会、共修学会、光武学会、洛東親睦会、大韓留学生会、同寅学会、湖南学会などが林立していた。そしてそれらが太極学会、共修学会、大韓学会に連合され(連合期)、さらに最終的に大韓興学会として統合されることになる。金洪周、前掲書、pp.14-17.

<sup>3)</sup> 孫煥「旧韓末期(1876-1910)における在日韓国留学生団体の体育に関する研究」『スポーツ史研究』第10号、スポーツ史学会、1997年、pp.66-67.

<sup>4)</sup> 旧韓末に朝鮮半島で行われていた運動会は①学生が中心であった点、②体育行事だけではなく、遊戯や娯楽、演説会などもともに行い、祝祭的な性格を有していた点、③教育的な機能をもっていた点、④身体発達の特徴に合わせて行われていた点、⑤軍事訓練的な競技も含まれていた点、⑥女学校で女子独自の運動会が行われていた点などの特徴があり、運動会が単純に体育行事としてで

留学生団体のスポーツ活動の目的は「留学生相互の親睦と団結を図る一方、留学生に民族意識を高揚させるために行われた」<sup>5</sup>とされるが、大韓興学会のスポーツ活動の目的はそれだけに止まるものではなかった。すなわち「体育の健全たる技術を通して弱肉強食の競争に打ち勝ちうる能力を育てことができると言われ、本会で運動部を設置した目的が健全たる韓国の青年を養成するため」<sup>6</sup>であるとしているのである。ここには帝国主義が蔓延るなかで社会進化論が朝鮮の知識人らによっても認識されていたことを意味する。

こうした価値観のもとで体育・スポーツが留学生らの間で行われている頃に金性洙は日本へ留学している。彼が渡日したのは1908（明治41）年のことであり、その後1914（大正3）年までを東京で過ごしている<sup>7</sup>。母国が併合される時をその支配国である日本で迎えることになったのは皮肉である。

金性洙の日本での生活で最も重要なのは、この留学時代に多くの知己に巡り会えたということだろう<sup>8</sup>。とりわけ宋鎮禹と張徳秀は朝鮮半島への帰国後、金性洙の文化的な事業を推進していくうえで重要な役割を果たした人物たちである。

金性洙が上記の大韓興学会の活動に参加していたという記録はないが、韓国併合により大韓興学会が解散すると、その後に成立する学友会で盟友の宋鎮禹らがリーダーシップを発揮しており、また金性洙自身も「韓人留学生会」の会長を務めたという記録<sup>9</sup>がみられる。こうしたことから金性洙らが日本における朝鮮人留学生の多くと交友していたことが分かり、後に彼らの知を結集していく東亜日報グループの原動力の根源をこの時期に見出すこともできるのである。

## （2）国際化するスポーツ状況

金性洙をはじめ、韓国併合前後に朝鮮半島からの学生が日本へと留学しているとき、日本のスポーツはどのような状況だったのか。当該期における日本の

---

はなく社会的な機能をもつものであったことが明らかにされている。

李學來『韓國近代體育史研究』지식산업사、1990年、pp.60-65.

<sup>5</sup> 孫煥、前掲書、p.68.

<sup>6</sup> 金淇周、前掲書、p.123.

<sup>7</sup> 1908年に金性洙は正則英語学校に入学し、その翌年に錦城中学校の5学年へ編入、1910年に早稲田大学予科に入学、1911年に同大学政経学部に進学している。東亜日報社『評傳仁村金性洙』東亜日報社、1991年、p.424.

<sup>8</sup> このとき日本に留学していた人物のなかには宋鎮禹、張徳秀のほか、玄相允、崔斗善、梁源模、朴容喜、金俊淵、李康賢、曹晩植、金炳魯、玄俊鎬、趙素昂、鄭魯滉、金度演、兪億兼、金雨英、洪命憲らがいた。仁村紀念會編『仁村金性洙傳』仁村紀念會、1976年、p.79.

<sup>9</sup> 東亜日報社編『評傳仁村金性洙』東亜日報社、1991年、p.424.

スポーツ状況は日本に渡ってきた留学生のスポーツ観、スポーツ活動にも影響を及ぼしたことは否めない。

先に述べたように金性洙が日本に留学していたのは1908（明治41）年から1914（大正3）年までであったが、この間、日本のスポーツ界はひとつの大きな転換期に差しかかっていた。

そもそも日本における近代スポーツの伝播は明治の文明開化の雰囲気の中で、新文化の輸入として始まり、学校を中心に普及し、その後次第に定着していく過程を辿った。この時期のスポーツにおいて重要なのは欧米に伍する国力、近代化への希求が欧米に対する憧れと劣等感を抱かせ、在留する欧米人らをスポーツで打ち負かすことが内在する文化的劣等感を払拭する契機ともなっていた点であろう。しかしこのことは日本のスポーツ文化における根源的な問題を孕ませることになる<sup>10</sup>。

ともあれこうして日本国内に普及・拡大していったスポーツは次の段階へと進んでいく。朝鮮半島から留学生が多く渡日してきていた時期、すなわち20世紀初頭の日本のスポーツの特徴のひとつはスポーツが国際的な活動となり、国際交流の場として機能し始めていたことだと言えよう。表2は当該期における日本のスポーツにみる国際交流の状況を表したものである。

年・月	関 連 事 項
1905. 4	早大野球部第1回渡米、7勝19敗
1906. 2	ラグビー、横浜外人9-0慶大、同年11月、横浜外人6-4慶大
1907. 1	第1回慶応対横浜外人のホッケー試合、外人6-0慶、ホッケー試合の初め
1	ラグビー、横浜外人9-0慶大
10	ハワイ・セントルイス野球団、慶応の招待により来日、外国野球団招待の初め
1908. 1	東京高師、蹴球で初めて横浜外人チームを破る（1-0）
2	第1回慶応対神戸外人ラグビー試合開催、外人19-0慶
7	慶応野球部、ハワイへ遠征
9	ワシントン大学野球チーム来日、6勝4敗
11	慶応ラグビー部、初めて横浜外人を破る、慶11-0外人

<sup>10</sup> 木下はこの時期のスポーツ観について富強主義的な時代を背景としたナショナルリズム的スポーツ観、勝利至上主義的な武士的スポーツ観、野次集団にみられる後進国的スポーツ観とに分けて言及し、これらを総じて「日本的」スポーツ観としている。こうしてこの時期に形成されたスポーツの価値観は長きにわたって日本のスポーツ文化の羈絆になったと言えよう。木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1972年、pp.97-120。

1909. 9	ウィスコンシン大学野球チーム来日、4勝4敗
11	高師とセントジョセフ・カレッジの蹴球試合を開催、高師3-0で勝つ
1910. 6	早大野球部ハワイ遠征、13勝12敗無勝負1
9	早大の招きでシカゴ大学の野球チーム来日、10戦全勝
1911. 3	早大野球部第2回渡米、17勝34敗中止1
7	大日本体育協会創立
1912. 2	早大野球部、マニラのカーニバル祭野球に出場、同時に朝吹常吉・山崎健之丞、 庭球に出場（庭球選手外遊の初め）
7	第5回オリンピック大会（ストックホルム）に日本より三島・金栗、初めて出場
1913. 2	第1回東洋オリンピック大会（マニラ）に、明大野球部および田舎片善次・井上輝二参加
5	スタンフォード大学野球チーム来日、6勝5敗
12	ジャイアンツ・ホワイトソックス帯同の世界一周野球チーム来日米大リーグ来日の初め
1914. 1	慶応庭球部熊谷一弥・野村裕一・市川重三・三嘴進、マニラのトーナメントに出場
3	慶大野球部渡米、15勝15敗2分
6	明大野球部渡米、26勝28敗2分

表2. 日本のスポーツにみる国際交流（1905-1914）

（典拠：岸野雄三編『近代体育スポーツ年表』pp.102-121）

この時期、日本のスポーツにみられる国際的な活動の傾向を確認すると、①とりわけ大学を中心としたスポーツ交流が盛んであったこと、②そのなかでも野球が逸早く国際的なスポーツ交流を行うものとして登場していること、③オリンピックや東洋オリンピック（極東選手権大会）などの国際的な競技大会への参加<sup>11</sup>を果たしていることなどが挙げられよう。

日清・日露戦争を経て、欧米列強と比肩しうるほど近代化が進み、その発展していく国力を背景に国際的な舞台へとスポーツの分野も進出し始めていたことがこの時期の日本のスポーツにみられる特徴のひとつである。またそれは当該期における日本社会の様相を反映する現象でもあっただろう。

植民地期の朝鮮人知識人らにとって、こうした国際的なスポーツ大会への憧

<sup>11</sup> 日本の国際スポーツへの参加に大日本体育協会の存在は欠かせないが、大日本体育協会が発足したのは「本来外国の組織團體の發達を見るに、最初各地方クラブが設けられ、漸次其等が擴大統合されて全國的の統一團體となつてゐるが、我が國にあつては諸外國より立遅れてゐるに不拘、一氣に國際的に發展飛躍を促された關係から、先ず中心的統制團體が生まれたのは、又止むを得ぬ経路であつた」とされており、世界のスポーツ情勢のなかで国内を統括するスポーツ組織の必要性にかられていたことに起因する。大日本體育協會、前掲書、pp.1-2.

れは一入ではなかった<sup>12</sup>。それは支配を受けているがために彼ら自身の「民族」の代表を国際的な舞台に送ることのできないもどかしさと裏腹にある。こうした点をふまえて植民地支配下にあった朝鮮半島のスポーツの進展過程をこの時期からの連続性としてみてみると、朝鮮人知識人らがスポーツに対して近代的な価値を見出し、スポーツの発展と民族の発展とを同列にみていく視点を有していたと考えられる。

### 3. 東亜日報社とスポーツ

植民地朝鮮では高宗の死を切っ掛けに三・一独立運動が1919（大正8）年に起こり、各地で多くの朝鮮民衆が立ち上がった。これに対して当局は徹底的な弾圧によって運動の鎮静化を図り、この運動を収拾させていく。この事件が契機となり、総督府はそれまでの武断政治と呼ばれる植民地政策から文化政治へと転換した点はよく知られているところである。この文化政治期に朝鮮民族による民族紙の発行が認められ、1920（大正9）年に設立したのが民族系の言論機関である東亜日報社であった。東亜日報社は民族をリードしていくことを自らに課していた。そのため言論機関として新聞を発行する以外にも多くの文化的な事業に手をつけている。そのひとつがスポーツ事業であった。



写真1. 鍾路にある東亜日報社①（筆者撮影）

<sup>12</sup> 大韓興学会にも所属した邊鳳現はオリンピックに参加できない民族の現状を憂い、運動競技を勧奨していく必要性を訴えていた。大韓體育會『大韓體育會史』大韓體育會、1965年、p.67.

表3. 東亜日報社のスポーツ事業一覧

(本社)

年	大会名	日程
1923年	第1回全朝鮮女子庭球大会	6. 30~7. 2
1926年	第1回4俱樂部野球連盟戦	8. 25~9. 5
1928年	第2回4俱樂部野球連盟戦	5. 1~6
	第3回4俱樂部野球連盟戦	9. 10~15
1929年	第1回全朝鮮水上大会	1. 20
	第1回全朝鮮水泳競技大会	9. 1
1930年	第2回全朝鮮水上大会	1. 25
	第1回京永短縮マラソン大会	3. 20
1931年	第3回全朝鮮水上大会	1. 25
	第7回4俱樂部野球連盟戦	5. 23~6. 4

(支・分局)

1921年	第1回庭球大会(沙里院)	11. 23
1922年	近郡連合春季庭球大会(醴泉)	6. 11
	全鮮蹴球大会(馬山)	7. 7~9
	第1回黄海庭球大会(載寧)	8. 2~3
	第1回咸南庭球大会(咸南)	8. 4~5
	嶺南庭球大会(金海)	9. 23~24
	第1回市外及高陽郡蹴球大会(高陽)	11. 12~13
1923年	大同江水上運動大会(平壤)	1. 20
	自転車競技大会(羅州)	5. 20
	私立学校連合大運動会(潭陽)	6. 16
	南鮮庭球大会(咸平)	6. 30~7. 1
	第2回咸南庭球大会(咸南)	8. 9
	夏季陸上大運動会(利原)	8. 10~11
	三郡連合個人庭球大会(楊州)	8. 12
	第1回優勝旗争奪畿湖庭球大会(安城)	8. 26
	全慶弓術大会(麗水)	8. 26~30
	振成少年庭球大会(平澤)	9. 23
	第1回湖南蹴球大会(扶安)	11. 3~4
1924年	日本艦隊対培材蹴球大会(仁川)	4. 1
	第2回優勝旗争奪畿湖庭球大会(安城)	7. 30
1925年	創刊5周年記念マラソン大会(東萊)	4. 3
	第1回嶺南庭球大会(東萊)	4. 18~19
	全朝鮮脚戯大会(統營)	4. 25~28
	自転車探勝回募集(安東)	5. 9~10
	第1回南朝鮮庭球大会(南原)	5. 10~11
	全鮮弓術大会(往十里)	5. 16~17
	第2回南鮮蹴球大会(大邱)	5. 23
	忠南公州市民鷄籠山探勝運動大会(公州)	5. 31
	西鮮個人庭球大会(肅川)	5. 31
	南朝鮮自転車競技大会(河東)	6. 14
	南鮮少年庭球大会(永同)	6. 28
	全江華青年連合陸上競技大会(江華)	6. 28
	京畿蹴球大会(往十里)	7. 4~6
	第3回優勝旗争奪畿湖庭球大会(安城)	7. 19
	第3回南鮮庭球大会(咸平)	7. 25~26
	大田木尺脚戯大会(大田)	10. 3~5
	第1回南鮮庭球大会(永同)	10. 4
	第2回南鮮庭球大会(永同)	10. 17
	忠南庭球大会(唐津)	11. 1
1926年	湖南弓術大会(裡里)	6. 14~15
	端午遊戯大会(平康)	6. 14~16

年	大会名	日程
1926年	第2回嶺南庭球大会(東萊)	6. 19~20
	全仁川少年野球大会(仁川)	6. 20
	第3回南朝鮮庭球大会(永同)	6. 20
	第1回南朝鮮個人庭球大会(慶州)	7. 18
	江華・金浦少年庭球大会(江華)	7. 18
	自転車及脚戯大会(郡仙)	7. 20~21
	第7回畿湖庭球大会(安城)	7. 30
	第2回男女鞆大会(清涼里)	7. 30~31
	慶北個人庭球大会(永川)	8. 8~9
	慶南闘牛大会(馬山)	9. 26~28
1927年	社屋落成記念運動会・探勝会(裡里)	4. 30~5. 1
	社屋落成記念運動会(定州)	4. 30~5. 1
	社屋落成記念脚戯大会(公州)	5. 7~8
	社屋落成記念自転車競技(載寧)	5. 8~9
	社屋落成記念庭球大会(端川)	5. 1
	社屋落成記念市民大運動会(安城)	4. 30~5. 8
	社屋落成記念少年野球大会(郡山)	4. 29~30
	社屋落成記念運動会(唐津)	5. 5~7
	社屋落成記念弓術大会(東部)	4. 30~5. 3
	社屋落成記念蹴球大会(四平街)	4. 30
	社屋落成記念庭球大会(宣川)	5. 4
	社屋落成記念庭球大会(通川)	4. 30
	社屋落成記念自転車大会(竹山)	5. 8
	社屋落成記念庭球大会(利原)	4. 30
	社屋落成記念庭球大会(高原)	4. 29
	社屋落成記念脚戯大会(固城)	4. 28~30
	社屋落成記念庭球大会・自転車競技(統營)	4. 30
	社屋落成記念弓術大会・野球大会(清州)	5. 1
	社屋落成記念庭球大会(安岳)	4. 30
	社屋落成記念庭球大会(鏡城)	5. 1
	社屋落成記念庭球大会(伊川)	5. 1
	社屋落成記念運動会(宜寧)	4. 30
	忠南少年庭球大会(大興)	6. 12
	第2回全仁川少年野球大会(仁川)	6. 26
	蔚山市民運動会(蔚山)	10. 16
	第5回畿湖庭球大会(安城)	10. 16
	7郡連合個人庭球大会(伊川)	10. 30
1928年	第3回全朝鮮水上大会(平壤)	1. 28
	第3回全仁川少年野球大会(仁川)	6. 3
	平康脚戯鞆大会(平康)	6. 22
	始興鞆大会(始興)	6. 22
	男女共同鞆大会(善山)	6. 22
	第1回始興個人庭球大会(始興)	6. 24
	南朝鮮個人庭球大会(馬山)	7. 7
	慶南庭球・蹴球大会(丹城)	7. 28~29
	第1回慶北個人庭球大会(軍威)	8. 4~5
	第4回南鮮庭球大会(永同)	8. 5
	第1回東北庭球大会(高城)	8. 11~12
	第6回畿湖庭球大会(安城)	8. 19
	金泉脚戯大会(金泉)	9. 3~9
	国境個人庭球大会(新義州)	9. 16
	西朝鮮個人庭球大会(肅川)	11. 25



年	大会名	日程
1929年	第1回中朝鮮水上競技(清州)	1. 20
	南朝鮮個人庭球大会(南海)	3. 24
	全朝鮮弓術大会(裡里)	4. 12~13
	第同連合大運動会(斧山)	5. 16
	全黃州個人庭球大会	5. 26
	第2回始興鞞韃大会(始興)	6. 11
	漢江鞞韃大会(始興)	6. 16
	支局設置5周年記念全朝鮮弓術大会(龍仁)	6. 29~30
	第1回關北個人庭球大会(新興)	7. 21
	第1回全朝鮮個人庭球大会(宣川)	7. 25~26
	南朝鮮庭球大会(蘆水)	8. 2~4
	鮮滿個人庭球大会(安東縣)	8. 18
	第1回全朝鮮弓術大会(清州)	8. 21~22
	全公州脚戲大会(公州)	8. 27
	第1回全朝鮮個人庭球大会(定州)	8. 31~9. 1
	第2回慶南庭球大会(丹城)	9. 20
	蔚山市民陸上競技大会(蔚山)	11. 2
1930年	第7回金泉脚戲大会(金泉)	7. 21~27
	第3回全伊川個人庭球大会(伊川)	10. 5
	南朝鮮個人庭球大会(江景)	10. 5
1931年	黃州水上競技大会(黃州)	1. 25
	全朝鮮個人庭球大会(安州)	8. 8~9
	第4回東北庭球大会(高城)	8. 9
	第2回北朝鮮蹴球大会(三防)	8. 12
	第1回南朝鮮個人庭球大会(順天)	8. 15
	第1回南朝鮮個人庭球大会(善山)	8. 16
	第3回慶北個人庭球大会(軍威)	8. 22~23
	安淮個人庭球大会(新高山)	8. 23
	第1回南朝鮮庭球大会(兵營)	8. 23~24
	第1回南朝鮮庭球大会(倭館)	8. 25
	第1回忠清庭球大会(忠州)	9. 13
	北朝鮮蹴球大会(雄基)	9. 19~20
	南朝鮮シルム大会(統營)	9. 30
	第8回金泉脚戲大会(金泉)	9. 30
	全朝鮮弓術大会(伽耶)	10. 23
1932年	全朝鮮弓術・脚戲・擲柶大会(汶川)	4. 28
	忠州市民大運動会(忠州)	5. 8
	第4回星州市民大運動会(星州)	5. 8
	全朝鮮男女自転車競技大会(開城)	5. 14~15
	銀盃爭奪全江華卓球大会(江華)	5. 15
	第6回蔚山市民大運動会(蔚山)	5. 22
	南朝鮮個人庭球大会(南原)	6. 7~8
	雄基市民大運動会(雄基)	6. 8~10
	第1回中部朝鮮庭球大会(清州)	6. 26
1933年	第1回南朝鮮庭球・蹴球大会(陝川)	8. 12
	慶南蹴球大会(文山)	8. 13~14
	南朝鮮庭球大会(倭館)	8. 13
	第1回全洪原庭球大会(洪原)	8. 13
	忠清庭球大会(忠清)	8. 13
	第3回南朝鮮個人庭球大会(倭館)	8. 13
	南朝鮮庭球大会(長水)	8. 13~14
	第1回水泳大会(莞島)	8. 20
	南朝鮮個人庭球大会(扶安)	8. 26~27
	第7回忠南庭球大会(唐津)	8. 27
	全宣川・全定州庭球模範對抗競技大会(宣川)	8. 27
	第3回南朝鮮個人庭球大会(兵營)	8. 27

年	大会名	日程
	全朝鮮個人庭球大会(東萊)	9. 3
	第2回湖南脚戲大会(木浦)	10. 5~8
	第1回北朝鮮間島蹴球大会(滿州安東)	10. 8
	第1回西朝鮮自転車大会(黃州)	10. 8
	第2回忠清野球大会(忠州)	10. 22
	第2回中朝鮮軟式野球大会(礼山)	10. 22
	北朝鮮蹴球大会(明川)	11. 11~12
	第1回南朝鮮野球大会(清安)	11. 11~12
	清州拳闘大会(清州)	12. 3
1934年	第3回黃州水上競技大会(黃州)	1. 5
	星州市民大運動会(星州)	5. 4
	忠南一週自転車探勝団(礼山)	5. 7~11
	男女市民大運動会(統營)	5. 20
	第2回關東蹴球大会(春川)	5. 27
	安州市民運動会(安州)	6. 5~8
	個人庭球大会(沙里院)	6. 24
	寧塞個人庭球大会(大館)	7. 21
	第5回湖西蹴球大会(礼山)	7. 22
	第3回全江華個人庭球大会(江華)	8. 19
	平北個人庭球大会(中台)	8. 26
	忠南庭球大会(唐津)	9. 2
	國境蹴球大会(新義州)	9. 15~16
	第2回湖南庭球大会(江景)	9. 16
	南朝鮮野球大会(清安)	10. 13
	中朝鮮軟式野球大会(礼山)	10. 17
	第2回中朝鮮庭球大会(清州)	10. 21
	市民大運動会(倭館)	11. 3
	第1回咸南蹴球大会(新興)	11. 3~4
1935年	市民大運動会(高興)	4. 28
	第7回星州市民大運動会(星州)	5. 5
	第2回咸南蹴球大会(新興)	5. 12
	全昌原蹴球大会(鎮海)	5. 19
	創刊15周年記念西朝鮮蹴球大会(瑞興)	6. 29~30
	第2回個人庭球大会(沙里院)	7. 7
	第6回湖西蹴球大会(礼山)	7. 20~21
	第7回中朝鮮庭球大会(礼山)	7. 21
	湖南蹴球大会(海南)	8. 3~4
	全慶尚個人庭球大会(蔚山)	8. 4
	第1回全朝鮮個人庭球大会(球場)	8. 10
	第3回中朝鮮軟式野球大会(礼山)	8. 11
	南朝鮮個人庭球大会(倭館)	8. 11
	第1回南朝鮮蹴球大会(順天)	8. 13~14
	全利原団体庭球大会(利原)	8. 18
	第5回全江華個人庭球大会(江華)	8. 18
	支局新築落成記念南朝鮮蹴球大会(蘆水)	8. 18~19
	第3回咸南蹴球大会(新興)	8. 25
	南朝鮮シルム大会(公州)	9. 13~15
	第1回關北個人庭球大会(咸興)	9. 24
	第1回全朝鮮個人庭球大会(白川)	10. 6
	第1回北朝鮮蹴球大会(古茂山)	10. 27
1936年	第1回關北水上競技大会(清津)	1. 25
	第1回金浦郡蹴球大会(陽谷)	3. 8
	星州市民運動会(星州)	4. 26
	欲知島民大運動会(欲知島)	5. 10
	第2回國境蹴球大会(茂山)	5. 23~24
	第1回全朝鮮鞞韃大会(兼二浦)	5. 31

年	大会名	日程
	第1回南朝鮮卓球大会(晋州)	6. 7
	第1回全朝鮮個人庭球大会(汶山)	7. 12
	第2回西朝鮮蹴球大会(瑞興)	7. 18
	個人卓球大会(進永)	7. 19
	南朝鮮拳闘大会(珍島)	7. 25~26
	納涼海水浴団(公州)	8. 1~3
	第4回中朝鮮軟式野球大会(礼山)	8. 9
	第1回秋花庭球大会(青丹)	8. 9
	第1回全安岳個人庭球大会(安岳)	8. 15
	第1回南朝鮮蹴球大会(淳昌)	8. 18~19
	第10回忠南個人庭球大会(唐津)	8. 23
	第6回全江華個人庭球大会(江華)	8. 30
	第2回北朝鮮蹴球大会(古茂山)	8. 30
	第2回慶南庭球大会(蔚山)	8. 30
1937年	第4回男女鞞毬大会(群山)	6. 13
	第2回全清津婦人幼稚園連合大運動会(清津)	7. 11
	第1回黄海少年・青年蹴球大会(水橋)	7. 11~12
	東京留学生軍・光州代表対抗野球大競技(光州)	7. 13
	第3回沙里院個人庭球大会(沙里院)	7. 18
	第2回南朝鮮卓球大会(晋州)	7. 18
	第6回全會率団体対抗庭球大会(會率)	7. 18
	城大対黎明俱樂部蹴球競技(清州)	7. 20
	留学生歓迎蹴球戦(車輦館)	7. 24
	第2回慶南庭球大会(蔚山)	7. 25
	第2回全安岳個人庭球大会(安岳)	7. 25
	第11回忠南個人庭球大会(唐津)	8. 8
	第2回開北個人庭球大会(咸興)	9. 23
	漆谷郡軟式野球大会(倭館)	11. 7
	全慶津庭球大会(慶津)	11. 7
1938年	第1回江原道水上競技大会(春川)	2. 6
	第2回漆谷郡軟式野球大会(倭館)	4. 29
	南朝鮮蹴球大会(興海)	5. 15
	第1回咸州少年野球大会(西湖)	5. 28~29
	第3回男女鞞毬大会(江景)	6. 2
	大杏釣魚大会(大杏)	6. 5
	南朝鮮個人庭球大会(青陽)	6. 26
	第1回中朝鮮庭球大会(抱川)	7. 3
	第3回南朝鮮個人卓球大会(晋州)	7. 3
	全朝鮮蹴球大会(青陽)	7. 30~31
	第2回個人庭球大会(枇峴)	7. 30
	海雲台海水浴団(蔚山)	8. 7
	個人庭球大会(永平)	8. 7
	大川海水浴団(輪山)	8. 7
	第1回南朝鮮蹴球大会(浦項)	8. 13~14
	第1回全奉化庭球大会(奉化)	8. 21
	第1回東萊軟式野球大会(東萊)	8. 28
	第3回漆谷郡内野球大会(倭館)	9. 24~25
	第7回全江華個人庭球大会(江華)	9. 25
	第5回南朝鮮野球大会(清安)	10. 30
	第1回全奉化庭球大会(奉化)	10. 30
	東萊女子大運動会(東萊)	11. 6
1939年	第4回開北水上大会(清津)	1. 29
	第1回江陵水上大会(江陵)	1. 29
	第1回老童野球大会(馬山)	4. 2
	全朝鮮男女自転車競技大会(公州)	4. 26
	第2回全慶北蹴球大会(興海)	6. 18

年	大会名	日程
	金剛山蹴球大会(金剛)	6. 24~25
	第2回咸州少年野球大会(西湖)	6. 25
	5郡連合庭球大会(忠州)	7. 23
	第7回全朝鮮軟式野球大会(礼山)	7. 23
	東京白友対長箭庭球大会(長箭)	7. 24
	東京在学生対元山軍籠球戦(元山)	8. 2
	新興対元山軍籠球戦(元山)	8. 3
	第1回水泳講習会(仁川)	8. 11~20
	第2回南朝鮮蹴球大会(浦項)	8. 12~13
	第2回全朝鮮蹴球大会(青陽)	8. 19~20
	第3回全朝鮮個人庭球大会(枇峴)	8. 19
	第2回南朝鮮庭球大会(陝川)	8. 20
	第2回全東萊軟式野球大会(東萊)	8. 20
	第8回全江華個人庭球大会(江華)	8. 20
	第4回北朝鮮個人庭球大会(咸興)	10. 7
	全朝鮮シルム・クネ大会(黃州)	10. 22~24
	第1回中朝鮮蹴球大会(仁川)	10. 28~29
	第1回北朝鮮卓球大会(西湖津)	11. 12
	蔚山市民大運動会(蔚山)	11. 12
	全三陟対抗野球大会(三陟)	11. 18~19
1940年	第3回全榮州水上競技大会(榮州)	1. 3
	第5回開北水上大会(清津)	2. 4
	第4回全金浦蹴球大会(陽谷)	3. 23~24
	創刊20周年記念国境蹴球大会(茂山)	4. 20~21
	脚戯・鞞毬大会(順安)	5. 15~16
	第4回朝・滿蹴球大会(新義州)	5. 18~19
	第4回全朝鮮弓術大会(温陽)	5. 20~22
	脚戯・鞞毬大会(邯鄲)	6. 10
	第2回中朝鮮蹴球大会(仁川)	6. 22
	第1回全朝鮮男女自転車大会(江景)	6. 22~23
	第3回南朝鮮庭球大会(陝川)	7. 28
	第3回咸州少年野球大会(西湖津)	7. 30
	蹴球大会(浦項)	8. 10
	俗離山探勝記念軟式庭球大会(報恩)	8. 11

※『東亞日報社史 第1巻』pp.454-475より作成。漢字の旧字体は常用漢字をあて、また韓国語のものは適宜、日本語に改めた。

植民地期における東亜日報社の文化事業は大きく2つに分けることができ、ひとつが学芸分野における文化事業、もうひとつが体育・スポーツ分野における文化事業であった。

東亜日報本社が主催したスポーツ事業を確認すると、全朝鮮女子庭球大会、4倶楽部野球連盟戦、全朝鮮氷上大会、全朝鮮水泳競技大会、京永短縮マラソン大会が挙げられている<sup>13</sup>。また体育団体の組織に積極的に支援をした例として朝鮮体育会の設立後援も重要な事業のひとつであったと考えられる。さらに表3のようにスポーツ事業を一覧としてしてみるとシルムや鞞韃などの民族的なスポーツも多く後援している事実が確認される。

そのため以下では東亜日報社とスポーツの代表的な活動として挙げられる朝鮮体育会の後援、全朝鮮女子庭球大会の主催に着目しながらその実態を明らかにし、また民族的なスポーツを振興している点についても考察していく。

#### (1) 朝鮮体育会の設立後援

朝鮮体育会は現在の大韓体育会の前身とされる。この体育組織が結成される背景として①文化政治への転換、②朝鮮体育協会の結成、③東京留学生らのスポーツ活動の3点が挙げられよう。

まず文化政治への転換は、それによりそれまでの武断政治では禁止されていた言論・集会・出版が認められ、東亜日報社の設立も朝鮮体育会の設立もこの政策転換に付随して成立したということが言える。また②は朝鮮体育会を組織するときに朝鮮民族を主体にした場合の外的要因であり、③は内的な要因として位置づけられる。それは以下のような文章から確認されよう。

韓日合邦にしたがい結社禁止令によって存在した団体まですべて解体された条件下にあり、そのうえ在韓日人たちの活動として1919年2月には日本体育協会の支部形式で朝鮮体育協会が組織されたことはさらに刺激を与えられ、また一方で我が東京留学生たちの活動が本国にまで影響を及ぼし、各種運動競技がそれなりに成長をみせるようになったのである<sup>14</sup>。

上記のような状況を背景に50余名からなる体育会発起人会が発足、そのなかから創立準備委員が10名選出されるが、こうした動きの当初から東亜日報社は後援・協力をしていたとされる。このとき選出された創立準備委員の10名をみると、尹冀鉉、邊鳳現、元達鎬、李東植、金丙台、李重国、劉汶相、

<sup>13</sup> 東亜日報社編『東亜日報社史 巻一』東亜日報社、1975年、pp.454-456.

<sup>14</sup> 東亜日報社、前掲書、pp.192-193.

李源容、金東轍、金圭冕<sup>15</sup>という人々であった。

このなかで尹冀鉉と邊鳳現は既述した大韓興学会の野球部のメンバーとして母国での訪問競技を行ったことがあった。また邊鳳現は東亜日報の記者でもあり、1920（大正9）年4月10日から東亜日報に「體育機関の必要を論ずる」という論説を3度に亘り連載するなど体育会を組織するために活発な動きをみせてもいた<sup>16</sup>。李重国、李東植、元達鎬、金丙台らは何れも日本への留学経験があり<sup>17</sup>、留学時代からの繋がりや留学時ならびに帰国後のスポーツ経験などが準備委員に選出された理由であろう。

その後、発起人の署名活動を教育機関、社会有志、競技関係者を中心に進め、90余名の発起人を集めるに至る。その大半を薦挙したのが当時東亜日報主筆であり、金性洙の盟友でもある張徳秀であったことは特筆すべきことである<sup>18</sup>。

このときの発起人の名簿からはこの内13名が東亜日報関係者であることが確認され<sup>19</sup>、朝鮮体育会設立への後援・協力の実際を裏付けるものであると言える。そのなかに金性洙と張徳秀の名前も見受けられる。

また張徳秀は1920（大正9）年7月13日の東亜日報社説に「朝鮮体育会に対して」という記事を書いており、その内容は当時の朝鮮人知識人らの身体観が現れている点で非常に興味深い。副題は「民族の発展は健全な身体から」とされ、西洋における文化の発達と身体の発達とが同列に置かれ、朝鮮民族のそれとの比較から、朝鮮社会の発達を促すために身体の発達向上の必要性が語られている。体育会設立はその方策の一環として論じられたのである。以下に体育会について述べた部分のみをみてみよう。

此れを回復して元氣を作興し身體を得達するをもって社會の發展と個人の幸福を企圖すれば、その途ただ體育を獎勵し天賦の生命を身體に暢達する外に他途が無く、大概體育の獎勵と道德の刷新が合一するところの理由は如何なるものか。體育の本意は自然の法則と原理にしたがい自然の生

15 大韓體育會編『大韓體育會史』大韓體育會、1965年、pp.67-68.

16 東亜日報社、前掲書、p.193.

17 大韓體育會、前掲書、pp.66-67.

18 大韓體育會、前掲書、p.68.

19 東亜日報関係者の13名は以下の通りである。

金東轍（東亜日報 記者）、金明植（東亜日報 論説委員）、金性洙（東亜日報）、邊鳳現（東亜日報 記者）、徐相日（東亜日報 大邱支局長）、宋濟元（東亜日報 新義州支局長）、安熙濟（東亜日報 釜山支局長）、李相協（東亜日報 編集局長）、李昌錫（東亜日報 宣川支局長）、張徳秀（東亜日報 主筆）、秦學文（東亜日報 政経部長）、河相勳（東亜日報 仁川支局長）、韓基岳（東亜日報 記者）大韓體育會、前掲書、pp.69-70.

命を發揮することにある。故に安逸と虚偽と貧を掃蕩するのにこの元氣を作興する所以となる。または道德を一新する理由である。道德が高潔であるならば人生が明明となり、知識に對して絶に聰明を發揮しうるが、これは實に體育が個人の身體の發達と國家社會の健康に關するのみにあらず、あるいは一般文化増進に對して深甚たる意義が有った所以である。これは體育會の文化的価値である。

在来朝鮮社會に個々の運動團體が無かったことはない。しかしこれを後援して獎勵し、聯絡する社會的統一的機關の缺如は現今國際聯盟の規約で世界人民の健康増進を規定し、世界的競技大會が年年到處で開催される此時に當りて、個個吾人の遺憾のみにあらず、實に朝鮮民族團體の一大羞恥である<sup>20</sup>

上記にみられる身體觀や認識は朝鮮人知識人らが朝鮮社會の近代化を志向するなかで、自らの民族の劣等性を打破していく力を体育・スポーツにも求めていたことを知らしめてくれる<sup>21</sup>。またオリンピックのように國家の代表選手を送るような大會の存在が發展した國家の象徴として受け止められていたことも理解されよう。

ともあれこうして設立に至った朝鮮体育會であつたが、その初代会長は張斗鉉が就任し、理事長には高元勳が就任している。因みに上記の記事を書いた張徳秀は理事のひとりとして理事陣に名を連ねている。

會長となつた張斗鉉という人物の詳細は分からないが、東亜日報社の幹部らが彼を會長に強く推したとされる。当時彼は東洋物産株式会社の社長であり、また金性洙の經營する京城紡織の監査役でもあつた<sup>22</sup>。1921（大正10）年9月に東亜日報社が「株式会社」としてスタートし、宋鎮禹が社長に就任した時に

<sup>20</sup> 『東亜日報』1920年7月13日付。

<sup>21</sup> 醫師であつた金基英も「朝鮮人體育に對する管見」という寄稿記事中で個人の身體の發達と國家・社會の發展とを結びつけて體育の重要性を説いている。そのための提言として「一、中央體育協會を設立する事 二、目的體育の發達増進を評り且體育思想の宣傳」としており、朝鮮体育會のようなスポーツを統率する團體の必要性を述べていた。

金基英「朝鮮人體育에對한管見」『서울』제3호、漢城圖書株式会社出版部、1920年、pp.73-74.

<sup>22</sup> 1919年10月に京城紡織株式会社の創立總會が開かれ、幹部らが選出されたが、そのときの監査役については「仁村よりも年長で財力のある人物たち」であつたとされている。このことから当時張斗鉉が植民地朝鮮の社會で非常に力のある人物であつたことが窺える。仁村紀念會編『仁村金性洙傳』仁村紀念會、p.164.

は取締役のひとりとして金性洙とともに名を連ねてもいる<sup>23</sup>。こうしたことから金性洙や東亜日報の幹部らと非常に近い人物であったことが確認される。

以上のように朝鮮体育会の設立に東亜日報社が深く関与しており、体育会設立の原動力となった人々の多くが日本での留学経験をしていたことが分かった。そのためこの時期のスポーツに関する情報は日本で得たもの、日本で経験したものが多く伝えられ、東亜日報社の後援を受けた朝鮮体育会はそうした当該期のスポーツ情勢を民族に組み込んで伝播させていく役割を担ったのだと言える。



写真 2. 鍾路にある東亜日報社② (筆者撮影)

最後に朝鮮体育会の有した性格について少し触れておきたい。朝鮮体育会は1938年7月に解散させられ、朝鮮体育協会に吸収合併されるまで18年間その活動を継続し、組織を存続させている。その活動は朝鮮半島における民族のスポーツ文化の発展・振興に寄与してきたとされる。それは当時の朝鮮人知識人らが直接この組織に関与してきたこととも無関係ではないだろう。当該期における歴代会長、乃至は委員長をみると表4のようになる。

歴代	氏名	期間
第1代	張斗鉉	1920.7.13~21.7.22
第2代	高元勳	1921.7.23~23.7.22
第3代	崔麟	1923.11.28~24.6.24
第4代	朴昌夏	1924.7.1~24.11.12
第5代	李東植	1924.11.13~25.3.29

<sup>23</sup> 東亜日報社、前掲書、p.411.

第6代	金圭冕	1925.3.30~25.9.10
第7代	申興雨	1925.9.11~27.7.14
第8代	兪億兼(1期目)	1927.7.18~28.8.17
第9代	尹致昊	1928.8.18~37.7.2
第10代	兪億兼(2期目)	1937.7.3~38.7.3

表4. 朝鮮体育会の歴代会長(1920-1938)

(典拠: 大韓體育會編『大韓體育會史』pp.65-128)

表にみられるように、植民地時代の有名人士が体育会の会長に名を連ねていることが分かる。ただ当該社会において非常に影響力を有した彼らは皇民化政策のなかで対日協力を行ったとして解放後の社会では断罪される対象となっている事実を確認しておく必要がある<sup>24</sup>。またこうした点についてはスポーツ関係の研究では触れられてこなかった。

朝鮮体育会それ自体は解散させられるまでの間、スポーツによる近代的な価値観の付与、あるいはそれによる植民地社会の近代化に関して一定の役割を果たしてきたと考えられるが、それを担った人々が植民地権力と結びつきやすい状況にあったことはこれらの活動が植民地権力に回収されやすいものであったと換言されうる。こうした観点に立つとき当該期のスポーツ状況が民族の抵抗や発展としてのみ語られるのではなく、そうした抵抗・発展を主唱していくことが朝鮮人知識人らの民族内でのヘゲモニー形成にも関係しており、植民地権力との駆け引きと同時に民族内での駆け引きも存在していたであろうことが推察される。この点は今後検討の余地を残す部分でもある。

## (2) 全朝鮮女子庭球大会の主催

東亜日報社の主催で行われたスポーツ大会のなかでも全朝鮮女子庭球大会は近代的な女性観をスポーツを通してプロパガンダしていったという点で重要である。

朝鮮半島におけるそれまでの女性観は儒教的な価値観と旧来の家父長制が強く影響していた。そうした価値観や制度は女性の社会進出を妨げる要素となっていたため、女性の「解放」が朝鮮人知識人らによって推進されることになる。このことは朝鮮社会における近代的価値観を敷衍しようとする試みのひとつであったと言えるだろう。

<sup>24</sup> 兪億兼、尹致昊、崔麟、高元勳らは対日協力者として名が挙げられる知識人である。林鍾国著、『親日派』反民族問題研究所、1992年、pp.241-375。

先に朝鮮体育会についても記事を書いていた張徳秀は同年9月に「婦人解放論」という論文を雑誌に掲載しており、女子教育の振興とともに社会改革の必要性を訴え、女性解放の羈絆となっている社会制度の見直しを論じていた<sup>25</sup>。こうしたことから東亜日報社が近代的な女性観を朝鮮社会に啓蒙していかうとしていたことが分かる。

こうした志向の下で東亜日報社は女子の庭球大会というスポーツイベントを準備していくことになったのであるが、当該期の価値観を転換させていくのは容易なことではなかった。このときの事情を以下にみてみよう。

當時であっても女性の公開場所の出入が禁忌されていたように儒教の因習がまだ根深く打ちこまれていた時である。本社の女子庭球大会はその隘路も並大抵でなく、手續節次もかなり面倒で今考えても今昔の感がある。この大会を開くため本社は事前に關係體育人と女學校當局と協議を重ねたすえに漸くその開催を決定することとなったがその決定に再び學兄と任員以外の一切の男性は入場を不許するという条件が付けられたのである<sup>26</sup>。

このように女性が人前でスポーツをするということには関係者らの払拭し切れない抵抗感があったのである。しかし、それでもこうしたスポーツ大会の開催は「当時の社會環境では一大勇斷が必要だったのであるが、この大会は體育それ自體にも意味ある大会だったのは勿論である。女性の社會的地位向上のための啓蒙という意味でも劃期的な事業だった」<sup>27</sup>とされているようにこの大会が女性解放に繋がる価値観を備えていたことが重要であり、単にスポーツを楽しむというような牧歌的な観点から開催されたのではなかったことを窺わせる。

こうして全朝鮮女子庭球大会は1923(大正12)年6月30日に初めて開催されるに至った。以後、植民地期では1939(昭和14)年まで17回に亘って開催されることになる<sup>28</sup>。他のスポーツではなく「庭球」を選んだ理由としては「庭

---

<sup>25</sup> 張徳秀「婦人解放論」『共濟』第1号、조선노동공제회、1920年、pp.87-93.

<sup>26</sup> 東亜日報社、前掲書、p.192.

<sup>27</sup> 東亜日報社、前掲書、p.192.

<sup>28</sup> 金性洙や宋鎮禹は東亜日報社の社長在任期間にこの大会に大会長として参加している。例えば金性洙は1925年の第3回大会に大会長として開会の辞を述べており、宋鎮禹は1931年の第9回、1932年の第10回、1935年の第12回大会で大会長を務めていたことが確認できる。大韓體育會、前掲書、pp.166-168.



球の競技は女子の體質に最も適當であり、またこの庭球の最初起源が實にその字義の如く一家の家庭を中心にした庭園の遊戯から發した沿革を思うと庭球こそが女子獨特の運動である」<sup>29</sup>とされていることから、当時のスポーツのなかでも庭球が女性に最も適したスポーツであると考えられていたことに起因する。

この大会へ参加していたのは朝鮮半島の女学校に所属する学生らが主体であった。例えば第1回大会の朝鮮人女学校をみると、淑明、貞信、進明、京女高、同徳、培花、永明、好壽敦という8校が参加しており、日本人女学校は一高、二高、演習科の3校が参加していた。このように朝鮮人、日本人ともに参加してはいたが当初は日本人学生の技術が高かったために大会は一部と二部に分けられ、一部では朝鮮人学校8校による団体戦がトーナメント方式で行われ、二部では日本人学校3校による団体戦がリーグ戦方式で行われている。こうした競技の方式は1927（昭和2）年の第5回大会まで継続され、それ以後は両女学校を合わせたトーナメント方式のゲームとなっていく<sup>30</sup>。

またこの大会が如何に衆目を集めたかについては第1回大会の観衆らの状態から推しはかれよう。『大韓体育会史』には「人波は貞洞一帯を埋め、収容能力四千名しかない同校校庭だけでは到底競技進行が困難であり、隣近の佛教中央布教室と普成初等學校の丘を借りて観覧席を用意せねばならなかった」<sup>31</sup>とあり、人々がこの庭球大会を見るために会場に殺到していたことが分かる。

ともあれこうして継続開催されていった女子の庭球大会は女性の体育・スポーツの社会的関心を高めた点で非常に評価される。それは東亜日報社のそもそもの目的であった「当時の儒教的社会におかれていた女性スポーツを一般に公開し、朝鮮の女性に対して体育・スポーツを奨励し、女性の健康増進及び女性スポーツの底辺拡大を図る」<sup>32</sup>ことが実現をみたということになるだろう。

こうした全朝鮮女子庭球大会に代表される女性の体育・スポーツの流れは1930年代になると顕著なものになってきた。まず1930（昭和5）年に朝鮮半島における女子体育の普及を目的に朝鮮女子体育奨励会が組織され、翌年の2月には初めての女子体育奨励講演会が東亜日報社学芸部の後援で開催されている<sup>33</sup>。これは女子のスポーツ大会のようなパフォーマンスを主にしたイベントとは別に、女性の体育・スポーツに対して理解の深化を促す活動の始まりであ

<sup>29</sup> 『東亜日報』1923年6月30日付。

<sup>30</sup> 李吉用「女子庭球十年史」『新東亜』第2巻9号、東亜日報社、1932年、pp.131-140。

<sup>31</sup> 大韓體育會、前掲書、p.165。

<sup>32</sup> 南宮吟皓「日本統治期朝鮮における東亜日報社主催女子庭球大会（1923-1939）に関する研究」『スポーツ史研究』第13号、スポーツ史学会、2000年、pp.36-37。

<sup>33</sup> 『東亜日報』1931年2月24日付。

ったとみられる。また同年 11 月には朝鮮体育研究会の主催、東亜日報社の後援により、第 1 回体育講演会が催されているが、そのテーマのひとつとして「女子の体育について」という演題で梨花女子専門学校の金信實が講演をしており<sup>34</sup>、これらから女性の体育・スポーツに対して専門的な見識をもった人々が育ってきていたことも窺わせる。

このように多くの朝鮮人知識人らのアリーナとして機能していた東亜日報社は近代的な価値観を先取りし、植民地権力の枠内で可能な民族への啓蒙活動を行っていった<sup>35</sup>。そのひとつが体育・スポーツを通じて近代的な女性観を朝鮮社会に敷衍させ、女性の身体を近代的な身体へと導いていくことだったのである。

### (3) 民族スポーツの振興

東亜日報社は庭球・野球・蹴球などの他にシルム（脚戯）や弓術、また鞞（ブランコ）などの民族スポーツの大会なども多く主催・後援している。これは表 3 にもみられる通りである。

こうした朝鮮民族の年中行事に組み込まれていた身体文化をスポーツ大会として振興していこうとしていた点は東亜日報社のスポーツ事業の特徴のひとつでもある。

例えば民族の伝統的な身体文化であるシルムの振興を目的に朝鮮シルム協会が 1927（昭和 2）年に発足しており、さらに YMCA が主催となって全朝鮮シルム大会が同年 12 月に開催されている。その後援を請けおったのが東亜日報社の運動部であった。12 月 19 日付の東亜日報には「第一回朝鮮シルム大会」と題して社説が掲載されているが、その社説からも分かるように「朝鮮一般民衆の間に新式の運動競技によらずとも我々が我々の身體を鍛錬する機会をもって」<sup>36</sup>いることをこうした大会によって広く知らしめることになったのである。またこの社説は以下のように締め括っている。

日本にあってはこの相撲（シルム）を彼らの國技として特別に盛大に興行しているが、決して日本の獨特なる國技ではなく、我々朝鮮にもずっと以前から存在してきており、各にその特點を發揮し互いに競争することもあ

<sup>34</sup> 『東亜日報』1931 年 10 月 29 日付。

<sup>35</sup> 金性洙、宋鎮禹らは民族主義を標榜してこれらの活動を行っていたが、現代において彼らは「妥協的民族主義者」と呼ばれ、文化政治期の植民地支配体制のなかで政治運動ではなく文化運動を、独立運動ではなく自治運動を選択していったことが親日的な行為であるとも言われる。

<sup>36</sup> 『東亜日報』1927 年 12 月 19 日付。

ったのである。こうした意味にあって我々は今番の第一回朝鮮シルム大會を歓迎し、これが今後において回数を重ねていく間にさらに特別なその技術を錬磨し、一種の特殊性と深遠味をもつようになるという運動競技にまで發達進展されることを希望しつつ今回の参加諸選手の健闘を祈る<sup>37</sup>

このように民族的な身体文化の發展を企図してシルム大會などに対して後援していくことも憚らなかつた。伝統的な身体文化を組織化し、さらに競技として發展させていくことは民族の近代化を図っていくことに寄与しうる有効な手段と見なされたのである。このことは伝統的なものを近代化させる、延いては伝統的な民族の価値観を近代化させるという当該期の朝鮮人知識人らの思想とも合致するものであった。

民衆に体育・スポーツを広めていこうとする風潮が強まりつつあったこの時期、特に農村部において体育・スポーツを振興する方策のひとつとして在来のスポーツに関心を向けることも重要であった。

ただこの点については1939（昭和14）年にノルティギ（板跳び）、シルム、弓術などの朝鮮固有競技を正科にしようという動きが日本の側からも出てきており<sup>38</sup>、同様の論理の下で植民地支配に取り込まれる可能性があった点にも注意を払う必要があるだろう。

#### 4. 小括

本研究は東亜日報社のスポーツ事業に着目し、その実態と意味について考察してきた。本研究において明らかになった点をまとめると以下の通りである。

1. 大韓帝国期に朝鮮半島から留学してきた在日留学生らは様々な組織を結成し、それぞれの活動を行っていたが、その活動は大韓興学会の成立に伴い、統合されることになる。大韓興学会では体育・スポーツ活動も行われていたが、その目的は「体育の健全たる技術を通して弱肉強食の競争に打ち勝ちうる能力を育てること」であり、体育・スポーツを通して当該期の状況に打ち勝ちうる韓国青年を育成することだった。

2. 金性洙をはじめ東亜日報グループの中心となる人々は日本への留学を経験している。また彼らが留学しているときの日本のスポーツ状況のひとつの特徴として、スポーツの国際化があげられる。スポーツを通して全世界に自国・自民族の存在を知らしめることができるようになったと考えられ、このことは東

<sup>37</sup> 『東亜日報』1927年12月19日付。

<sup>38</sup> 『東亜日報』1939年3月18日付。

亜日報グループの人々の身体観にも影響を与えた。

3. 東亜日報社は植民地期にスポーツ事業を推進している。その代表的な事業として朝鮮体育会設立の後援、全朝鮮女子庭球大会の主催を行っており、また民族スポーツの振興にも携わっていた。こうした一連のスポーツ事業を通して朝鮮民族に近代的な価値観と民族意識を付与していかうとしたのである。

これらの点を改めて確認すると、金性洙を中心とする東亜日報グループとスポーツの関係は彼らの理想とする「民族」をスポーツを通して形成・象徴していくものであったと言える。

東亜日報グループの人々は妥協的民族主義者としてカテゴライズされるが、それはこうしたスポーツの普及過程を見ても確認されることでもあろう。すなわち彼らの理想とする民族は近代的な身体性を帯びた「民族」であり、それまでの因習に基づく民族観を近代スポーツを通して変換していくことが重要であった。しかし、その近代性への志向は日本を経由して移植されてきたものでもあり、朝鮮総督府が朝鮮半島を近代化させていかうとする時代的流れとも合致することになる。そのため一方で抵抗や民族の発展という意識を持ちつつも、その活動が近代化を志向しているがために植民地権力の向かうベクトルと同じ方向を向いていたことが最大の弱点であり、そもそもそうしたスポーツ活動は植民地権力に回収されやすいなかで展開されていたのだと考察される。

## 第6章 オリンピックと植民地朝鮮

### 1. はじめに

日本が朝鮮半島を植民地とした期間に近代オリンピック競技大会（夏季）は6回開催されている<sup>1</sup>。この6回の大会のうち、第10回大会（ロサンゼルス）と第11回大会（ベルリン）の二つの大会には当時の植民地朝鮮から日本代表として10名の朝鮮人選手が参加していた<sup>2</sup>。日本にとっても朝鮮にとっても国際スポーツの舞台に被支配民族の選手らが参加していることの意義は決して小さくはなかったであろう。とりわけベルリン大会のマラソンで孫基禎によって金メダルが齎されたことは双方にとって大きな意味を持つ。そして、その後の朝鮮半島で起きた日章旗抹消事件。これら一連の事件は恐らく植民地朝鮮のスポーツに関しては最も有名な出来事であった。

オリンピックという国際的な舞台であるからこそ、朝鮮人の知識人層にとってはオリンピックへの参加そのものに価値が見出され、表象される選手らに民族的価値を賦与していこうとした。そうした反応に日本側は孫基禎らをあくまでも日本の代表選手という枠で捉え、朝鮮半島の熱狂に対する警戒・統制へと向かっていったのである。このことはベルリン大会での孫基禎の金メダル獲得が文化政治以降、「内鮮融和」を主張してきた朝鮮半島のスポーツ界にとっては全く逆の機能をなし、国家と民族という双方の乖離した植民地社会の状況を顕在化する役割を果たしたものと捉えられる。

そこで本章では上記のような視点からオリンピックのロサンゼルス大会、ベルリン大会に出場した朝鮮人選手らに着目し、彼らのオリンピック参加の意義を考察するとともに、ベルリン大会で優勝した孫基禎にも焦点を当て、英雄となった「孫基禎」を当該期の植民地社会とスポーツの関係から捉え直し、植民地権力がスポーツ選手とどのような関係にあったのかを明らかにしていく。

### 2. 研究の方法

---

<sup>1</sup> 日本の代表選手が初めてオリンピックに参加したのは1912（大正元）年の第5回のストックホルム大会からであり、既に朝鮮を植民地支配していた時期にあたる。その後1920（大正9）年のアントワープ大会、1924（大正13）年のパリ大会、1928（昭和3）年のアムステルダム大会を経て、朝鮮人選手の参加が確認されるロサンゼルスとベルリンの両大会に参加している。因みに日本で初の金メダルはアムステルダム大会の織田幹雄（三段跳）であり、この大会、日本は水泳の鶴田義行の金メダルと合わせて2つの金メダルを獲得していた。  
<sup>2</sup> 冬季オリンピックにはスケートで金正淵、李聖徳、張祐植の3名が参加・出場しているため総勢は13名ということになるが、ここでは2つの夏季大会に絞ったため10名とした。

## (1) 先行研究について

孫基禎の生い立ち、ベルリン大会での活躍とそれまでの経緯、さらに日章旗抹消事件などについて詳述された著書に鎌田忠良の『日章旗とマラソン』<sup>3</sup>がある。史資料が充実していることに加え、インタビュー調査なども数多くなされて編まれた著書のため、孫基禎のことについて知るには最も良い文献となっている。いくつかの研究論文においても引用・参考されており、本研究においてもその成果に負うところは大きい。しかし、ベルリン大会後の孫基禎のことについては触れられていない部分も見受けられる。そのため本研究においては鎌田によって述べられていない点について当該期の孫基禎の言動や行動を史料により把握し直し、英雄としての「孫基禎」の存在がどのように捉えられていたのかを分析していく。

またその他の研究では孫基禎のベルリン大会での金メダルと日章旗抹消事件を支配－被支配の関係から人権を蹂躪するものとして認識し、人権教育などの教育教材として利用するために研究されているものなどがある<sup>4</sup>。しかしこれらは植民地朝鮮におけるスポーツ史的な視点を有していないため本研究の視角とは一線を画するものとなっている。

日章旗抹消事件については浅野健一の「日帝支配下の韓国の言論－『東亜日報』日章旗抹消事件を中心に－」<sup>5</sup>が挙げられる。この研究は植民地期の朝鮮における言論統制の視角から記述されたものである。日章旗抹消事件が東亜日报社のみならず、朝鮮中央日报社においても起きていたことについて言及している点、また事件を主導した李吉用については彼の息子である李台永氏にインタビュー調査を行うことにより、李吉用の経歴について明確にしている点などは評価できるが、その他の史実については新たな知見は示されていない。また当該事件について朝鮮人側の事件の認識については記述されているが、肝心の植民地権力の側がどのようにこの事件を捉えていたのかについてはほとんど言及されておらず、言論統制を行う側の認識について説明を加える必要があると思われる。

## (2) 史料について

史料については当該期における日本において発行されていた『東京読売新聞』、

<sup>3</sup> 鎌田忠良『日章旗とマラソン』潮出版社、1984年。

<sup>4</sup> 例えば山本典人『日の丸抹消事件を授業する』岩波ブックレットNO.334、1994年。や沢田和明「時代を走らされた長距離ランナーたち－朝鮮半島支配と人権－」平井肇編『スポーツで読むアジア』所収、世界思想社、2000年。など。

<sup>5</sup> 浅野健一「日帝支配下の韓国の言論－『東亜日報』日章旗抹消事件を中心に－」評論・社会科学第55号、1996年。

『東京朝日新聞』などの新聞資料、さらに大日本体育協会が発行していた『アスレチック』、『オリムピック』などの雑誌資料を中心に本研究に関わる朝鮮人選手らに関するデータを収集し、日本の側から朝鮮人選手らがどのように捉えていたのかを分析していく。それに対して当該期における朝鮮側の認識を分析するために用いる史料としては民族主義的な言説が確認される『東亜日報』や『朝鮮日報』などの新聞資料を主なものとし、双方の史料から本研究対象に対する日本側と朝鮮側の言説比較を行っていく。

また本研究対象のなかでも特に孫基禎と南昇龍に関してはベルリン大会後の行動が日本の監視下にもあったため内務省警保局が発行している『特高外事月報』などからその警戒の状況を把握していく。さらに日章旗抹消事件については『緑旗』という植民地朝鮮で発行されていた雑誌のパンフレットや京城地方法院検事局の『思想二関スル情報綴』なども手掛かりにして事件に対する日本側の認識を分析する。孫基禎に関しては彼の自叙伝や当該期に彼が綴った論文、また『京城日報』などの新聞資料からも彼の言動や行動を確認していきたい。

### 3. 朝鮮人選手と二つのオリンピック

植民地期の二つの夏季オリンピック大会に日本代表として出場した朝鮮選手は10名いる。以下の表はその10名の選手一覧と競技種目及び競技結果である。

表1. オリンピック競技大会(夏季)に日本代表として参加した朝鮮人選手

氏名	競技種目	大会(都市名)	競技結果
金恩培	マラソン	第10回大会(ロサンゼルス)	6位
權泰夏	マラソン	第10回大会(ロサンゼルス)	9位
黄乙秀	ボクシング	第10回大会(ロサンゼルス)	1回戦敗退
孫基禎	マラソン	第11回大会(ベルリン)	優勝
南昇龍	マラソン	第11回大会(ベルリン)	3位
金容植	サッカー	第11回大会(ベルリン)	2回戦敗退
李性求	バスケットボール	第11回大会(ベルリン)	3回戦敗退
張利愷	バスケットボール	第11回大会(ベルリン)	3回戦敗退
廉殷鉉	バスケットボール	第11回大会(ベルリン)	3回戦敗退
李奎煥	ボクシング	第11回大会(ベルリン)	敗退

(典拠:大日本體育協會『第十回オリムピック大會報告書』および『第十一回オリムピック大會報告書』)

1932(昭和7)年のロサンゼルス大会には3名の朝鮮人選手が参加しており、競技種目はマラソン2名、ボクシング1名であった。1936(昭和11)年のベルリン大会には7名の朝鮮人選手が参加し、マラソン2名、サッカー1名、バスケットボール3名、ボクシング1名といった内訳になっている。以下ではこうした朝鮮人選手のオリンピックへの参加について考察していく。

### (1) ロサンゼルス大会と朝鮮人選手

植民地期に日本代表として朝鮮人選手が初めて近代オリンピック大会に参加したのは第10回のロサンゼルス大会である。これはこの時期の朝鮮において優秀な競技成績を残すスポーツ選手が出てきていたことを意味する。その典型がマラソンであった<sup>6</sup>。

それではロサンゼルス大会の代表に選ばれたひとり、金恩培はどのような選手だったのか。金恩培は元々トラック競技で好成績を残していた。『アスレチックス』には当時年度別に優秀記録のランキングが出されているが、そのランキングによると1930（昭和5）年には5千m競走において16分36秒6という記録で14位の位置につけている<sup>7</sup>。さらにロサンゼルス大会前年の1931（昭和6）年にはマラソンを2時間34分58秒という記録で走り切っており、この年度の3位にランキングされていた<sup>8</sup>。この頃、朝鮮総督府の鈴木武は金恩培について以下のように評価している。

金君は今京城に在る鮮人の中學校養生高等普通學校の四年生です。今年の神宮競技でマラソンに二着に入つて而も二時間三十四分五十八秒と云ふ日本に於ける第三番目の優秀記録をつくつたので一躍斯界に知れ渡つた人ですが、實は朝鮮内に於いての彼の名聲は昨日今日に始まつたものではないのです。最も彼のマラソンに出場したのは今秋を以て嚆矢とするので従來五千米、一萬米に毎年々々朝鮮の記録を更新して來た人なのです。

（中略）そして明治神宮競技の折は期待をかけながらも未知數、無經驗の事とて彼も監督も全く頭を悩ました。コースに不慣れの事、氣候の異なる事、生活の違ふ事は金君にとつて確かに大きなハンディキャップだつた様です。（中略）實力は決して優勝者に劣つて居るものではなかつたのですから、むしろ若くて充分なる期待を持てる同君の將來を私は囑望して

<sup>6</sup> 植民地期の朝鮮半島でマラソンの強さを見せつけたのは5年ほど遡り1927（昭和2）年の朝鮮神宮競技大会での馬鳳玉だった。第3回の朝鮮神宮競技大会でマラソンが採用され、この大会を制すると、続く1928（昭和3）年の第4回朝鮮神宮競技大会においても優勝。この2つの大会で馬鳳玉はマラソン2連覇を果たしていた。そのため朝鮮マラソン界の先駆けとなった人物だと言っていいだろう。その後金恩培らが続く。『京城日報』1927年10月19日付、同1928年10月17日付。

<sup>7</sup> 全日本陸上競技連盟「昭和五年度陸上競技二十傑」『アスレチックス』昭和6年2月号、大日本體体育協會、1931年、p.80。

<sup>8</sup> 全日本陸上競技連盟「昭和六年度陸上競技十傑」『アスレチックス』昭和7年2月号、大日本體体育協會、1932年、p.118。



居ります。(中略)

金君は今耐久力の養成のために午前の暖かい時間を選んで二回宛アスファルトの道路を走つてゐます。朝鮮の冬は全く内地とは違ひますから來春までに相當考へてやらねばならないと思つて居る次第です。而して來春は更に日本の期待にそふだけの彼に仕上げてお目にかけたいと思つて居ります<sup>9</sup>。

このように金恩培は日本の競技力向上を担うスポーツ選手として期待されていたことが分かる。またこうした言説は朝鮮人選手に対する日本側の認識の在り方を窺わせる。

それではもうひとりのマラソン代表、権泰夏はどうだったのか。金恩培でみた先ほどの年度別のランキングによると 1931 (昭和 6) 年に 1. 万 m 競走で 33 分 16 秒 6 というタイムを出し、その年度の 6 位にランクインしている<sup>10</sup>。しかし、権泰夏が最も良い結果を得られたのは 1932 (昭和 7) 年の第 19 回全日本陸上競技選手権大会、すなわち第 10 回オリンピック大会全日本予選会の時だった。悪コンディションのなか行われた大会だったためタイムはそれほどではなかったが、あらゆる強豪を振り切り、見事 1 位でゴールイン、オリンピック代表の座を手に入れている。朝鮮のスポーツ界で共に陸上競技で活躍していた山根健一は権泰夏がロサンゼルス大会の代表に選ばれたことについて以下のように述べている。

権君と私とは競技種目に於ては異つては居りましたが、お互に缺點に注意し合ひ又激勵もし合ひました。

権君は學校生活六年間本當に恵まれざる選手でした。でも屈することなく只黙々として練習を續け今日の榮譽を克ち得たことは、彼権君の耐ゆまざる努力に依ると信じて居ます。

第二次豫選に於て未経験なマラソンに出場し、古豪津田、高橋及び矢萩鹽飽の強豪を抑へて拍手と喚聲の混卷の中にテープ切ろうとは誰が想像したことだろう。

あの悪コンディションに打ち克つた彼のファイテングは、必ずやロサンゼルス大スタジアムのメインマスト桿頭に日章旗を掲げるであろう。其の

<sup>9</sup> 鈴木武「金恩培君の事ども」『アスレチックス』昭和 7 年 3 月号、大日本體育協會、1932 年、pp.133-134.

<sup>10</sup> 全日本陸上競技連盟、前掲書、p.118.

目を想像すると胸は躍ります<sup>11</sup>。

こうした言説から競技生活のなかで山根と権が互いに尊敬し合う関係であったことが分かる。選手たちにとっては民族という枠に左右されず、仲間としてスポーツを行っていたことを窺わせる事例のひとつだろう。

代表を決定する予選会では権が1位、金が2位、津田が3位となり、この3人がマラソンの日本代表としてロサンゼルス大会に出場することとなったが、上記のような期待とは裏腹に代表となった金恩培と権泰夏は専門家からはそれほど期待されていたわけではなかった。特に予選会で優勝した権は「フロック」だと思われていた節があり<sup>12</sup>、津田晴一郎の引き立て役程度にしか期待されていないようだった<sup>13</sup>。実際のオリンピックでの順位は津田が5位、金が6位、権が9位という結果であった。

## (2) ベルリン大会と朝鮮人選手

1936(昭和11)年のベルリン大会にはロサンゼルス大会よりも参加した朝鮮人選手は増え、7名が大会に参加している。マラソンの孫基禎、南昇龍、サッカーの金容植、バスケットボールの李性求、張利慎、廉殷鉉、ボクシングの李奎煥である。ロサンゼルス大会以降の朝鮮半島におけるスポーツの進展は代表選考にも影響を与えたものと思われる。以下では代表選考を巡るいくつかの事例をみていきたい。

1936(昭和11)年5月にはマラソンの代表選考を決める予選会が行われている。この予選会では南昇龍が1位、孫基禎が2位、3位が鈴木、4位が鹽飽という順位であった。ロサンゼルス大会の予選会での選考の仕方に若干の修正が必要だと考えた陸上競技連盟は3名の代表をオリンピック直前に現地で決定するというイレギュラーな方法を取ることにし、この4名を候補者としてベルリン入りさせることになった。この時の状況は鎌田の『日章旗とマラソン』に詳しい<sup>14</sup>。現地で最終の代表選考を行うことは朝鮮人選手、とりわけ南の猜疑心を掻き立て、決定が下されるまではかなり神経質になっていたようである<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> 大日本體育協會『アスレチックス』昭和7年8月号、大日本體育協會、1932年、pp.63-64.

<sup>12</sup> 鈴木良徳「世界の諸豪に列してロサンゼルスで好調ならば」『アスレチックス』昭和7年7月号、大日本體育協會、1932年、p.59.

<sup>13</sup> ロサンゼルス大会での代表選考の仕方はベルリン大会での代表選考に少なからず影響を与えたものと思われる。

<sup>14</sup> 鎌田忠良、前掲書、pp.217-225.

<sup>15</sup> 鎌田忠良、前掲書、pp.261-264.

しかし南の不安は現地での最終選考の結果により漸く払拭され、孫、南、鹽飽の3名が代表として出場、孫基禎・南昇龍のメダル獲得へと繋がっていく。

ベルリン大会の代表選考において幾分顕在化したのは、朝鮮人選手らの葛藤である。南昇龍が代表に決定するまで神経質になっていたのも、朝鮮人であったからという点に帰する。朝鮮人であるがゆえに選手らはどのようなことを考えねばならなかったのか。バスケットボールには延禧専門学校出身の3名の朝鮮人選手が代表に選ばれていたが、そのひとり廉殷鉉は当時を振り返って以下のように語っている。

ベルリン・オリンピックでは、その代表候補選手に延禧専門から李性求、張利鎮、私の三人が選ばれた。当時の韓国は日本の政治的支配下にあり、日本人でない我々は、韓国元老の方々にその参加可否を打診した。元老連から懇ろに参加を懇請され、盛大な歓送会が何回も開かれた<sup>16</sup>。

スポーツ選手としてはオリンピックという華やかな舞台に立ち、メダルを獲得することが夢であるのは昔も今も変わらない。しかし、当時の朝鮮人選手のなかには「日本代表」を目指しつつ、一方でその立場に引け目を感じているものもあり、民族主義と植民地権力とのせめぎ合いのなかで自身の立ち位置や方向性の判断に迷いが生じていた。その迷いから抜け出すには朝鮮人を代表する知識人層の支持を取り付けること、乃至は後押しを得ることだった。

金容植の場合はどうだったのか。大島の『日韓キックオフ伝説』にはベルリン大会のサッカー代表選手の選考のことについて触れられている<sup>17</sup>。ここでの重要人物は呂運亨である。当時のサッカー界にあって、朝鮮チームの活躍は目を見張るものがあった。ベルリン大会前の日本で開催された2つの大会、全日本選手権大会と第8回明治神宮体育大会で共に優勝を果たしたのは朝鮮から出場していた京城蹴球団であった。朝鮮のサッカー関係者は当然オリンピック代表選手の多数が朝鮮人選手であろうと考えていたが<sup>18</sup>、結果は金容植と金永根の2名のみでの選出であった。朝鮮蹴球協会はそのことについて抗議を行う。その抗議を行ったのが当時朝鮮蹴球協会の会長であった呂運亨である。呂運亨は大日本蹴球協会が朝鮮側の抗議に対して態度を変えないことに懐慨し、金容植

<sup>16</sup> 日本バスケットボール協会編『バスケットボールの歩み 日本バスケットボール協会50年史』日本バスケットボール協会、1981年、P.110。

<sup>17</sup> 大島裕史『日韓キックオフ伝説』実業之日本社、1996年、pp.64-69。

<sup>18</sup> 大島の著書では「大日本蹴球協会からも、朝鮮から七人ほど選抜するという約束があった」とされており、代表選手の多くが朝鮮人になる予定であった。大島裕史、前掲書、p.66。

と金永根の2人の参加を辞退するように促したとされる<sup>19</sup>。それでは金容植と金永根はどのような判断をしたのか。その後の金容植と金永根は以下のような経過を辿ることになる。

“いずれにせよ私と金永根は1936年初め東京に渡り、早稲田大学のグラウンドで3週間訓練を積み、一旦帰国しました。1週間後、最終エントリーが発表されたが金永根は候補に選抜され、私だけ正選手となりました。全くあきれたことでした。当時攻撃の選手としては朝鮮8道と日本全体をくまなく探しても金永根ほどの人材はみつからなかった。ところが彼が落ちてしまい、いくら考えてもやりきれないことでした”

自尊心が傷ついた金永根は候補選手が一体何んだと興奮、これ以上の努力を放棄して平壤に帰ってしまった。問題はひとり残った金容植だった。そんな日本チームに行くことはないという主張とそれでも朝鮮蹴球の名誉にかけて参加しなければならないという主張が重なり合い、蹴球界がうるさくなっていた。(中略)

“結局私は普専蹴球部長の洪性夏教授と法律学の教授玉璿珍先生に相談したところ、先進国の技術を学ばねばならないということで行くことを希望されたんです。それで再び日本に渡っていったのです<sup>20</sup>。”

金容植の証言だと金永根はレギュラーではない補欠選手として扱われることを嫌い、自尊心から代表を辞退したようであるが、日本チームへの不信感と先の呂運亨の言動の影響も無視できない。代表を自ら辞退するということはスポーツ選手としては相当な覚悟であったと思われる。金容植も葛藤の最中にあった。金容植のベルリン大会参加を後押ししたのは金容植が所属していた普成専門学校の教授たちである。

当該期における朝鮮人の知識人ら、なかでも民族主義者らにとって民族の優秀性を示すことは非常に大きな意味があった。廉殷鉉の場合もそうであったが、たとえ「日本代表」だとしても朝鮮民族の優秀さを国際スポーツの場において発揮してくれることが、民族主義者らの論理に適うものだったのである。呂運亨の言動も同様の論理の下でなされていると考えられる<sup>21</sup>。そうした朝鮮人知

<sup>19</sup> 大島裕史、前掲書、p.68.

<sup>20</sup> 윤경헌・최창신 『이야기－한국체육사③』 국민체육진흥공단, 1997年, pp.276-277.

<sup>21</sup> 民族の優秀性を主張することは植民地におかれていた朝鮮人の状況と世界的な傾向、とりわけ優生学との関係は無視できないだろう。植民地朝鮮にお

識人層のスポーツ選手らへの期待はオリンピックへの朝鮮人選手参加を促したものと考えられ、孫基禎のマラソン優勝によって引き起こされた日章旗抹消事件への布石になったものと考えられる。

#### 4. 孫基禎の優勝と日章旗抹消事件

ベルリン大会のマラソンでは孫基禎が2時間29分19秒という記録で優勝を果たし、見事金メダルを獲得する。また南昇龍も3位と健闘し、銅メダルを獲得するなどマラソンにおける朝鮮人選手の活躍は際立っていた。しかし、その後起こったいわゆる日章旗抹消事件は植民地朝鮮の現実を知らしめるものであった。本節では孫基禎のマラソン優勝時の各紙で報道された言説を比較してその特徴を分析し、その後起こった日章旗抹消事件について考察していく

##### (1) 日本と朝鮮にみる報道の特徴と差異

孫基禎がベルリン大会のマラソンで優勝したのは1936（昭和11）年の8月9日のことだった。8月10日の『東京読売新聞』の第2面には「マラソン日本、世界を征服」、「今ぞ成就す二十四年の宿願 孫に輝く“大会最大の覇者”、南も憤走して三等に入賞」という見出しで競技の経過とストックホルム大会以来24年目にして手にした金メダルを称える記事が掲載されている<sup>22</sup>。また10日の号外には競技場に入ってくる孫基禎の写真を掲載し、オリンピック特派員であった西條八十が「我等の英雄！弾丸の如く躍り出た小男」という記事のなかでその時の孫基禎の姿を以下のように語っている。

赫い夕陽は場内に流れ染めた午後五時半十萬の眼は、地下道の口に、磁石のやうに吸ひ寄せられた

その刹那！砲丸のやうに躍り出でた小男！

孫！孫！地下道を走り出て、丘上に燃えるマラソン炬火を仰いだ

小さい彼の身體から、流れた全場を壓する大きな影！

拍手、拍手、歡聲、怒濤のやうな歡聲！

あゝ、誰れか、今日のこの勝利を期待しただろう

---

いては1934（昭和9）年に朝鮮優生協會が朝鮮人医師李甲秀の主導により発足するなどこの時期にその関心の度合いは増していた。さらに1935（昭和10）年には朝鮮優生協會主催、東亜日報社学芸部後援で優生問題大講演会が開催されており、その議題のひとつに呂運亨による「體育と優生」といった講演内容が盛り込まれていたことは體育・スポーツと優生学の関わりを如実に表しているものと思われる。『東亜日報』1935年1月23日付。

<sup>22</sup> 『東京読売新聞』1936年8月10日付。

踊れ！起て！歌へ！日本人！

日本は見せた

けふ明瞭<sup>ハツキ</sup>りみせた

この小男孫のなかに

世界を指導する、躍進日本の勇ましい現在の姿を<sup>23</sup>

このように孫基禎の優勝を世界のなかの「日本」と重ね合わせながら語る論調となっていることに注意したい。

では『東京朝日新聞』はどのように報じていたのか。8月10日の第2面には「マラソン廿四年の宿願成る」、「世界に誇れ！孫選手 見事一着・日章旗輝く 南選手も堂々三着」という見出しで、競技経過の詳細、孫基禎や2位となったハーバーの談話なども掲載している<sup>24</sup>。さらに第11面には孫基禎や南昇龍の母校である朝鮮の養正高等普通学校の安校長が喜びで涙する様子を掲載するなど両選手の地元の声も報道していた<sup>25</sup>。翌日の8月11日の第3面には「半島選手の勝利」という記事が掲載されている。この記事は朝鮮半島に対する日本側の認識を象徴する記事でもあるので以下にみてみたい。

オリンピックの陸上競技は、マラソンの優勝によつて、華々しき幕を閉じたのであるが、その日章旗の掲揚が、半島選手の健闘によつてなされたことは、意義深いと思ふ。それは二十余年の歴史の上に積み重ねられた成績には違ひないが、久しく期待され、幾度か逸せられたマラソン日本の榮冠が、半島の新人選手によつて「日本」の頭上に載せられたことは、何といても、特筆されてよいことである。(中略)

スポーツのみではないが、國際的なるものに對する我國人の關心は、世界の人を驚かすに足るものがある。輝かしき世界記録は、人類の可能の範圍を擴げてゆくことに於て、人類に貢獻する。戦争とスポーツ以外にも、藝術と科學と文化的方面に於ても、來るべき皇紀二千六百年東京大會への四年間に、世界記録への準備をしなければならぬ。内地人と外地人と、心を協せ力を集めて、その偉大なる記念塔を築き上げなければならない<sup>26</sup>。

これらの言説から日本側のメディアが報じた孫基禎優勝の記事の特徴を確認

<sup>23</sup> 『東京読売新聞』1936年8月10日付号外。

<sup>24</sup> 『東京朝日新聞』1936年8月10日付。

<sup>25</sup> 『東京朝日新聞』1936年8月10日付。

<sup>26</sup> 『東京朝日新聞』1936年8月11日付。

すると、まず日本がオリンピックに初めて参加したストックホルム大会以来、悲願のマラソン優勝であったという点が強調されている。次に孫基禎・南昇龍は朝鮮人であり、日本の一地方である朝鮮から代表として活躍し、日本に勝利を齎したことに意義があるという論調になっている。それが当時の植民地朝鮮のスローガンであった「内鮮融和」を象徴するような記事になっている点は重要である。

因みに『東京朝日新聞』には孫基禎の優勝に際して、この年朝鮮総督に赴任したばかりの南次郎の談話も掲載されていたが、この談話はその後の植民地政策を暗示するかのようなものであった<sup>27</sup>。

一方で朝鮮側のメディアは孫基禎と南昇龍の活躍をどのように報じたのか。

『東亜日報』では8月9日に既に号外が発行されている<sup>28</sup>。その見出しには「世界の視聴総集中裡 堂堂、孫基禎君優勝 南君も三着堂堂入賞へ」とあり、孫基禎と南昇龍の順位とタイムが掲載されていた<sup>29</sup>。さらに8月10日の号外には9日の号外の記事に加えて朝鮮人数名の談話が掲載されている。そのなかで当時朝鮮体育会の会長だった尹致昊は「孫君の優勝は二十億の勝利」という見出しで「孫基禎君が優勝したということはすなわち朝鮮青年の未来が優勝したという予言として、或いは活教訓であると固く信じている。我々朝鮮の青年がスポーツを通してとりわけ二十億を相手にして堂堂たる優勝の栄冠を獲得したということはすなわち我々朝鮮の青年が全世界二十億人類に勝利したということである。我々の喜びと感激は衰えることがない」<sup>30</sup>と語っている。さらに8月11日の夕刊には「世界制覇の朝鮮マラソン 孫・南両選手の偉業」という社説が掲載され、そこには「朝鮮の息子である孫南両君は勿論世界に誇るに値する鐵脚も持っているうえに、世界制覇するさらに固い意志を持っているのである。両君の優勝はすなわち朝鮮の優勝であり、両君の制覇はすなわち朝鮮の制覇で

<sup>27</sup> 南次郎は孫基禎と南昇龍の活躍を聞き、「誠にもつて快い話ぢや、儂には専門家のいふ記録のことは解らぬが世界一とは實際素晴らしい、殊に孫君の優勝に續いて南君も三等に入るなどスポーツの世界を離れて考へても非常に意味のある歴史的な大きな仕事だ、両選手の奮闘は一死をもつて軍國に酬ゆる武人の氣魄と同じに評價さるべきもの、誠に貴いことだがこの貴い氣魄は絶えず我々の目の前に露出されゐる、毎日の様に滿洲から傳わる可愛い部下の戦死の報に儂は一つ一つ同じ様に胸を突かれてゐるのだ」と発言している。孫基禎と南昇龍を祝福するというよりは、総督としての自らの立場と考えを牽強しているように感じられる発言であった。この考え方はその後の皇民化政策の展開を予兆させるものでもある。『東京朝日新聞』1936年8月11日付。

<sup>28</sup> 東亜日報社は現地に権泰夏と鄭商熙の2名を特派員として送っていたことから他社に比べて情報をいち早く本社に伝えることができたものと思われる。

<sup>29</sup> 『東亜日報』1936年8月9日付号外。

<sup>30</sup> 『東亜日報』1936年8月10日付号外。

ある」<sup>31</sup>と、尹致昊の談話と同様に民族主義的な論調で社説が記されており、孫基禎と南昇龍のメダルの獲得を朝鮮民族の優秀性へと結びつける言説となっていた。そしてこの11日からは「朝鮮の息子 孫基禎」という特集記事が13日までの3日間に渡って掲載され、孫基禎がオリンピックで優勝するまでの軌跡も伝えている<sup>32</sup>。

当該期の朝鮮を代表するもうひとつの新聞、『朝鮮日報』の場合はどのように報じられていたのだろうか。『朝鮮日報』においては、まず8月11日の第1面に「朝鮮男児の意気 孫基禎の壮拳」という社説が掲載されている。その一部をみると、

我々は今回の孫、南両君の勝利をもって民族的一大榮譽を得ると同時に民族的一大自信を得たのである。即朝鮮のあらゆる環境は不利であっても我々の民族的に受けた天稟は他のどの民族より先行できないようなことはなく、努力さえすればどのようなことであっても成就しうるのである。我々はスポーツにおいて世界の班列に参席する資格を得たうえに我々は今後文化的道徳的その他あらゆる方面にあっても世界的水準に達する日にあることを信じるのである<sup>33</sup>。

と述べられており、朝鮮民族が世界のあらゆる民族に比べても勝るとも劣らない民族であることの証明として孫基禎と南昇龍の活躍を評価している。第2面には「朝鮮の勇名は世界に 偉大なる我々の新英雄 朝鮮青年の新しい歴史を打ち立てる 民族歓喜三千里に充満」という見出しの下で孫基禎と南昇龍の活躍が大きく取り上げられていた<sup>34</sup>。

以上のようにベルリン大会での孫基禎と南昇龍の活躍についての報じ方は日本と朝鮮との新聞メディアの間ではかなりの温度差があった。しかしその差異と特徴からそれぞれの論理や立場が明確に現れてきていることが分かる。朝鮮側の報道に関して付言すれば、『東亜日報』、『朝鮮日報』は検閲を踏まえてか、日本をあからさまに非難・批判する記事は全く見られず、世界的水準に自らの民族を重ね合わせたうえでスポーツにおいてその水準に達してきた朝鮮民族を主張することに終始している。この主張の帰結が恐らくは植民地支配の否定であり、植民地支配からの解放であることは理解できよう。ゆえに彼らの論理の

<sup>31</sup> 『東亜日報』1936年8月11日付。

<sup>32</sup> 『東亜日報』1936年8月11日付、同12日付、同13日付。

<sup>33</sup> 『朝鮮日報』1936年8月11日付。

<sup>34</sup> 『朝鮮日報』1936年8月11日付。



なかでは孫基禎の優勝は「民族」の勝利でなければならなかった。

## (2) 日章旗の抹消

孫基禎のベルリン大会での優勝はこれまでみてきたように日本側と朝鮮側とはその認識に明らかな違いが確認された。とりわけ朝鮮側にみられた民族主義的な傾向は孫基禎のマラソン優勝を巡ってある事件を引き起こす誘因になっていたと考えていいだろう。それがいわゆる日章旗抹消事件と呼ばれる事件である<sup>35</sup>。ここでは事件の概要とその後の展開について以下で確認してみたい。

孫基禎がベルリン大会で優勝した同月25日、東亜日報の夕刊に掲載された表彰台の孫基禎を写した写真には、胸にあるはずの日章旗のマークがなくなっていた。同日の朝刊には同じ写真が掲載されているが、その時は日章旗のマークがあり、これが意図的に消されたものであることは明らかだった。

この日章旗抹消を牽引した人物は当時東亜日報社のスポーツ記者であった李吉用である。李吉用は表の略歴にもみられるように東亜日報社が結社された1年後にはスポーツ記者として東亜日報社に入社し、一旦朝鮮日報社に勤めるも、再び東亜日報社へと復帰、スポーツ記者としてスポーツ記事を新聞・雑誌に綴り、ある時はスポーツ組織の委員や理事としてスポーツ大会の運営などにも携っていた。さらに朝鮮における体育・スポーツの研究を推進するなど植民地朝鮮のスポーツ界において最も重要な人物のひとりであったと評価することができる。

李吉用が日章旗を抹消することを決意するまでの言動と行動は鎌田の『日章旗とマラソン』に描かれており、その記載内容からも彼の上司を含めた多くの社員がその行為について支持していたことを窺わせる<sup>36</sup>。そして『東亜日報社史』には「李吉用體育部記者が調査部所屬本報專屬畫家李象範記者に日章旗處理を議論したのだが、その時二人はただにっこりと笑っただけで特に言葉を交わすことはなかった。以心傳心、差し出した者も受けた者も互いに意思が疎通していた」<sup>37</sup>と記されており、その後、覚悟の決意で臨んだ日章旗抹消が実現したのであった。

<sup>35</sup> 日章旗を抹消するという行為は本論においては主に東亜日報社の件について論じているが、朝鮮中央日報社においても同様に孫基禎の胸の日章旗を消すという行為があった。朝鮮中央日報社も東亜日報社とともに停刊処分に付され、その後経営に行き詰まったため、復刊には至らず、そのまま廃刊となっている。

<sup>36</sup> 鎌田忠良、前掲書、pp.355-356.

<sup>37</sup> 東亜日報社編『東亜日報社史 第一』東亜日報社、1975年、pp.364-365.

表2. 李吉用の略年譜

1899年	9月9日(陰暦8月15日)、慶南馬山で貫郷慶州李致相氏与李福順女史の長男として出生。雅号波荷、筆名月江。
1912年(14歳)	仁川永化学校卒業、ソウル培材学堂入学。
1916年(18歳)	培材学堂本科卒業後に無断で渡日、京都同志社大学入学。
1918年(20歳)	母親危篤という家族からの急電でやむを得ず学業を中断して帰国、鉄道局に就職して満鉄京城管理局に勤務。
1919年(21歳)	三・一運動で4月中旬、上海に臨時政府が樹立されるのを前後して中国と国内間を行き来する独立運動関係重要文書の列車便密送を任せられていたさなかに捕らえられ、ソウルの西大門刑務所に投獄、3年の実刑を受ける。
1921年(23歳)	6月出獄。服役中に知り合った古下宋鎮禹氏の勧誘で東亜日報社に入社、社会部体育担当記者として先駆的に活躍。
1923年(25歳)	6月30日、東亜日報社主催第1回全国女子庭球大会実務管掌。
1924年(26歳)	秋に朝鮮日報社に移り、革新紙面を編集しつつ運動記者生活。11月13日、朝鮮体育会常務委員に選出。
1927年(29歳)	3月下旬から4月初旬、月南李商在特集記事を作りつつ、7月朝鮮日報から東亜日報へ復帰して体育記者として猛活躍。8月27日、永今亭で朝鮮日報秦蕃、中外日報馬春植、毎日申報高永翰記者との4人の会合で朝鮮運動記者団組織。
1929年(31歳)	3月8日、朝鮮体育会理事。
1930年(32歳)	東亜日報編集局運動部主席記者として朝鮮女子庭球大会を例年の行事として主管するなか、新しい体育用語普及のなかで日刊紙にはじめて横書き編集を実施、その嚆矢となる。1月30日、朝鮮スキークラブ創設、理事に推戴。
1931年(33歳)	4月11日、朝鮮籠球協会創立、理事。6月20日、朝鮮水上競技会創立、常務理事。6月22日、朝鮮体育研究会、発起人。
1932年(34歳)	第10回ロサンゼルスオリンピック大会でマラソンに出戦した金恩培選手が6位で入賞するとユニフォームの胸の日章旗を抹消して報道。4月15日、高麗陸上競技会定期総会で理事に選出。
1934年(36歳)	3月号の「新東亜」に「運動記者列伝」発表。4月30日、京城陸上競技連盟創立総会で総務に選任。
1936年(38歳)	8月25日付の東亜日報第2面に第11回ベルリンオリンピックでマラソンに出戦し、堂々と世界を制覇(8月9日)した孫基禎選手の日章旗を抹消した特報で新聞が押収されるとともに実際に抹消に協力した青田李象範伯伯と金俊淵主筆、薛義植編集局長、玄鎮健社会部長をはじめとした幹部役員など10余名とともに鍾路警察署に連行、ひどい拷問を受けて40日間留置され、主導者5名一堂は退社するという誓約書を書いて放免。8月29日、東亜日報は第4次の無期停刊になり、強制退職後、社会活動の一切を禁止される。
1939年(41歳)	ある集会で反日の歌謡を歌ったという事件により3回目の投獄。
1942年(44歳)	城北洞の会長に就任したが、要視察人として監視を憂慮し、4カ月で辞退。'朝起会'結社で'朝鮮を起す集まり'の陰謀と言いがかりをつけられ、警察に連行、4度目の入獄。
1943年(45歳)	創氏改名に応じず検挙、5度目の入獄。
1945年(47歳)	反日発言で6度目の検挙、投獄、健康悪化のため保釈、出獄。8月15日、民族解放を迎えて市内城北洞56の自宅で仁村金性洙・古下宋鎮禹・芹村白寛洙・維石趙炳玉・朗山金俊淵などの同志たちと集まり、韓民党創党を評議し、9月中旬に正式創党で情報部次長に選出される。12月東亜日報復刊、事業局次長。この年に朝鮮体育同志会評議員。8月15日、光復直後から1948年政府樹立を経て、6月25日頃まで非常国民会議代議員、朝鮮体育会常務理事、野球協会副会長、梨花女大財団理事、培材中学校同窓会副会長など歴任。
1949年(51歳)	10月15日、大韓体育会の創立30周年記念で功労賞を受ける。
1950年(52歳)	6月25日の戦乱(朝鮮戦争)のなか敵の支配下のソウルで人共内務署員により、6月27日に連行、調査を受け帰宅。7月17日、2度目の連行、拉北されたのち生死不明状態。拉致され北上途中におそらく病死したものと推定される。

典拠:『李吉用 일장기 말소의거 기자』pp.292-294参照

この日章旗抹消事件を受けて当局はどのように反応したのか、またこの事件に対してどのような認識を示していたのか。事件後に総督府の警務局長は以下のような発表をしている。

東亞日報は今回発行停止處分に附せられました。先日伯林に開會されました世界オリムピック大會のマラソン競技に我が朝鮮出身の孫基禎君が優勝の月桂冠を嬴得た事は我が日本全體の名譽であつて、内鮮共に大に祝賀すべきものであり、且つ又内鮮融和の資となるべきものでありまして、苟且にも之が逆用せられて少しでも民族的對立の空氣を誘致するようなことがあつてはならないのです。然るに事實は新聞紙等の記事にして動もすれば對立的感情を刺戟する如き筆致に出づるものがあるのは、一般に遺憾とせられて居つた處であります。然るに東亞日報に於ては從來屢々當局の注意があるにも不拘、八月二十五日の紙上に孫基禎君の寫眞を掲載したのであります。その寫眞に明瞭に顯はれねばならない筈の日章旗のマークが故意に抹消された形跡があつたので、即時差押處分に附してその實情を取調べました所、右は八月二十三日附大阪朝日新聞に掲載せられた孫基禎君の寫眞を轉載するに際し、日章旗が新聞紙上に現はれることを忌避して故らに技術を用ひて之を抹消したものであることが判明するに至つたので、遂に其の新聞紙に對し発行停止處分をせらるゝに至つたのであります。申す迄もなく此の如き非國民的態度に付ては將來共嚴重なる取締を加へる方針であります。一般に於ても誤りの無い様に注意して貰ひ度いと思ふのであります<sup>38</sup>。

東亞日報社は同月 29 日付をもって発行停止處分となつた<sup>39</sup>。植民地期におけ

<sup>38</sup> 森田芳夫「孫選手のマラソン優勝と日章旗マーク抹消事件」『緑旗パンフレット第五輯』緑旗連盟、1936年、pp.12-13。

<sup>39</sup> 発行の停止處分とともに今後の人事等についても以下のような申渡しが行なわれていた。

- (一) 東亞日報社長宋鎮禹ハ引責辭任スベシ
- (二) 發行兼編輯人名義ハ新社長タルベキ者ニ變行ノ手順ヲ履行スベシ
- (三) 社長、副社長、主筆、編輯局長ノ任用に當タリテハ豫メ當局ノ承認ヲ受クベシ
- (四) 當局ニ於テ不適當ト認ムル幹部及社員竝ニ事件責任者ハ之ヲ免黜シ且ツ同一社内ノ他ノ職務ニ從事セシムベカラズ、其ノ氏名左ノ如シ  
宋鎮禹（社長 政要） 張德秀（副社長 政要） 梁源模（營業局長 政要）  
金俊淵（主筆 特要） 薛義植（編輯局長 政要） 李如星（調査部長 政要）  
朴讚熙（地方部長 特要） 崔承萬（雜誌部主任 普要） 李吉用（運動部長）  
申樂均（寫眞課長） 玄鎮健（社會部記者） 張龍瑞（同上）

る発行停止処分はこれが4度目<sup>40</sup>であったが、このときの発行停止処分は9カ月間にまで及び、経営の上での損害は甚大なものになったという。またこの発表における日本側の認識は先にみた報道の違いのなかでも確認された通りである。すなわち孫基禎の優勝は日本の勝利であり、この優勝の意味するところは「内鮮融和」であることが求められていたのである。それを朝鮮民族の勝利とし、民族主義的な報道を行うことは植民地社会の安定を望む当局にとっては当然危惧せざるを得ない事態であった。さらに日本の象徴である日章旗を抹消する「非国民」的行為に対しては法に照らして取り締まることで対応していったのである。また当局の動きに呼応して大東民友会という朝鮮人で組織された親日団体は以下のような声明を発表している。

吾人は先づ孫君の優勝を朝鮮人のみの榮譽とする偏狭な態度を拒否しなければならぬ。孫君の出場が日章旗の下で行はれ、その競技が日章旗の翻翻と全日本國民の歡呼の中に於て獲られたところのものであると云ふことを忘れてはならぬ。今回の孫君の優勝を通して内鮮兩族の心臓と心臓とを貫く共通の歡喜と感激とが如何に兩民族の感情と情緒の融合を齎したことを想はなければならぬ<sup>41</sup>

ここでもやはり孫基禎の優勝は日本と朝鮮の融和を示すものとして理解され、孫基禎の優勝を朝鮮民族のものとする民族主義的な論調や主張を退けている。

「内鮮融和」という日本側の主張を補強するものとしては孫基禎の出身校である養正高等普通学校の陸上競技部でマラソン選手を指導した峰岸昌太郎<sup>42</sup>を

---

徐永浩（寫眞部員）

以上十三名

（五）新二東亞日報發行名義人トナリタル者ハ當局ノ指定スル項目ニ從ヒ紙面ノ刷新ニ付誓約スベシ

（六）右申渡ハ社長宋鎮禹又ハ梁源模ニ對シテ行ヒ金性洙、宋鎮禹及ビ梁源模ノ三人ハ今後責任ヲ以テ一切ノ處理ヲ遂行スベシ

こうした申渡しは金性洙や宋鎮禹ら朝鮮人民族主義者たちに対する警戒と疑念が色濃く出ていた。（「東亞日報發行停止處分ノ解除に至ル經過」京城地方法院檢事局『思想ニ関スル情報綴』昭和十二年度。）

<sup>40</sup> 東亜日报社の停刊処分の1度目は創刊した年の1920（大正9）年9月であった。2度目は1926（昭和元）年の3月、3度目は1930（昭和5）年の4月に停刊処分を受けている。

<sup>41</sup> 森田芳夫、前掲書、p.13.

<sup>42</sup> 峰岸昌太郎のことについては西尾達雄「養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について」北海道大学大学院教育学研究院紀要第104号、2008年、西尾達雄「朝鮮体育協会と峰岸昌太郎」北海道大学大学院教育学研究院紀要第110号、2010年の2つの論文のなかで詳しく述べられている。

讀えたうえで「へだてなき内地人の熱ある指導を論外に、孫君の優勝は全く考へられぬ所、而も今次の大會に日本のコーチの下に指導され、日本選手として出場して勝つたのである」<sup>43</sup>と、日本人指導者たちの功績を示したうえで日本選手孫基禎のマラソン優勝があったのだという主張などもそのひとつに数えられよう。



写真 1. 孫基禎が通っていた養正普通学校（筆者撮影）

このように日章旗抹消事件は総督府によって東亜日報・朝鮮中央日報両新聞の発行停止処分というかたちで一応の解決をみた。しかしこの事件によって明らかになったのは世界一になった孫基禎を巡って植民地社会における支配—被支配の対立構造が顕在化し、「内鮮融和」というスローガンの下での懐柔的な政策が決して植民地朝鮮における安定的な社会形成を促さないということであった。つまり当該期において植民地権力が志向してきた文化政治の限界を示した点にもその意義が見出される。南次郎が朝鮮総督として赴任してきたちょうどこの年を境としていわゆる皇民化政策が植民地朝鮮において展開されていった歴史を鑑みれば、過渡期にあたるタイミングで起こったこの事件の重要性は計り知れない。

##### 5. 英雄としての「孫基禎」

ベルリン大会での孫基禎のマラソン優勝は日本にとっても朝鮮民族にとっても喜ばしいものであり、それぞれに意味ある金メダルとなっていた。しかし、

<sup>43</sup> 森田芳夫、前掲書、p.21.

植民地朝鮮においてはその熱狂のなかで日本の論理を忌避したい民族主義的な動きが抵抗の行動へと転化していく。そのピークに東亜日報社・朝鮮中央日報社による日章旗抹消事件があった。この事件は朝鮮人の民族意識の強さを表出することはできたものの、当局から徹底的に弾圧され、その余波は英雄「孫基禎」にまで及んでいくことになる。それは植民地という支配体制のなかでの宿命でもあった。以下ではベルリン大会後、日章旗抹消事件後の英雄「孫基禎」が植民地権力のなかでどのように存在していたのか、あるいはその存在がどのように利用されたのかを考察していく。

#### (1) 警戒される存在

朝鮮人らのスポーツに対する日本側の警戒は1930年代の外務省の史料のなかでいくつか確認される。これらは何れも朝鮮蹴球団に関するものであり、朝鮮蹴球団の海外遠征に際して、その動静を外務大臣宛てに報告したものであった。日本側の警戒は如何なるものだったのか、1935（昭和10）年の廣田外務大臣に宛てた天津の川越総領事の報告では以下のように記されている。

朝鮮蹴球團（約三十名）ハ昨年ノ例ニ倣ヒ本月廿一日平城發廿四日頃當地着更ニ上海ヲ經テ東京ニ赴ク豫定ナル趣當地朝鮮人會ニ入報アリタル處其ノ時機偶々滿洲國陛下御渡日ト相前後シ居リ目下南京ニ於ケル朝鮮義烈團政治訓練第四期生ヲ募集中ニテ各地ニ同志ヲ派シ工作ヲ進メツツアリ等警戒スヘキ情報サヘアリ一般鮮人ノ行動特ニ注意ヲ要スル際右蹴球團ノ來津ニ依リ各地ヨリ多數ノ鮮人入込ムニ於テハ警衛ノ措置ニ頗ル困難ヲ來ス惧アル次第ニ付此ノ際右團體ノ渡支ハ成ルヘク見合セシムル様御取計アリ度シ

上海、滿ニ轉電セリ<sup>44</sup>

この報告の結果、桑島東亜局長より朝鮮総督府の警務局長宛てに朝鮮蹴球団の遠征延期の電信がなされ、実際に朝鮮蹴球団の遠征の延期が決定されている<sup>45</sup>。上記から日本側の朝鮮蹴球団への警戒を推すと、朝鮮蹴球団というスポーツ組織が中国を経由しながら遠征していく過程で、それに乗じて朝鮮人たちが集まり、煩雑な状況のなかで何らかの政治的行動を起こさないだろうかという懸念と警戒であった。「スポーツ」が起点となり、それに託けた朝鮮人らの政治

<sup>44</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04012475100『体育並運動競技関係雑件』第四卷9.朝鮮蹴球団関係、1935年、p.89.

<sup>45</sup> 外務省、前掲書、p.92.

的な活動に対する警戒はこうした報告から確認される。

それではスポーツ選手としての孫基禎・南昇龍の場合はどうだったのか。日章旗抹消事件は孫基禎を警戒される存在へと導いていった。当然のことながら孫基禎が朝鮮半島に戻ってくることによって噴出する民族主義、それを契機に群がるであろう朝鮮の民衆に対する警戒感が強まったことはこれまで考察してきた点からみても否めない。そのことを端的に示す史料が内務省警保局の『特高外事月報』である。1936（昭和11）年8月分の『特高外事月報』の「朝鮮人の運動状況」には孫基禎と南昇龍のベルリン大会での活躍により、民族主義運動が高まってきていることに注意を促す報告がなされている。報告は民族主義運動が高まってきた状況の背景として、「帝都反乱事件」<sup>46</sup>後に一部の朝鮮人に「国体に対する国民の確信に動揺を来しつつあるが如き謬想」を抱かせるようになったとし<sup>47</sup>、その後は以下のように続く。

更に第十一回オリンピック大会に於ける孫基禎、南昇龍選手の優勝は、一般朝鮮人に多大な衝撃を與へ、「全國民の二十四年來の宿望達成」として、内地人の歡喜に相和する者ある一面、一部偏狹分子に於ては、之を以て「朝鮮民族の優秀性を證名せられたり」と爲し、或は「兩君の優勝は即ち朝鮮の優勝であり兩君の制覇は即ち朝鮮の制覇である」として極力民族意識の誘發とその昂揚に努むる所あり、爲に一時沈衰せる民族主義運動も、最近擡頭の傾向頓に濃厚となれり<sup>48</sup>。

孫基禎と南昇龍の活躍をこれまで述べてきたように「朝鮮民族の優秀性の証明」とする主張、それが民族主義的な活動を誘発しているということについて言及していたのである。その後、朝鮮内での民族運動に関わる状況、なかでも優勝報道の仕方や日章旗抹消事件などについて触れ、日本における朝鮮人留学生らの行動についても言及していた<sup>49</sup>。

次に彼らについての報告が出てくるのは同年10月分の『特高外事月報』である。そこには他の陸上競技選手らとともに神戸港に帰港し、大阪での歓迎会に出席、翌日東京に向かうにあたり「當時兩選手は、選手隊伍の最後尾に位し、一般鮮人の接近を容易ならしむるが如く、一部民族主義者の意に迎合せむとす

<sup>46</sup> 1936（昭和11）年2月26日に起こった二・二六事件を指している。

<sup>47</sup> 内務省警保局編『特高外事月報』昭和11年8月、1936年、p.99.

<sup>48</sup> 内務省警保局、前掲書、p.99.

<sup>49</sup> 内務省警保局、前掲書、p.100.

るやに認めらるゝ行動ありたり」<sup>50</sup>としている。

孫基禎と南昇龍の行動に不信な点があれば、それがたとえ些細なことであっても監視の対象になっていたことが分かる。殊に孫基禎の場合は「在獨中孫基禎は、多数の外国人よりの「サイン」の求めに應じ「KORE（高麗）孫基禎」と記する等、不穩當の舉措」があった<sup>51</sup>とされており、オリンピックが行われたドイツにあっても孫基禎の行動は誰かに観察・監視されていたのである。そしてベルリンからの帰国に際しては孫基禎・南昇龍が戻ってくることによって朝鮮人らの祝賀会などの集会が行われたり、彼らに群がる群衆ができあがりたりする状況を避けたかった当局は以下のように取締を行った。

孫南兩選手は、帝國代表選手として出場し之が優勝に關しては、指導者並國民の熱烈なる指導後援に依る所多く、従つて今回の優勝歸朝に際しても、全國民的に祝福歡迎すべきことに屬す。従つて既に上陸第一歩に於て、日本陸上競技聯盟の歡迎會あり、帝都に於ても、大日本體育協會、東京市等其他公の機關に於て盛なる歡迎會開催の計畫あるを以て朝鮮人獨自の歡迎會開催の要なしと認められ、一面前敍の如く内外に於ける民族主義運動は、兩選手の歸朝を契機として相當高潮化するやの状勢にあり、斯る際朝鮮人のみを以てする別個の歡迎會慰安會等の開催を許すに於ては、民族的感情の趨く所、内鮮人對立の氣運を醸成するの虞なしとせざるものあるに鑑み、警視聽に於ては朝鮮人だけの歡迎會等は一切認めざる方針を採り、前記在京朝鮮人の歡迎計畫に對しては、論旨中止せしめ、都下各大學朝鮮留學生の秋季陸上運動會に對しても、歡迎空氣の鎮靜後開催せしむべく延期方を論旨する等、嚴重取締を加へ凡ゆる不穩策動を阻止せり<sup>52</sup>。

このように嚴重な取締の下、孫基禎と南昇龍を朝鮮民族で祝うということではできなくなっていたのである。日本側が日本人と朝鮮人の對立の回避、高まる朝鮮人らの民族運動の雰囲気鎮靜化させることに注意を払っていた状況が窺える。

こうした状況はスポーツ界にも当然伝わっていたものと思われるが、大日本體育協會關係の史料や關係者らがこのことに直接触れている史料は管見ながら見つからない。翻つて考えるとスポーツ關係者らはこのことに敢えて触れないことにしていたのではないかと推察される。そのため10月3日に日比谷

<sup>50</sup> 内務省警保局編、『特高外事月報』昭和11年10月、1936年、p.96.

<sup>51</sup> 内務省警保局、前掲書、p.96.

<sup>52</sup> 内務省警保局、前掲書、p.97.



大音楽堂にて催された大日本体育協会主催の代表団歓迎報告会での平沼亮三の報告ではベルリン大会で日本選手が活躍した種目と選手名を其々挙げているにもかかわらず、マラソンに関しては優勝に対する評価はしつつも孫基禎と南昇龍の名前を出していない<sup>53</sup>。これは差別的な言動ということではなく、恐らく上記の事件とその後の警戒によって両者の名前を意識的に伏せることになったのではないかと理解される。公の場においては迂闊に両者の名前を出せず、それを避ける状況にあった可能性は否定できない。また同報告ではマラソンの優勝について「やはりコーチが非常によく注意して、非常によく訓示を與へ、選手はこれに絶対服従致しまして、好く走つてあの好果を挙げたのだと私は飽くまで信じてゐるのであります。これはやはり日本の非常に誇るべき美點であるのではないかといふことを感じて参つたのでございます」<sup>54</sup>とも述べられている。ここでもやはり孫基禎・南昇龍については触れられず、選手がコーチに絶対服従するという上意下達の行き届いた関係が日本の美德であり、その結果がベルリンでのマラソン優勝であったとする発言となっていた。これをスポーツにおける日本精神の發揮の一例として紹介している<sup>55</sup>ことから両選手のおかれた状況をできる限り日本側の期待する方向に沿うものとして伝えていこうとしていた。

このように孫基禎と南昇龍はベルリン大会において輝かしい成績を残した英雄であると同時に招かれざる者として存在していた。それは植民地朝鮮からの日本代表選手という立場に対して日本という国家と朝鮮民族のそれぞれの思惑が余りにも強く反映された結果でもあった。

## (2) 英雄「孫基禎」の葛藤

ベルリン大会での優勝により日本、そして植民地朝鮮で英雄となった孫基禎は社会的影響力を持つ存在になった。彼は表象される存在としてその後を生きねばならず、それは権力との相克と葛藤のなかに身を置くことを意味していた。

ベルリン大会後には日章旗抹消事件も相俟って日本から警戒される存在だった孫基禎、しかし1940年代初頭、日本がアジア・太平洋戦争へと突入すると、戦線は拡大され、その後の戦況の悪化により人的資源確保の動きが活発となっ

<sup>53</sup> 平沼亮三「オリムピックより歸りて」『オリムピック』第14巻第11号、大日本体育協会、1936年、pp.6-7.

<sup>54</sup> 平沼亮三、前掲書、pp.8-9.

<sup>55</sup> 平沼の報告は『第十一回オリムピック大會報告書』にも全く同様のものが掲載されている。ただ『第十一回オリムピック大會報告書』ではいくつかの節に分けられて記載されており、その各節には見出しがつけられている。ここでの見出しは「日本精神の發揮」とされていた。

てきた1943（昭和18）年11月、朝鮮半島北部の咸鏡北道を訪れた孫基禎は朝鮮人学生に学徒兵への志願を呼び掛ける存在となっていた<sup>56</sup>。オリンピックで英雄となった孫基禎はその知名度ゆえに対日協力に加担せざるをえない存在へと転化していたのである<sup>57</sup>。

日本での学徒出陣の後、植民地朝鮮・台湾では「陸軍特別志願兵臨時採用規則」<sup>58</sup>が公布され、植民地からも学徒兵が駆り出されることになった。孫基禎は明治大学の卒業生として学徒先輩中堅団という組織の一員となり、朝鮮人学徒の募集を呼び掛けていくことになったのであった。この時期の『京城日報』には連日のように朝鮮人志願兵に関する記事が掲載されている<sup>59</sup>。

ベルリン大会時には日本の植民地政策に賛意を示していたとは思われない孫基禎がこの時期に植民地権力の意に沿う行動を取らざるをえなくなった背景はどのようなものだったのか。ベルリン大会後の表象される孫基禎に着目しながら考察してみたい。

ベルリン大会での優勝報道の他に日本で孫基禎が取り上げられていたものに1936（昭和11）年10月発行の『青年』という雑誌に「半島の生んだマラソン王 あゝ栄冠の蔭にこの涙」という論文がある<sup>60</sup>。挿絵入りで掲載されたこの論文は孫基禎と南昇龍を日本人の恩人との関係から描いたもので、両者とも貧

<sup>56</sup> 1943年11月14日付の京城日報には「“學徒の奮起確信” 激勵陣頭に孫基禎氏」という見出しの記事が掲載されており、孫基禎は「われら若き半島青年が今こそ起つて大東亞戦争に直接身をもつて戦はなければ、何時またこんな絶好の〇〇があるでせうか、大いに血を流し、〇をもつて若き日の〇〇を〇は〇〇なりとせん、いふ、半島はあげて學徒の出陣を〇〇してあるのです、全く〇〇です。未だ〇つてこんなに二千五百萬が〇蹶起してその熱と〇を一つの點に集中させたことがあつたでせうか、私はこのやうな氣持を學徒〇その〇〇を訪れて〇へ〇〇を乞ふと共に、微力ながら大いに激勵するつもりです。」と語っていた。〇は文字の判読ができなかった部分である。

<sup>57</sup> このことはすでに姜徳相の著書『朝鮮人学徒出陣』において触れられていた。姜徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997年、p.134。

<sup>58</sup> 1943（昭和18）年10月20日に陸軍大臣東條英幾の名の下に通告されている。この『昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則』の第二条には「前条ノ規定ニ依リ陸軍ノ兵役ニ服スルコトヲ志願スル者ハ昭和十八年十一月二十日迄ニ到着スル如ク願書（陸軍特別志願兵令施行規則附録第一様式ニ準ズ）ニ特別志願兵志願者學歷一覽表（陸軍補充令施行規則第七十七條三項ノ様式ニ準ズ但シ幹部候補生志願者學歷一覽表トアルハ特別志願兵學歷一覽表トス）ヲ添テ學校所在地所管ノ軍司令官ニ宛差出スト共ニ現在修學ノ學校長（昭和十八年度十月以降現在ノ學校ニ入学シタル者ニ在リテハ最終修學ノ學校長）ニ成績證明ヲ願出ツベシ」とあり、孫基禎が学徒先輩中堅団として咸鏡北道を訪れた時期は志願の申込の締切りにかなり差し迫っていた時期であることが確認される。

<sup>59</sup> いくつかの記事の見出しを紹介すると以下の通りである。

<sup>60</sup> 鷲宮文彦「半島の生んだマラソン王 あゝ栄冠の蔭にこの涙」『青年』第21巻10号、日本青年館、1936年、pp.34-39。

しい暮らしのなかで苦勞し、峰岸や鈴木といった日本人からの援助を受けつつ、栄光を掴み得たという美談をやや道徳的な話として展開している。この論文は日本語で書かれているため、ここで展開される内容は日本で発行される新聞と同様に日本人の期待する孫基禎像・南昇龍像が描かれていると考えていいだろう。こうした日本人に期待される孫基禎像は孫基禎の言動や行動に反映されていく。

朝鮮に戻った孫基禎は養正高等普通学校での卒業を迎える年でもあったため、12月には日本の大学への進学を希望し、東京高等師範学校を受験する。しかし1月の発表で不合格となり、結果、朝鮮の普成専門学校に進学することになった。普成専門学校での学生生活は長くはなかった。普成専門学校自体が当局からの監視の対象とされていた学校でもあったことから、権泰夏と鄭商熙の後押しを受けて半年後に再び日本の明治大学へ入学し直したという<sup>61</sup>。その後は1940（昭和15）年3月に明治大学を卒業し、朝鮮に戻るまでの間、日本で学生生活を送ることになったのである。植民地朝鮮における対日協力者とされる人々のなかには日本に留学していた経歴を持つ者が少なくないことを鑑みると孫基禎もこの時期に日本で学生生活を送ったことの意義は大きいだろう。

さらに孫基禎は日本代表選手としてその榮譽が称えられることにもなっていた。1937（昭和12）年1月にオリンピックなどで活躍した日本人選手らとともに朝日体育賞を受賞したのである。そのときの授賞式では「この賞を持つて國に歸り先生達に早く見せ度いと思ひます、四年の後には東京で必ずもう一度やつてみます」<sup>62</sup>と発言し、1940（昭和15）年に開催予定の夏季オリンピックの東京大会で出走する意欲も見せていた。

しかし孫基禎はマラソンを走ることはなく、英雄として表象されることのほうが多くなる。その典型が1938（昭和13）年11月に開催された国民精神作興体育大会で行われた矛繼走である。これは伊勢神宮から聖矛を各府県のランナーたちが繋ぎながら繼走するもので、結城神社、熱田神宮、三島神社、鶴ヶ岡八幡宮などを経由し、最終的には明治神宮に至る道程で行われている。この矛繼走は大会を彩るイベントとして行われるとともに、神都と帝都を結ぶことを象徴する大行事でもあった。この繼走の最終ランナーは金栗四三であり、その金栗に矛を繋ぐランナーとして登場するのがベルリン大会マラソン優勝者の孫基禎であった。『東京朝日新聞』はその時の様子を以下のように報じている。

<sup>61</sup> 孫基禎の自叙伝によると、普成専門学校での学生生活は要注意人物として常に監視される状況だったため、日本の大学に進学することを希望したと記されている。孫基禎『ああ月桂冠に涙』講談社、1985年、pp.213-215。

<sup>62</sup> 『東京朝日新聞』1937年1月26日付。

第二十一區を擔當した青山小學校の豆選士小川芳至君（一四）以下四十名は伊勢神宮から護衛バスに積み込んだ炬火六十本に火をつけて赤坂區役所前から外苑入口へ勇ましくひたはしり、こゝに待ち構へたオリンピックの覇者孫基禎君に渡せば孫君は村社講平君以下の衛團に守られて神宮競技場の國民精神作興大會會場へと力走

會場は既に濃き夕闇に閉され、篝火があかあかと燃える時しも六十余の炬火が「聖矛」を守つて會場に繰り込む、一萬觀衆は『萬歳』の歡呼を轟かす、ここで最終選士金栗四三君への受継ぎが行はれ君が代齊唱裡に完了<sup>63</sup>、

その後、聖矛を受け継いだ日本陸上競技連盟会長の平沼亮三から明治神宮の宮司に矛が手渡され、神殿に奉納されたとしている。このような多くの觀衆の前に孫基禎が現れるのは実はこの時だけではなかった。1940（昭和15）年に皇紀2600年奉祝の大会としても開催された第11回の明治神宮國民體育大会にも聖火団のひとりとして参列していたのである。このことを示す史料は孫基禎自身が記し、『三千里』に掲載された「體育大祭典參觀과朝鮮體育振興에의展望」なかにある。この第5節は「聖火団에参列」という見出しになっており、その様子は以下のように記述されていた。

紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮國民體育大會の閉會式は惶悚にも三笠宮殿下の臺臨を仰奉して十一月三日午後四時五十八分から明治神宮外苑競技場で舉行されたが、輝かしい入賞者三千餘名を先頭に大會役員と各府縣選手一萬五千餘名が堂堂入場、そして爆發する感激の歡聲と拍手は蜿蜒と入場する各部隊の入場ごとに起こった。そして脱帽總起立下に嚴肅にも聖恩之旗が入場し壇上に奉迎された後最敬禮、そして「君が代」齊唱、宮城、明治神宮、檀原神宮遙拝、その後に明治神宮から捧持してきた聖火の一團が到着したが、先頭には往年のマラソンの覇者金栗四三選手、副捧持者は今回大會のマラソン優勝者竹中正一郎選<sup>64</sup>、これを再び護衛してマラソン王日比野寛翁と小生とマラソン長距離競走の先輩たちであった<sup>64</sup>。

このように日本のマラソン金メダリストとして日本という国家を象徴する重

<sup>63</sup> 『東京朝日新聞』1938年11月7日付。

<sup>64</sup> 孫基禎「體育大祭典參觀과朝鮮體育振興에의展望」『三千里』第13巻第1号、三千里社、1941年、p.375。

要なスポーツの式典に参加していたことは明らかであり、日本の英雄のひとりとしてその榮譽とともに表象される存在となっていたのである。

ここまで日本の英雄として表象されてきた孫基禎をみてきたが、ベルリン大会後の孫基禎をみていくときにもうひとつ重要なのは彼が日本人、あるいは日本から恩恵を受けている朝鮮人との繋がりが緊密になっていたという点である。例えば学徒先輩中堅団とともに咸鏡北道を訪れた大山寅相こと趙寅相は養正高等普通学校陸上競技部の先輩にあたり、彼は総督府の御用新聞でもあった京城日報の政治記者でもあった。朝鮮総督府学務局に勤める鄭商熙も養正普通高等学校陸上競技部の先輩にあたり、ロサンゼルス大会に代表選手として活躍した権泰夏は明治大学の先輩であり、満鉄に勤務していた。そして孫基禎自身も朝鮮貯蓄銀行での職を朝鮮陸上連盟の会長であり、貯蓄銀行の頭取であった伊森明治に紹介してもらったこともあり<sup>65</sup>、孫基禎を取り巻く人々の多くに日本人あるいは日本から恩恵を被る者が多数いた事実が確認される。

孫基禎は自身の対日協力行為について「私はマラソンで名をあげたということで学徒兵募集に強制動員された。これに応じなければそれこそどんなひどい目にあうかもわからなかった」<sup>66</sup>と語っている。確かにその可能性は払拭できない。ただ上記で確認してきたように「英雄としての孫基禎」を取り巻く環境は常に日本との接点をなくすことができなくなっていたことに注意を払う必要がある。何故なら植民地権力による強制的な力が働いたにせよ、日本との関係の延長線上に対日協力という行為がなされたと捉えられるからである。しかし、このことは日本の英雄でもあり、朝鮮民族の英雄でもあったひとりのスポーツ選手が、この時代を、また植民地朝鮮をどのように生きねばならなかったのかという難しさを痛感させられる事実でもある。

## 6. 小括

本研究は1930年代にロサンゼルス、ベルリンで開催された2つの夏季オリンピックに植民地朝鮮から日本代表選手として参加した選手らに着目し、彼らの行動が当該期の植民地権力と民族主義の影響をどのように受け、またどのように反映していたのかを明らかにするものであった。本研究で明らかになった点は以下の通りである。

1. 朝鮮人選手が日本代表としてオリンピックに参加したのは1932（昭和7）年のロサンゼルス大会からであり、3名の朝鮮人選手が参加している。とりわ

<sup>65</sup> 孫基禎『ああ月桂冠に涙』講談社、1985年、p.226.

<sup>66</sup> 孫基禎、前掲書、p.231.

け植民地朝鮮でもその当初から競技力の高かったマラソンには金恩培・権泰夏という2名の朝鮮人選手が日本代表予選を勝ち抜いてオリンピックに参加し、金恩培は6位、権泰夏は9位という結果を出している。

2. ベルリン大会には7名の朝鮮人選手が日本代表としてオリンピックに参加しているが、選手選考のなかで朝鮮人選手らは朝鮮民族と日本という国家の狭間でダブルバインドの状態に陥っていた点が見受けられた。しかし民族主義者らの価値観のなかには当該期における優生的な思想の影響もあり、国際スポーツの場に朝鮮人選手らが参加することは望まれることであった。そのため朝鮮人選手のオリンピック参加を促す態度が確認され、その参加を後押しすることになっている。

3. ベルリン大会における孫基禎と南昇龍の活躍は日本、植民地朝鮮それぞれにおいて熱狂を齎した。しかしその活躍の報道についてはそれぞれの認識に齟齬があり、日本は24年目にして念願のマラソン金メダルを朝鮮人選手が齎したという主唱のなかで「内鮮融和」が謳われ、一方、植民地朝鮮では民族主義者らによって「民族の優秀性」が主唱されていた。

4. いわゆる日章旗抹消事件は東亜日報社の運動記者李吉用が主導して実行されたが、それに対する朝鮮総督府の取締は厳しく、東亜日報社・朝鮮中央日報社は無期停刊処分を受けている。この事件に対する当局の認識は孫基禎の優勝が内鮮融和に資するものであるという認識であり、民族的対立が助長されるような事態に対して危惧を示し、事件の関係者らに対して弾圧を加えていた。

5. 日章旗抹消事件の影響は孫基禎と南昇龍にまで及び、彼らは警戒される存在として帰朝することになった。当局のここでの警戒は英雄となった孫基禎と南昇龍が戻ってくることによって多くの朝鮮人が特定の場所に集まって群衆となり、民族主義に基づいた政治的な活動を起こさないだろうかという警戒であった。

6. 日本・植民地朝鮮の英雄となった孫基禎は権力との相克のなかに生き、日本の英雄として表象される存在へと化していった。そして最終的には対日協力に加担せざるをえない状況にまで追い込まれていったのである。

本研究はオリンピックという英雄を創出するシステムによって齎された悲劇のひとつを提示したのもであった。本研究の対象とする時代、支配－被支配の関係にあった日本と朝鮮半島。そこではスポーツによって「支配」を助長させる論理、「抵抗」を示す論理が存在し、その先に「協力」という選択肢が用意されていた。スポーツ選手らは常に表象される可能性を秘めており、その表象のなされ方によってそれぞれの論理に与することになる。それは自己の選択で

あると同時に他者との関係のなかで決定された選択でもある。植民地朝鮮のスポーツ選手は日本という国家と対峙したとき、常にその選択を迫られた。これは自由な選択とは程遠いものであり、その選択の位相は植民地権力や民族主義といった同時代性を反映する見えざる力が作用する場であったと言えよう。

## 終章 植民地朝鮮におけるスポーツの位相とその機能

### 1. 植民地朝鮮におけるスポーツの位相

本研究は植民地朝鮮におけるスポーツに着目し、日本の植民地主義の影響下においてスポーツという文化的実践が当該社会においてどのような役割・機能を果たし、またその文化的実践がいかなるものであったのかをいくつかの事例に基づき明らかにしてきた。本研究の視角は植民地権力ならびに民族主義のそれぞれとスポーツがどのように結びついており、植民地朝鮮の人々が共有するスポーツという場の位相がどのような意味を帯びて存在していたのかという点にあった。ここでは本研究において述べてきた点をまとめるとともに植民地朝鮮におけるスポーツの位相を今一度確認しておきたい。

第1章から第3章までにかけては植民地権力の側が形成したスポーツ実践について明らかにしてきた。第1章と第2章において着目したのは朝鮮神宮競技大会という植民地朝鮮において最も盛大に行われた総合的なスポーツ大会であった。京城という都市が開発されていく時期に創建された朝鮮神宮、さらに京城運動場という総合運動施設、このような人々の動きをつくり出し、収容していける巨大な施設群の存在とともに朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会が創設されていく。そして1924（大正13）年に日本で開催された明治神宮競技大会に倣い、朝鮮神宮にスポーツを奉納する神事の意味をもって翌1925（大正14）年に第1回の朝鮮神宮競技大会が開催されたのであった。この第1回大会の開会式は朝鮮神宮の鎮座祭、京城運動場の開場式と同日に行われており、これらの一連の式典は植民地権力側の権威を示すことになっていたのである。

こうして儀礼化されたスポーツの祭典であるこの大会は植民地朝鮮において毎年行われるようになり、時の植民地支配の様式に従ってその役割・機能が期待されることになる。まずは当初からこの大会に日本人、朝鮮人が共に参加していたこともあり、文化政治期のスローガンである「内鮮融和」を象徴するスポーツ大会として位置付けられ、競技の結果や大会の華々しさとともに「内鮮融和」に基づく言説が繰り返し再生産されていったのである。つまり朝鮮半島に生きる人々の認識の在り方、あるいは期待される行動の規範をこの大会を通じてプロパガンダし、指し示していったと言えるだろう。さらに1930年代になると社会事業の一環として、とりわけ社会教化に資する事業として行われることにもなっている。このことは朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会の当該社会への影響力を総督府も認識していたことの証左として確認される事実である。1940年代には朝鮮の民族スポーツを競技種目として採用したり、大会を厚生局や総督府が主催していくことになるなど体制側の思惑がより強く反映され



るようになり、最終的には戦時の軍事訓練的要素を含んだ競技大会へと化して  
いつている。

また第3章では皇民化政策期の植民地朝鮮において日本への求心性を高める  
ために武道・武士道といった日本精神を植え付けていこうとする文化的実践に  
ついて分析を行った。ここで着目した皇国臣民体操と呼ばれる体操は剣道の型  
を簡易化したものであり、皇国臣民の誓詞とならんで、皇国臣民の精神を形成  
していくための「動的体認の実践部面」を受け持つことを目的に制定されてい  
た。その普及に関しては各種学校をはじめとして様々な場所で実践されてはい  
るものの植民地朝鮮に定着するまでには至らなかったようである。これはこの  
体操や武道を指導する能力をもった教員や指導者の少なさに起因している。た  
だ重要なことはこの時期にこうした文化的実践を通して武士道的な精神を「内  
鮮一体」へ導くものとして利用し、植民地朝鮮に生きる人々にそれを受け入れ  
させようとしたことであり、その方法の一手段としてこの体操が登場してきて  
いる事実であろう。皇民化政策を推進した南次郎は朝鮮に徴兵制を布き、朝鮮  
人を戦争へと動員していくことを植民地政策の目標に掲げていた。日中戦争の  
勃発により、朝鮮半島の地政学的重要性がさらに増してくると、これまで以上  
に民族主義を廃棄した朝鮮人の必要性がクローズアップされたのである。つま  
り植民地社会の安定を目指す政策ではなく、体制に協力せざるをえない環境を  
つくるのが重視され、それに沿ったスポーツの実践がこの頃から現れてきた  
と捉えられる。その典型として皇国臣民体操が登場してきていたのである。

こうした支配論理に与するスポーツとは一線を画して実践されたスポーツを  
第4章と第5章で取り上げた。ここでは植民地朝鮮における民族主義者側のス  
ポーツに着目し、なかでも普成専門学校と東亜日報社（金性洙を中心とする東  
亜日報グループ）のスポーツをその対象として分析を行った。

植民地朝鮮における民族主義者らがスポーツを発展させていくことに価値を  
見出したのはそれが民族の発展を示す、あるいは促すと考えたからであった。  
そうした朝鮮人のスポーツの発展を示す好例として取り上げたのが第4章で扱  
った普成専門学校のスポーツ活動である。普成専門学校は植民地朝鮮において  
は朝鮮人のための高等教育機関であり、金性洙が校長として赴任してきた時期  
からは宗主国である日本の競技力を上回る競技結果を残す活躍がみられた。例  
えば皇民化政策期にあたる時期に普成専門学校の籠球部は全日本大会で3連覇  
を果たすなどその快挙には目を見張るものがあり、朝鮮民族のスポーツによる  
抵抗と発展はこうした高等教育機関のスポーツ活動において示されることとな  
っていた。

さらに当該期の朝鮮民族を代表する言論機関として存在していた東亜日報社

のスポーツ事業も同様の論理の下で行われている。

東亜日報社の設立は文化政治への転換により、集会・結社が認められるようになったことによる。東亜日報社が当該期に手掛けたスポーツ事業は旧態依然とした朝鮮半島の価値観を転換するためにスポーツを利用するといった側面があった。例えば女性の解放を意図してスポーツ大会を開催したり、民族系のスポーツ組織である朝鮮体育会を後援し、スポーツを朝鮮社会に普及させていくことに力を注いだのである。また民族スポーツを近代スポーツのように近代化させていこうとしている点も見受けられた。つまり東亜日報社を中心とする朝鮮人知識人らが自らのスポーツに見出したのはスポーツによって対抗・抵抗を示すこと以上にまずはスポーツを通じて民族の近代化、民族の発展を図ることにあつたのであり、民族を発展させていくことそれ自体が植民地主義への対抗手段とみたのである。スポーツはその目的達成のための一手段であつた。

第6章では夏季のオリンピックに参加した朝鮮人選手らに着目して、朝鮮人選手の国際スポーツ参加の意義を明らかにした。オリンピックという国際舞台に立つには「日本」の代表選手とならねばならない。そうした状況は朝鮮人選手らを朝鮮民族と日本という国家の狭間でダブルバインドの状態に陥らせていた。選手らをオリンピックへと向かうように促したのは朝鮮人知識人らであつた。彼らの価値観のなかには当該期における優生的な思想の影響もあり、国際スポーツの場に朝鮮人選手らが参加することは民族の優秀性を示すためにも望まれることであつた。そのため朝鮮人選手のオリンピック参加を促す態度が確認され、その参加を後押しすることになっている。そしてその成果はベルリン大会での孫基禎のマラソン金メダルに結実していった。

この孫基禎のベルリン大会での優勝は朝鮮人を嬉々の渦中へと至らしめた。朝鮮人知識人らは挙つてこの事実を朝鮮民族の優秀性、民族の発展を全世界に知らしめる契機になつたと喧伝した。東亜日報社と朝鮮中央日報社は孫基禎の優勝を民族の勝利として報道するために胸の日章旗を消し去つた。一方、日本もこの勝利に沸き立ち、マラソン24年目の悲願が達成されたと報道する。つまり植民地朝鮮にとってこの勝利は肯定的に受け入れられうるものだったのである。ただ当局にとってそれは「内鮮融和」に資するもの、象徴するものであらねばならなかつた。そのため総督府が朝鮮人らの民族主義的言説と行為を許すはずはなく、この植民地権力と民族主義の相克は、結果的に植民地権力側によって民族主義側が弾圧されていくなかで終息し、その後の皇民化政策期へと向かつていったのである。ベルリン大会後の孫基禎は日本の英雄として表象される存在ともなり、対日協力を余儀なくされる状況にまで追い込まれることになっている。

本研究では日本の植民地主義の影響下にあった朝鮮半島のスポーツという文化的実践を植民地権力の側と民族主義の側の双方から確認し、その役割と機能を分析・考察してきた。植民地権力の側はスポーツという文化に自文化の伝統的とされる価値を賦与したうえで植民地朝鮮に生きる人々へそれを示し、統合の象徴としていった。一方で朝鮮人知識人を中心とする民族主義者らはスポーツを自民族の発展、あるいは近代化を促す手段として利用し、その役割に期待した。こうしたスポーツ状況はそれぞれの理念と利害の相克のなかで複層的な状況を形成していたのである。ただ両者において希求された近代化への志向は植民地権力に統合されることによって、その状況はひとつの位相に結びつけられていく。つまり最終的に植民地朝鮮のスポーツは体制を強化していく方向へと向かっていったのである。

植民地朝鮮で生きる人々がこの時期スポーツを通して見たものは植民地社会を主導していく者たちのそれぞれが期待する理想の表象であった。そしてそれは植民地朝鮮における「支配」・「抵抗」・「協力」の位相のうちに存在していたのである。

## 2. 植民地朝鮮におけるスポーツの機能

ここでは植民地朝鮮におけるスポーツを総合的な視角から鳥瞰したうえでその機能が如何なるものだったのかを考察していきたい。

植民地朝鮮におけるスポーツをその特徴から抽象化していくならば武断政治期には「分離」されていたスポーツが、文化政治期には内鮮融和のもとに「雑居」していく状況となり、その後の皇民化政策期以降は内鮮一体の下に「同化」に資する実践へと導かれていったと捉えられる。さらにこの「分離」・「雑居」・「同化」という経時的な流れに常に一定の影響を与え続けたのが近代化の論理であった。ここでの近代化は実際に近代的な社会へと進展していくプロセスだけではなく、その志向性も含んでいる。こうした近代化の論理が植民地権力側、民族主義者側の双方に存在していた点は重要であろう。またそれぞれにとってその近代化は「支配」や「抵抗」を示すものでもあった。そのためこの論理には一定の力が作用する可能性を秘めていたのであり、当該期のスポーツの機能はそれぞれの理念と利害を達成していくための装置としての機能を備えていたと捉えることが可能になる。すなわち当該期のスポーツにはスポーツという文化的実践を通してそれぞれの理想とする国民・民族を身体化させていく機能を有していたのである。

ただ植民地朝鮮という空間においてはその身体化に対して支配者側の論理、つまり植民地主義の影響が最終的には色濃く反映されていくことを本研究にお

いて明らかにもしている。植民地朝鮮のスポーツが「分離」・「雑居」の状態であるならばそれぞれの「支配」と「抵抗」に則した身体化を共時的に示すものになりえる。しかし「同化」においてはそれぞれの論理がひとつの論理へと転化され、その身体化は「協力」を導くことになっていたのである。それは植民地朝鮮における歴史的帰結ではあったが、経時的に流れるスポーツの状況にそれぞれの志向する近代化といった理念が通底していた点、さらにそのことが国際スポーツへと参加していく過程で植民地権力側の身体化を経なければならなかった制度的な枠組みの影響、それらが本研究のなかで垣間見られたのである。

このように植民地朝鮮におけるスポーツは主導していくものの論理が反映され、身体化させていく機能を有するものであった。ここでの身体化はスポーツを実践する人、表象される人、その表象を共有する人々までをその範囲として想定される。そのため植民地朝鮮においてはその範囲の拡大までもが模索されることとなり、民族スポーツのような朝鮮半島における固有の身体文化までその範疇に含んでいこうとしていた点を付言しておきたい。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究では朝鮮半島における植民地主義とスポーツをテーマにスポーツにみられた植民地権力と民族主義の相克と緊張を歴史的な方法に基づき分析を行った。植民地社会の近代化のなかでスポーツという文化的実践が果たした役割と機能、それを単純化することはできないが、結果として植民地権力側の統合に結びついていった点は本研究で考察してきたとおりである。植民地社会が近代化（政治的、経済的、社会的）していくことは人々の生活が植民地権力によって保障されていくことにも繋がる。そしてこのことは民族主義者らが植民地社会のなかで民族の近代化を図ること、それ自体が植民地権力に回収されていく可能性を秘めていたものと捉えられた。植民地朝鮮においてスポーツという文化に着目した理由のひとつはこのことを端的に示すものでもあったからと言わねばならない。

ただ本研究においてはいくつかの検討課題を残したままではある。ひとつは日本がアジア・太平洋戦争へと突入していった1940年代、戦時体制が確立していくなかで植民地朝鮮におけるスポーツの役割、すなわちスポーツや身体文化がどのように植民地体制に与することになっているのかという点である。この点に関しては本研究では体系的に触れることができなかったため、研究に要する視角を構築したうえで今後更に詳細にみていく必要がある。

またもうひとつは本研究において言及するまでには至らなかったが、植民地主義の影響を理解しようとするならば、植民地であった地域の解放後の社会に

おけるスポーツの役割・機能を明らかにする必要もある。植民地支配を受けた側がその後の社会で宗主国とどのような関係にあり、植民地主義の影響がどのように断絶し、また連続・接続しているのかという部分に視角をおき、植民地期の遺産としてのスポーツが朝鮮半島においてどのような位置付けにあるのかを検討する余地が残されている。混迷していく解放後の朝鮮半島においてスポーツの果たした役割はいくつか想定される。本研究課題を深めるために今後はこの点についても研究を行っていかねばならないだろう。

## 【研究資料】

### 韓国スポーツの近現代史

#### －スポーツ記者趙東彪氏へのインタビュー調査－

長年韓国でスポーツ記者として活躍され、スポーツジャーナリズムに関わってこられた趙東彪さんに、ご自身のスポーツとの関わり、植民地時代から今日までの韓国スポーツの発展についてお聞きした。2日間、4時間ほどのインタビューであったが、細部にわたる大会や人物に対する記憶には、ふたりとも驚かされた。体調がすぐれないにもかかわらず、快くインタビューに応じていただいた。ここでの発言は、韓国スポーツ史の一つの証言でもあり、貴重な資料になるものと考えている。

- ・インタビュー実施日：2011年8月5日（金）、8月6日（土）
- ・場所：大韓民国京畿道軍浦市山本洞
- ・インタビュアー：西尾達雄（北海道大学）、金 誠（札幌大学）

2011年8月5日（金）16：06 インタビュー開始

#### 1. 趙東彪先生の経歴と著書について

西尾：お疲れのところ申し訳ないです。

趙：近頃、風邪を引いたん。咳が止まらない。（咳き込みながら）地震の被害はなかった。

西尾：札幌は被害がなくて。

趙：ぜんぜん揺れない。どこまで揺れた？大阪は？

西尾：札幌は震度4程度で、大きな揺れは関東までだと思います。

趙：新潟の方は揺れた？

西尾：新潟の方は揺れたようです。

趙：そう。

西尾：ところで、先生は、1925年のお生まれでしたよね。何月何日でしょうか。

趙：10月の6日。

西尾：あの学校は？

趙：学校はね、普成専門学校。

西尾：普成専門学校。

趙：1946年6月卒業。入ったのは1943年ですよ。

西尾：普成専門学校を出られたあとは？

趙：あとはね。1949年にKBSの記者公募があって、受かって、49年の2月に

受かったわけですね。5月、放送課長という人が、あの人、こちらのスポーツ放送の草分けなんですね。スポーツ放送のアナウンスメント。その方が運動記者にならないかということで、運動記者になって、それから、ずっと戦争中を除いて。運動記者はじまったのが1949年の5月だったでしょ。そして北から攻めてきたのが50年の6月25日なんですよ。ですから、それ以後、スポーツはなかった。それに私は兵隊にとられて、55年10月除隊でしょ。11月に韓国日報の運動記者になって、それ以来88年ソウルオリンピックまで、韓国日報、韓国日報および韓国日報の大きいスポーツ専門紙、日刊スポーツに勤めて、ま、それからラジオやテレビや何か古い媒体、今日までですね。だから60年近く、運動記者60年という経験談はね、書こうと思ったんですよ。49年だから、2009年ね。ところが怠けてばかりおって3分の2くらい脱稿して、まだ3分の1くらい、で書き収めなんだけど、なかなか筆は捗らない、さらに著碌して、この頃。定期的に月2本書いているんだけどそれで精いっぱいですね。それで週に1回、スポーツミーって言って地方の放送の5分くらい話しているんだけど、それで精いっぱい、なかなか本がね、書けない。

西尾：まず、あの私たちの聞きたいことも幾つかあるんですけど、先生のほうでぜひ我々に伝えておきたいということがあれば。

趙：皆さん、あの、韓国スポーツの発展史というのが聞きたかったって言ったんでしょ、こないだ。あれもね、実は1990年あたりまでの書いたのがあったんですよ。

私なりに恐らく1990年頃だろうと思う。その頃にまとめた韓国の近代スポーツ史なんですよ。スポーツ50年史の原稿をみせてあげますから、それ以後のことをまた書こうと思っただろうと思います。しかしそれ以後のことは時間が経たないと整理ができないから書いてなかった。それで、この題目はね、近代スポーツの上陸、ということからずっと書いてますから。もしも、私なりの、韓国のスポーツはですよ、それをお聞きしたいとおっしゃれば、これをコピーすればいいわけですね。265で終わってますから。読みづらいたろうけど。

これは47年のことなんだけど、あの、解放されて、その翌々年ですね。その年に初めて韓国の運動選手たちが海外へ出始めた。それが、ボストンマラソンで徐潤福っていう選手が優勝した。そして、それが4月で。9月にウェイトリフティングがフィラデルフィアでの世界選手権大会に出た。ま、そのとき田舎もんだから、どういうヘマを犯したということを書いているんですね。駄目だな、印刷が悪くて。彼なんか、偉いんです。南寿逸なんだけど、これは1939年にね、あの、ウェイトリフティングフェザー級で、明治神宮大会で世界新記録出したんですよ。あの当時はプレスとスナッチとジャークと3つありますが、

それに合計まで、合計まで4種目すべて世界新記録なんですね。それで日本のウェイトリフティング協会、驚いてね、あの、パリの国際ウェイトリフティング協会に、記録の公認を申請したんですよ。この人は幸いだったんですね。というのは、1939年ということはヒトラーがポーランドに侵攻した。もしもヒトラーがパリに向けて侵攻したならば、国際ウェイトリフティング協会の事務所はパリになかったはず。ところがパリは平和だったから日本の協会が申請したならば、40年の1月に、この人にね、これは認定すると。これは恐らく日本の記録は国際連盟に公認された最初のケースじゃないかと思う。これはね、持っているのは朝日体育賞なんですよ。あの時代は、あの、全国的な体育賞は朝日体育賞しかなかった。韓国人で朝日体育賞をとったのは孫基禎と南寿逸の二人だけ。それで随分、日本でモテたらしいですね。

## 2. 孫基禎選手の印象と逸話

西尾：先生はずっと孫基禎先生をインタビューされて。

趙：55年以来、付き合っていましたね。

西尾：そのなかで孫基禎さんについて先生はどんなふうな印象を持たれてますか。

趙：優勝して以来、あの人ほど恵まれた韓国のスポーツマンはなかった。随分恵まれた人で、もうちやほやされてね。それでも弟子がね、徐潤福でしょ。ポストンマラソンで、一応成功したわけですけど。ところがマラソンのスピード化にはついていけなかった。ま、それなりの人物ですよ。

西尾：さきほどあの徐相天という力道協会の役員をやっておられた、解放前に。

趙：ソ・サンチョン？徐相天(じょ・そうてん)。

西尾：あの御存じ？

趙：徐相天ですね。あの人は遠くから見たことありましたが、話したことはなかった。あの人の直弟子がいますよ。今生きてる。94歳で。金晟集という人なんだけどね。えっと、韓国は一番始めに出たオリンピックは1948年のロンドンオリンピックでしょ。あそこでミドル級で3位入賞した人で、あれが解放以後、韓国人が得た最初のメダル、オリンピックで。さっき会って昼飯いっしょに食べたんだけど。あの人は中学校2年生のときから、徐相天さんが中央体育研究所っていう、いうならばこの頃のフィットネスクラブですね。あそこに入門して、まじめな弟子だった。徐相天氏の教えにしたがって、いちいち消化して、あの人、58年まで、58年ということは第3回の東京アジア競技大会の、あの58年まで選手だった。そ、あの、1936年ベルリンオリンピック大会、あそこへ出ようと思ったんですよ。あのとき孫基禎さんが養正の5年生でしょ。



この人は徽文(フィルム)の5年生だった。そして東京でね、え、あれがあったんですよ、予選が、オリンピック予選が。出て行ったらば、あの人がその前の32年のロサンゼルスオリンピック、ミドル級の3位と4位との間の記録を出した。みんなびっくりしましたね、日本の役員がね。そしてバアっと。日本の選手たちの記録はね、はるかにおよばない。で未成年は参加できないきまりだったんですね。ウェイトリフティングの選手はね、怒らなかつたんですよ。36年のベルリンオリンピックに研究員だけが行った。彼がもしも李相佰さんという人を知ったならば、李相佰はあの当時、日本体育協会の専務理事だったから、李相佰さんを知ったならば、李相佰さんを通じて運動をいただろうに、ま、そういうコネをね、全然知らないから、そのまま失意の下に帰ってきた。ソウル駅に降りたら、みんな、プラスバンドやら、若い選手たち、あの学生たち出てきてポカポカやっとなるわけですね。何かと思えば、孫基禎を送る、その

...

西尾：壮行会か、何か？

趙：うーん、だったんです。ですから、あの、満州からくる列車に乗って、孫基禎さんは日本の合宿に参加するためにソウル駅を発つ。あの金晟集さんは失意の下に帰ってきたということですね。

西尾：非常に対照的な。

趙：ええ。そして6月に孫基禎さんは日本に行って、鎌倉の合宿を終えて、それから下関-釜山-ソウル-満州-シベリアということでベルリンに入った。今、孫基禎さんといえばね。2001年の12月かな。2001年の12月に、2002年にね、ワールドカップでしょ。2001年の12月に東京で日本と韓国の代表との間で親善試合があったんですよ。その当時、私はワールドカップ、サッカー協会の宣伝委員のなかの宣伝部か、委員会の委員だったから、その試合見に行かないか、ということで行ったんですよ。でもその前に孫基禎に話を聞こうと思って、というのは孫基禎さんの話が面白いんですよ。

昭和10年か、昭和10年に極東オリンピック大会というのがありましたよね。(昭和9年5月16, 18, 19, 20日にフィリピンマニラで行われる第10回極東選手権競技大会のことと思われる。)あの予選が東京であったんです。(全日本陸上競技予選会は同年4月14日、15日明治神宮外苑競技場で举行された。)孫基禎さんは5000m、1万mの、朝鮮代表として参加して、選ばれなかった。(この時1500m及び1万mの代表は柳長春で、1500mで2等、1万mで1等になっている。＜山本邦夫『日本陸上競技史』469～471頁＞)ところが劉約翰という力持ちがあるんですね。あの人は円盤の選手なんですよ。実力では日本で一番なんですよ、円盤投げで。あの人はね、その予選に出た。ところが思

い通りの記録は出なかった。投げたらばね、波型で波が遠くて、あまり円盤が伸びなかった。それでまあ、俺はダメだと、随分失望して、バツと蹴ったところが自転車、自転車置き場なんですね。(この話によれば、劉約翰は代表として選出されなかったことになるが、劉約翰は選出され、本大会では円盤投げと槍投げでどちらも4等に入賞している。〈同前469~475頁〉) 自転車置き場の一番はじめをバツと蹴ったらば、自転車がその、ドミノみたいにね、次々倒れてく。そういう話が面白いんですよ。そういう話を話してくれて、それをすぐその場で理解できるのはいくらないですね。こちら、リアクションがあるから、先生も話しやすい。だから一度会ったらね、話は長いんですよ。というのはあの人、膝が悪いからあんまり外へ出ない。も、いつもみたら壁なんですね。ま、ところが、その後輩に会ったらば、そりゃ嬉しいから一生懸命話すんですね。

例えばナカバラ・キヨシという早大出の中距離の選手があるんですけど。あの人、同時代なんですね。(当時の早大の中距離の選手は中村清だと思われる。後にマラソンの瀬古利彦の指導者として有名である。) そういう話とか。それから走り高跳びの選手なんだけどね、ちょっとヤクザっぽい、そういう人がおったんですね。孫さんはね、ヤクザのスラングを知ってた。私も初めて聞いた。そういうヤクザの社会のね、単語を知ってた。その人がね、ベルリンで随分かばってくれたんだそうですよ。ま、そういう話、聞いてくれる人があんまりいないから、会って、随分嬉しかったわけですね。3時間も4時間も話すんです。面白いし、話聞くの。

そして、孫さんのお宅に電話入れたらば、日本におるってんですね。日本には孫さんの息子おるんです。孫正寅ね。彼に聞けば、どっか行きたいとき、病院で医療保険で、あれ受けられるから、ちょいちょい行くんですね。そして、孫さんの、ソウルで、私東京いるから、孫さんに会いたいから、どこへいるんって言えば、今、入院してるって言うんですね。明日、試合だから、今日ですね、行ったんですよ、日吉に。えー、新宿(渋谷)からかな、小田急(東急)なんですね。小田急(東急)、で日吉。慶応の付近でしょ。日吉から降りてタクシーで行ったらば、井田総合病院って、あそこ行ったらね、6人部屋に眠った、壁の方向いてね、エビ型になってね。これが天下の孫基禎かっと思えば、随分悲しかった。

孫基禎さん、眠ってるから、起きるまで待つとった。したらば、起きてですね、どうして来たんだって、ま、かくかくしかじかで来ましたって、そうかって。少ししたら、孫正寅が来て、朝は孫正寅が出かけに朝の挨拶する、昼は嫁さんが来てちょっと世話して帰る、夜、夕方は孫正寅が自分の事務所の事務仕事してあとに来て、またあの世話して帰る。というのはホールがあって、そこ

の何階か知らんけど、そこにホールがあって、ホールでご飯が炊けるようになってるんですね。蒸して食べるんじゃない。で、ホールに行くには孫さんをフィルチャにその乗せて、そして押していってご飯を食べるようにしてるって。ところがみると糖尿なんですね、糖尿はね、端々がどっかに当たって痛い、移すのにフィルチャに移すのに足がね、足指がこういうふうにあたって、ベッドの柱に、あいたたーって、ま、そういうのも私としては悲しいし。ところがご飯を食べると、口は健啖なんだな、一生懸命食べる。それが悲しくて、それで別れたんですけど。

帰ってきて、プロのバスケットボールが始まったんですよ。12月くらいから。プロのバスケットボールが始まった。それで見物にいったんですね。そしたら当時のプロのバスケットボールの総裁がユン・セヨン（윤세영）って言って、この人はあのSBSの放送の、SBSの会長なんですね。だから、私あなたに特ダネをひとつ与えると、孫さんを取材しろと、孫さんを取材するためにはこうこう行けば会えるんだと言ったらですね、この人がバスケットの試合が終わる前に自分の放送局の報道の人間にね、早くそれを流せって言ったわけですよ、それで流された。それを聞いたのはあの三星、三ツ星。三星と、三星とは因縁があるんですよ。あの孫さんの兜あるでしょ。あの兜、買ったんですね。ま、買ったていうのは変だけど、うーん、孫さんが寄贈して、向こうの博物館に寄贈して、そして、あ、保管課かなんかですね、全部もらった。ま、そういう経緯があるんですよ。だから三星が立派な病院、経営してますね。あそこに収容しとったら、すぐに体力も... それを聞いたのは、その放送聞いたのはKALです、大韓航空の会長が聞いたんですよ。というのは、井田総合病院なんですよ、年末でしょ、ですから勤務する医者が少ない、勤務する看護婦さんが少ない。だからツテのある患者はね、退院してうちで1月3日まで過ごして、それからまた入院する。そういうこともあって大韓航空では特別なシートをつくって、逃げて、孫さんを迎えたんですよ。そして、ソウル着くなり三星病院ですね、あの病院へ入って、2週間過ごしました。そして、今、入院する必要はないんだと、あの、自宅療養すれば、あ、看護がね、看護週に2度、派遣して、ま、いろいろな、あの、例えば足なんかね、あそこきれいに洗ってくれるとか、あの治療してくれるとか、ま、そういうことで、月に1度病院に来て診断すればいいんだと、そういうことで決着した。

ところがそれから数週間たって、私に会いたいんだと言ったんです。したらばね、俺の故郷はお前も知っているとおり新義州だと、だから、あ、僕の家族の墓地はないんだと、できれば俺が死ねば国家有功者、国家に功労のある人の墓地があるんですよ、大田に。(1955年ソウルに国軍墓地として造られたが、65

年国立墓地になった。手狭になったため、79年に大田に造られた。)あそこに収まりたいんだと。それをしてくれないかと、それを運動してくれないか、ということなんです。分かったと、いうことで体育会の事務総長にあったんですけど、孫さんがね、こう言っとった、どうすればいいんだろうと言ったら、そりゃ、ちょっと難しいですね、というのはですね、大会で起案してうえに上げる、うえに上げるというのは体育部にあげるんですね。体育部から報勲処(報勲処：大韓民国の國務総理室の配下にある国家行政機関で、主な役割は愛国者と退役軍人に関する政策の立案と実施を行なうことである。)ってあるんですよ。報いる、勲、ところですね。あの、国家の独立士とか、そういう人たちの、あのすべてを扱うところなんです。体育会—体育部—報勲処—國務會議—それから大統領の許可が下りないとだめなんです。だからその17日難しいなと、ま、とにかく聞いておきたまえて言ったわけなんです。それが2000年の始めでしょ。その年に、国体がね、済州島で行われた。2002年の韓日ワールドカップが終わって、国体が済州島で行われた。国体っていうのは10月に行われる。終わりごろになって、娘さんから電話が、朝早く、電話が。趙さん、どうも変だと。お父さんが、ま、3日前、早くその、三星医療に行かなければだめじゃないかと。今、そこが三星医療になってる。三星医療では今日、明日危ないから、早く入院しなさいと、そういうことなんです。それで会長に言ったんですよ。体育会長が記者たちを集めて孫さんが危ないと、孫さんの願いは国家有功者の墓地に収まりたいと、ま、そういうこと言ったわけですね。そしたら、それがパアッと新聞に載った。時の大統領は金大中さんですね。あの人が別にスポーツには関心ない人なんだけど。私と年が同じ頃ですから、昭和5年から6年くらいか、孫さんの優勝の歓喜を味わった人なんです。まずは体育会ではKOC、KOC葬、体育会葬、体育葬じゃなくて、陸上競技連盟葬じゃなくて、韓国オリンピック委員会葬にすることに決定した。というのは、ま、この人は一応国際人みたいな人だから、外国にもたくさん知られているだろうから、KOC葬にすることにした。そして有功者の墓地に収まれるように起案して、え

...

西尾：上申をした。

趙：上申した。そしたら、ある途中にね、大統領がその忌中にね、これはね、ここに収めなければならぬと、彼はやはり歓喜した人なんだから、孫さんが優勝したときの朝鮮民族の感激というのはね、それはもう筆舌に尽くせない。韓国のスポーツは孫さんの優勝を期に、前から、ま、孫さんが優勝したのだからその下というのはあったんでしょう。けれど、それを期にパアッとね、あの、火がついたと言えらると思う、私は。ですから、大統領も感激した人ですか

ら。じゃ、あの人の思い通りに、あの、思い通り、生前の願った通りに許可してやれと、いつ墓地に、そういう話、孫さんとはそういういきさつあったんですよ。

西尾：36年といいますと先生が11歳の頃。

趙：小学校5年生。

西尾：小学校5年生ですね。

趙：あのときは興奮しましたよ。

西尾：学校ではどんなふうな伝え方がされたんですか。

趙：夏休みですから。学校では何の行事もなかった。なかったんだけど。

西尾：集まったりはしなかった？子どもたちを集めて何か話をするとかっていうことはなかった？

趙：孫さんがですか？

西尾：いえ、学校で。

趙：学校ではなかった。そういう催しはなかったですね。孫さんはね。随分注目されてですね。帰ってくる時、まともに帰って来れなかった。シンガポールに着いたらば、刑事が歩いてきて、用心しろと、東亜日報でね、日章旗抹消事件っていうのを起こしたと、お前のために、だからお前用心しろと、言動に、用心しろと。神戸へ着いたらば、神戸で刑事がまた歩いてきて、その刑事は朝鮮人だったですよ、用心しろと、身を慎めと。それでソウルにすぐ帰って来れなかった。東京まで行って東京から飛行機に乗せられて、あの飛行機は蔚山経由して、あの、皆さんが泊まるとるヨイドの、あそこに飛行場あったんですよ。あそこ元々。あそこに着いて警官に、警官の監視下のなかで学校の先生に渡されて、学校へ行けなかった、学校では歓迎会開こうと思って用意しとったんだけど、その学校の先生の宅にね、そのまま帰れと、今日学校に出るなど、そう言われたんですね。

そして、あの人、37年にね。普成専門に入学してるんですね。普成専門に入学して、当時、あの、朝鮮、おそらく朝鮮学生陸上競技連盟っていうのがあったんでしょうね。あそこで高等専門学校の対抗陸上競技大会があったんですね。400とか800とか1500とかに出て全て優勝するんですね。普成専門はね総合優勝するんですよ。ところが、一学期しか通えなかった。道を歩けば、注目して、孫基禎さんと。競技場に出て勝てばね、ワッーっと騒ぐでしょ、だから危ないんだな、上の...。で、明治に移られて、普成専門は一学期だけ通って、夏を終えて、9月にね、明治に移ったんですよ。明治では走らない。

西尾：そういう約束をさせられて？

趙：それ以来、走らない。それで、高麗大学で、これが普成専門の後身だから、

これで名誉卒業証書を与えたんですよ、あれはいつだったかな。分からない。

### 3. 植民地時代のスポーツ経験

西尾：最初にお伺いすることだったんですけど、先生は普成専門のときは何かスポーツに関わったことは？

趙：というのはね。私、入ったのは昭和18年でしょ。スポーツはなくなっていた。

西尾：そうですね。できなかつた。

趙：スポーツはなくなつたんですよ。

西尾：それまでは何か運動の経験は？

趙：それまではね。私は水泳を。というのは、韓国で水泳っていうのはあんまり普及していないんですよ。ところが私は中学校はね、3つの中学校を経た、ということですね。あの大邱から大田からソウル、これ卒業はソウルなんですけど、入ったのは大邱なんですね。当時ね、中学校でプールをもってる学校は非常に少ない。

西尾：そうですね。

趙：ソウルに来たところが、プールをもってる学校が2つしかなかったでしょ。大邱はね、日本人の校長が、あの、大邱高等普通学校、今のケイホク中学校なんですよ。校長がプールを作ろうってことで、父兄がお金を集めて、それでプールを作った。25m。それも珍しい。んで、あそこで1年入ったら、200m以上泳げないと夏休みに地方にうちのある大邱に下宿している学生は帰さない、で、大邱にうちのあるものは200m泳げるまで毎日来て泳がないとだめ。ま、そういう規定なんです。だから強制的に水泳覚えさせられたんです。ま、ご存じでしょうけど、水泳はね、一度泳げれば、もう終生泳げるから、ほんで、普成専門に入って、水泳部に籍を置いたんですね。ところが、あの当時、プールないから、ソウル運動場、あれは50mプールでしょ。あそこ水入れるの遅いんですよ。もう夏頃入れるかな。そしたら、4月末頃、漢江に出てきて漢江で泳ぐんです。こっち岸から向こう岸。それから、渡って来ながら、おうって遊ぶんですね。水中でね。ウォーターポロ。流れ流れてあの、鉄橋まで流れてくる。そして上がってくる。ま、そういうの。

西尾：漢江で泳がれた。

趙：うん。

西尾：それは別にしきりなどはない。

趙：ない。7時になれば、ソウル運動場でウォーターポロの試合がありますよ。そしたら私いつも駆け付けた。

西尾：結構活発に、その水球とか。

趙：性格が消極的だから。まじめですよ。

#### 4. 韓国のロンドンオリンピック参加について

西尾：さっきロンドンオリンピックの話ありましたけど、何か聞きたいことがありましたら。

金：そうですね。ロンドンオリンピックに参加するってことはすごいことだと思うんですけども、当時それこそ北との関係もこうぎくしゃくし出して、どのような経緯で参加できたのかなっていうのを知りたいんですけども。

趙：あのね。ロンドンオリンピックは開かれる、ということはみんな知ってるんです。いかにすれば参加できるのか、その方法を知ってる人はひとりしかいない。李相佰さん。あの人は日本のバスケットボール協会、創設した人で、日本のバスケットボール協会の推薦でもって、日本体育協会の理事になる。そして、1932年、ロサンゼルス第10回オリンピック大会のときは日本選手団の団長、平沼、という方が団長なんだけど、その人の秘書と団の総務を務めて。

西尾：平沼亮三さんですか。

趙：ええ、平沼亮三さんですね。あの人が団長で、あの人の秘書を務めて、そして通訳もして、そして団の総務。だから非常に貴重な人だったんですね。その人が昇進して専務までも、専務までになった、さらに...

日本のバスケットボール協会の会長はね、IOC委員であの人とともに東京オリンピック大会、1940年開催の。あれの運動のために世界中を回った。だから、オリンピックを、オリンピックに参加せんがためにはどのような手続きを踏まなければならないか、全て知ってるんですね。ところが、恐らく韓国ではあの人しか知らなかったですよ。うん、解放以後。みんなオリンピックに参加する参加するというんだけど、どうすれば参加できるか、ということを知ってる人は恐らくあの人だけだったんですよ。ところが、あの人日本体育協会であのように華々しく活躍したんだから、当然解放以後は親日派だと、韓国体育会の衆からは迫害されたんですね。体育協会も関与しないんだと、で、超然としたそういう立場とったわけ。ところがいろんな世論がオリンピック委員会を設立しなければならないということで、ぜひ関与してくれと頼まれて、Korea Olympic Committee、これの創立準備委員会の副会長に選ばれて、体育会とは縁がないけど、オリンピック準備委員会とは、副会長には参入したわけですね。自信はないけど、当時の規定としてはオリンピックに参加するためには5つ以上の国際競技連盟に加盟しなければならないと、前提にならねばならない。それで陸上競技連盟とか、ボクシングとか、レスリングとかウェイトリフティン

グとか、ま、そういう、あの、国際連盟、IFに加盟したわけ。

それから、あ、当時のIOCの副会長はアベリー・ブランデーさんですね。ブランデーさんと李さんとね、交友関係があった。というのは1932年のロサンゼルスオリンピック大会の番外競技としてバスケットボールを入れようとしたんですね。ところがアメリカでは、いやアメリカンフットボールのほうがいから、番外競技にアメリカンフットボールが採択された。バスケットボールは採択されなかった。ところがそれ以来、ブランデーさんと、その、はからって、是非とも36年のベルリンオリンピック大会にバスケットボールを正式種目に入れようと、とういことをふたりで画策して、それに入れたんですね。ですからブランデーさんと、その、親交があった。

で、同じ副委員長に田耕武という人がおるんだけど、この人、口八丁手八丁なんですね。英語はできるし、あの、米国育ちだから。ですから、その人、先立ててアメリカ行ってブランデーに会えと、あの人がブランデーに会って、下工作、韓国KOCがIOCに加盟する、した工作をみんなでしたわけですね。1947年の6月だったけかな。スウェーデンのストックホルムでIOCの総会が開かれる、そこでKOCが加盟することになった。それをせんがために田耕武、さっきの副委員長、韓国発ったわけですね。軍用機で、アメリカの軍用機で。その軍用機が日本の厚木上空で事故を起こした。遭難ですよ。死んだわけ。落ちて。行けない。で、急遽、あの、ニューヨークに李元淳という人おるんですね。その人に電話を入れて、田耕武死んだから、すぐストックホルムに行ってくれ、行ってくれということでストックホルムに行って、KOCがIOCに加盟したわけです。

ところが、KOCは朝鮮半島すべてのオリンピック運動を管理する、その本部はソウルにあるんだと、これが入ったんですね。そのKOCの憲章に、それが入ったんですね。それ以来、韓国は南北に分断されているんだけど、オリンピック委員会が必要だと。北のは認定しない。李相佰さんが、それを予めそれを、その、想定したのか、しなかったのかは知らない。けれど、李相佰さんのアイデアでもって、IOCの、いやKOCの憲章を定めたことによって北は当分オリンピックに出れなかった。それでロンドンのオリンピックに出れるようになった。それがね、ロンドンオリンピックに出てる人が、旅程がふた月、ひと月、うん、まずソウルを発って、釜山に泊まって、日本に渡って、東京に入れなくて横浜に行って、横浜から船便を待って、上海行って、上海で一度降りて、上海から香港まで船便で行って、香港から2グループに分かれて、バンコクーカラチーテヘランーカイローローマ、それからアントワープ、それからロンドンですね。で、ひと月。



西尾：たいへんですね。

趙：だから船の上で練習したらしい。降りるなり練習したり。ところがちょっと早く着いたんですよ。ひと月くらい前に。だから現地で現地に適応する、そういう期間はあった。で、さっきの南寿逸、世界記録出した人だとか、三段跳びの金源権っていう人がおるんですよ、その人はね、1939年オーストリアのピエンナで世界大学生陸上競技選手権大会があったんですよ。あそこ出て走り幅跳びと三段跳び優勝したんですよ。

西尾：ユニバーシアド。

趙：ユニバーシアド。日本は1928年のアムステルダムオリンピックで織田幹雄さんでしょう、それから1932年のロサンゼルス、南部忠平さんでしょ、1936年の田島直人さんでしょ、三段跳びに関して3連勝なんですよ。だから三段跳び、日本のお家芸だ…。その次、東京でオリンピック開かれれば、日本が優勝しなければならない、お家芸だから。誰か、1939年に金源権が優勝したから、金源権。その当時ですよ、世界最高記録は田島直人の16mですよ。この人、15m83、跳んだんですよ。ですから世界最高記録、当時の。で、金源権だと。ところが運の悪い人、悪い。さっきの南寿逸だとか、金源権とか。当然、金メダル獲れるだろうに獲れなかった。それから戦争終わって48年でしょ、ふたりとも失敗した。南寿逸は4等、金源権、予選通ったかな？も、そういうことで。

西尾：その解放前にそういう記録が学生の間で広まっていくっていうのは、かなり陸上競技の水準なり、力道、ウェイトリフティングの、その、水準が高かったという…

趙：高かった。

西尾：その背景は？

趙：西尾さんね。ちょっと聞きづらいただろうけど、言えば。あのう朝鮮では小学校6年、小学校、普通学校って言ったでしょ。中学校にあたる教育課程5年課程がね、高等普通学校でしょ、養正高等普通学校。その高等普通学校、商業と、それから農業学、工業学はあんまりなかったけど。ま、中等教育機関ね、比較的、あの、生活水準高いんですよ。貧乏じゃ、勉強させられないから。だから勉強しながら、のんびりスポーツを楽しむ。というのは彼らには希望がない。随分優秀じゃないと朝鮮総督府の官吏にはなれない。官吏になってもいいところまでは行けない。どうせ日本人の走り使いやとなれば、まあ、うちは食えるんだし、ま、適当に暮らして、ま、死ねばいいんじゃないかと、ま、こういうことが、大体その当時の中等学生の中に蔓延った気質なんですよ。だから、じゃあ、ま、スポーツでも、ということでスポーツはね、随分普及しと

った。この頃とは違いますよ。この頃は勉強ばかりしたり、運動ばかりしたり、それでしょ。この頃と違ってスポーツはその当時ね、中等学生の間にはね、随分、その、普及しとったと。それで養正なんかでもね、陸上競技部員が多かったでしょ、比較的。陸上競技部員が多かったり、バスケットボール部員が多かったり。

西尾：サッカーも、サッカーもそうですね。チュッグ。

趙：やれば勝てるから。日本と当たって勝てるから。だから日本と当たって勝てるから、さらに励む。それに孫基禎さんが優勝したでしょ。じゃあ、素質はあるんだと、一生懸命やろうじゃないかと。

西尾：先生なんかもやはり小学校から中学校にかけてはそういうふうな雰囲気は。

趙：私はね。大田にはプールがないでしょ。さらにソウルもプールがないでしょ。ですから水泳はね、私は選手じゃなかったからね。ただ普成専門に入って、水泳部に入って、あのときもスポーツはなくなったんだから。

西尾：あ、そうですね。

趙：試合もない。

西尾：だんだんこう盛り上がったのが衰退していく。そういう経過もずっと体験されてきている。

趙：ええ、見ていますね。

## 5. 朝鮮神宮競技大会について

金：植民地時代に朝鮮神宮競技大会というのが開催されてたと思うんですけど。

趙：ええ、一番権威がありましたよ。一番権威がありました。というのは、あそこでいい成績を出せば、明治神宮大会行けるから。タダで、タダで行けるから、朝鮮代表として。ま、いわば遠征ですよ。だから随分水準が高かった。

西尾：これはスポーツマンにとっては全国大会に出れるという、そういう気概を与えるようなものであったということでしょうかね。そのときは日本人と戦えるというふうなことも意識としてあったんでしょうか。

趙：それも一部あったんでしょうけど。

西尾：明治神宮大会に出たっていうことがひとつの、ま、名誉みたいなことになるんでしょうか。

趙：出て成績良かったですよ。バスケとかサッカーだけじゃなしに、あの...

西尾：テニス。

趙：テニス、テニスとか、もちろんウェイトリフティングとか。競技の数、少ないですね、この当時。

金：神宮競技大会を見られたことありますか。

趙：あれはね。朝鮮神宮奉賛体育大会。

金：そうですね、はい。

趙：あれがね、明治神宮大会よりか歴史が古いんじゃないんですかね。

西尾：1924年からですね。

趙：明治神宮。

金：朝鮮神宮は1925年からですね。翌年ですね。

趙：1年遅れとるかな。あれはね。ソウル運動場の竣工と、竣工の年に第1回朝鮮神宮大会が開かれた。

西尾：彼はそれを論文に書いているんですよ。朝鮮神宮大会の。

趙：第1回には朝鮮人は出なかった。第1回の大会には。第2回から出始めた。はじめのうちはあまり活躍はしなかったですね。あとで道対抗になって、それでいいのが出たでしょ。道対抗でね。

#### 6. 朴正熙によるスポーツの奨励

金：もう少し時代を経て、朴正熙政権のときのスポーツ政策の話を少しだけお聞きしたいんですけれども。何かご存じのことはございますか。

趙：朴正熙。

金：朴正熙のときのスポーツ。

趙：朴正熙さんはね、スポーツを奨励しましたよ。うーん、1961年でしょ、朴正熙さんが政権獲ったのは。1950年というのは、50年代は、朝鮮戦争の煽りでもって随分スポーツが衰退した、そういう時だったんですね。軍がなければ恐らくスポーツは随分、命脈をね、維持できなかつたと、私は思います。ところが軍がね、軍と言えば、陸軍・空軍・海軍、それに海兵隊なんだけど、その軍が士気を高める、士気が高まるかどうか知らんけど、ま、士気を高めるということで、え、スポーツを奨励した。それで筋のいい選手たちはね、軍にとられて軍のスポーツチームで、よって、それによってスポーツを維持できた。軍では、軍と言えば、陸上競技・バスケットボール・サッカー・レスリング・ボクシング・射撃・バレーボール、それから一部スピードスケATING、という、あの、スポーツがね、軍の庇護を受けたわけ。それでもって維持ができた。1953年に戦争が終わったんだけど、1954年にサッカーのワールドカップがあった、スイスで。んで、極東予選、日本との間で行われたんだけど、当時の韓国代表の大部分が軍所属選手だった。だ、ワールドカップ予選がホームアンドアウェーでしょ。ところが、李承晩大統領は反日主義者ですから、日本人は上陸できない。そういうことで東京で2試合みな行った。で、第1戦が5-1で

しよ、韓国勝った。日本があの当時ね、竹腰重丸っていう人が日本サッカー協会の専務理事だった。うーん、3月で東京、曇りが降ったんですね。グラウンドがめちゃくちゃ田圃みたいに、蹴ってもボールが走らない。こちらの選手は軍人だから、パワーがある。走ることに、それで先に1点とられたけど、力が続かないから5-1で負けた。第2戦は1-1で引き分けた。それで1勝1分で韓国はスイス行ったんですよ。スイス。ま、そういうことですね。ですから、軍の力によって韓国のスポーツはね、その...

西尾：命脈を保ったという。

趙：命脈を保った。ところが、50年、朝鮮戦争終わったでしょ。韓国に、ま、例えば構造的にね、最上部が実業団チームがあって、ま、その次が大学、高校、中学、ま、こういうヒエラルキーっていうんですか、なんだけど。産業がね、もう全然動かないからチームが少ない。せいぜい銀行、数個とか、それから、実業チームをつくれる、会社、あの、団体が無いわけです。だから韓国のあれはね、スポーツは随分衰退した時期なんですね。50年代後半は。ですから50年代の後半と言えば、メルボルンオリンピックとか東京の第3回アジア競技大会、ま、そういうことなんですけど。意欲はあったんですけど、東京での成績はあんまり良くないでしょ。せいぜいボクシングとか、陸上競技でも思いがけず、そのマラソン。それから走り幅跳び勝ったんですよ。あのとき、あれは。ボクシング2、3階級。サッカーも優勝できなかった。バスケットボールも優勝できなかった。バレーボールは勿論日本にやられた。あの当時は日本が一番強かった。それが朴正熙になって、強いチームをつくり始めたんですね。例えば韓国の電力会社とか、韓国海運、海運でしょうね、とか。石炭公社とか。すべてその、将軍がね、社長なんです。それで60年代の初めに実業チームで選手を獲り始めた。それで韓国のエリートスポーツが少し芽生えて、64年の東京オリンピック大会。あそこでは200名を越える大選手団を送ったんです。あれはね、在日僑胞がぜひとも大規模な選手団を送ってくれと、開会式に北が出るんだと、北より大きい選手団を送ってくれないとダメだと、言うんで。それで、近代五種まで出たんですよ。それから、これ何んていうんですか。

西尾：ボートですか。

趙：ボート。ボートも出たんだから。全然弱いのに。とにかく大規模だった。北も出たんですよ。ところが北はね、新潟から上野駅を経て、それから国分寺っていうのかなあ、朝鮮大学の寄宿舎に入ったんですよ。向こうの目玉がね、辛金丹(シン・グムタン)、辛金丹という女、女、あれが中距離、ですから800と1500のね、世界記録保持者なんだな。彼女ができれば金メダル。こっちには金メダリストいないですよ。ところが彼女は出れなくなった。というのは、そ

のいきさつは知ってるでしょ。

西尾：GANEF0に。

趙：うん。GANEF0。GANEF0に出たんです。失格です。向こうに怒って帰ってしまった。そのときに辛金丹の親父がソウルにおるわけです。セブランス病院の、セブランス医科大学の、病院の守衛なんだな。その中央情報部で彼を連れて、日本に行ったんですよ。親子が会った。涙を流して別れたんですよ、上野駅で。上野に朝鮮、朝総連のなんか会館があったそうです。あそこで会って、離れ離れになって。民族の悲劇やった。

で、韓国、出たんだけど負け続け、で、銀メダルをふたつ獲って、銅メダルひとつでしょ。銀メダルというのはボクシング、ボクシングのバンタム級、それからレスリング、チャン・チョンソンって、あの、あのふたりが銀メダルで、銅メダルはひとつ。それは在日僑胞の柔道、金義泰。彼は天理大学ですよ。天大って柔道強いから。それで、ときの会長は、あ、閔寛植っていう人なんだけど。閔寛植ね。国会議員なんだけど。これは帰っても散々やられたわけですね。なんだ、大規模の選手団つくって行って、散々負けて帰ってきて。で、彼は怒って、泰陵の選手村だけ。それからコーチの質を高めなければならないとコーチアカデミーつくって、そして有望な選手を、その、発掘しなければならない、新人発掘大会、これは全国的な規模であれを行った。ところが、ま、それを許したんだから朴正熙はスポーツを奨励したことになりますね。

例えば泰陵の選手村なんかね、あれは文化財管理委員会、文化財庁かな、ま、そういう政府機関が、あの、管理してるんです。というのは、泰陵と言うから皇帝の陵でしょ。だから王の陵があるわけ。だからあそこは手を入れたらいけないところなん。ところが手を入れてもいいという許可を与えたんだから、朴正熙が。だから朴正熙は、ま、スポーツを奨励したことになりますよね。あれは決定的な韓国のスポーツ水準を高めるためには、あれの存在が、あの、決定的な役割を果たしたんだから。

西尾：それを提言したのが閔寛植さんなんですか。

趙：ええ。あの人が、あの、大統領に訴えて、朴大統領は、まあよろしいと、やりたまえ、いいと。たが木を切っていけないよ。木がいっぱいある。まあ、そういうことで黙認したわけ。

西尾：その時期からあのアーチェリーなんかも強くなってるんですか。

趙：そうですね。それはね、アーチェリーが強くなったのは70年代。78年。

西尾：からですか。

趙：うん。78年から。

西尾：それはなんか理由があったんですか、強くなる背景？

趙：あれはね。ハードトレーニング、ハードトレーニング。うん。あの、彼女らにもね、1万m走らせるわけです、朝。そしたら、もう、体もたないでしょ。1万m走らせるわけは、アーチェリーは腰が固まらないといけない。腰を固めるためには足が強くなければいけないということで、1万m走らされた、毎朝。それにね。泰陵の後ろに仏岩山というちょっと険しい山あるんです、あそこ毎日登るんです。時間を測るんですね。何分で下りてくるか。夜中に、夜中の2時に墓場に行って...

西尾：肝試し。

趙：肝試し。ま、そういうハードトレーニングです。その結果、78年のアジア大会に初めてアーチェリーが採択されるでしょ、正式種目に。北はその前に72年のミュンヘンオリンピック大会。あそこにアーチェリーが採択されたんだから、あのときから出てるんですよ。北はメダルを獲れなかったけど、5位とか6位とかには入った。ですから、70年、歴史は韓国より古かった。韓国の発展によって、女の個人戦で金珍好(キム・ジンホ)、あれが個人戦に優勝したんですよ。北が3位だったね。んで、優勝して3位に握手しようとして、握手断られた。

西尾：それは何故、女性のほうのアーチェリーだったんですか、男性ではなくて。

趙：コーチでしょ。

西尾：コーチが？

趙：うん。コーチ。あの、チュン・ガンホというというのがコーチだった。あれがもう激しい奴でね。あれの下に随分育ったんですよ。

西尾：その女性を集めたっていうのは何か理由があるんですか。男性ではなくて。

趙：男性も良かったでしょ。男性も良かった。

西尾：あ、男女とも。

趙：男女とも。

西尾：あ、そうですか。

趙：男が花開くのはちょっと遅かった。

西尾：女子は今でも強いですよ。

趙：女子今も強い。男も強い。

西尾：韓国、アーチェリーに力入れるっていうのは何か理由があるんですか。

趙：勝つから。勝つから、力入れるでしょ。ところがね、ここ出身のコーチが世界に広まると。それで、今のコーチがね、後輩で、向こうが先輩で。だから国際競技場なんかで会いますね、そしたら、向こうが、おいって言われて、

だんだんだんだん、この、あの立場がね、弱くなって。力は随分、その、外国人強くなってるとでしょ。中国なんか男女ともこの人でしょ、コーチが。

18:04 インタビュー終了

2011年8月6日(土) 10:58 インタビュー開始

## 7.ソウルオリンピックと韓国社会

趙：あの、あの人(朴正熙)ね。79年の10月にやられましたね。その前にね。78年、世界射撃選手権大会が韓国で開かれたし、それから79年の春にはね、世界女子バスケットボール選手権大会が開かれた。それまで韓国のスポーツはだんだんだんだん上がり目ですね。76年のモントリオールオリンピック大会で金メダル獲ったでしょ、レスリングでね。ヤン・ジョンモ(양정모)。フェザー級の選手がね、韓国は48年のロンドンオリンピック大会参加以来、初めて獲った金メダルだったね。と同時に、あの大会では柔道とか、ボクシングとか、銀も銅も獲ったんで比較的成績良かったの。ま、そういう具合にだんだんだんだん上がり目だったんだけど、韓国で世界選手権大会を開いたことはなかった。

ところが、朴正熙さんの末期にね、あのひとつの世界選手権大会に開いたでしょ。さらに彼が亡くなる直前にね、88年のソウルオリンピック大会、あれを誘致したいと体育会のほうが提起したらば、「しろ」と言って許可を与えたんですね。ご存じのようにオリンピック大会と言えば世界のスポーツマン、技量を問わず、宗教を問わず、政治のイデオロギーを問わず、全て迎え入れるのが条件がつかないから、これは国家的な後援がなければ開かれないのがオリンピック大会でしょ。ま、それを開いてほしいと、誘致してほしいと、許可したんだから、ま、彼は彼なりにスポーツに関しては理解があったし、奨励したんだと言えますね。昨日うちに帰ったら、そのこと言えばよかったんだと思ったんです。

金：先生はソウルオリンピックのときはどういうふうな活動をされていたんですか？

趙：私。日刊スポーツの論説委員だったし、その、組織委員会の競技委員会かな？組織委員会の委員だったと思う。

金：先生もソウルオリンピックは感動されました？

趙：うん、良かったね。あれはね、韓国を明るくした。というのはね、その前は韓国には夜間通行禁止令っていうのがあった。えっと、12時から暁の4時まで4時間、一般人は外に出歩けないの。それは、解放以後、左右の対決が激しかったし、それから朝鮮戦争以後、常に、その、北の襲撃が何かに備えなければならぬということで、治安の維持のためにね、12時から暁の4時まで一般

人は通行禁止だった。ところがオリンピックを誘致するとなるとそういう制度があったら困るね。だからそれをなくした。それで一般人の生活がね、少し明るくなった。それに朴正熙さんのときはね。白黒のテレビだけが一般に市販されてカラーテレビはね、一般人には売れなかった。作らない。ところがカラーテレビ、あれが輸入されて、つくられて、ということで、テレビをつくるから。80年のモスクワオリンピック大会、あれにはアメリカ参加してませんね。それで西ドイツとか、日本とか韓国もアメリカについて参加しなかった。で、84年のロサンゼルスオリンピック大会、あれにはソ連が報復の意味で参加しませんでしたね。で、キューバとか、北朝鮮とか、あ、26国がボイコットした。ところが88年のソウルオリンピック大会には、北朝鮮、キューバ、エチオピアなどは参加しなかったけど、ソ連が参加した。東ドイツも参加した。ということで、東西融合のオリンピック大会だというね、8・8大会だと。と同時に韓国としてはいわゆる北方外交というんだけど、その道が開けた。あの大会終わって、ハンガリーと国交結んだりとか、それから・・・ソ連と国交結んだりね、したから。それに世界にね、コリア、世界にコリアを宣伝する、こう、まあ、チャンス、好機だった。こういう国だったのか、オリンピック開くとなると、随分進んだ国なんだろうという、そういう認識を与える。

それに海外に住む、ま、韓国に住む人に与えた感激も大きかったんだけど、海外に住む僑胞たちにね、スポーツに対する交流というか、そういうのを与えた。開会式なんか良かった。良かった。ま、そういうことですね。8・8オリンピックの効果っていうのは大きかった。

金：韓国における在日コリアンのイメージってすごく悪かったと聞いたことがあるんですけどソウルオリンピックでそういうのも変わったんですかね、そういうのはないですか？

趙：あのときね。在日僑胞はね。随分お金集めて、寄付しましたよ。組織委員会に。随分巨額だった。額が多かった。それで今ね、国民体育振興公団がね、そういう団体があるんだけど、そこでは競輪をしたり、それから競艇か、競艇をしたり、それから体育くじを売ったりなんかして随分そのお金をかき集めてるんだけど、その公団のね、公団のつくったもともとの基金は在日僑胞が寄付したお金でもって、ちょっと余ったんだから、大会を、8・8オリンピック開いてちょっと余ったんだから、その余ったのが在日僑胞が寄付したんで、寄付した額が多かったんで、それも加えて余ったわけ。その余ったお金でもってその公団の基金として建てて、その公団がさらにさっき言ったような事業を開発して、韓国には16の市と道があるんだけど、市・道ごとに大きな近代的な体育センターをつくってスポーツの一般化に努めてるし、それから、今そこからお



金が出るでしょ。そしたらそのお金でもって体育会を補助するとか、ま、そういうことやってますよね。その金額が随分大きい。年々。それはすべて8・8オリンピックを開いた副産物なんだな。

## 8.現代韓国の体育・スポーツ振興

西尾：先生、昨日の話で、朴正熙時代はですね、スポーツ振興に積極的だったと話を伺ってですね、その目的として国威発揚という言葉を書いていますよね。

趙：うん。それもあるし。それからスポーツでいい成績を取れば、国民の団結...

西尾：統合。

趙：ええ、に寄与しますね。それにさっき言ったんだけどいろいろな余得があったわけです。

西尾：先生、60年代、70年代というのはそういう政策が中心で？

趙：ええ、まあ、そういう政策中心、政策のなかのひとつですね。

西尾：選手はやっぱり、選手を中心に競技力を向上させる、それが中心で、80年代、8・8オリンピックの後ぐらいに国民体育の振興と、一般国民の...

趙：ま、少し余裕が出来たんだから、毎日山に登るとか、それからいろいろなスポーツ政策が出来たんだから、それを利用して健康、国民健康も力を入れると。今ね、国民生活体育協議会という団体があります。ま、スポーツに関してね、大きな団体はといえば、さっき言った公団、体育振興...、体育振興公団、あそこからお金を供給しますね。それから、そのお金をもらって、活発な事業をしてるのが体育会と、それに国民体育振興...、国民生活体育協議会というのがあって、これは、あの、体育協会に非登録選手たちをかき集めて、ま、やってもらってね、これは随分あの範囲が広いんですよ、全国的に。室内とか、ゲートボールとか、そういうのもやってますから。随分広いんです、全国的にね。この組織はすごい。

西尾：「ピョンセンチュエク(平生体育)」という表現は使わないですか？教育のほうでは「ピョンセン(平生)教育」という表現がよく使われるようなんですけど、体育では生活体育という...

趙：センファルチュエク(生活体育)、はい。

西尾：のほうが表現としては多いんですか？

趙：そのほうはあまり詳しくないんですよ。ですから確かね、あの団体が始まった当時は生活体育と言ってましたね。ママさん、ママさんハッキョとかね、ママさんバレーとか、ママさんバスケットボールとか、それから早起きサッカーとかね。ですからね、あれは広いんですよ。ちょっと生活に余裕ができたと

いえば、ま、そういうスポーツがね、好きなんだから、テニスも。

西尾：それが広がってくるのが 90 年代以降。

趙：そうですね。山登りとか。

西尾：韓国の方はよく山登りしますよね。あれは昔からそういう習慣があったんですか？

趙：じゃないでしょう。

西尾：最近ですか？

趙：ええ。

趙：近頃の電車に乗ればね、随分その立派なリュックサックしょってるでしょ。

### 9. テコンドーの国際化

金：88 年のソウルオリンピックでテコンドーが、種目として、あれは正式種目ではないですね。

趙：正式な種目じゃないですね。デモンストレーションとしてやった、やったのかな。デモンストレーションだったでしょ。

金：テコンドーのことなんかについてはご存じないですか？オリンピック種目に導入されていく過程であるとか、そういうことはご存じないですか？

趙：テコンドーはね。72 年のミュンヘンオリンピック大会のときに、ちょっと顔見せがありましたね。それからテコンドーをオリンピック種目に採用させようと随分努力した。で、8・8 のときには、ところがそのテコンドーは 76 年、80 年、84 年とみんな外国で開かれたんで、それは番外競技でもなかった。88 年にソウルオリンピックのときに番外競技として行われた。あとは 92 年、バルセロナでは行われなかった。96 年はどうかな？私、行けなかったから。

金：シドニーで正式種目...

趙：シドニーで種目だったんでしょ。シドニーでしょ。シドニーであの、正規の種目になった。

金：テコンドーで、金雲龍さんという方がいらっしゃったと思うんですけど、非常にあの政治的にも力を持った方だと聞いたことあるんですが、金雲龍氏については何かご存じではないですか？

趙：あの人に対しては毀誉褒貶がね、多々あるんですよ。政治とかがあまり強引なんで好まない人もいるし、追従してあの人と行動をともにする人もいるし、ま、結局はあの方は、やられてね、え、失敗するんだけど、テコンドーをオリンピック種目に採択させたというのはあの方の功労でしょ。1975 年にね、第 1 回世界テコンドー大会、選手権大会をソウルで開いて、あの時に、あの、オスカー・ステイト (Oscar State) という、あの、GAISF (Association of

International Sports Federations) という団体ありますね。あのスポーツ、いろいろなスポーツ統合した団体がある。GAISF という。いろんなスポーツを統合した団体があります。その事務総長がオスカー・ステイトという英国人で、あの、ウェイトリフティングの、国際ウェイトリフティングの事務総長だった。それとボビー・ナイドゥ (Bobby Naidoo)、これも英国人なんだけど、インド系の英国人ですね。これは AIPS (Association International de la Presse Sportive)、世界スポーツ記者連盟、の事務総長だった。このふたりがね、75年のソウルで開かれた世界テコンドー選手権大会、あれに招待されたんですよ。で、金浦の飛行場に降りて、タイコンドなんか全然知らない、その韓国に着く途中で東京で日本の記者にタイコンド知るとるかと言ったら、全然知らない。あんまりその好意的な、そういう態度じゃなかった。ところが3日ほどソウルへ泊まって、大会を見て、帰るときはフニャフニャになってね、うん、あれは素晴らしいスポーツだと、賞賛しながら帰って。彼らを招待したのが金雲龍です。金雲龍は英語が上手なんですよ。それに我が強い。あれから国際化に手を染めたわけですね。ま、その結果が2000年のシドニーオリンピック。それみると随分長いね。75年から。

#### 10. 戦時体制と体育・スポーツ

金：また話が飛んでしまうんですけども、先生、あの1940年代の、いわゆる日本の戦時体制がどんどんこう固まっていくなかで、朝鮮半島のスポーツ状況ってというのは、これは、ま、すごくやりづらくなってきているような状況だったと思うんですけど、そのときの先生、ご記憶とかがあれば...

趙：40年、41年は解放以前の韓国のスポーツの黄金時代じゃなかったかな。朝鮮の。ま、中等学校ね、いろんな中等学校を基礎にして、それ基盤なんですよ。で、孫基禎さんの優勝とか。日本人に勝てるんだから。例えばね、1938年から1940年まで全日本総合バスケットボール選手権大会あるんですよ、1月のはじめに。それを普成専門がね、3連覇した。38、39、40と。えっと、38年は37年に選手かき集めて、彼らをトレーニングして、38年1月、東京で行われた全日本総合選手権大会出たわけですね。あの当時は高等普通学校が5年制だから、高等普通学校を卒業すると何歳？19歳かな、18歳かな？19歳かな。20歳ですよ、20歳で髪の毛も伸ばしていない、専門学校1年生だから。そういうのがいて優勝したんだから。相手は東大とか、京都大学、京都帝大とか。それから学士クラブって一般の自治区チームもあるし、それ相手に優勝したんだから。朝鮮のスポーツがね、一番盛んだった時代じゃないかな。昨日言った金源権、三段跳び。あの人は39年に普成専門学校の2年で、え、ユニバーシ

アード優勝したでしょ。それからあの人が40年に慶応大学入ったんですよ。41年が彼の全盛時代。だから40年、41年というのは戦前の朝鮮のスポーツの黄金時代。サッカーは日本に行けば勝てるしね。ボクシングは強いし。レスリングは明治大学中心にね、うん、いろいろな有望な選手が出てくるし。だからそっちは軟式庭球、あれ強かった。そういうことですね。

西尾：42年以降はちょっとこう衰退してきますね。

趙：ダメですね。敵性スポーツだから。

西尾：43年には完全に中止されますね。

趙：ただね、43年の2月までは、あの冬のスピードスケートのあれがありましたから、あそこまででしょ。

西尾：それが最後くらいですね。

趙：それから国防競技になった。国防競技っていうのは土嚢担ぎとかね、手榴弾投げとか、そんな。

西尾：先生もなさったんですか？

趙：やりましたよ（笑）。

西尾：たいへんだったですね。壁を攀じ登ったりとか、そういうのもあったみたいですね。写真でしか分からないですが。

## 11. 皇国臣民体操と武道教育

金：先生、あの、皇国臣民体操っていう木剣とか木刀を使った体操が植民地期にやられていたっていう話があるんですけど、先生見たことなかったですか？

趙：いや、しませんでしたね。銃剣術、銃剣術随分やらされましたよ。

西尾：木刀を、木剣、棒をこう持って剣道のかたちを体操でやるっていう。

趙：そういうのはやりませんでしたね。

西尾：37年の10月にそれがつくられるんです。37年の10月っていうと先生は？

趙：37年？12、3歳、昭和10年ですね。

西尾：12年ですね。

趙：昭和12年。あの日支事変がはじまった年ですね。やりませんでしたね。

西尾：広がっていくのが38年頃なんですけど、初等学校を中心に広まっていたっていう。

趙：朝鮮にはね、まだ広まっていなかった。

西尾：それはね、先生、朝鮮でつくられたんです。

趙：そうですか。

西尾：あの皇国っていうファングシンミンチェジョ。

趙：あのね、1937年と言えば、僕、小学校の6年生でしょ。ところが普通学校なんだけど。普通学校で剣道はね、全然やらない。武道は全然やらない。普通学校では。で、高等普通学校に入れば、剣道と柔道に分かれて、武道の時間が週に2時間からあったんだけど、あのときもやらなかった。

西尾：あの皇国臣民の誓詞っていうのは読まされました？

趙：随分読まされた、毎日、毎日。

西尾：それはやってるんですね。

趙：毎日。朝会、朝の朝会にね。

西尾：その皇国臣民の誓詞を体現するっていうか、体で表したのが皇国臣民体操だっていうふうに歴史の史料には書いているんですけど。

趙：それ嘘だね。朝鮮人の学生はそれやらされなかった。それやった学校もない。

西尾：そうですか。

趙：私は中学校3つ行ったでしょ。大邱で入って、大邱公立、それから大田なんだけど、これは日本人の学校だったんですね。日本人が90名で朝鮮人が10名だった。そこでもやらなかった。それからソウルへあがってきて城南中学校っていう中学校、朝鮮人だけの中学校で、そこでもやらなかった。

西尾：初等学校時代は、ひょっとしたら先生が卒業された後に広がっていったということはないですか？

趙：恐らくね。木刀でしょ。木刀、各々がひとつずつ持たなければなりませんね。あれも高いと思うんです。高かったと思う。

西尾：それもなんか簡易な木材で竹刀のようなかたちで広げるっていうふうなことは書いてありました。

趙：竹刀でも高い。竹刀でも高いんですよ。というのは竹刀の柄のほうは革でしょ。竹の一番先に革でしょ。革はね、あの当時、革は高級品です。すべておさえてるから。私はあの高等普通学校入って、大邱の、ずっと剣道だったんです。武道の時間はずっと剣道だったんです。ですからそれやったらね、知らないはずがない。

西尾：多分、あの、剣道とか武道やってるところではやってないと思うんですね。皇国臣民体操は。その初等学校を中心に広めていくという。

趙：そうですか。

西尾：先生の後の世代かも知れないです。37年で12歳っていうことは13年にはもう中等学校。13年以降はソウルにずっといらしてたんですか。

趙：大田。大田中学校。

西尾：13年は大田ですか。

趙：ええ。12年で大田中学校に移って、それから15年にソウルへ。親父がね、親父の職場の関係で。

趙：「われわれは皇国臣民なり。忠誠以て君国に報ぜん」って（笑）

西尾：覚えさせられてるんですね。

西尾：高等女学校、日本人の高等女学校、京城第一高等女学校で皇国臣民体操をやってる写真はあるんですよ。

趙：そうですか。

西尾：38年には広まっていってると。

趙：大田中学ではしませんでしたよ。

西尾：ああ、そうですか。

金：やはり、あまり普及していない...

西尾：可能性はあるね。

趙：大田中学校はね、市原っていう人が、五段なんだけど、あの人が剣道の先生だったんだけど。大田中学でしませんでした。

西尾：剣道はやはり日本精神を重視するということか、そういうものとして行われた？

趙：あの、大田はね、忠清南道でしょ。高等普通学校はひとつ。それから中学校はひとつ。中学校っていうのは日本人が通うんですね。高等普通学校は公州にあったんですよ。それから大田には道庁所在地とか、鉄道の中心とか、そういうんだから大田には日本人の中学校がある。ところがだんだん朝鮮人も増えるから、ま、入れようじゃないかというんで、100名なんだけど、これが少しずつ増えて、朝鮮人が10名、日本人が90名。ですからやっとならば、あそこではしなけりゃならない。ま、そういう学校だった。ところがしなかったんです。

西尾：高等普通学校でもやったような形跡はなかったですか。

趙：うん。そんなに奨励したのかな。女を相手に。

西尾：子ども、小学生ですね。初等学生にまず広げるっていう。ずっと初等学校では剣道は位置づけられてなかったんです。それを体操のかたちで日本精神を植え付けるっていうのがねらいだという。当時の塩原という学務局長が積極的に推進したと言われてるんですけど。総督府の学務課がその中心になって広めた。梅沢という日本人の視学官がいたんですけど、その人が広めた。そんなに長くはやらなかったみたいですけど。太平洋戦争が始まる時期にはもうあまりそれは重視されなかった。

趙：城南中学校、ソウルですね、私の通った、卒業した学校。あそこの校長がね、陸軍少将ですよ。だから随分軍国調な、ま、そういう学校だったんですけど。

ど。

西尾：建国体操ってというのはやられなかったですか。

趙：建国体操はありましたよ。

西尾：やりましたか。

趙：やりましたよ。タン・タ・タンタ・タン...って。未だに知ってるんですよ。

西尾：朝会とか、朝礼とかで。

趙：ええ、それはありましたよ。

西尾：ああ、そうですか。その前なんですよ。建国体操といっしょに広めていくんですけども、日本人には建国体操をやらして、あの朝鮮人にはその皇国臣民体操をしようっていうのがねらいだったんですけど。そういう記憶は全然ない。

趙：ない。昔のこと随分覚えてるつもりだけど。

## 12. ロンドンオリンピックと李相佰

金：昨日、ロンドンオリンピックのときに李相佰さんがいろいろ働かれたっていう話をお聞きしたんですけども、暗殺されました呂運亨さん、呂運亨さんが何らかに関わってなかったかどうかってことをお聞きしたいんですけど。

趙：ロンドンオリンピック。

金：そうですね。ロンドンオリンピック。

趙：の前に死んだんです、やられたんですよ。呂運亨。確か47年でしょ。47年。夏頃、秋の初めかな、末頃かな。

金：特にオリンピックには？

趙：呂運亨はね、ただ上にその乗っかって。あんまり実務的にはね、影響を及ぼさなかった。政治に忙しいから。李相佰さんもロンドンオリンピックのときは北工作はやったんだけどオリンピックには行かなかった。

金：そうなんですか。

趙：うん。というのはね、ええ、李相佰を排斥する勢力あったわけですね。それがそのロンドンオリンピックの選手団の主体だった。も、こうすればIOCに加盟できると、そういうことでIOC加盟まで李相佰さんが影響を及ぼして。初めての海外遠征でしょ。ですからね、もう、引っ張り合いだな、足の引っ張り合いで李相佰さん嫌気がさしたんでしょ。俺はもうここまでで、ま、それからはその関与しないと。ということで。

西尾：やっぱりあれですか。民族派とその親日派というか...

趙：親日派とまではいかないけど。李相佰さんね、あの、出がいいんですよ。だから、48年といえばね、スポーツをしたっていう人達がオリンピックに参加

できるということは、それはもう随分その針の穴を潜るように難しいわけですよ。それでいろんなその、足の引っ張り合い、あったわけですね。例えばサッカー、16名しか行かないんですよ。ところが一番年食っとるのが39歳。それから若いのが20代の後半。大学生はたったの1名。大学生のなかにいいのがたくさんおったんですよ。それを昔の世代がね、この機会を逃せばもうオリンピックに出る機会がないんだから。昔の世代と言えば、解放以前にサッカーをした連中が、も、一生懸命、選手に選ばれようとして彼らが主体になっていったんですよ。バスケットボールも同じ。12名なんだけど。すべて30代。そういった傾向なんですね。ですから李相佰さんはもう嫌気がさして、お前ら行ってこい、俺は行かない。

西尾：スポーツ界のなかにそういう、いってみれば主導的な対立みたいなものはなかったですか。

趙：それはなかった。

西尾：そういうことはなかった。あの45年に解放された後、すぐに体育同志会っていう会が...

趙：あれはね、李相佰さんがつくったんです。李相佰さんがつくって、李相佰さんが10月に、大会の名前が何かな、解放慶祝全国体育大会か、ま、そういうのが10月にやったわけなんですよ。そして、ま、国体ね。それがずっと国体のあの大会なかの第何回大会と、こうなってるわけです。これに在来の朝鮮体育会系が脅威を覚えた。その大会は彼らがすべきだったのに、いち早く李相佰さんがやったわけ。それで何で親日派の李相佰が朝鮮の体育の主体となろうとするのか、朝鮮の体育の主体となるんだとすれば俺たちじゃないか。朝鮮で朝鮮体育、それずっとやっとして、日本帝国主義者がやめろというんで1938年に解体されたんでしょ。

西尾：統合されました。

趙：ええ。これでその残りのその伝統をひいた俺たちが朝鮮体育界の主体となるべきではないかというんで、11月に朝鮮体育会があつた構成されるんですよ。あんなかに李相佰はただのヒラ理事に入ってこいと、してやると。だから李相佰さんその中入るわけない、だから李相佰さん、ボイコットしたわけですよ。ところがオリンピックには出なければならぬ、というんでオリンピック準備委員会か、朝鮮オリンピック委員会創設準備委員会、そのメンバーにはなりますね。そこの副委員長として入ってますね。あのそういうことです。だから李相佰さんが、ああ、韓国のスポーツの主体となるのは1950年以降なんですよ。50年以降。52年のヘルシンキオリンピック大会には総監督として。体育会の副会長。



西尾：その辺は大韓体育会がその朝鮮体育会を再建する人たちを中心に大韓体育会がつくられてきて、50年代、朝鮮戦争...

趙：朝鮮戦争でしょ。釜山ね。釜山で、みんな避難して、あの、ですから朝鮮体育会の人たちが散り散りバラバラですね。ま、その中で大会と体育会の命脈を保たなければならないというんで。

西尾：そういう経緯が。

趙：ええ。李相佰さんは、ああ、政界の有力者ね、内務大臣あの人担いで、あの人、会長に担いで自分が副会長に就任したんですね。まあ、その時はとにかく体育会をつくらなけりゃならないんじゃないか、ということで、みんな李相佰さんが積極的にこうするんだから、それについていかなければならない。それで李相佰さんの天下というか、それひらかれるわけですね。李相佰さん、1966年に死んだけど。

西尾：なるほど、オリンピックが大きい。

趙：あの人頭が良いんだな。随分書いてますよ、論文を。スポーツに関する論文とか、それから社会学者でしょ。それから李氏王朝のね、初めの頃、高麗—李氏朝鮮になりますけど、そのあたりの論文をね、随分書いてますよ。だから一生懸命に生きてたな。早く死んだの惜しい。

### 13.ベルリン大会参加選手のその後

金：ベルリンオリンピックのときにサッカーでは金容植さんとか、バスケットボールは廉殷鉉さんですかね、普専の選手とかが選ばれて、張利鎮さんとか。

趙：あのときは朝鮮人は7人ですね。

金：そうですね。

趙：7人は、孫基禎と南昇龍と、それからボクシングの、ボクシングと。金容植と、サッカーの。それからバスケットボールは3人ですね、バスケットボールが廉殷鉉と李性求とそれから張利鎮と。バスケットは3人、サッカーが1人、マラソンが2人、それからあれでしょ、ボクシング。

金：そういったベルリンオリンピックで活躍された方々はその後、どういうふうな活躍をされたかっていいですか、何か組織に入られて...

趙：うーんと、孫基禎と南昇龍は解放以後にマラソン普及会、あの諸処方々からお金を集めてマラソン普及会というのを、そういう組織をつくって、主に孫基禎さんのうちに合宿所みたいな、ま、そういうものを。あれで有望な選手たちを集めて、飯を食わして、そして毎日走った。ま、その結果は徐潤福、というので1947年のポストンマラソンで優勝した。あのサッカーはね、金容植、あの人、韓国のサッカー協会の副会長まで務めましたよ。あれは我が強いんで、

ま、いろんなほうに、いろんな具合に言われましたね。ま、一応、先生、先生って崇められて、韓国代表チームのコーチも務めた。それが1962年までかな。そしてバスケットボールの李性求はね、バスケットボールの李性求は韓国のバスケットボール協会の副会長を務めて、それから女子プロバスケットボール連盟の総裁を務めた。それから張利鎮は解放以後に海軍に入って、海軍のバスケットボールチームをつくった。そして、昨日言ったように、朝鮮戦争のときに、バスケットボールを維持するのに一翼を果たした。それから廉殷鉉はね京都帝大に入って歴史を専攻した。それで解放以後に大学の教授になった。これでいいですか。

金：ありがとうございます。はい。

趙：孫基禎は陸上競技連盟の会長まで務めましたね。あんまり優秀な会長じゃなかったんです。(笑)

金：ありがとうございました。

西尾：ありがとうございました。

11:43 インタビュー終了

このインタビュー調査は2011年8月に行ったものであった。趙東彪さんに初めてお目にかかったのは2010年12月、西尾先生にお引き合わせいただいたのがそのきっかけであった。趙東彪さんはその時からご体調を崩されていた。最初にお会いした際もそうだったが、気になる咳込み方をしていらっしゃったことが忘れられない。私の研究のことをお話しすると「もう少し早く会いたかった、夏にまた来なさい。」とおっしゃってくれた。その夏が2011年の8月であった。インタビューは2日間に渡って行わせていただいたが、ご体調のほうは芳しくはなかったと思う。ご無理させてしまったのかも知れない。

テープ起こしを行い、次年度の研究調査の際にお伺いさせていただきたいと思っていた。まだお聞きしたいことも山ほどあったからである。しかし、もうお会いすることは叶わなくなってしまった。2012年5月31日、趙東彪さんは肺癌でこの世を去られた。私の不勉強さゆえに原稿を確認していただくことに間に合わず、後悔の念が絶えない。今は本当に申し訳ない気持ちでしかいられない。

ただこのときの趙東彪さんへのインタビュー調査で得たものは私の研究生活のなかでも大きな財産となっている。趙東彪さんにお会いできたことは本当に有難い経験であった。西尾先生と私にご遺稿となった原稿を預けるため、それをご自宅まで取りに行く道すがら、「民族とはなんだろうね。」と感慨深くおっしゃられたさりげない一言がなぜか私の脳裏に焼きついてしまった。あと時折みせてくれた笑顔が私にとっては孫に笑いかけるハラボジのように感じられたことも思い出される。

西尾先生の御許可も得て、本研究資料を博士学位申請論文「朝鮮半島における植民地主義とスポーツに関する研究」の一部として上梓させていただくことにした。朝鮮半島の大きな変動の時代を生き抜き、スポーツジャーナリストとしてご活躍し続けた趙東彪さんに尊敬と感謝の意を表するとともにご冥福をお祈りしたい。

(2012年9月23日 金 誠)

【参考文献】

(日本語文献及び論文)

- 浅田喬二編 (1994) 『「帝国」日本とアジア』吉川弘文館
- 浅野健一 (1996) 「日帝支配下の韓国の言論－『東亜日報』日章旗抹消事件を中心に－」評論・社会科学第55号
- アレン・グットマン (1997) [谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳] 『スポーツと帝国』昭和堂
- 石井昌幸 (1995) 「イギリスのスポーツ教育と植民地政策」稲垣正浩・谷釜了正編『スポーツ史講義』大修館書店
- 石井昌幸・金光誠 (2004) 「植民地主義とスポーツ文化の拡大」宇佐美隆憲編著『スポーツ人類学』明和出版
- 板垣竜太 (2004) 「〈植民地近代〉をめぐって」『歴史評論』No.654 校倉書房
- 稲葉継雄 (1982) 「金性洙－韓国における民族系私学の指導者－」東亜日報社『仁村金性洙의 愛国思想과 그實踐』東亜日報社
- 今西一編 (2008) 『世界システムと東アジア』日本経済評論社
- 林鍾国 (1992) [コリア研究所訳] 『親日派』反民族問題研究所
- 岩下傳四郎 (1941) 『大陸神社大観』大陸神社聯盟
- 大島裕史 (1996) 『日韓キックオフ伝説』実業之日本社
- 岡崎茂樹 (1943) 『時代を作る男 塩原時三郎』大澤築地書店
- 小笠原省三 (1933) 『海外の神社』神道評論社
- 呉天錫 (1979) [渡部学、阿部洋訳] 『韓国近代教育史』高麗書林
- カーター・J・エッカート (2004) [小谷まさ代訳] 『日本帝国の申し子』草思社
- 梶村秀樹 (1993) 『朝鮮史の方法』明石書店
- 鎌田忠良 (1984) 『日章旗とマラソン』潮出版社
- 韓国教員大学歴史教育科 (2006) 『韓国歴史地図』平凡社
- 姜徳相 (1997) 『朝鮮人学徒出陣』岩波書店
- 岸野雄三編 (1987) 『最新スポーツ大事典』大修館書店

- 北澤一利（2000）『「健康」の日本史』平凡社  
———（2001）「近代的身体と健康概念の歴史性」『環』第7号 藤原書店
- 木下秀明（1970）『スポーツの近代日本史』杏林書院
- 金白永（2010）「植民地都市京城の広場と路地」『植民地朝鮮と帝国日本』勉誠出版
- 木村幹（2000）『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』ミネルヴァ書房  
———（2003）『韓国における「権威主義的」体制の成立』ミネルヴァ書房
- 京城日報社（1920）『京城日報社誌』京城日報社
- 駒込武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
- 坂上康博（1998）『権力装置としてのスポーツ』講談社選書メチエ  
———（2001）『スポーツと政治』山川出版社
- 佐藤秀夫編（1996）『続・現代史資料10』みすず書房
- 沢田和明（2000）「時代を走らされた長距離ランナーたち—朝鮮半島支配と人権—」平井肇編『スポーツで読むアジア』世界思想社
- ジョン・ホバマン（2007）川島浩平訳『アメリカのスポーツと人種』明石書店
- 新東亜編集室編（1980）『朝鮮近現代史年表』三一書房
- 祖父江孝男・米山俊直・野口武徳編著（1985）『改訂文化人類学事典』株式会社ぎょうせい
- 孫基禎（1985）『ああ月桂冠に涙』講談社
- 孫煥（1997）「旧韓末期（1876—1910）における在日韓国留学生団体の体育に関する研究」『スポーツ史研究』第10号 スポーツ史学会
- 大日本體育協會編（1937）『大日本體育協會史 下巻』大日本體育協會
- 武田幸男編（2000）『朝鮮史』山川出版社
- 朝鮮史研究会編（2011）『朝鮮史研究入門』名古屋大学出版会
- 富永健一（1990）『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫  
———（1996）『近代化の理論』講談社学術文庫

- 鄭敬謨（1982）「悪の種子が蒔かれた頃－韓国ハイド性とジキル金性洙－」『シアレヒム』第4巻 シアレヒム社
- 中濃教篤（1976）『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会
- 中村民雄（1992）『剣道事典－技術と文化の歴史』島津書房
- 並木真人（1990）「戦後日本における朝鮮近代史の現段階」『歴史評論』No.482
- ―――（1997）「植民地後半期朝鮮における民衆統合の一断面」武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社
- ―――（2003）「朝鮮における「植民地近代性」・「植民地公共性」・対日協力」『国際交流研究』国際交流学部紀要第5号
- 南宮吟皓（2000）「日本統治期朝鮮における東亜日報社主催女子庭球大会（1923-1939に関する研究）」『スポーツ史研究』第13号 スポーツ史学会
- 西尾達雄（1996）「朝鮮近代体育史研究の意義と課題（上）」『鳥取大学教育学部研究報告』（教育科学）第38巻第1号
- ―――（1996）「朝鮮近代体育史研究の意義と課題（下）」『鳥取大学教育学部研究報告』（教育科学）第38巻第2号
- ―――（1997）「朝鮮総督府「国防と体育に関する座談会」について」『鳥取大学教育学部研究報告』（教育科学）第40巻第2号
- ―――（1998）「戦時体制下朝鮮におけるスポーツ政策」『鳥取大学教育地域科学部紀要』（教育・人文科学）第1巻第1号
- ―――（2002）「日本植民地下朝鮮における学校軍事教練の実施過程」『鳥取大学教育地域科学部紀要』（教育・人文科学）第3巻第2号
- ―――（2003）『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店
- ―――（2003）「植民地支配と身体教育」望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』昭和堂
- ―――（2008）「養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について」北海道大学大学院教育学研究院紀要第104号
- ―――（2010）「朝鮮体育協会と峰岸昌太郎」北海道大学大学院教

育学研究院紀要第110号

日本体育協会編（1970）『日本スポーツ百年』日本体育協会

日本バスケットボール協会編（1981）『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会

根本通夫（1936）『剣道要義』大同館書店

ノルベルト・エリアス エリック・ダニング（1995）〔大平章訳〕『スポーツと文明化』法政大学出版局

朴忠錫・渡辺浩編（2006）『「文明」「開化」「平和」』慶応義塾大学出版会

坂東藤太郎（1938）『皇国臣民体操精義』日韓書房

古田博司（2007）「北朝鮮マスメディア批判序説－初期の思想的意匠と近代化の虚構」鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶応義塾大学東アジア研究所

マーク・ピーティアー（1996）〔浅野豊美訳〕『植民地 帝国50年の興亡』読売新聞社

馬越徹（1983）「日本統治下朝鮮における民族的大学観の形成－「朝鮮国立大学」設立運動と普成専門学校を中心に－」『大学論集』第12集 広島大学大学教育研究センター

松本武祝（2002）「“朝鮮における「植民地的近代」”に関する近年の研究動向－論点の整理と再構成の試み－」『アジア経済』Vol.43

No.9 アジア経済研究所

三浦雅士（1994）『身体の零度』講談社選書メチエ

水野直樹編（2004）『生活の中の植民地主義』人文書院

南博編（1977）『大正文化』勁草書房

御手洗辰雄（1957）『南次郎伝』南次郎伝記刊行会

宮嶋博史・李成市・尹海東・林志弦編（2004）『植民地近代の視座』岩波書店

宮田節子（1997）『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社

宮田節子・金英達・梁泰昊（1996）『創氏改名』明石書店

村上重良（1985）『国家神道』岩波書店

明治神宮奉賛会編（1937）『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会

文部省（1937）『現代體育の施設と管理』目黒書店

山本典人 (1994) 『日の丸抹消事件を授業する』岩波ブックレットN  
O.334

吉野作造 (1995) 『吉野作造選集9』岩波書店

米谷匡史 (2006) 『アジア／日本』岩波書店

(韓国語文献及び論文)

高麗大學校六十年史編纂委員會編 (1965) 『六十年誌』高麗大學校

高麗大學校70年誌編纂室編 (1976) 『高麗大學校70年誌』高麗大學校

공제욱·정근식편 (2006) 『식민지의 일상』문화과학사

김경일 (2001) 「1920~1930년대 신여성의 신체와 근대성」 『전신  
문화연구』 제24권 제3호

金洪周 (1993) 『韓末在日韓國留學生의民族運動』느티나무

金成植 (1974) 『抗日韓國學生運動史』高麗書林

金重洵 (1998) 『문화민족주의자 金性洙』一潮閣

金雲龍 (1996) 『KOC50年史』대한올림픽위원회

김학민·정운현編 (1993) 『親日派罪狀記』학민사

羅絢成 (1981) 『韓國體育史』教学研究社

—— (1958) 『韓國運動競技史』普文社

東亜日報社編 (1975) 『東亜日報社史 卷一』東亜日報社

—— (1986) 『仁村金性洙』東亜日報社

—— (1991) 『評傳仁村金性洙』東亜日報社

大韓體育會編 (1965) 『大韓體育會史』大韓體育會

—— (1990) 『大韓體育會七十年史』大韓體育會

수요역사연구회편 (2007) 『식민지동화정책과 협력 그리고 인식』  
두리미디어

스포츠사회철학회 (2004) 『체육·스포츠인물사』21세기교육사

신용하 (2006) 『일제 식민지정책과 식민지근대화논 비판』문학과  
지성사

연세창립주년80기념사업위원회편 (1969) 『연세대학교사』연세대학



교출판부

- 윤경현·최창신 (1997) 『이야기－한국체육사③』 국민체육진흥공단  
이태영 (1999) 『20세기한국스포츠100년』 이길영기념사업회  
李學來 (1990) 『韓國近代體育史研究』 지식산업사  
이학래 (2001) 『한국체육백년사』 한국학술정보  
仁村紀念會編 (1976) 『仁村金性洙傳』 仁村紀念會  
鄭晋錫 (1990) 『한국언론사』 나남출판  
박성진 (2003) 『사회진화론과 식민지사회사상』 선인  
한국체육기자연맹편 (1993) 『일장기말소의거기자李吉用』 한국체육  
기자연맹

(英語文獻及び論文)

- Gi-Wook Shin, Michael Robinson. 1999. *Colonial Modernity in Korea*,  
Harvard University Press.  
Gwang Ok. 2005. The Political Significance of Sport: An Asian Case Study  
— Sport, Japanese Colonial Policy and Korean National Resistance, 1910  
— 1945, *The International Journal of the History of Sport Vol.22, No.4*.  
———. 2007. Coercion for Asian Conquest : Japanese Militarism and  
Korean Sport, 1938—45, *The International Journal of the History of Sport  
Vol.24, No3*.  
J.A.Mangan, Fan Hong. 2003. *Sport in Asian Society : Past and  
Present*, Frank Cass Publishers.  
John Bale, Mike Cronin. 2003. *Sport and Postcolonialism*, Berg.  
Tani E.Barlow. 1997. *Formations of Colonial Modernity in East Asia*, Duke  
University Press.

(朝鮮總督府關係資料)

- 朝鮮總督府編 (1974) 『朝鮮總督府施政三十年史』 名著出版  
————— (1992) 『朝鮮總督府施政年報』 昭和十二年度版 クレス出版  
————— (1992) 『朝鮮總督府施政年報』 昭和十三年度版 クレス出版  
————— (1992) 『朝鮮總督府施政年報』 昭和十四年度版 クレス出版  
————— (1992) 『朝鮮總督府施政年報』 昭和十五年度版 クレス出版  
————— (1992) 『朝鮮總督府施政年報』 昭和十六年度版 クレス出版

- (1933) 『朝鮮事情』 昭和九年度版
- (1935) 『朝鮮事情』 昭和十年度版
- (1937) 『朝鮮事情』 昭和十三年度版
- (1938) 『朝鮮事情』 昭和十四年度版
- (1939) 『朝鮮事情』 昭和十五年度版
- (1940) 『朝鮮事情』 昭和十六年度版
- (1941) 『朝鮮事情』 昭和十七年度版
- (1942) 『朝鮮事情』 昭和十八年度版
- (1931) 『朝鮮の習俗』
- (1933) 『朝鮮の年中行事』
- (1931) 『朝鮮要覧』 昭和七年度版
- (1932) 『朝鮮要覧』 昭和八年度版
- (1985) 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』 高麗書林
- (1985) 『日帝下支配政策資料集第十五巻』 高麗書林
- (1985) 『日帝下支配政策資料集第十六巻』 高麗書林

(新聞及び雑誌資料)

新聞

- 『大阪朝日新聞朝鮮朝日』
- 『京城日報』
- 『東亜日報』
- 『朝鮮日報』
- 『東京朝日新聞』
- 『東京読売新聞』

雑誌—日本語

- 『アスレチックス』
- 『オリムピック』
- 『青年』
- 『朝鮮』
- 『朝鮮及滿洲』
- 『朝鮮行政』
- 『文教の朝鮮』
- 『體育と競技』

雑誌—韓国語

『共済』

『三千里』

『서울』

『新東亜』

(その他の史資料)

京城地方法院検事局 (1937) 『思想ニ関スル情報綴』昭和十二年度

京城日報社編 (1986) 『昭和九年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十一年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十二年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十三年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十四年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十五年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十六年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十七年度 朝鮮年鑑』高麗書林

————— (1986) 『昭和十八年度 朝鮮年鑑』高麗書林

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04012475100 (1935) 『体育並運動  
競技関係雑件』第四卷9.朝鮮蹴球団関係

大日本體育協會 (1932) 『第十回オリンピック大會報告書』

————— (1936) 『第十一回オリンピック大會報告書』

朝鮮體育協會 (1934) 『歴史深き半島のオリンピックアード綜合競技プログラム』

帝國地方行政学会 (1920) 「社寺 宗教」『朝鮮法規輯覧』帝國地方行政政治学会

内務省衛生局編 (1924) 『第一回明治神宮競技大會報告書』

内務省警保局編 (1936) 『特高外事月報』昭和 11 年 8 月

————— (1936) 『特高外事月報』昭和 11 年 10 月

普成専門學校 (1937) 『普成専門學校一覽』昭和十一年度

緑旗連盟 (1936) 『緑旗パンフレット第五輯』緑旗連盟

## 【謝辞】

本論文を書き上げることができたのは神戸大学大学院博士課程の担当教官である木村幹先生のご指導のお陰である。先生のご指摘はいつも適切だった。常に私の研究の全体を見渡して下さり、あらぬ方向に進んでいかないように常に向かうべき道を照らし続けていただいた。なかなか捗らない私の論文作成に対してはきつく咎めることなく、じっと辛抱強くお待ちいただいた。本当にありがとうございました。また研究者としての先生の姿は真摯に研究に取り組むことの大切さをいつも実感させてくれている。その姿を追い、今後も見習っていきたい。

副査をご担当いただいた松並潤先生と土佐弘之先生には口頭試問において本論文に足りない視点と今後の研究課題をお示しいただいた。いただいた課題を踏まえて今後の研究活動に取り組んでいきたい。ありがとうございました。

北海道大学の西尾達雄先生には貴重な史資料を惜しげもなくご提供いただき、また共に研究させていただく機会をいただいた。研究を行うのに最も苦しかった時代から公私ともにお世話になり、いつも有難い経験をさせていただいている。ここに記して感謝の意を表したい。ありがとうございました。

札幌大学の李景珉先生には史資料をご提供いただくとともに、朝鮮の近現代史のお話をお伺いする機会をいただいた。朝鮮史の理解が浅い私にとっては本当に有難い限りであった。また先生ご自身の貴重な体験もお話いただき、歴史研究の重要性を学ばせていただいた。

京都大学の水野直樹先生には多くの史資料をご提供いただくとともに効率的な史料収集の方法もご教示いただいた。まだ修士を出たばかりの頃、朝鮮史関係の方たちのなかで最初に門外漢の私の研究に興味を持っていただけた先生であり、それだけで有難かったことが思い出される。

ソウル大学の羅永一先生には韓国での研究活動をご支援いただき、南宮吟皓先生にはインタビュー調査にご協力いただくなど韓国での研究調査ではお二人のお力添えがなければうまく研究を進めることができなかった。

また札幌大学でともに仕事をさせていただいている瀧元誠樹先生、東原文郎先生、増田敦先生、谷代一哉先生には職務の上でご迷惑をかけてしまい申し訳なかった。先生方の応援のお陰でなんとか本論文を完成させることができた。武術の師でもある瀧元誠樹先生には職務の上で常にフォローしていただくとともに史資料をご提供いただいたり、スポーツ史に関する文献も多くお見せいただいた。東原文郎先生には研究の構想を練る際にはいつもご助言をいただき、

「研究」そのものについてともに語り合っていた。そのお陰で私自身の研究を深く見つめ直すことができ、本論文につながっていった。増田敦先生にはいつも有難いお言葉をいただき、私の精神的な拠り所となっていた。恐らく先生のお声掛けがなければ私は潰れていたと思う。本当にありがとうございました。

本論文がひとつの区切りだと考えたとき、学部時代に奈良教育大学でスポーツ史の魅力を教えて下さった稲垣正浩先生、その後、大学院修士課程でスポーツ史の研究方法を徹底的に指導して下さいました日本体育大学の谷釜了正先生に対する感謝も忘れることはできない。両先生にはまともな挨拶もできておらず合わせる顔もないが、この場を借りて感謝の意を表したい。ご指導、ありがとうございました。

家族にも感謝の意を表したい。妻の昭子、娘の萌愛、息子の絢世には夜な夜な研究室に出ていくことで不安な思いをさせたり、健康面での心配をさせてしまうことが多々あった。それでもみんなが協力してくれたお陰でなんとか本論文を書くことができた。本当にありがとう。

最後に。

私の研究生生活を陰ですっと支え続けてくれたのは母だった。私が進もうとする道は多くの人たちに非難されてきたけれども母だけは違った。誰が何を言おうと母だけはその道を真っ直ぐ歩かせてくれた。母なくして今の私は存在し得ない。ほんまにありがとう。

在日コリアンの二世として生きてきた母の苦労は人知れない。ミシン工として懸命に働く母の姿をみて私は育った。私たちのために小さな体がボロボロになるまでがんばってくれた姿は私が死ぬまで忘れることはないだろう。でもきっとその苦労の上に胡坐をかいて私は今の研究生生活を送っている。その代償が本論文であることを思うとこの論文は母に捧げなくてはならない。有難いと同時に本当に申し訳ない。今は疲れた体を休めてこれからの自分の人生を楽しんでもらいたい。